埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第124集

桶川市

狐塚遺跡

県営桶川川田谷団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

1993

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

第13号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土遺物

序

紅花の街として知られる桶川市は、その名前の由来が「川の起きるところ」といわれるように清流と豊かな緑に恵まれ、江戸時代には中山道の桶川宿として栄えました。市内には縄文時代後・晩期の遺跡として著名な高井東遺跡、後谷遺跡を始め、副葬品が重要文化財に指定されている熊野神社古墳等の数多くの遺跡が分布し、古くから人々の営みが知られています。

このたび、荒川に近い桶川市西部の川田谷地区に、県営住宅が建設されることになりました。当地は昭和30年代に旧石器時代、古墳時代の遺物が出土しており、早くから遺跡の存在が知られていた所です。当地に所在する埋蔵文化財の取り扱いに関して、関係諸機関による協議が重ねられた結果、当事業団が発掘調査を実施して、その記録を保存することになりました。

発掘調査の結果、狐塚遺跡は縄文時代早期・中期・後期、古墳時代中期の集落跡であることが判明し、土器、石器などの貴重な資料を得ることができました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。これが埋蔵文化財の教育・普及・保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料として広く活用していただければ幸いです。

刊行に当たりまして、発掘調査における調整にご尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご協力くださいました埼玉県住宅都市部住宅建設課、桶川市教育委員会、並びに地元関係者各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成５年３月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長　　荒井　修二

例言

1　本書は、埼玉県桶川市大字川田谷字富士見1738－1に所在する狐塚遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査届に対する文化庁長官からの指示通知は平成３年７月５日付委保第５の859である。

2　遺跡名の略号はKTNZKである。

3　発掘調査は、県営桶川川田谷団地建設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整を経て、埼玉県住宅都市部住宅建設課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4　発掘調査は、金子直行、福田　聖が担当し、平成３年４月１日から平成３年10月31日まで実施した。整理作業は福田が担当し、平成４年10月１日から平成５年３月31日まで実施した。発掘調査・整理作業の組織は第Ⅰ章に示した。

5　遺跡の基準点測量ならびに空中写真撮影・空中写真測量は株式会社パスコに、土器の胎土分析は株式会社第四紀地質研究所に、口絵の遺物写真撮影は折原基久氏に委託した。

6　本書で使用した空中写真以外の遺構写真、口絵写真以外の遺物写真は、金子、福田が撮影した。

7　本書の図版作成は福田が担当し、金子、西井幸雄、川口潤、植木智子、中島令子の協力を得た。

8　本書の執筆は、第Ⅰ章第１項を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、第Ⅳ章第２項の遺物、第Ⅵ章の縄文時代を金子が担当し、それ以外は福田が担当した。

9　本書の編集は、資料部資料整理第１課の福田が担当した。

10　本書にかかる資料は、平成５年度以降埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。

11　本書を作成するにあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。（敬称略）

浅野晴樹、今井正文、塩野　博、関根　訪、立石盛詞、粒良紀夫、橋本富夫、早坂廣人、古川國男

凡例

1　本書に掲載した挿図類の指示は以下のとおりである。

- X、Yによる座標数値は、国家標準直角座標第Ⅸ系に基づく座標値を示し、方位は全て座標北を表す。
- 挿図類の縮尺は、住居跡1/80、炉1/40、土坑1/40・1/80、炉穴1/60、溝平面1/160、溝断面1/80、土師器1/4、縄文土器1/2・1/3、を原則とする。それ以外の場合は別に示した。
- 遺構図中に示したドットは遺物の出土位置及び接合関係を示し、ナンバーは遺物実測図のそれと一致する。
- 遺構図中のスクリーントーンは、▒が焼土の分布範囲を、▒が攪乱を示す。
- 土層註の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修　1967）により、特に断りのない場合は10YRを示す。
- 土器実測図において復元実測を行ったものは、その中心線を一点鎖線で示した。
- 土器実測図中のスクリーントーンは、▒が赤彩の範囲を示す。
- 土器実測図中の矢印は、ヘラ削りもしくは木口状工具によるナデの方向を示す。

2　遺物観察表の凡例は以下のとおりである。

- 大きさは左欄から全器種の口径、胴部最大径、底径、器高を示している。
- 大きさの（　）内の数値は推定値であり、単位はcmである。なお破片の器高は残存高を示す。
- 形態・手法の特徴における土器の部位は以下のように略して使用している。口縁部－口（全器種）、頸部－頸、胴部－胴、底部－底（壺・甕）、杯部－杯、柱状部－柱、裾部－裾（高杯）、体部－体、底部－底（鉢・椀）。
- 形態・手法の特徴における調整法は、以下の略号を用いている。刷毛目－Ha、ヘラ磨き－HM、ヘラ削り－HK、ヘラナデ－HN、木口状工具によるナデ－KN、ナデ－N、横位のナデ－ON、横ナデ－YN、指ナデ－YuN、絞り目－SM。
- 胎土のアルファベットは以下のものを表している。A－柔らかい白色粒子（パミス）、B－硬い半透明粒子（石英）、C－柔らかい赤色粒子、D－硬い黒色粒子、E－鉄分粒子、F－黒雲母、G－硬い赤色粒子。
- 胎土の砂粒の粒径の表示は次のとおりである。b－微粒子（0.2mm以下）、s－細かい砂粒（1～1.9mm）、r－小礫（2mm以上）。
- 焼成は3ランクに分けた。1－良好、2－やや悪い、3－悪い。
- 色調は、『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修　1967）による。
- 残存率は全形の知れるものは数字のみを示し、破片は部位・残存率を示した。

目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．調査に至るまでの経過 …… 1
　2．発掘調査・整理事業の組織 …… 2
　3．発掘作業・整理作業の経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要 …… 10
Ⅳ　遺構と出土遺物 …… 13
　1．古墳時代の遺構と遺物 …… 13
　　a　住居跡 …… 13
　　b　土坑 …… 46
　　c　包含層 …… 47
　2．縄文時代の遺構と遺物 …… 58
　　a　住居跡 …… 58
　　b　炉穴 …… 68
　　c　土坑 …… 70
　　d　包含層 …… 74
　3．縄文時代、古墳時代以外の遺構と遺物 …… 97
　　a　溝 …… 97
　　b　土坑 …… 102
　　c　ピット群 …… 103
　　d　包含層 …… 104
　　e　旧石器時代の遺物について …… 105
Ⅴ　分析結果（胎土分析） …… 106
Ⅵ　考察 …… 116
Ⅶ　結語 …… 164

挿　図　目　次

第１図　埼玉県の地形……4
第２図　遺跡周辺の地形……5
第３図　周辺遺跡分布図……6
第４図　調査区全測図……11
第５図　過去の採集資料……12
第６図　第１号住居跡……14
第７図　第１号住居跡遺物出土状況……15
第８図　第１号住居跡出土遺物（１）……16
第９図　第１号住居跡出土遺物（２）……17
第10図　第２号住居跡・出土遺物……18
第11図　第３号住居跡……19
第12図　第３号住居跡遺物出土状況……20
第13図　第３号住居跡出土遺物……21
第14図　第４号住居跡……22
第15図　第４号住居跡出土遺物……22
第16図　第５号住居跡……24
第17図　第５号住居跡出土遺物……24
第18図　第６号住居跡……25
第19図　第６号住居跡出土遺物……25
第20図　第７号住居跡・出土遺物……27
第21図　第10・11号住居跡・出土遺物……29
第22図　第12号住居跡……30
第23図　第12号住居跡遺物出土状況
　・出土遺物……31
第24図　第13号住居跡……32
第25図　第13号住居跡遺物出土状況……33
第26図　第13号住居跡出土遺物（１）……34
第27図　第13号住居跡出土遺物（２）……35
第28図　第14号住居跡……37
第29図　第14号住居跡炉
　・遺物出土状況（１）……38
第30図　第14号住居跡遺物出土状況（２）……39
第31図　第14号住居跡出土遺物（１）……40
第32図　第14号住居跡出土遺物（２）……41
第33図　第14号住居跡出土遺物（３）……42
第34図　第14号住居跡出土遺物（４）……43
第35図　第14号住居跡出土遺物（５）……44
第36図　第14号住居跡出土遺物（６）……45
第37図　第22号土坑……46
第38図　第22号土坑出土遺物……47
第39図　土坑群出土遺物……47
第40図　包含層出土遺物（１）……48
第41図　包含層出土遺物（２）……49
第42図　第９号住居跡……59
第43図　第９号住居跡出土遺物……59
第44図　第８号住居跡……61
第45図　第８号住居跡出土遺物……62
第46図　第15号住居跡……63
第47図　第15号住居跡出土遺物（１）……64
第48図　第15号住居跡出土遺物（２）……66
第49図　第15号住居跡出土遺物（３）……67
第50図　第１・２号炉穴……68
第51図　第１号炉穴出土遺物……69
第52図　縄文時代の土坑群……71
第53図　出土土器実測図……73
第54図　第32号土坑出土遺物……75
第55図　土坑出土の遺物……76
第56図　包含層出土遺物（１）……78
第57図　包含層出土遺物（２）……79
第58図　包含層出土遺物（３）……80
第59図　包含層出土遺物（４）……81
第60図　包含層出土遺物（５）……84
第61図　包含層出土遺物（６）……85
第62図　包含層出土遺物（７）……86
第63図　包含層出土遺物（８）……87
第64図　包含層出土遺物（９）……88
第65図　包含層出土遺物（10）……89
第66図　土器以外の出土遺物……94

第67図　出土石器実測図（1）……95
第68図　出土石器実測図（2）……96
第69図　第1号溝……97
第70図　第2～5号溝……98
第71図　時期不詳の土坑……100
第72図　ピット群……102
第73図　中・近世の遺物……104
第74図　旧石器時代試掘坑位置図……105
第75図　表採のナイフ形石器……105
第76図　東西方向土層対応図……105
第77図　ダイアグラム位置分類図……107
第78図　Mo-Mi-Ch 三角ダイアグラム、Mo-Ch，Mi-Hb 菱型ダイアグラム……109
第79図　Qt-Pl 相関図……113
第80図　実験対象遺物実測図……115
第81図　出土土器の分類……118
第82図　狐塚遺跡出土土器の編年（1）……122
第83図　狐塚遺跡出土土器の編年（2）……123
第84図　狐塚遺跡出土土器の編年（3）……124
第85図　狐塚遺跡出土土器の編年（4）……125
第86図　後張出土紡錘車との対比……131
第87図　第Ⅰ群出土の漁具……133
第88図　各遺跡の土製円盤……135
第89図　住居跡集成図（S＝1：160）……136
第90図　住居跡の規模・主軸方向（1）……138
第91図　住居跡の規模・主軸方向（2）……139
第92図　集落の変遷……142
第93図　遺物出土状状態のパターン（文献61より転載）……146
第94図　第14号住居跡高杯出土状況……151
第95図　桶川市内出土の撚糸文系土器群……158
第96図　桶川・上尾市内の条痕文期の住居跡集成……160

表目次

第1表　古墳時代遺物観察表（1）……50
第2表　古墳時代遺物観察表（2）……51
第3表　古墳時代遺物観察表（3）……52
第4表　古墳時代遺物観察表（4）……53
第5表　古墳時代遺物観察表（5）……54
第6表　古墳時代遺物観察表（6）……55
第7表　古墳時代遺物観察表（7）……56
第8表　古墳時代遺物観察表（8）……57
第9表　石器一覧表……94
第10表　土坑一覧表……101
第11表　ピット一覧表……103
第12表　胎土性状表……111
第13表　試料一覧表……113
第14表　各氏の編年との対応……125
第15表　歯痕のある土器一覧表（1）……129
第16表　歯痕のある土器一覧表（2）……130
第17表　住居跡一覧表……137
第18表　貯蔵穴一覧表……137
第19表　第13号付居跡出土遺物の評価（1）・145
第20表　第13号付居跡出土遺物の評価（2）・146
第21表　第14号付居跡出土遺物の評価（1）・147
第22表　第14号付居跡出土遺物の評価（2）・148
第23表　第13号付居跡出土遺物の評価（3）・149

図版目次

図版１　航空写真
図版２　遺跡遠景、第１号住居跡
図版３　第１号住居跡遺物出土状況(北東から)
　　第２号住居跡
図版４　第３号住居跡
　　第３号住居跡遺物出土状況(北東から)
図版５　第４号住居跡
　　第５・６号住居跡
図版６　第６号住居跡遺物出土状況
　　第７号住居跡・第10号土坑
図版７　第10・11号住居跡、第12号住居跡
図版８　第13号住居跡
　　第13号住居跡覆土堆積状況(南から)
図版９　第13号住居跡炉検出状況
　　第13号住居跡遺物出土状況
図版10　第14号住居跡
　　第14号住居跡遺物出土状況(1)(南東から)
図版11　第14号住居跡遺物出土状況(２)～(８)
　　第14号住居跡土玉出土状況
図版12　第９号住居跡、第８号住居跡
図版13　第15号住居跡、第１号炉穴
図版14　第２号炉穴
　　第15・22・24・32号土坑
　　第12号住居跡玦状耳飾り出土状況
図版15　第１・４・６～８・12～15
　　・28～31土坑、ピット群
図版16　第２～５号溝、包含層遺物出土状況
図版17　第１号住居跡出土土器(１)
図版18　第１号住居跡出土土器(２)
図版19　第１号住居跡出土土器(３)
　　第３号住居跡出土土器(１)
図版20　第３号住居跡出土土器(２)
　　第４号住居跡出土土器(１)
図版21　第４号住居跡出土土器(２)
　　第５号住居跡出土土器
図版22　第６・７・12号住居跡出土土器
　　第13号住居跡出土土器(１)
図版23　第13号住居跡出土土器(２)
図版24　第13号住居跡出土土器(３)
　　第14号住居跡出土土器(１)
図版25～32　第14号住居跡出土土器(２)～(９)
図版33　第14号住居跡出土土器(10)
　　第22号土坑出土土器
　　土坑・包含層出土土器
図版34　土玉・土製円盤・紡錘車
　　第９号住居跡出土土器
図版35　第８号住居跡出土土器
　　第15号住居跡出土土器(１)
図版36・37　第15号住居跡出土土器(２)～(５)
図版38　第１号炉穴出土土器
　　第32号土坑・包含層出土土器
図版39　第32号土坑出土土器(１)・(２)
図版40　土坑出土土器、第Ⅰ群土器(１)
図版41　第Ⅰ群土器(２)・(３)
図版42　第Ⅰ群土器(４)・第Ⅱ群土器
図版43　第Ⅲ群土器(１)・(２)
図版44　第Ⅲ群土器(３)
　　第Ⅴ群第１類土器(１)
図版45・46　第Ⅴ群第１類土器(２)～(５)
図版47　第Ⅴ群第１類土器(６)
　　第Ⅴ群第２類土器
図版48　土偶・玦状耳飾り・ナイフ形石器
　　出土石器(１)
図版49　出土石器(２)・(３)

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至るまでの経過

首都圏に位置する埼玉は、人口増加も著しく、特に県南を中心に住宅や住環境等の改善に対する要望が強い。このような状況への対応のため、埼玉県では各種の住宅政策、都市・土地政策を実施しており、住宅建設もその一環として行われている。こうした開業事業に対応するために、県教育局生涯学習部文化財保護課では、開発関係部局と事前協議を実施し、文化財の保護について遺漏のないように調整を進めているところである。

狐塚遺跡は、荒川の左岸の大宮台地上に位置し、周辺には旧石器から中世に至る多くの遺跡が所在する。照会箇所の東には小谷を挟み、小在家Ⅱ遺跡が所在し県立桶川西高等学校の建設に際して発掘調査が実施され、縄文時代の集落跡及び近世初期の村落跡が確認されている。今回の照会箇所もこれら大宮台地の遺跡群の一つであり、旧石器から平安時代の複合遺跡と考えられていた。

平成３年１月11日付け住建第1514号で住宅都市部住宅建設課から桶川狐塚団地建設予定地における埋蔵文化財の所在及びその取り扱いについての照会があり、これに対して文化財保護課では平成３年２月26～28日に遺跡の範囲確認調査を実施した。試掘結果に基づき、平成３年３月15日付け教文第1198号で概ね下記のとおり回答した。

1．建設予定地内には旧石器、縄文、古墳時代の集落跡が所在する。
2．これらの埋蔵文化財包蔵地の取り扱いは、現状保存することが望ましい。
3．工事計画上止むを得ず現状を変更する場合は、文化財保護法第57条の３の規定に従って、事前に記録保存の発掘調査を実施すること。
4．発掘調査にあたっては、当課と協議すること。

その後、取り扱いについて文化財保護課と住宅建設課において協議を重ねたが、計画変更は不可能となったため、止むを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査の実施については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と住宅建設課、文化財保護課の三者により、調査方法、調査期間、調査経費を中心に協議を行った。その結果、平成３年４月から平成３年10月まで調査を実施することが決定された。

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団から文化財保護法第57条第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が平成３年３月30日付け財埋文第963号で文化庁長官あて提出され、文化庁から平成３年７月５日付け委保第５－859号で指示通知があった。

（文化財保護課）

2．発掘調査・整理事業の組織

(1)発掘調査(平成3年度)

主体者　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼管理部長	倉持悦夫
理事兼調査部長	栗原文蔵
庶務経理	
常務理事兼管理部長	倉持悦夫
庶務課長	高田弘義
主査	松本晋
主事	長滝美智子
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
主事	菊池久
発掘	
理事兼調査部長	栗原文蔵
調査副部長	梅沢太久夫
調査第1課長	宮崎朝雄
主任調査員	金子直行
調査員	福田聖

(2)整理事業(平成4年度)

主体者　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	荒井修二
副理事長	早川智明
常務理事兼管理部長	倉持悦夫
理事兼調査部長	栗原文蔵
庶務経理	
常務理事兼管理部長	倉持悦夫
庶務課長	萩原和夫
主査	贄田清
主事	菊池久
経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主事	長滝美智子
主事	福田昭美
主事	腰塚雄二
整理	
資料部長	中島利治
資料部副部長	
兼資料整理第1課長	増田逸朗
調査員	福田聖

3．発掘調査・整理作業の経過

（1）発掘調査の経過

狐塚遺跡の発掘調査は、1991年（平成3年）4月1日から同年10月30日までの7ヶ月に渡って行われた。調査対象面積は、約3,500m^{2}に及び、調査区の旧状は山林であった。そのため、調査前に伐採を行い、その後重機による抜根、ローム面までの表土除去を行った。

調査区には全面に渡って10mの大グリッドを設け、その中を更に2mの小グリッドによって分割して遺構・包含層の調査を行い、それと並行して旧石器時代のユニットの試掘を実施した。以下、各月毎に概要を記す。

4月　調査区内の樹木を抜採、搬出する。

5月　重機による抜根を行い、ローム面までの表土除去を行う。終了後、基準点測量、遺構確認

に入る。

6月　遺構確認と並行して遺構の調査を開始する。この段階で古墳時代中期の住居跡10軒を確認する。

7月　住居跡・土坑の調査を進める。縄文時代早期（鵜ケ島台期）、中期（加曽利E期）の住居跡、古墳時代中期住居跡10軒の調査を進める。

8月　住居跡・土坑・包含層の調査を進める。並行して旧石器時代の試掘調査を開始する。

9月　住居跡・炉穴・土坑・溝・包含層の調査、旧石器時代の試掘を進める。全遺構調査着手。
9月21日遺跡見学会開催、51人参加。

10月　17日セスナ機による空中写真撮影、測量を行う。安全確保のため重機による埋め戻しを行い、機材を撤収。全調査を完了した。

（2）整理作業

整理作業及び報告書の刊行は、1992年（平成4年）10月1日から1993年（平成5年）3月31日まで実施した。

1992年10月　遺物の接合、復元を行い実測を開始する。並行して図面の整理を行う。

11月　遺構の第2原図を作成し、トレースを行う。縄文土器の拓本を開始し、土師器の実測を行う。

12月　遺構のトレースを終了、遺物のトレースを開始し、版下の作成に入る。

1993年1月　遺物のトレースを終了し、版下の作成を継続する。割り付けを開始する。

2・3月　版下の作成を終了し、遺物の写真撮影を行う。資料収集、原稿執筆を行う。編集を終了し、報告書を刊行する。

作業風景（1）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

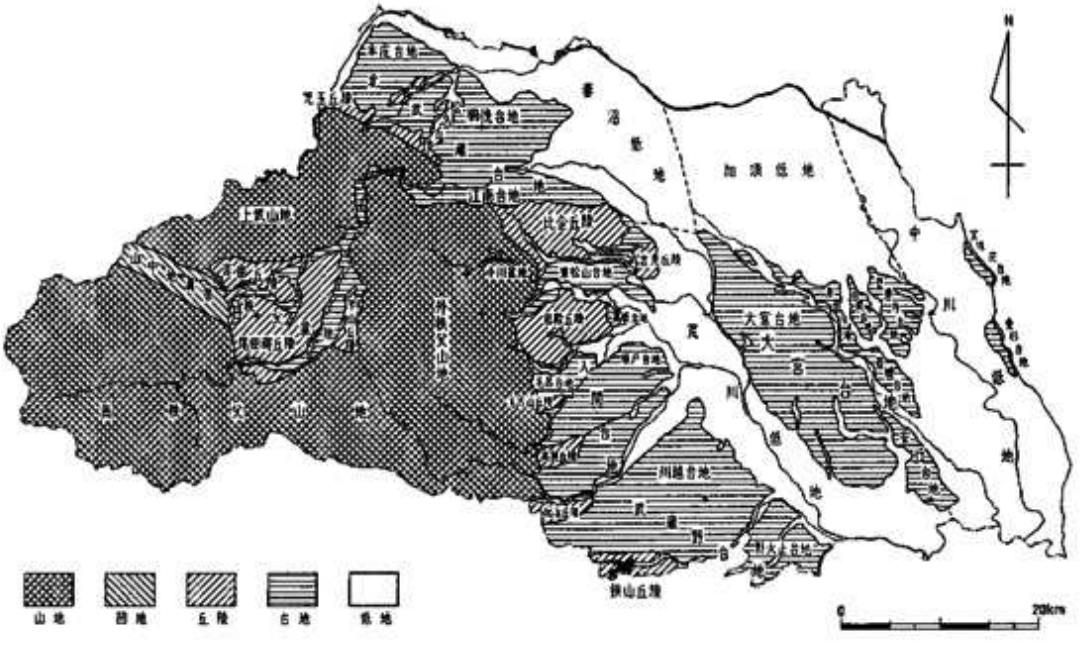
立地

狐塚遺跡は桶川市大字川田谷に所在し、JR 桶川駅の西北西約3.5km に位置する。遺跡の所在する川田谷地区は大宮台地の北西部に当り、荒川低地に接する。

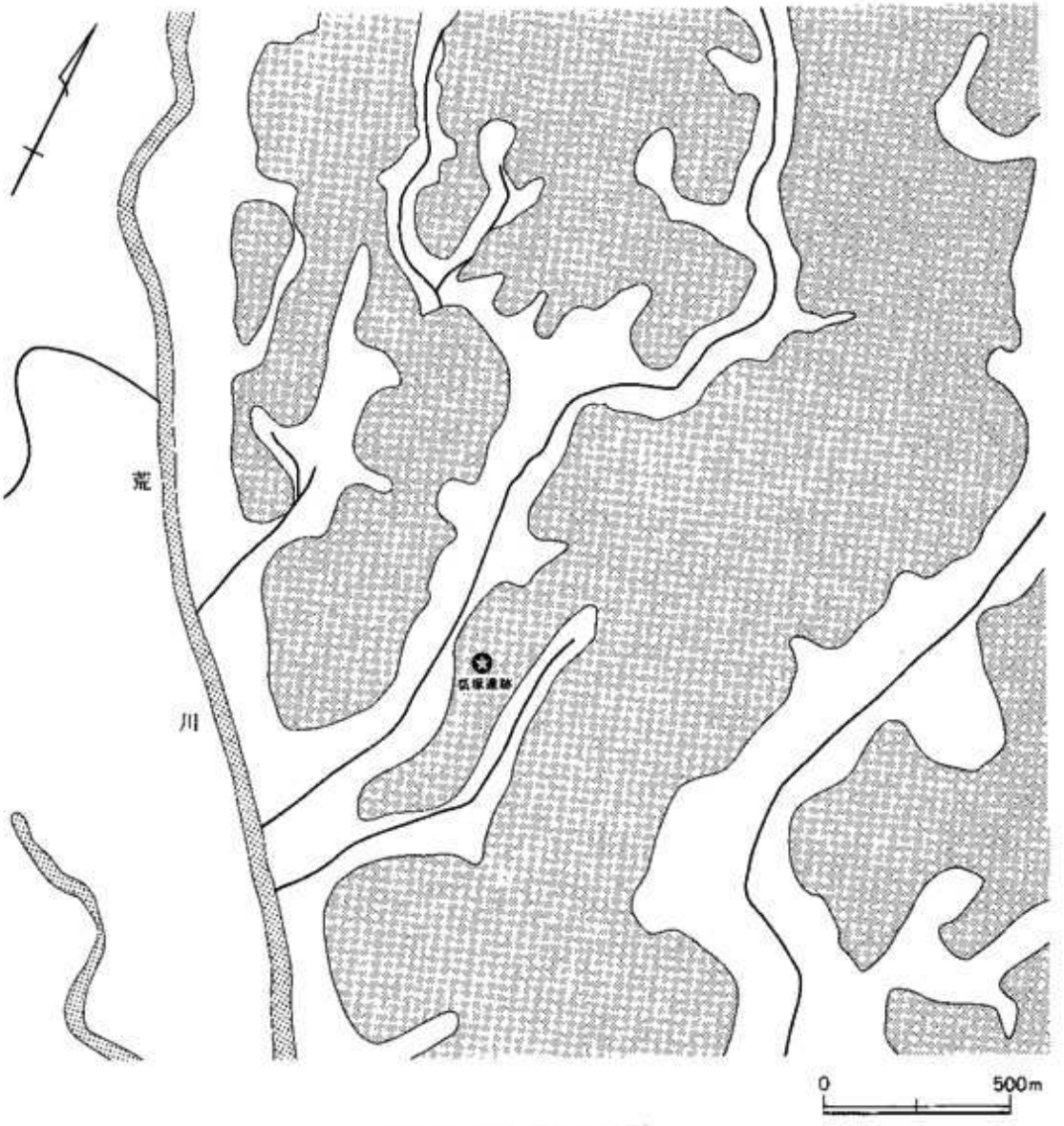
大宮台地は、利根川の右岸に発達した大規模な低地、加須低地・中川低地と、荒川流域に発達した荒川低地に囲まれた、所謂関東ローム層により形成される洪積台地である。（第１・２図）

桶川の地名の由来が「川の起きる所」と言われるように、遺跡の近辺は湧水流が多く、荒川に注ぎ込む江川を中心とする中小河川が台地を開析し、複雑な樹枝状谷が形成されている。遺跡の占地する台地は、それらの中小河川「石川堀」等によって開析され、やせ屋根状を呈し、調査区の西側は石川の開析谷に面する。これらの開析谷の低地はかつて「ドブッ田」と呼ばれる腰まで埋まる強湿田として利用されていたが、土壌改善工事等で現在その面影は消えつつある。調査区の標高は約17m を測り、西側の低地との比高差は約３m、荒川との比高差は６m 程である。

川田谷地区の西面する荒川低地は、古期利根川によって開削されたもので、日本で最大規模を誇り、右岸の堤防から左岸の川島町の堤防までは１km 程の距離がある。現在の荒川は昭和初期の河川改修によって造られたもので、本来の流れはその西側に蛇行した痕跡を残している。地図を広げると荒川が乱流した痕跡が到る所に認められ、文字通り荒れる川だったことを物語っている。また、大宮台地西部で特徴的に見られる農法「ドロッケ」は、この荒川の運んだ肥沃な土を台地上の畑に運び上げるもので、やせた酸性土壌のローム土を基盤とする農地の土壌改良法として民俗学上著名なものである。



第１図　埼玉県の地形（文献１より転載）



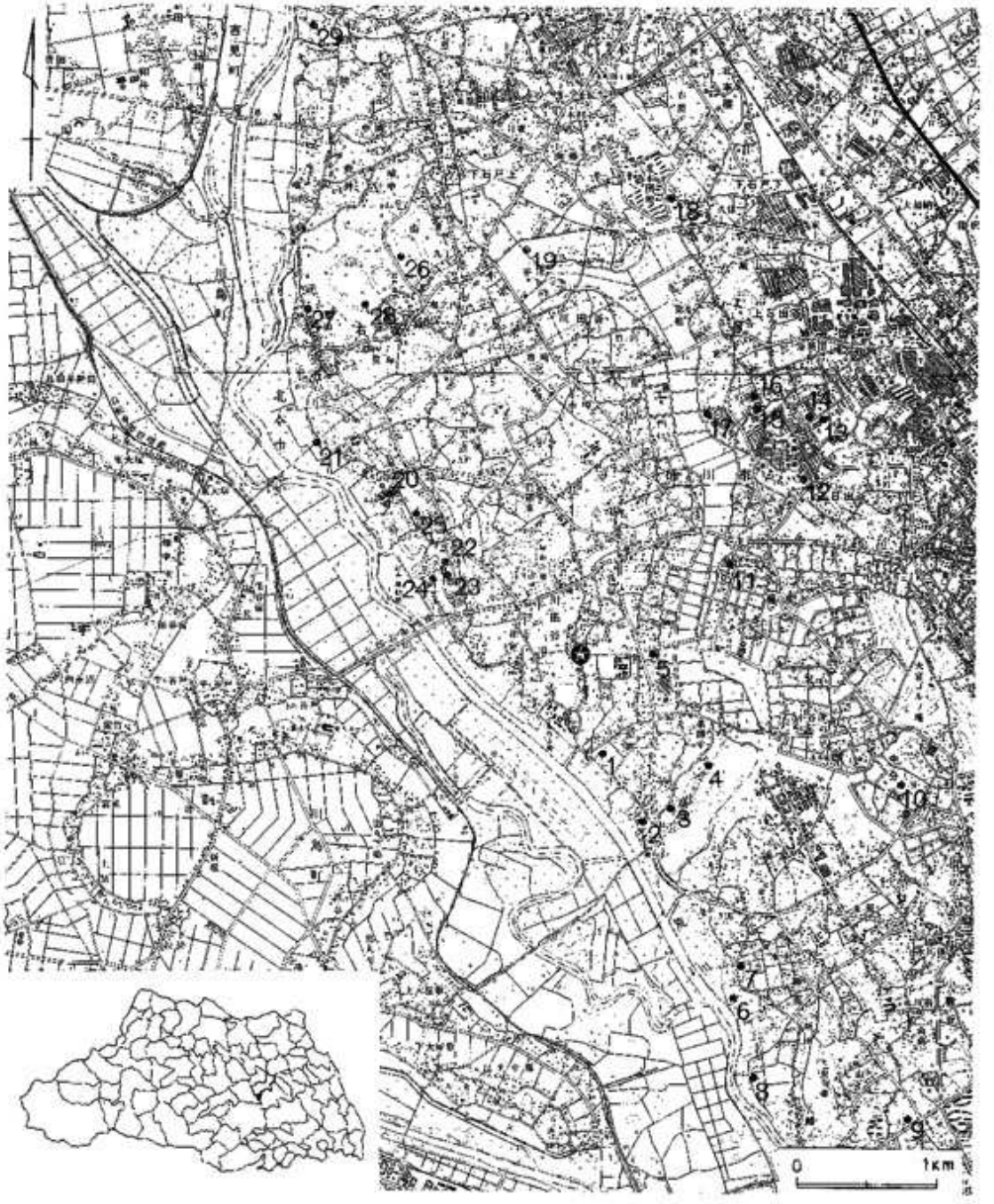
第２図　遺跡周辺の地形

このような大小の河川の流れが、人々の営みに大きく関わってきたことは想像に難くない。谷に面する台地上に多くの遺跡が残されていることが、それを示唆している。

歴史的環境

遺跡の所在する川田谷地区を含む荒川・江川流域には、旧石器時代から近世に渡る遺跡群が濃密に分布する。縄文時代後・晩期の県内有数の遺跡として著名な高井東遺跡、後谷遺跡を始めとするそれらの遺跡群について、全時期・全地域を網羅的に述べるのはここでは不可能である。本項では、本遺跡の中心的な時代である古墳時代の様相を中心に述べることにしたい。

前項で述べたように、樹枝状の小支谷が発達した川田谷地区では、その開析谷に面した台地の縁



第3図　周辺遺跡分布図

辺部に多くの遺跡が分布する。これらの遺跡は、立地と分布状況から遺跡群として認識することが可能である。

本遺跡と同一の樋詰支丘上には、荒川を臨む位置に八幡耕地遺跡、宮前遺跡、江川を臨む位置に砂ヶ谷戸遺跡、楽上遺跡、熊野神社古墳の各遺跡が所在する。（第Ⅰ群）

八幡耕地遺跡（1－文献2）は、古墳時代前期から後期に渡って継続的に営まれた集落である。剣形石製品や滑石製の有孔円盤、後期の珠文鏡が出土しており、後に詳しく述べるが本遺跡に近接

する同時期の集落として、注目されるものである。

宮前遺跡（2－文献3）は、弥生時代後期、古墳時代前・後期の集落で、古墳時代前期の「大廓式」土器を含む一括資料が出土しており、近接する熊野神社古墳との関連が注目される。

熊野神社古墳（3－文献4）は、1928年墳頂部の社殿改築時に、玉類、碧玉製石釧、筒形銅器等の豊富な副葬品が出土し、本県を代表する最古の前期古墳として注目を集めてきたものである。

1984年に県史編さん室によるトレンチ調査が行われ、径約38m、高さ6.0～6.5m前後の裁頭円錐に幅3m前後の張出しが付く墳丘を持つことが明らかになった。

出土した有段口縁の壺形土器、小型丸底土器、器台形土器から4世紀第3四半期の時期が与えられている。近接する宮前遺跡、八幡耕地遺跡との関連と共に「畿内型」の副葬品を持つ本墳の被葬者の性格づけが問題であろう。

楽中遺跡（4－文献5）は、古墳時代後期の集落である。この楽中と前述の八幡耕地、宮前は後述する川田谷古墳群の存立基盤の可能性があり、両者の関連が注目される。

楽上遺跡（5－文献6）は、古墳時代前期・中期の集落である。前期の1号住居跡からは碧玉製管玉が出土しており、熊野神社古墳との関連が注意される。また、遺跡の北側200mには、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落とそれに対応する墓域である砂ヶ谷戸Ⅱ遺跡が所在する。

樋詰支台の遺跡群（第Ⅰ群）の江川を挟んで対岸に当たる上尾市域では、分布調査等から濃密な遺跡の分布が予想されるものの、調査がそれ程行われていないため桶川市域程その様相は明らかでない。第Ⅱ群とした荒川に臨む台地縁辺部では、殿山遺跡、殿山古墳、雲雀遺跡、畔吉遺跡、江川山古墳の存在が知られる。

殿山遺跡（6－文献7）は、前期の方形周溝墓群である。現在まで集落域が確認されておらず純粋な墓域であった可能性が高い。

殿山古墳は、熊野神社古墳に続く中期前半の古墳と評価されている。大部分が整地作業による変形を受けているが、径32m、高さ2.7mの円墳であることが明らかになっており、周堀からは底部穿孔とされる壺形土器、小型壺、鉄鎌が出土している。古墳周辺で、その存立基盤となる集落の存在は知られていないが、古墳時代における当地域の社会的動態を考える上で、欠くことのできない古墳である。

雲雀遺跡（7－文献8）は、殿山古墳の北東約120mに位置する前期の集落である。担当者の小宮山克巳氏は、殿山遺跡の方形周溝墓群の造営集落と考えている。また、パレス壺・S字甕・「S字」鉢等の東海・畿内系の外来系土器の出土も注目される。

畔吉遺跡（8－文献9）は、前期の集落で、パレス壺が出土している。

また、当遺跡群には、その所在地が明らかでないが、江川山古墳（文献10）と呼ばれる古墳時代前期の古墳が存在したと伝えられている。この古墳からは捩文鏡、鼉龍鏡をはじめとする豊富な副葬品が出土しており、鏡及び伴出したと伝えられる土器の年代から4世紀後半の時期が与えられている。江川の対岸の熊野神社古墳とは対をなす関係にあり、また殿山古墳をはじめとするその他の遺跡との関係を考える上でも見逃すことができないものである。

在家遺跡（9）は、前述の3遺跡と異なり、図中には入っていないが、平方に所在する箕輪Ⅱ遺

跡、宿北遺跡、天沼遺跡と同一の遺跡群に含まれると思われる後期の集落である。（第Ⅲ群）1988年の調査で、未報告である。

畔吉の3遺跡の所在する支台の北側は、江川に注ぎ込む小河川による開析谷が発達する。小谷津遺跡（10－文献11）は、その谷奥に形成される後期の集落である。（第Ⅳ群）

後山遺跡（11－文献12）、西Ⅰ遺跡（12－文献13）を含む第Ⅴ群の遺跡群は、江川を挟んでⅠ群と対峙している。後山遺跡は、江川を臨む台地縁辺部に位置する後期の集落である。西Ⅰ遺跡は、江川に注ぎ込む小支谷を挟んでⅥ群の遺跡群と対峙する位置にある弥生時代終末～古墳時代初頭の集落である。台付甕の脚台部を転用したベンガラ容器が出土しており、注目される。

Ⅵ群の遺跡群は、西Ⅰ遺跡と大きな開析谷を挟んだ対岸の台地縁辺部に位置する。Ⅰ群の遺跡群と並んで中期の集落の分布が密に認められる地域である。

高井遺跡（13）、高井北遺跡（14）、愛宕遺跡（15）、愛宕耕地遺跡（16）、宮遺跡（17）は全て中期の集落である。（文献14～18）

高井遺跡と高井北遺跡は同一の集落である。高井北遺跡の9号住居跡は初現期のカマドを持つものとして早くから注目を集めてきた。また、高井遺跡1・2号住居跡からは石製模造品、乗馬の様子が線刻された滑石製紡錘車、鋸が出土しており、この集落の特異性を窺わせる。

愛宕遺跡は高井遺跡の北側、小支谷を挟んだ対岸の台地緩斜面に位置し、愛宕耕地遺跡とは小谷を挟んで近接する。

宮遺跡は愛宕耕地遺跡と小谷を挟んで東面する。また、遺跡の南端に位置する氷川神社の裏手に小円墳があり、集落と同時期のものではないかと推定されている。

このように江川に注ぎ込む小支谷を中心に密集して分布するⅥ群について、橋本富夫氏は、宮→愛宕耕地・愛宕・高井という、当初江川に臨む台地縁辺に占地したものが小支谷の奥に展開していく様相を指摘している。（文献17）高井遺跡に認められる特異性と合わせて、拠点的遺跡群の推移を示すものとして傾聴に値するものである。

Ⅶ群の遺跡群は、江川を遡った最奥部に位置する。榎戸Ⅱ（18－文献19）、丸山（19－文献20）両者共弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落である。

Ⅷ群の遺跡群は、四群の支群から成る川田谷古墳群を中心に、比較的密な分布が認められる。

群中における前期の集落としては、西台遺跡（20－文献21）、東台Ⅰ遺跡（21－文献22）があげられる。

特に西台遺跡は集落と方形周溝墓がセットで検出され、鉄鏃や臼玉・三角形の透穴を持つ北陸系器台等が出土していることから、特殊な性格を持つ集落と考えられる。

中期の集落としては、バチ山遺跡（22－文献23）があげられるのみである。1軒のみの検出だが、カマドと考えられる施設があり、楽上遺跡、高井遺跡の例もあるため、この地域の社会の展開を考える上で注目されるものと言えよう。

後期の集落は、東台Ⅰ遺跡で検出されている。Ⅷ群内では唯一のものである。

川田谷古墳群は、6世紀後半から7世紀代の群集墳である。かつては100を超える基数があったと言われるが、現在は原山古墳群にその面影をとどめるのみである。図中に示した川田谷ひさご塚

(23－文献24)、城髪山1・2号（24－文献25)、原山23号（25－文献25)、西台古墳群（20－文献21）は調査が行われ、報告書が刊行されている。

Ⅷ群中には同古墳群の造営基盤となる集落は東台Ⅰのみしか認められず、古墳の基数に対してあまりにその数が少ないと言わざるを得ない。Ⅰ群中の該期の集落が存立基盤となっていることも考えられる。

Ⅸ群の遺跡群は、全て報告書が未刊のものである。この地域も小支谷が発達し、その小支谷を臨む台地縁辺部に遺跡が立地する。(文献26)

八重塚遺跡（26）は、それらの中で中心的な位置を占めるものである。弥生時代終末から古墳時代中期まで連綿として営まれるこの遺跡は、地域の核となる拠点的集落と捉えて良いだろう。前期のS字甕や中期の3号住居跡から検出されたカマドが、この集落の特異性を示している。特に中期のカマドは、高井遺跡、バチ山遺跡との関連が問題になる。

また石戸城跡（27）からは、前期の集落が検出され、北陸系の装飾器台が出土している。

後期の古墳群は、八重塚（文献27)、諏訪山南遺跡（28）で調査されており，川田谷古墳群と同時期の群集墳であることが判明している。

Ⅹ群の遺跡は、後期の群集墳のみしか現段階では明らかでない。宮岡Ⅱ遺跡において中期と思われる土器が出土しているが、包含層出土のものである。

阿弥陀堂遺跡（29)、中井古墳群、北袋古墳群（後二者は図外の北側）は共に6・7世紀の群集墳と考えられる。

Ⅹ群の北側は更に馬室古墳群を始めとする鴻巣市域の遺跡へと続いていく。Ⅲ群の遺跡群も薬師耕地前を始めとする上尾・大宮市域の遺跡と続いていく。ここではⅠ～Ⅹの遺跡群を設定して、狐塚遺跡周辺の歴史的環境について述べてきたわけだが、本遺跡の歴史的座標を確認するためには、それらの荒川沿岸の遺跡、更に流域を異にする同時期の遺跡（例えば川越市御伊勢原遺跡、女堀遺跡等）との対比が必要である。

作業風景（2）

Ⅲ　遺跡の概要

今回の調査では、縄文時代早期～後期、古墳時代中期、中・近世の遺構が検出され、旧石器時代・縄文時代・古墳時代、中・近世の遺物が出土した。遺構の分布は、北側に片寄っており、調査区の南側に小谷が入り、地形全体も南側に緩やかに傾斜することから、今回の調査区は遺跡のほぼ南端に当たると思われる。

調査区の層序は、第4図に示したように、山林によって形成された表土層（Ⅰ）、ソフトローム（Ⅱ）、武蔵野台地第Ⅵ層に比定されるハード・ローム層（Ⅲ）、第2黒色帯に比定されるブラック・バンド（Ⅳ・Ⅴ）、武蔵野台地第Ⅹ層に比定されるⅥ層までを旧石器時代の遺物群検出のための試掘坑で確認している。

今回の調査で検出された遺構の中心的時期は古墳時代中期である。該期の遺構は竪穴住居跡12軒、土坑1基が検出されている。

竪穴住居跡は一辺7m前後の大型のもの（1～3，12～14）と3m前後の小型のもの（4～7）が存在する。大型の住居跡は、10・11号を除き、深く掘り込まれ、4本柱穴で炉を持つ。これらは主軸方向も同一か直交する方向で、住居の向き自体はほぼ同一である。

10・11号住居跡は、大型だが、掘り込みが浅く、しっかりとした柱穴、炉を持たない。主軸方向も他の大型住居と異なるため、機能的に別の性格を持つ遺構である可能性が高い。

これら大型の住居に対して小型の住居は、掘り込みが浅く、柱穴も不明瞭で炉を持たない。主軸方向は、4・6・7号住居跡がほぼ同一で、大型住居とも同一の方向である。5号住居跡は北に振れる軸を持ち、出土遺物も古相を呈しており、他の遺構より遡る時期のものと考えられる。これらの小型の住居は、機能的に先の大型の住居と別種のものである可能性を持つ。

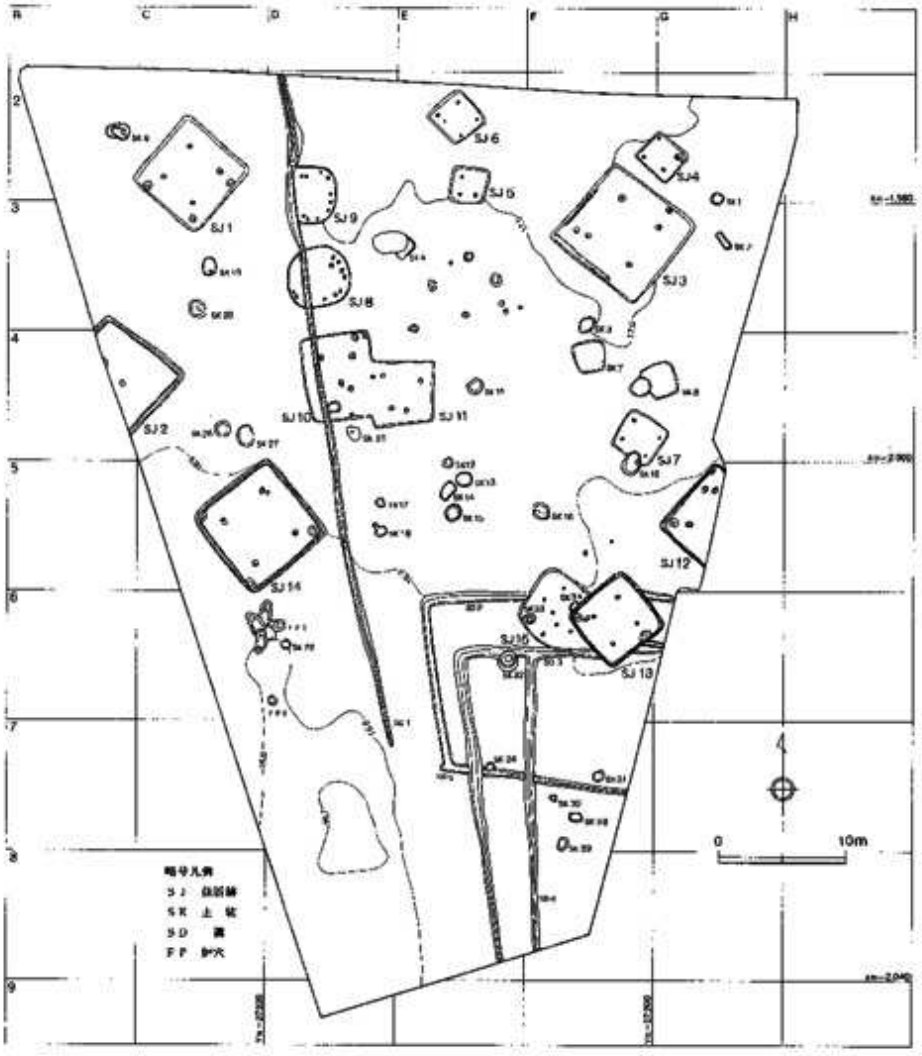
土坑は31基検出されたが、確実に古墳時代に帰属するものは22号土坑一基のみである。22号土坑は掘り込みこそ浅いが、高杯を中心とする土器を細片で多く出土しており、何らかの特別な機能を持つ可能性がある。

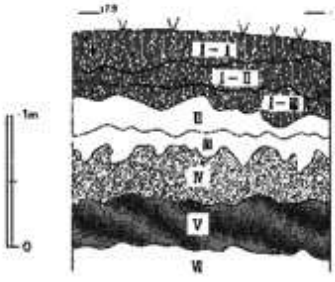
古墳時代中期の出土遺物は主として土師器である。土師器の中では、高杯が特徴的に高い比率を占めている。また、鉢形の一穴甑や、柱状部に穿孔される高杯、縞状に赤彩を施す高杯等の祭祀的様相を示すものも認められる。その他に1号住居跡からは滑石製の紡錘車が、14号住居跡からは土玉が出土している。

これらの古墳時代中期の遺構群とは別に、縄文時代の遺構・遺物も多く検出された。該期の遺構は竪穴住居跡3軒、炉穴2基、土坑3基である。

住居跡は早期（9）・中期（8）・後期（15）のものを各一軒検出している。早期の住居跡は鵜ヶ島台期に当たり、類例の少ない貴重な一例である。中期の加曽利E期の住居跡からは埋甕と考えられる破片が出土している。上記の2軒は、掘り込みが浅く、不明瞭な状態での検出であった。後期の堀之内期の住居跡はそれに比して掘り込みが深く、柱穴もしっかりしている。いずれの住居でも炉は認められない。

炉穴は、条痕文系土器を出土する早期のもので、ローム面への掘り込みが深く、良好な状態で検





基本層序土層説明

Ⅰ－1　明褐色土(4/3)
表土層。根の被乱が著しい。ボソボソした感じ。

Ⅰ－2　暗褐色土(3/3)
表土層。Ⅰ－1より明度が落ちる。

Ⅰ－3　明褐色土(4/3)
表土層。根の被乱が著しい。ローム・ブロック(1～3cm)をやや多く含む。

Ⅱ　黄橙色土(6/6)
ソフト・ローム層。粘性が高い。

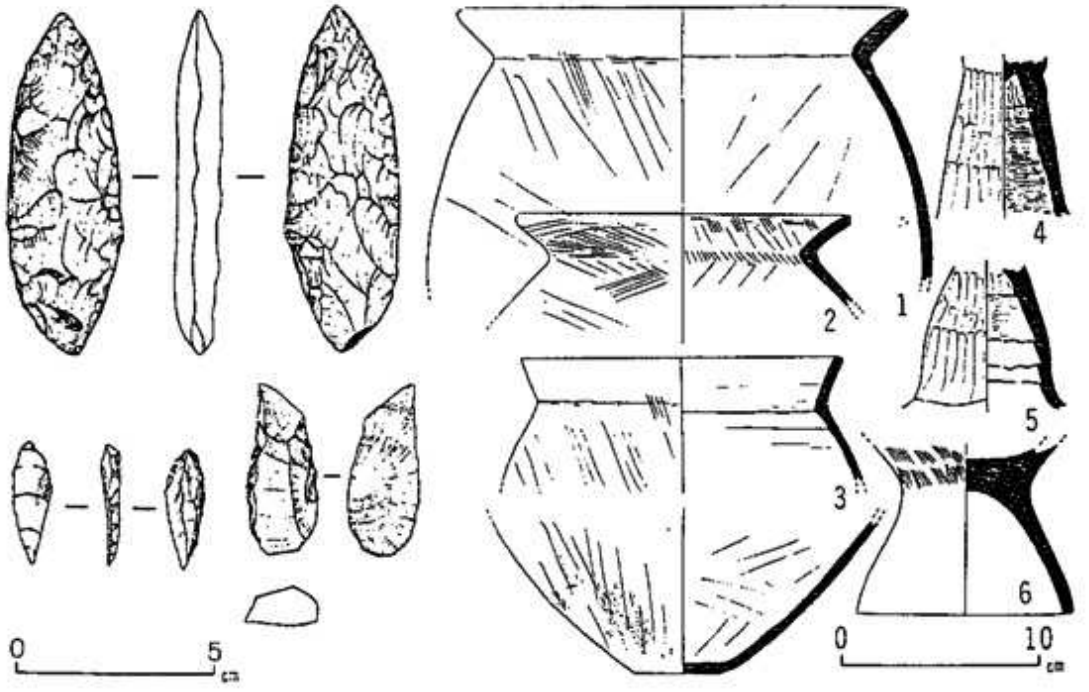
Ⅲ　黄橙色土(5/6)
ハード・ローム層。部分的にソフト化している。武蔵野ローム第Ⅲ層に比定される。非常に堅緻である。

Ⅳ　暗褐色土(4/3)
第2黒色帯上層に比定される。部分的にⅢ層をブロック状(3～5cm)に混入する。非常に粘緻である。

Ⅴ　黒褐色土(4/4)
第2黒色帯下層に比定される。部分的にローム粒子を微量含む。粘性高し。

Ⅵ　黄橙色土(7.5YR6/6)
武蔵野ローム第Ⅹ層に比定される。非常に堅緻である。

第4図　調査区全測図



第５図　過去の採集資料（文献28・29より改図・転載）

出された。１号炉穴は５ヶ所の炉床を持つもので、放射状に重複している。

土坑は、後期（堀之内期）のものが３基検出された。このうち、１基は深さが2.8m ある堀之内式に特徴的なもので多量の遺物が出土した。

遺構出土の縄文時代の遺物は接合個体数こそ少ないが点数が多く、良好な資料である。

調査区からは、これらの縄文・古墳時代の遺構の他に溝５条、土坑27基が検出されている。

溝は何らかの区画溝と考えられるが、遺跡の旧状が雑木林のため、その性格は不明である。１号溝から板石塔婆の破片と考えられる緑泥片岩片が出土していることから、これらの溝は中・近世のものである可能性が高い。

土坑27基からは、縄文土器、土師器の細片が出土しているが、細片で帰属時期は不明である。

また、今回の調査では上記の遺構を覆う包含層からも、旧石器・縄文・古墳・中近世の各時代に渡る多量の遺物が出土している。

中でも、縄文時代の撚糸文系土器群は量的にも良好な資料である。また、12号住居跡からは流れ込みの状態だが滑石製の玦状耳飾りが出土しており、注目される。

本遺跡の北側は現在狐塚団地となっているが、かつては団子山と呼ばれる雑木林であった。住宅地造成、それに先立つ土取の際にも、旧石器時代（文献28）・縄文時代早期～中期・後期、古墳時代中期（文献29）の遺物が出土しており、相当広い範囲で各時代の集落が営まれていたと思われる。今回の調査区は冒頭に述べたように、その南端に当たると思われ、明らかになった各時代の様相も、かつて予想されていた遺跡の広がりを実証したものとなっている。

Ⅳ　遺構と出土遺物

1．古墳時代の遺構と遺物

a　住居跡

概要　今回の調査では、古墳時代中期の住居跡が12軒検出されている。前項で述べたように、これらの住居跡には、一辺7m前後の大型のものと、一辺3～4mの小型のものの二者がある。

前者は、10・11号住居跡を除き、掘り込みが深く、しっかりした柱穴・炉を持ち、出土遺物も多い。

後者は、掘り込みが浅く、明瞭な柱穴、炉を持たない。また、5号住居跡は主軸方向がその他のものと異なり、時期的に古くなると思われる。

この両者は、ほぼ同時期に併存していたものと考えられる。規模の差異が何に起因するかは、各説の後分析を試みることにしたい。

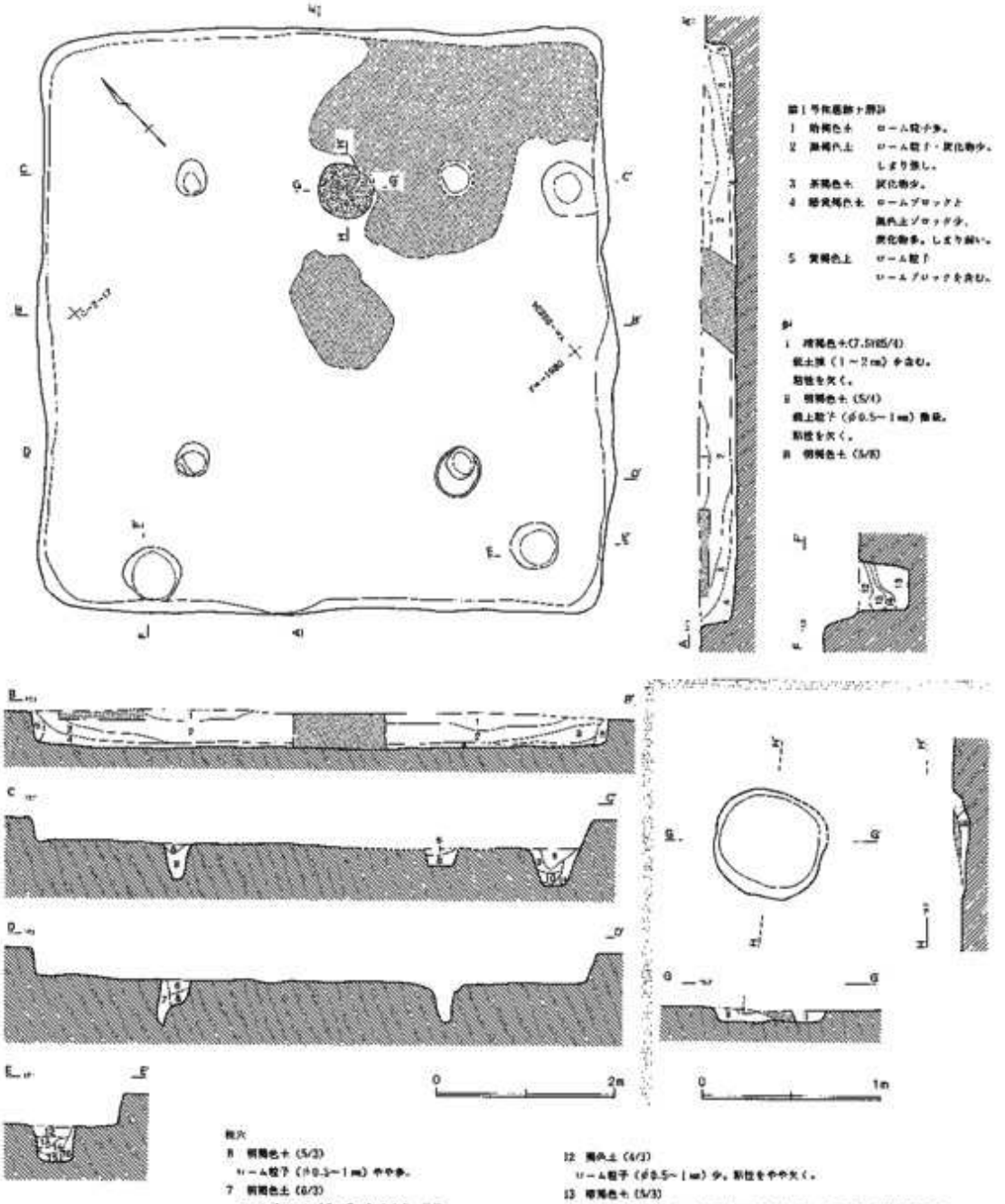
第1号住居跡（第6～9図）

第1号住居跡は、C－2・3グリッドに位置する。東コーナーを中心に樹木の根による撹乱が入り、一部が床面から壁まで破壊されている。主軸方向は、N－40°－Eで、第3号住居跡、第13号住居跡とほぼ同方向である。位置的には、第2号住居跡の北東壁から約9m、第5号住居跡の西壁から約13mに位置する。

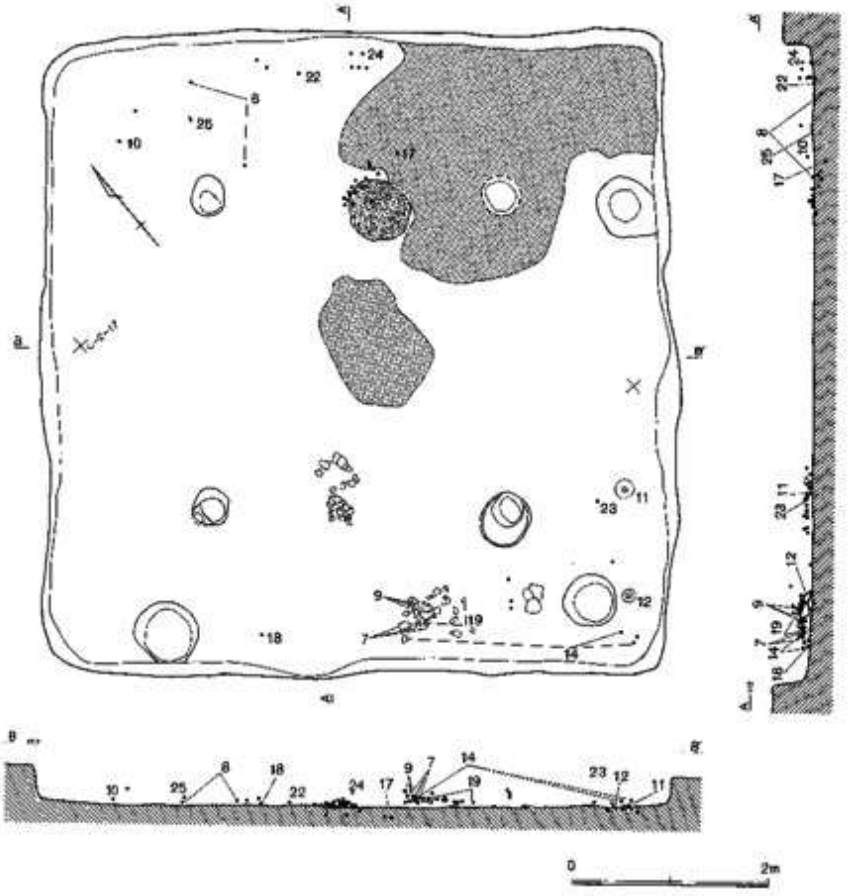
規模は、長軸方向6.5m、短軸方向6.5m、深度45cmを測る。平面形は、ほぼ正方形である。壁溝は認められなかった。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかい。壁も崩落が進んだためか、凹凸が多く、直線的ではない。柱穴は撹乱されている東側を除き、床面から40～50cmを測る。特に西側の柱穴は、その西側が更に一段深く掘り込まれており、第7層は柱痕の可能性がある。貯蔵穴は南東側、南側、南西側の3ケ所認められる。南側の1例を除き壁に接して掘り込まれている。平面形はいずれも不整円形で、径50cmほどである。深度は、東側・南側が40cmで断面逆台形を呈し、西側が50cmで断面箱形を呈する。炉は北東側に認められ、二本の柱穴の中央からやや南東に寄る。平面形は不整円形で、長軸方向63cm×短軸方向58cmを測る。深度は8cm程で浅く、あまり焼けていない。

覆土は、暗褐色土、黒褐色土で構成され、レンズ状の自然堆積の様相を呈している。5層はローム・ブロックを多く含み、壁上部の崩落土と思われる。柱穴の覆土も、褐色土で構成され、自然堆積の様相を呈する。ただし西側柱穴の第7層は、前述のように柱痕である可能性を持つ。貯蔵穴の覆土も自然堆積の様相を呈している。

遺物は、第4層堆積後に大部分がもたらされたもので（第7図）、土師器の甕・小型壺・高杯・鉢・甑、滑石製の紡錘車が出土している。（第8・9図）集中して出土する傾向があり、接合関係を持つものも多く、単なる流れ込みとは考え難い。器種では、高杯の比率が高く、8・9の小型壺が火を受けていること、赤彩された甑があることも、先の出土状況と合せて注目される。第3・4


第1号住居跡ナ断面
1 暗褐色土 ローム粒子少。
2 黒褐色土 ローム粒子・炭化物少。しまり強し。
3 茶褐色土 炭化物少。
4 暗黄褐色土 ロームブロックと黒色土ブロック少。炭化物多。しまり強い。
5 黄褐色土 ローム粒子ロームブロックを含む。
P1
1 暗褐色土(7.5YR5/4)
粘土質(1～2mm)を含む。粘性を欠く。
2 明褐色土(5/4)
粘土粒子(φ0.5～1mm)微量。粘性を欠く。
3 明褐色土(5/6)
0 2m
0 1m
粘土
8 明褐色土(5/3)
ローム粒子(φ0.5～1mm)ややあり。
7 明褐色土(6/3)
ロームブロック(3～5mm)ややあり。明瞭。
6 褐色土(4/3)
ローム粒子(φ0.5～1mm)少。
9 明褐色土(5/3)
ロームブロック(1～2mm)ややあり。粘性強し。
10 褐色土(4/3)
ロームブロック(1～2mm)ややあり。9より明度が落ちる。しまり非常に良い。
11 褐色土(4/3)
ロームブロック(5～8mm)ややあり。しまり非常に良い。
12 褐色土(4/3)
ローム粒子(φ0.5～1mm)少。粘性をやや欠く。
13 暗褐色土(5/3)
ローム粒子(φ0.5～1mm)、褐ブロック(5～8mm)ややあり。粘性をやや欠く。
14 暗褐色土(4/2)
ロームブロック(2～3mm)微量。
14' 黒褐色土(5/3)
14に比して明度が落ちる。ロームブロック(3～10mm)ややあり。粘性をやや欠く。
15 褐色土(4/3)
ロームブロック(5～8mm)多。しまりをやや欠く。
16 黒褐色土(4/3)
ロームブロック(1～3cm)多。

第6図　第1号住居跡



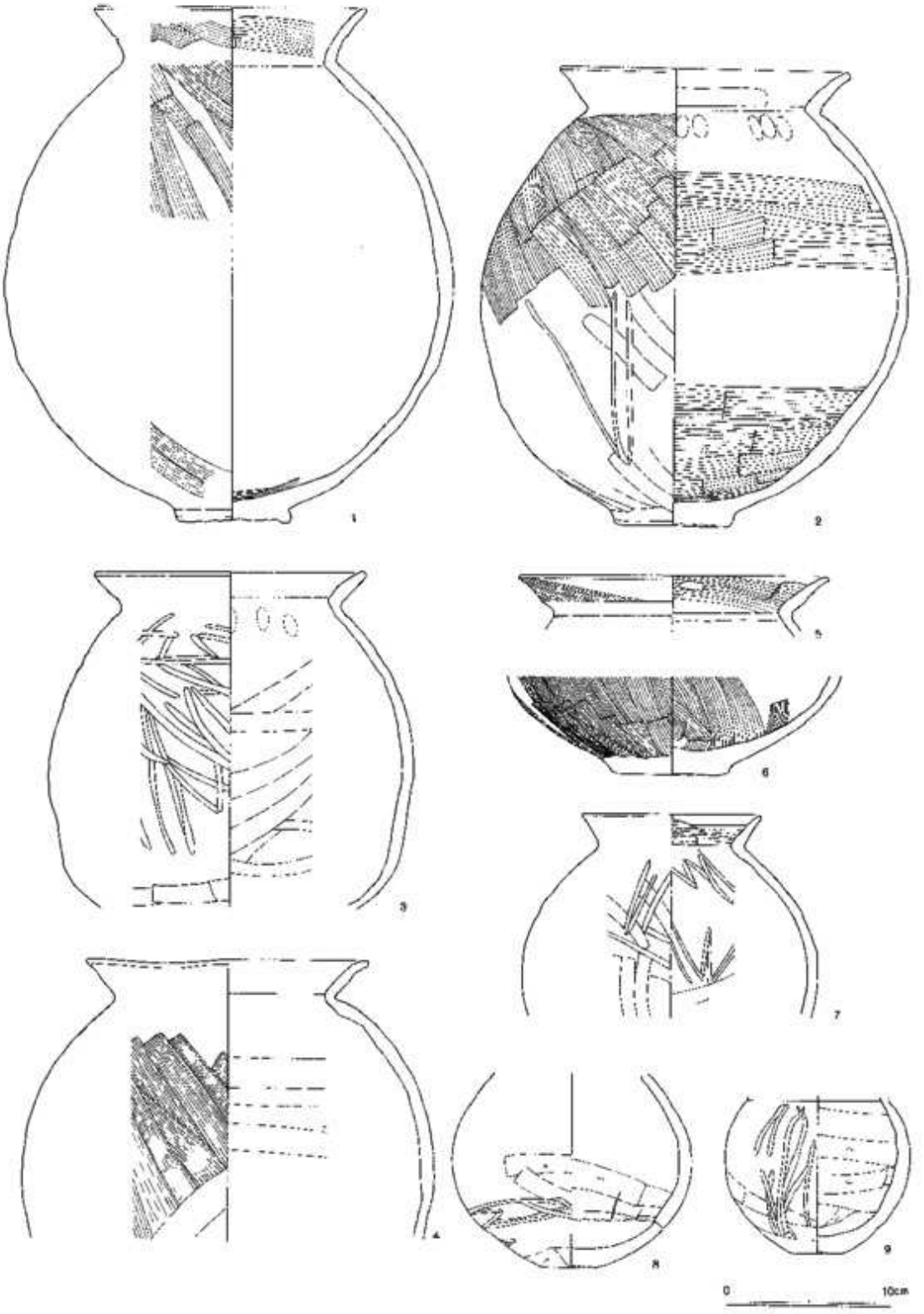
第７図　第１号住居跡遺物出土状況

層中に含まれる炭化物も示唆的である。紡錘車は上部径2.3cm、下部径5.3cm、厚さ1.2cm、孔径上径９mm、下径８mm、重さ38.3g を測り、滑石製である。暗文様の研磨痕が放射状に施されている。

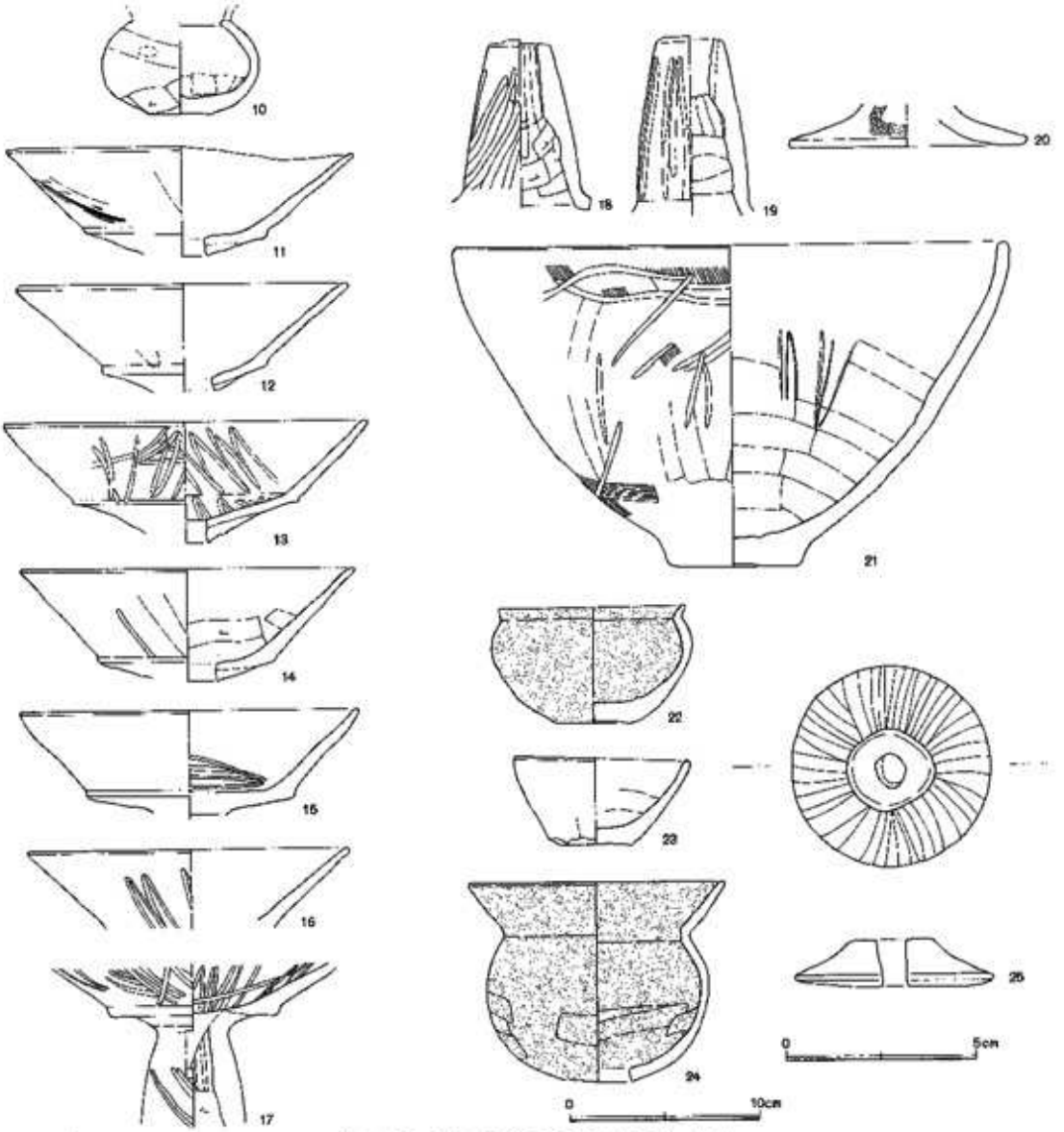
第２号住居跡（第10図）

第２号住居跡はＢ・Ｃ－３・４グリッドに位置する。遺構の西側は調査区域外にかかり、調査区内の中央及び北側は木の根による攪乱により、床面から確認面まで破壊されている。主軸方向は、N－55°－W である。なお本跡に限り、主軸方向は二つの炉を結んだ線とほぼ平行する壁面の方向とした。位置的には、第１号住居跡の南西壁から約９m、第14号住居跡の北コーナーから約８m の位置に当る。

規模は、主軸方向7.2m、主軸に直交する方向は6.2m 以上、深度30cm を測る。平面形は、方形である。壁溝は全周する。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかく、しまりが悪い。壁も崩落が進んだためか、凹凸が多く、直線的でない。柱穴は検出できなかった。貯蔵穴も調査区内では認められない。炉は、法面にかかるものと、それより南東に位置する２基が認められる。法面側の方は、不整円形を呈すると思われ、調査区内での長軸方向で72cm、深度18cm を測り、あまり焼け



第8図　第1号住居跡出土遺物（1）



第９図　第１号住居跡出土遺物（２）

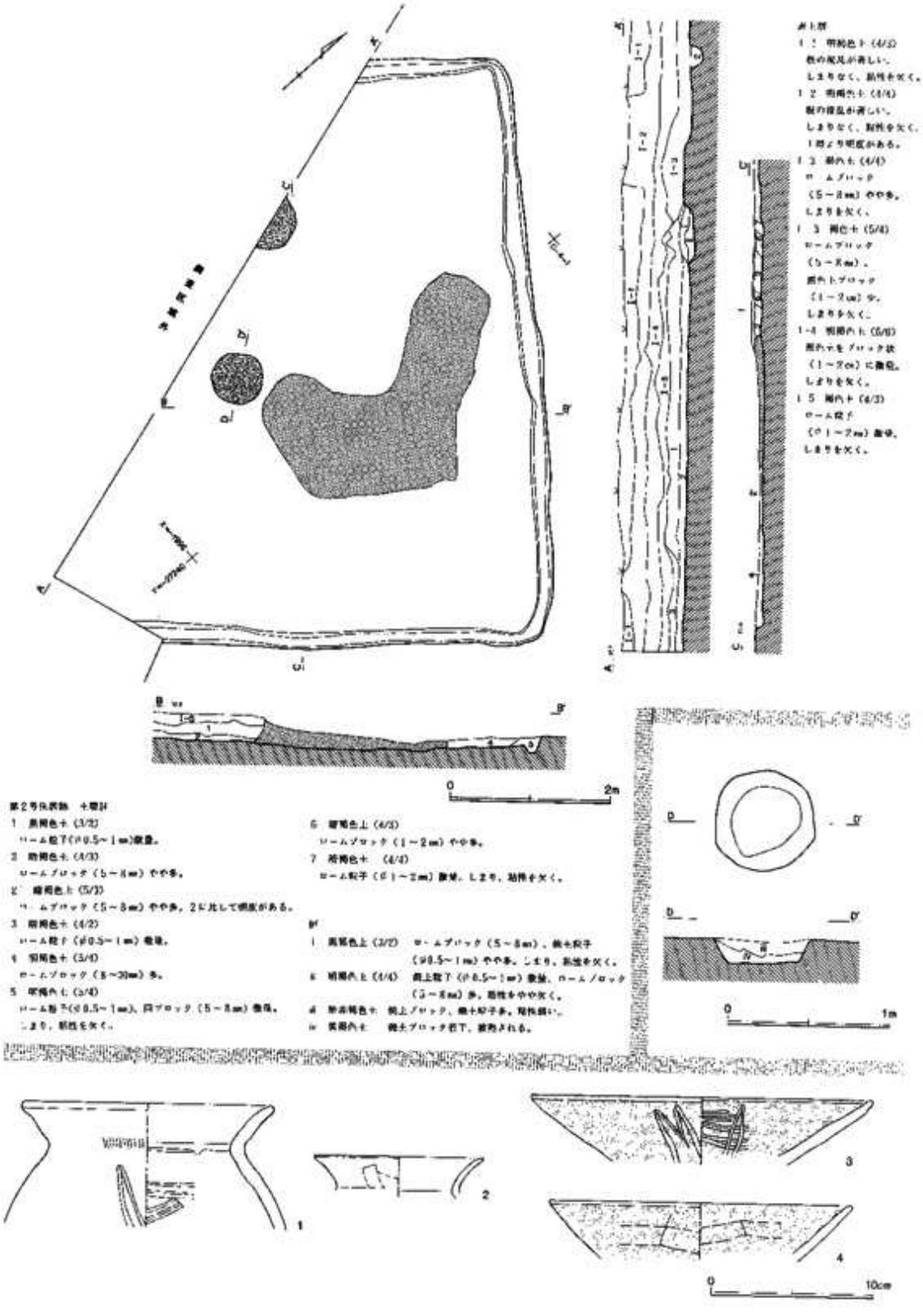
ていない。南東側のものは長・短軸共に62cm を測る。深度は14cm 程を測り、よく焼けている。

覆土は、明褐色土、褐色土で構成され、深度が浅いため堆積パターンは分からないが、人為的な様相は感じられず、自然堆積と考えられる。４層はローム・ブロックを多く含み、壁上部の崩落土と思われる。

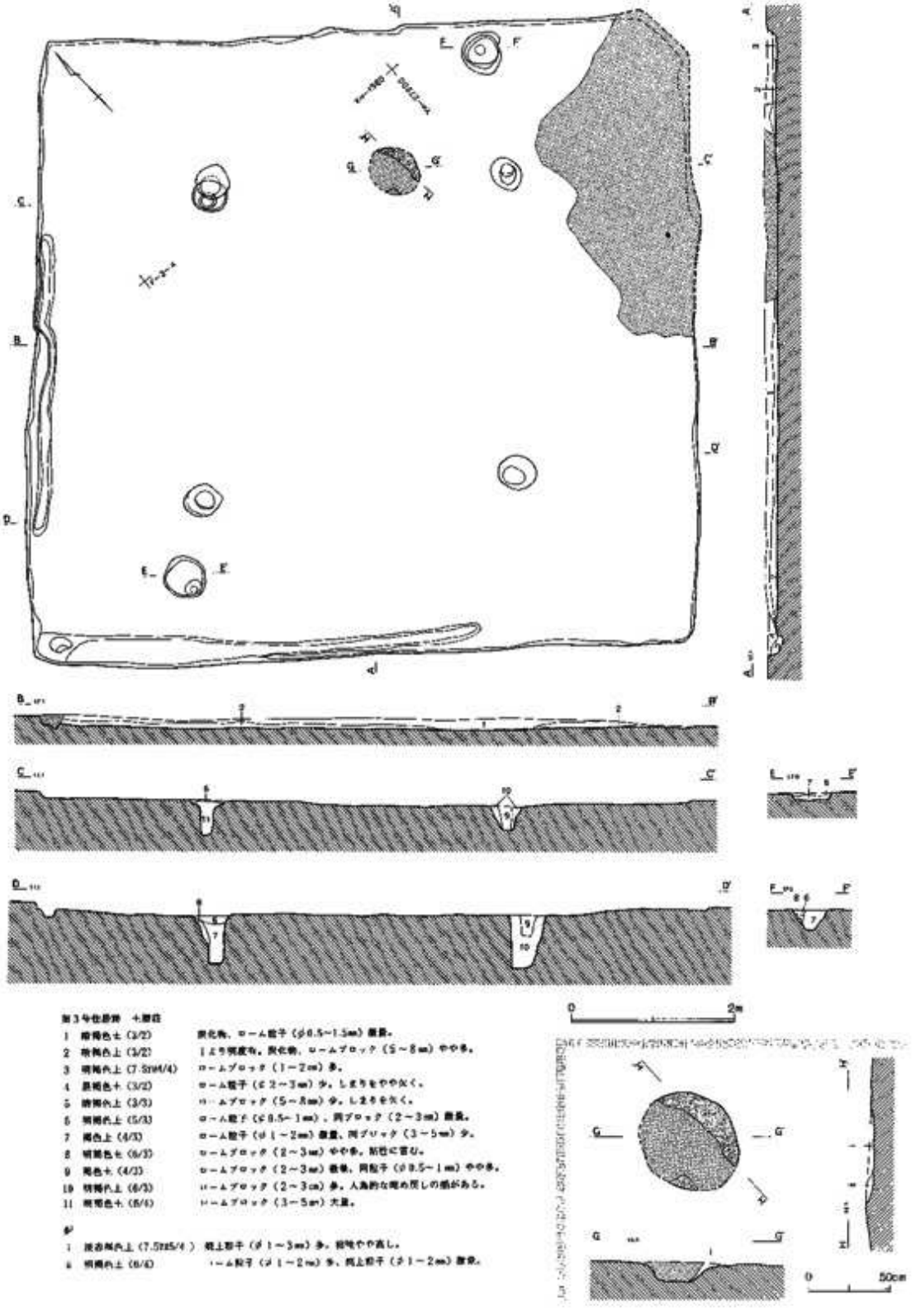
遺物は、流れ込みと考えられ、覆土中から土師器の甕・高杯の破片が、散在して出土する。

第３号住居跡（第11～13図）

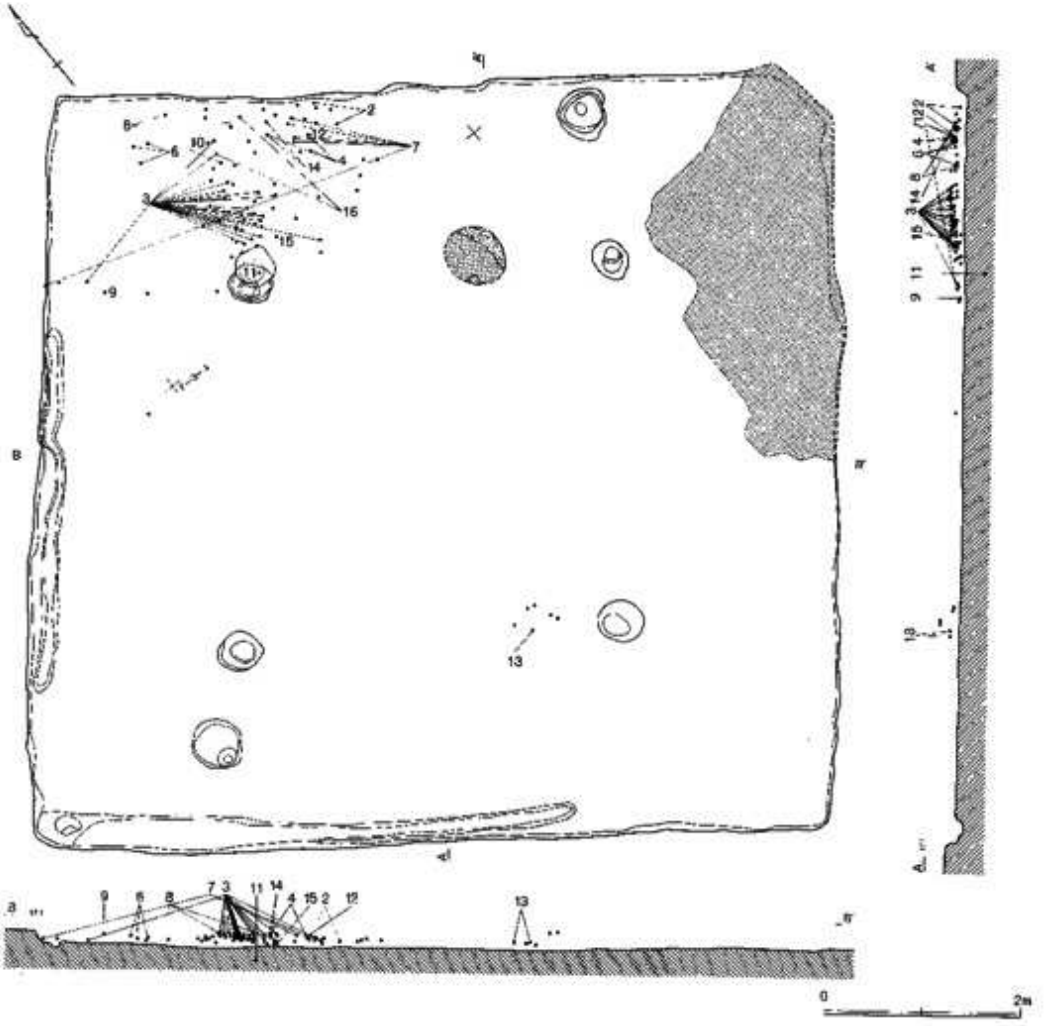
第３号住居跡は、F・G－２・３グリッドに位置する。東コーナーから南東壁に樹木の根による攪乱が入り、一部が床面から壁まで破壊されている。主軸方向は、N－37°－Eで、第１・３号住居



第10図　第２号住居跡・出土遺物


第3号住居跡　土層注
1　暗褐色土（3/2）　炭化物、ローム粒子（φ0.5～1.5mm）微量。
2　暗褐色土（3/2）　1よりやや明度有。炭化物、ロームブロック（5～8mm）ややあり。
3　明褐色土（7.5YR4/4）　ロームブロック（1～2mm）多。
4　黒褐色土（3/2）　ローム粒子（φ2～3mm）少。しまりをやや欠く。
5　暗褐色土（3/3）　ロームブロック（5～8mm）少。しまりを欠く。
6　明褐色土（5/3）　ローム粒子（φ0.5～1mm）、同ブロック（2～3mm）微量。
7　褐色土（4/3）　ローム粒子（φ1～2mm）微量、同ブロック（3～5mm）少。
8　明黄色土（6/3）　ロームブロック（2～3mm）ややあり。粘性に富む。
9　黒色土（4/2）　ロームブロック（2～3mm）微量、同粒子（φ0.5～1mm）ややあり。
10　明褐色土（6/3）　ロームブロック（2～3cm）多。人為的な埋め戻しの感がある。
11　明黄色土（6/6）　ロームブロック（3～5cm）大量。
炉
1　暗赤褐色土（7.5YR5/4）　焼土粒子（φ1～3mm）多。粘性やや高し。
2　明褐色土（6/6）　ローム粒子（φ1～2mm）多、同土粒子（φ1～2mm）微量。
0　2m
0　50cm

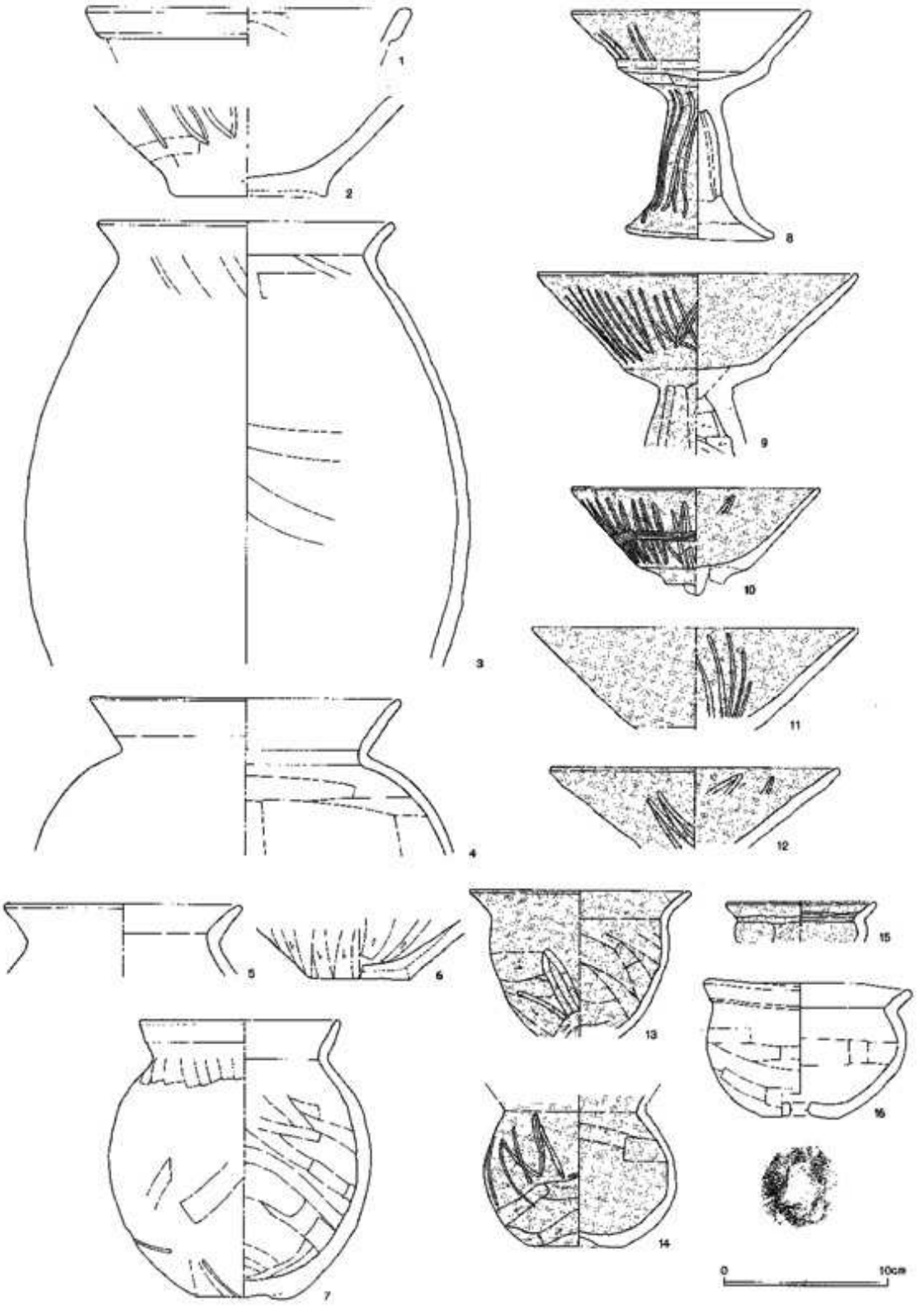
第11図　第３号住居跡



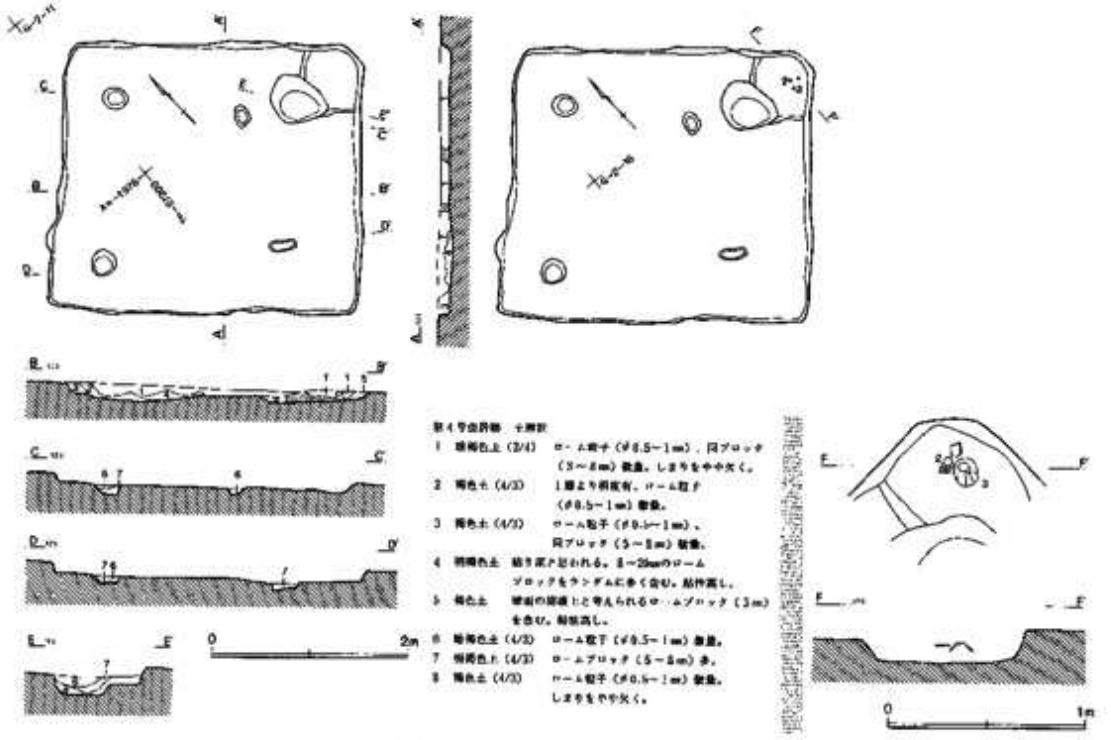
第12図　第３号住居跡遺物出土状況

跡とほぼ同方向である。位置的には第５号住居跡の東壁から約８ｍ、第７号住居跡の北コーナーから約８ｍに位置している。また、第４号住居跡の南西壁から１ｍ程しか離れておらず、住居の方向も同一のため、両者には密接な関係が考えられる。

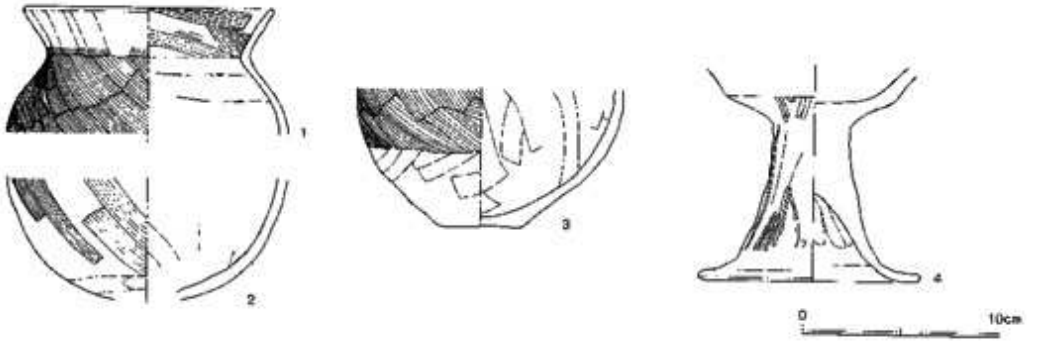
規模は、長軸方向8.3m、短軸方向7.7m、深度10cm を測る。平面形は、南東－北西方向がやや長い正方形である。壁溝は北西壁から南西壁にかけて認められ、西コーナーで一旦切れる。深度は６cm～10cm を測る。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかい。壁も崩落が進んだためか、凹凸が多く、直線的ではない。柱穴は西側・南側が深く床面から各々60・70cm、北側・東側がやや浅く各々40・30cm を測る。特に北側の柱穴は二重の構造が認められ、その他の様相からは明らかでないが、建て替えが行われた可能性を示すものとも考えられる。また、第９層は柱痕の可能性があり注意される。貯蔵穴と考えられるものは北東側、南西側の２箇所に認められる。ただ西側のものは床面から10cm 掘り込まれた南西側を更に10cm 程掘り下げており、他の機能を持つ可能性もある。北西側の深度は25cm 程である。平面形はいずれも不整円形で、径50cm ほどである。炉は北東側に認められ、二本の柱穴の中央からやや南東に寄る。根による攪乱により中心を壊されてい



第13図　第３号住居跡出土遺物



第14図　第４号住居跡



第15図　第４号住居跡出土遺物

る。不整円形を呈すると思われ、長軸方向65cm ×短軸方向55cm と推定される。深度は最高12cm を測る。攪乱が進み焼成の度合は不明である。

覆土は、暗褐色土、褐色土、明褐色土で構成され、大略レンズ状の自然堆積の様相を呈している。柱穴の覆土はローム・ブロックが多く、埋め戻しの感を受ける。前述のように第９層は柱痕の、第10層は掘り方の可能性を持つ。貯蔵穴の覆土は、自然堆積の様相を呈する。

遺物は、北東壁際の北コーナー寄りに集中して分布する。（第12図）第２層堆積後に破砕して廃棄した状態を呈し、住居の埋没途中に何らかの儀礼が行われた可能性が高い。

遺物（第13図）は、土師器の甕・高杯・鉢・甑が出土している。実測不能な個体中では、甕の比率が高いようである。また、赤彩されてこそいないが赤橙色を呈する甑（16）があり、１号住居跡

の様相と似通っている。やはり1号住居跡と同様に第1・2層中には炭化物が含まれており、この点でも共通性が窺える。

第4号住居跡（第14・15図）

第4号住居跡は、F・G－2グリッドに位置する。部分的に根による攪乱により、壊されている。主軸方向は、炉がないため確定的でないが、ここでは長辺の方向を取りN－48°－Wとしておきたい。軸方向としては第2・6号住居跡等とほぼ同一である。また、第3号住居跡の北東壁から1m程しか離れておらず、住居の方向も同一のため、両者には密接な関係が考えられる。

規模は、長軸方向3.1m、短軸方向2.8m、深度15cmを測る。平面形は、南東－北西方向がやや長く正方形に近い長方形である。壁溝は認められない。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかい。硬化面が認められないためサブ・トレンチを入れたが明瞭な感触は得られず、色調によって床面を認定した。そのため遺構の西側は多少掘り過ぎとなっている。壁も崩落が進んだためか、凹凸が多く、直線的でない。柱穴はいずれも不明瞭で浅く、床面から各々15cm程しか掘り込まれていない。貯蔵穴と考えられるものは東側のコーナーに認められた。70cm×60cmの方形の部分を54cm×44cm程の楕円形の掘り込みが切るという二重構造で、方形の部分の深度が10cm、楕円形部分の深度が20cmを測る。炉は認められない。

覆土は、暗褐色土、褐色土、明褐色土で構成され、大略レンズ状の自然堆積の様相を呈している。柱穴の覆土も自然堆積の様相を呈す。貯蔵穴の覆土も同様である。

遺物は少なく、貯蔵穴内から土師器の甕が、南コーナーの覆土中から高杯が出土している。

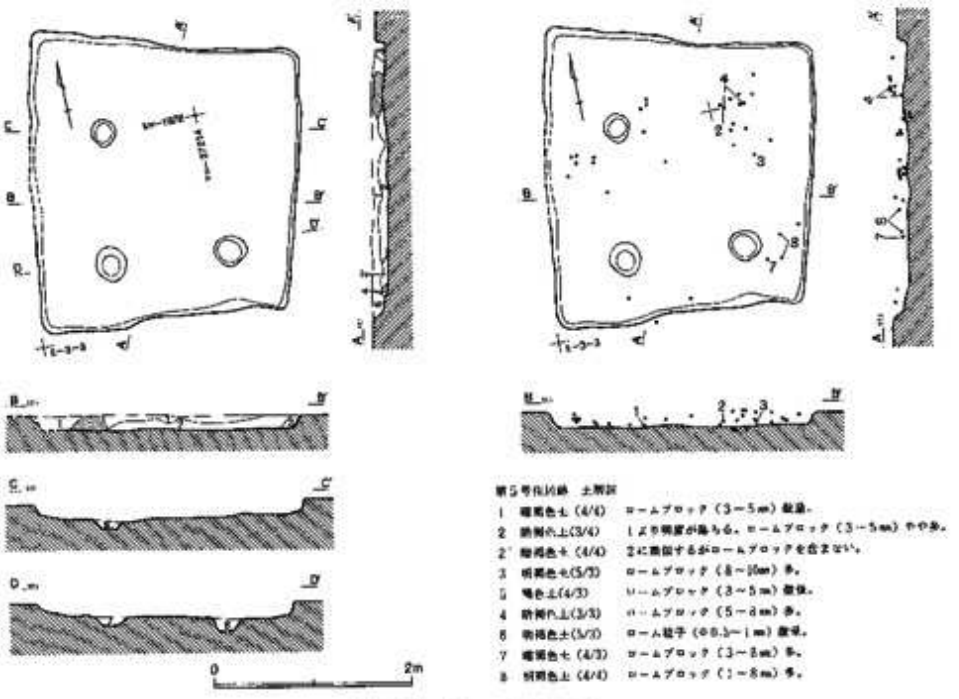
第5号住居跡（第16・17図）

第5号住居跡は、E－2グリッドに位置する。部分的に根による攪乱により、壊されている。主軸方向は、長辺の方向をとり、N－16°－Eとしておきたい。この主軸方向は、他のどの住居跡とも一致しない。位置的には、第1号住居跡、第3号住居跡のほぼ中間に当たる。軸方向は異なるが、第6号住居跡の南東壁から2m程しか離れておらず、両者には密接な関係があると考えられる。

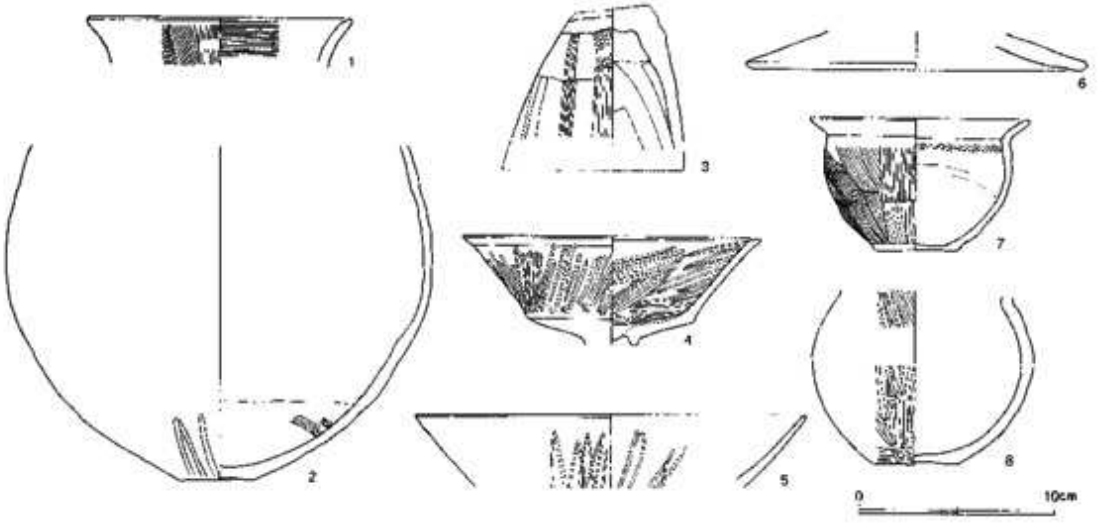
規模は、長軸方向3.0m、短軸方向2.8m、深度15cmを測る。平面形は、南北方向がやや長い不整方形である。壁溝は認められない。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかく、しまりに欠ける。壁も崩落が進んだためか、凹凸が多く、そのためか西辺が長いのが特徴的である。柱穴はいずれも不明瞭で浅く、床面から各々10cm程しか掘り込まれていない。貯蔵穴と考えられるものは認められなかった。炉も同様に認められず、この時期の住居としては極めて不自然であると言わざるを得ない。

覆土は、暗褐色土、褐色土、明褐色土で構成される。三角、レンズ状の堆積が見られ、自然堆積の様相を呈している。柱穴の覆土も自然堆積の様相を示す。

遺物はほぼ第2層中に含まれる様相を呈し、量的にはそれほど多くない。土師器の壺・甕・台付甕・高杯・鉢等が出土し、図化していない破片を含めると壺・甕の比率が高いようである。また、2の壺、7・8の鉢は熱を受けており、注意される。



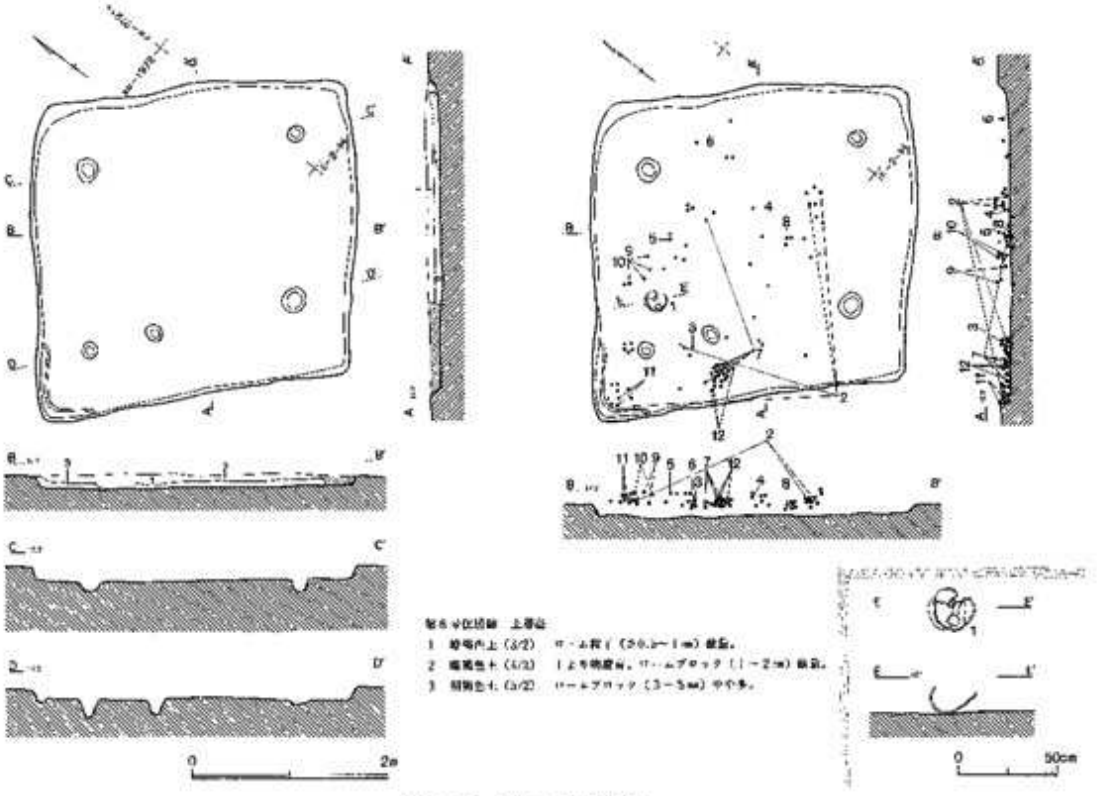
第16図　第５号住居跡



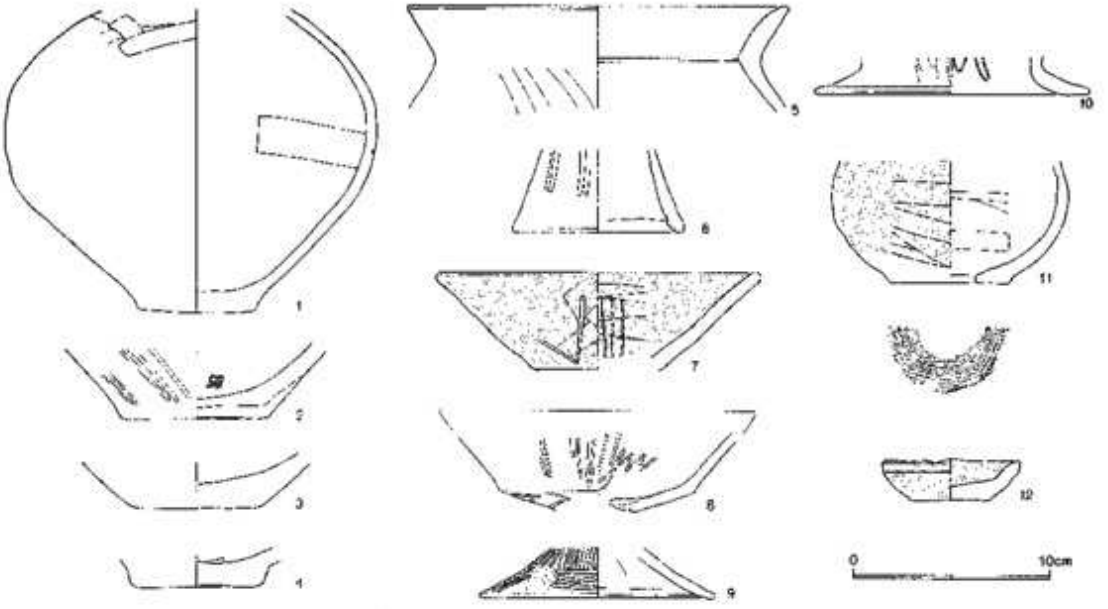
第17図　第５号住居跡出土遺物

第６号住居跡（第18・19図）

第６号住居跡は、E－２グリッドに位置する。南側のコーナーを中心に、根による攪乱により、壊されている。主軸方向は、長辺の方向をとり、N－43°－W としておきたい。軸方向としては、第２・４号住居跡とほぼ一致する。住居の方向自体は、第１・３号住居跡と同方向である。位置的には、第１号住居跡、第３号住居跡のほぼ中間に当たる。軸方向は異なるが、第５号住居跡の北壁から２m 程しか離れておらず、両者には何らかの関係も考えられる。



第18図　第６号住居跡



第19図　第６号住居跡出土遺物

規模は、長軸方向3.4m、短軸方向3.3m、深度15cm を測り、第７号住居跡と同一である。平面形は、北東－南西方向がひしゃげた不整方形である。壁溝は南西コーナーに深さ５cm ほどで一部認められる。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかく、しまりに欠ける。壁も崩落が進んだた

めか、凹凸が多い。柱穴はいずれも不明瞭で浅く、床面から5～15cm程しか掘り込まれていない。貯蔵穴と考えられるものは認められなかった。炉も同様に認められず、第5号住居跡と同様この時期の住居としては極めて不自然であると言わざるを得ない。

覆土は、暗褐色土、明褐色土で構成される。レンズ状の自然堆積の様相を呈している。柱穴の覆土も同様の様相を示す。

遺物は規模の割に多く、第2・3層が流れ込んだ後、廃棄したような様相を呈している。特に西コーナーに集中して出土する。図示可能なものは、土師器の壺・甕・台付甕・高杯・鉢・甑・ミニチュアである。図化していない破片を含めると壺・甕の比率が高い。また、1の壺、9の高杯は熱を受けており、注意される。

第1号、第3号住居跡で見られた赤彩された甑に加え、赤彩のミニチュア等が組成に含まれていることは、出土状況とも合せて両住居との関係を物語るものとして注目される。

第7号住居跡（第20図）

第7号住居跡は、F・G－4グリッドに位置する。試掘時のトレンチが一部に入り、攪乱を受けている。また、南西壁は10号土坑に切られる。主軸方向は、長辺の方向をとり、N－59°－Wとしておきたい。軸方向としては、やや開くがほぼ第2・4・6号住居跡と一致する。住居の方向自体は第3・12号住居跡と同方向である。位置的には、第3号住居跡の南コーナーから約8m、第12号住居跡の北西壁から約4mに当る。第12号住居跡と近接し、何らかの関係が予想される。

規模は、長軸方向3.4m、短軸方向3.3m、深度15cmを測り、第6号住居跡と同一である。平面形は、ほぼ正方形である。壁溝は認められない。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかく、しまりに欠ける。壁は凹凸が多いが、他の住居に比して直線的である。柱穴はいずれも不明瞭で浅く、東側の1基がやや深いが、大略床面から10cm程しか掘り込まれていない。貯蔵穴と考えられるものは認められなかった。炉も同様に認められず、第5・6号住居跡と同様この時期の住居としては極めて不自然であると言わざるを得ない。

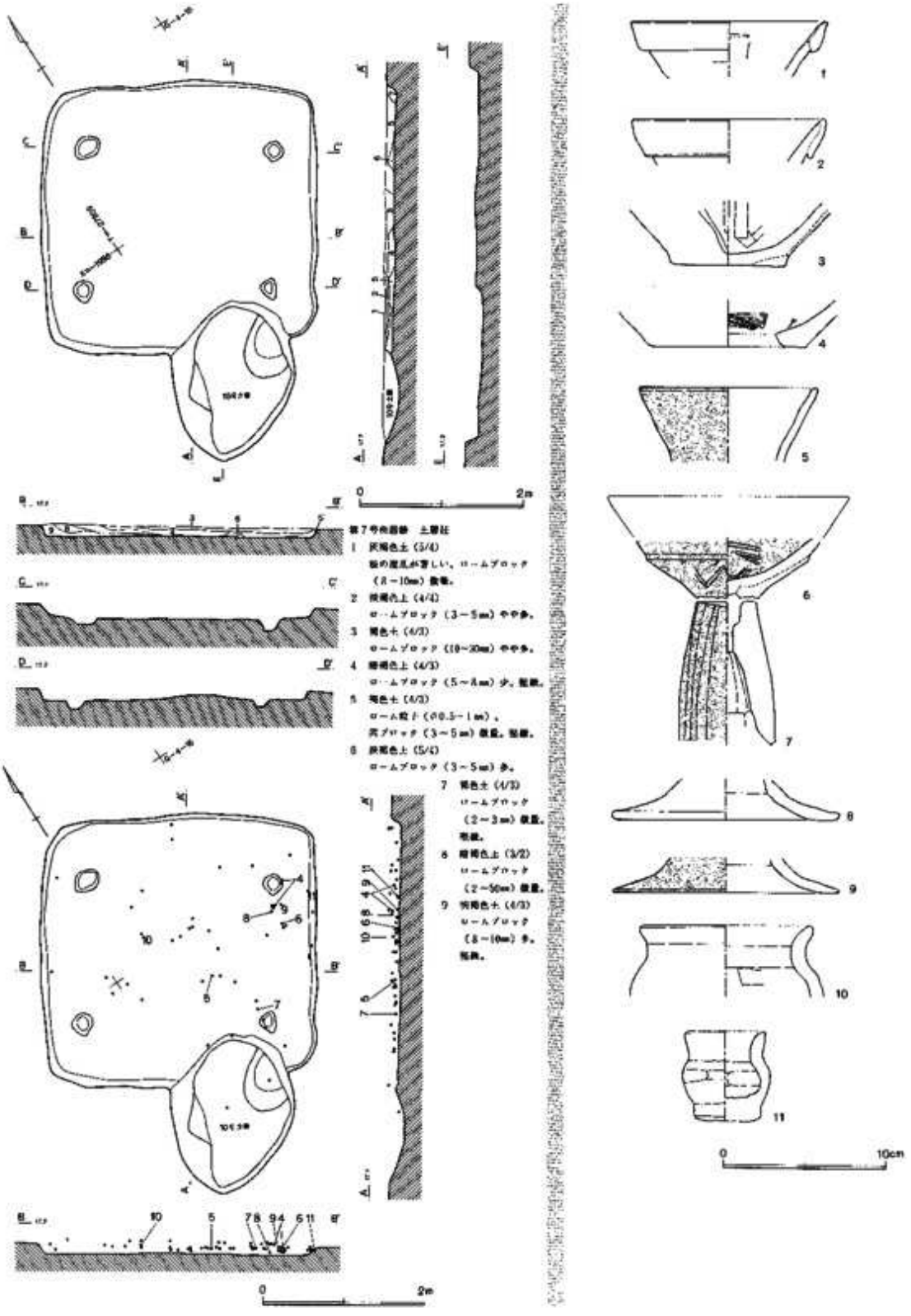
覆土は、灰褐色土、淡褐色土、明褐色土、褐色土、暗褐色土で構成される。根の攪乱等により一部乱れるが、レンズ状の自然堆積の様相を呈している。柱穴の覆土も同様の様相を示す。

遺物は少なく、覆土中に散在する。図示可能なものは、土師器の壺・小型壺・高杯・鉢・ミニチュアである。図化していない破片を含めると壺・甕の比率が高い。

第10号住居跡（第21図）

第10号住居跡は、D－4グリッドに位置する。東側の第11号住居跡と切り合い、こちらの方が古い。木の根による攪乱により、部分的に壊されている。主軸方向は、長辺の方向をとり、N－9°－Wとしておきたい。他の住居跡のいずれとも一致しない軸方向である。位置的には、第1・2・3・5・7・14号住居跡のほぼ真ん中にあり、丁度それらの住居群に取り囲まれる格好になっている。最も至近の第14号住居跡の北東壁からは、南西コーナーで約4.5m離れている。

規模は、長軸方向6.5m、短軸方向5.1m、深度10cmを測り、浅い。平面形は、南北に長い不整長



第20図　第7号住居跡・出土遺物

方形である。西壁は外側にやや張り出している。壁溝は認められない。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかく、しまりに欠ける。壁は西壁を除き直線的である。柱穴は多いが、いずれも不明瞭で浅く、床面から10～15cm 程掘り込まれるのみである。貯蔵穴と考えられるものは認められないが、南西コーナー近くの1.1m ×1.0m、深さ10cm 程の掘り込みが、貯蔵穴となる可能性がある。炉は認められず、この時期の住居としては極めて不自然である。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土で構成される。木の根により攪乱を受けているが、概ね自然堆積と考えられる。柱穴の覆土も同様の様相を示す。

遺物は、規模の割に僅少で、覆土中に散在する程度である。図示可能なものは、土師器の壺の底部２点のみである。

第11号住居跡（第21図）

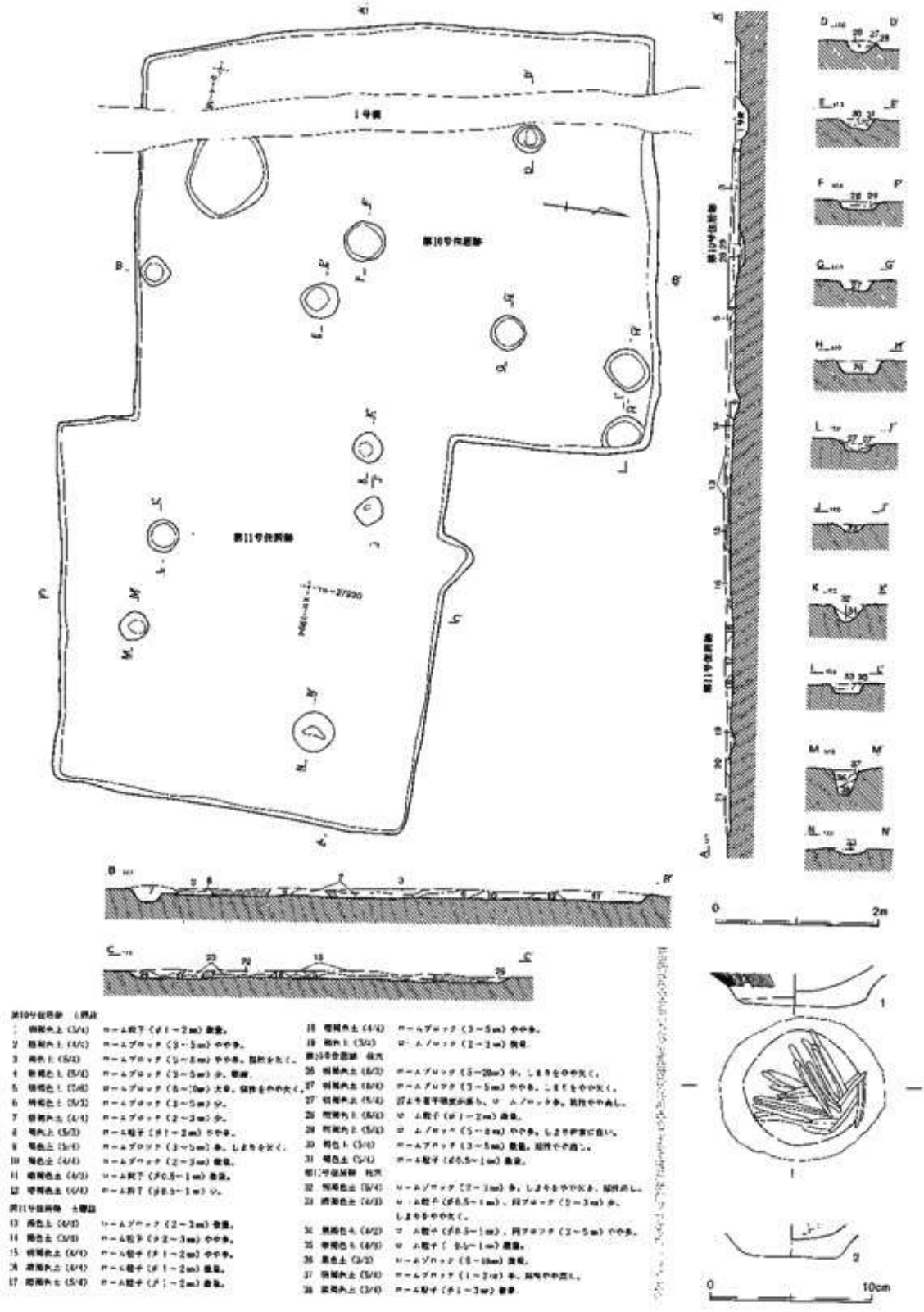
第11号住居跡は、D・E－４グリッドに位置する。西側の第10号住居跡と切り合い、こちらの方が新しい。木の根による攪乱により、部分的に壊されている。主軸方向は、北辺の方向をとり、W－E としておきたい。第10号住居跡同様、他の住居跡のいずれとも一致しない軸方向である。位置的には、第１・２・３・５・７・14号住居跡のほぼ真ん中にあり、丁度それらの住居群に取り囲まれる格好になっている。最も至近の第14号住居跡の北東壁からは、南西コーナーで約８m 離れている。

規模は、長短軸方向共4.4m、深度10cm を測り、浅い。平面形は、歪んだ正方形である。北壁の一部が張り出すが、これは攪乱によるものと考えられる。壁溝は認められない。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかく、しまりに欠ける。壁は直線的である。柱穴は多く、いずれも不明瞭で、北西隅・南東中央のものがやや深く床面から20－30cm を測る他は10～15cm 程しか掘り込まれない。貯蔵穴と考えられるものは認められない。炉も認められず、この時期の住居としては極めて不自然である。

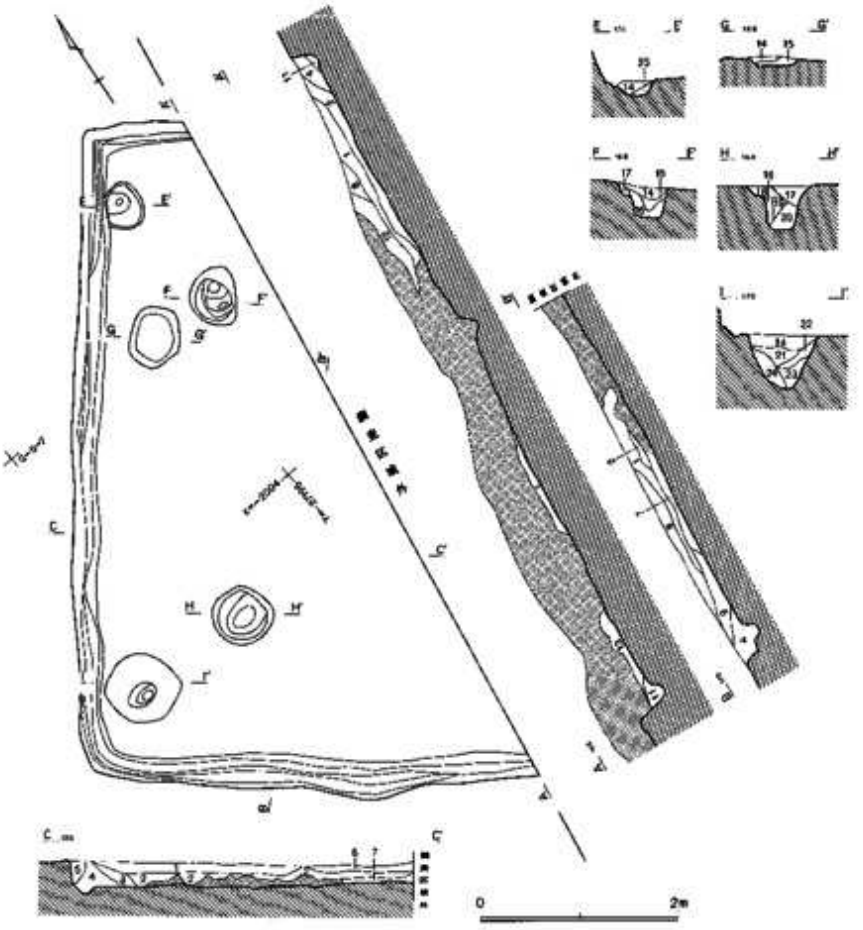
覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土で構成される。木の根により攪乱を受けているが、概ね自然堆積と考えられる。柱穴の覆土も同様の様相を示す。

遺物は、規模の割に僅少で、覆土中に散在する程度である。図示可能なものは出土していない。

作業風景（３）



第21図　第10・11号住居跡・出土遺物



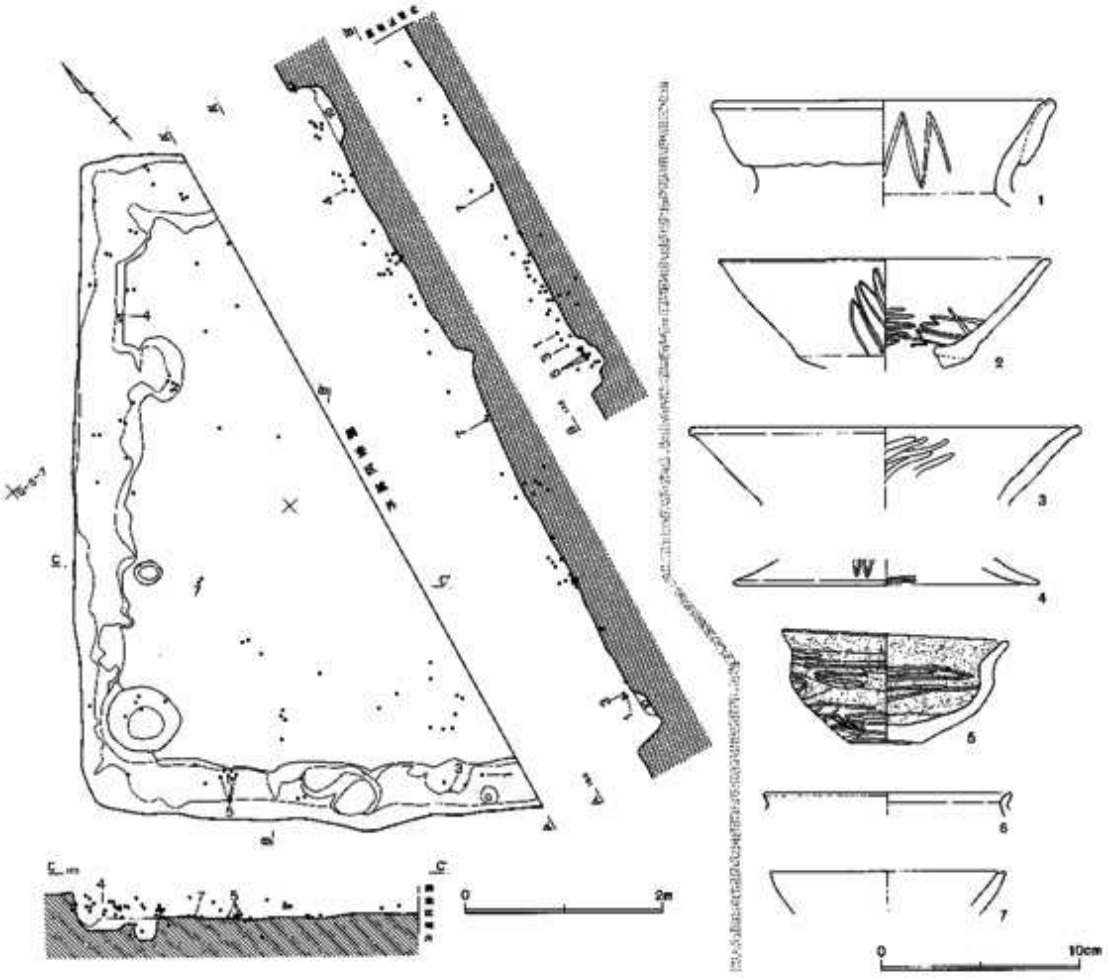
第22図　第12号住居跡

第12号住居跡（第22・23図）

第12号住居跡はG－５グリッドに位置する。遺構の東側は調査区域外にかかり、一部が木の根による攪乱により、床面から確認面まで破壊されている。主軸方向は、N－48°－Eである。なお本跡に限り、主軸方向は確認できた北西壁の走る方向とした。軸方向としては、第１・３号住居跡とほぼ同一の方向である。位置的には、第７号住居跡の南東壁から約４m、第13号住居跡の北東壁から約4.5mに位置している。

規模は、主軸方向7.7m、主軸に直交する方向4.7m以上、深度は確認面から20cmを測る。平面形は方形である。壁溝は深度８～10cmを測り、全周する。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかく、しまりが悪い。壁も攪乱にやられており、凹凸が多く、直線的ではない。柱穴は４本検出した。北西壁沿いの２本は10～15cm程の深さで浅く、不明瞭である。それ以外の２本は掘り込みの深いしっかりしたもので、30～40cmの深さがあり、一段掘り込んだ中心をもう一段深く掘り込む２重の構造を持つ。貯蔵穴は南西コーナーに１基認められる。径80×70cmの不整円形で、断面逆台形を呈し、深度50cmと深い。炉は、調査区内では認められない。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土で構成される。攪乱により、かなり壊されているが、レンズ状の堆積状態を示し、自然堆積と思われる。柱穴、貯蔵穴共同様の様相を呈している。



第23図　第12号住居跡遺物出土状況・出土遺物

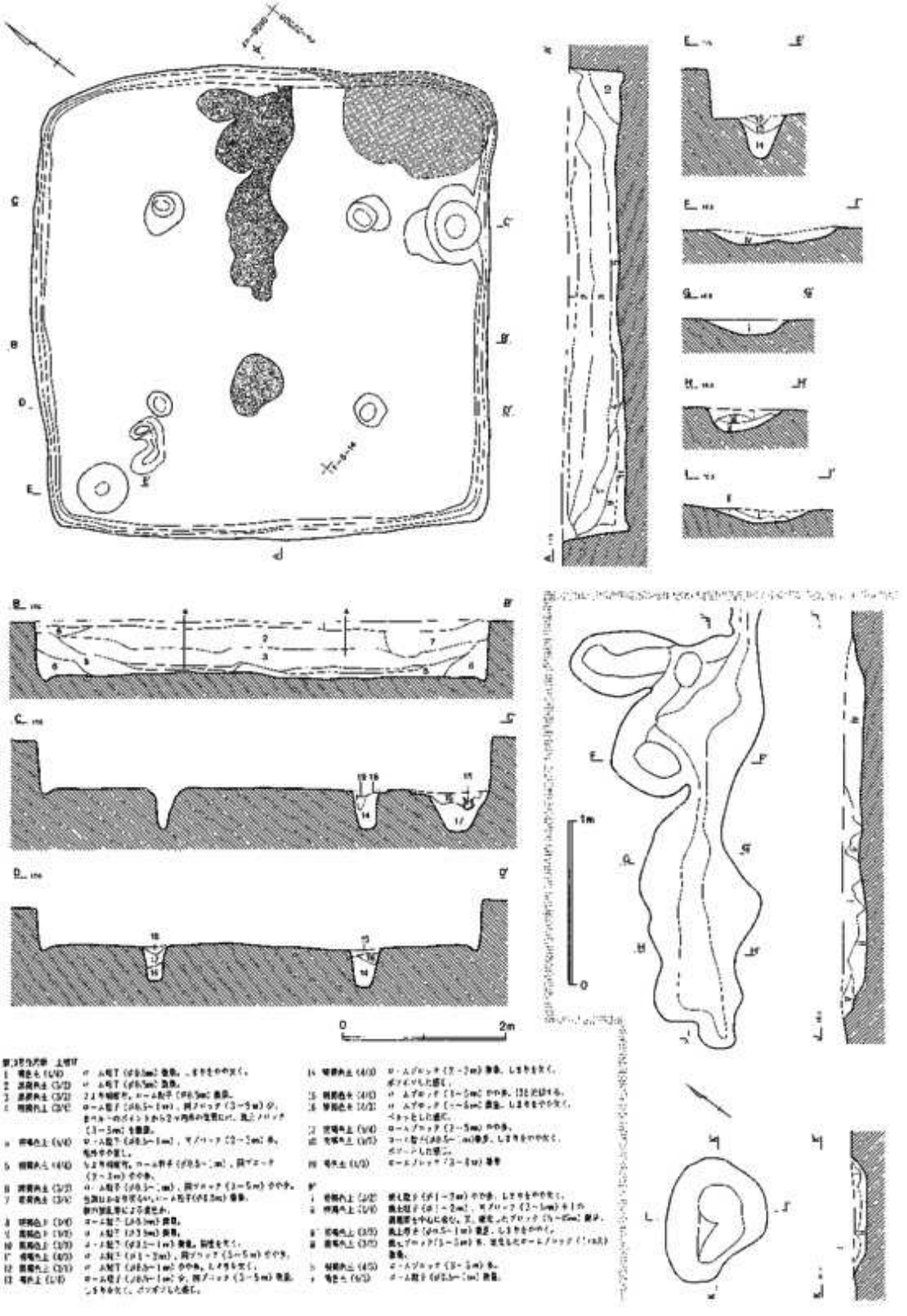
この住居は本遺跡中で唯一、掘り方をもつものである。（第23図）その構築手順としては、①まず方形に地面を掘削する。②住居の中央を残して周囲を一段深く掘る。③そこにローム混じりの暗褐色土を貼り込む。④柱穴、貯蔵穴、壁溝等の施設を掘削する、という段階を想定できる。

遺物は、第４層・９層の覆土中から散在して出土し、流れ込みと考えられる。また、本住居は縄文時代の遺物の流れ込みが多く、前期と考えられる玦状耳飾りが第１層中から出土している。

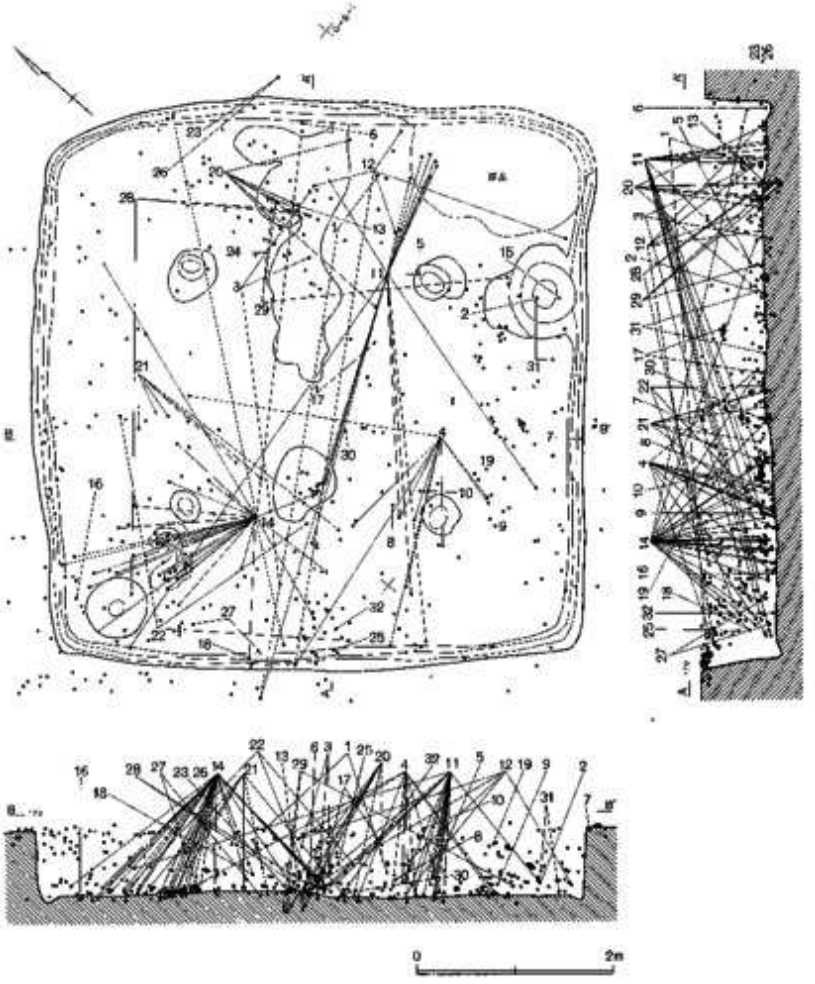
遺物（第23図）は、土師器の壺・甕・高杯・鉢の破片が出土している。図化不能分も含めると壺・甕の比率が高い。

第13号住居跡（第24～27図）

第13号住居跡は、F・G－５・６グリッドに位置する。東コーナーを中心に木の根による攪乱が入り、一部が床面から壁まで破壊されている。また、縄文時代後期の第15号住居跡を切って構築されているため、覆土中から多量の縄文時代後期の土器が出土する。主軸方向は、炉が２箇所あるため確定できないが、ここでは北からの軸方向としてN－55°－Eとしておきたい。軸方向としては



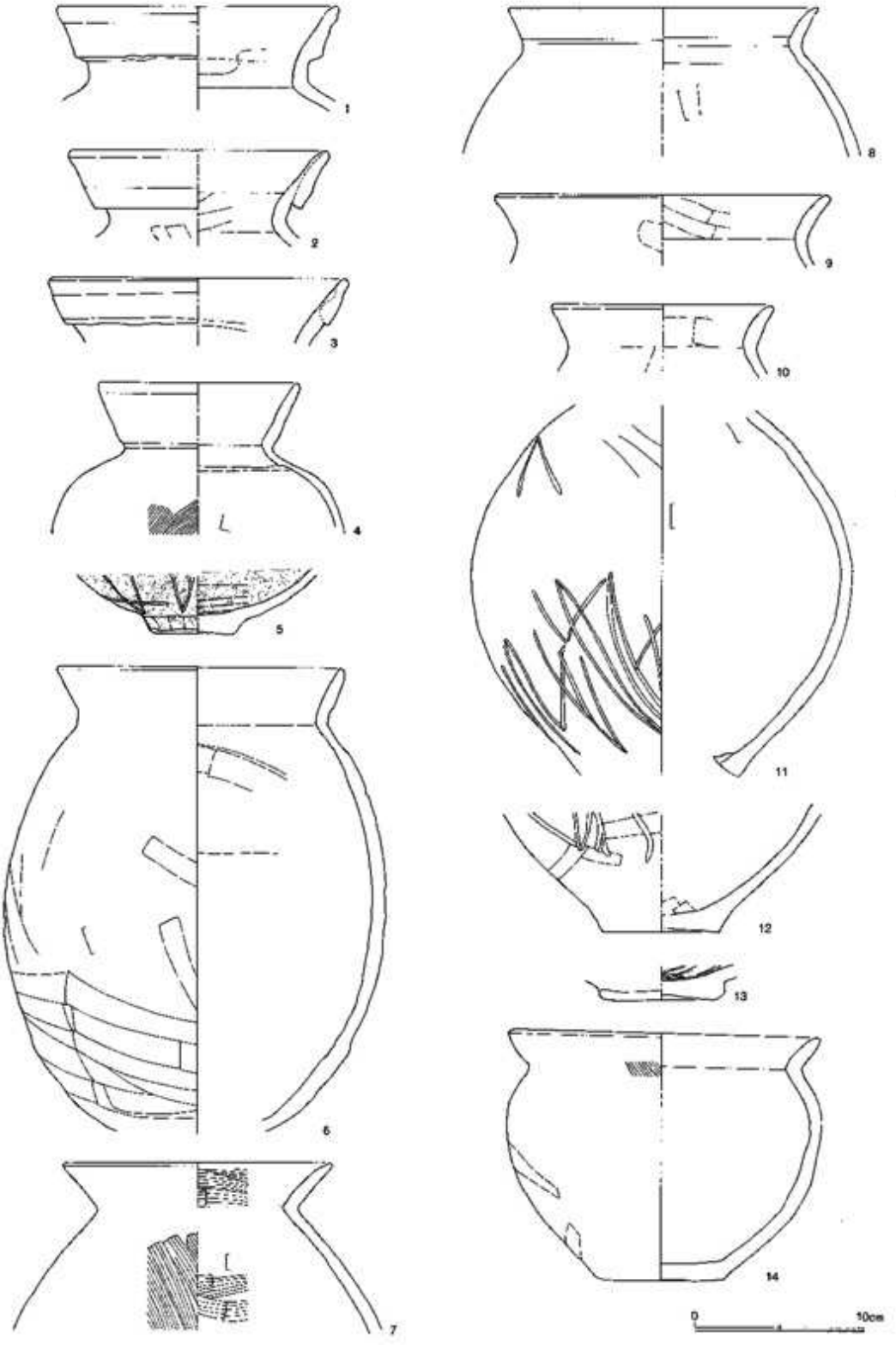
第24図　第13号住居跡



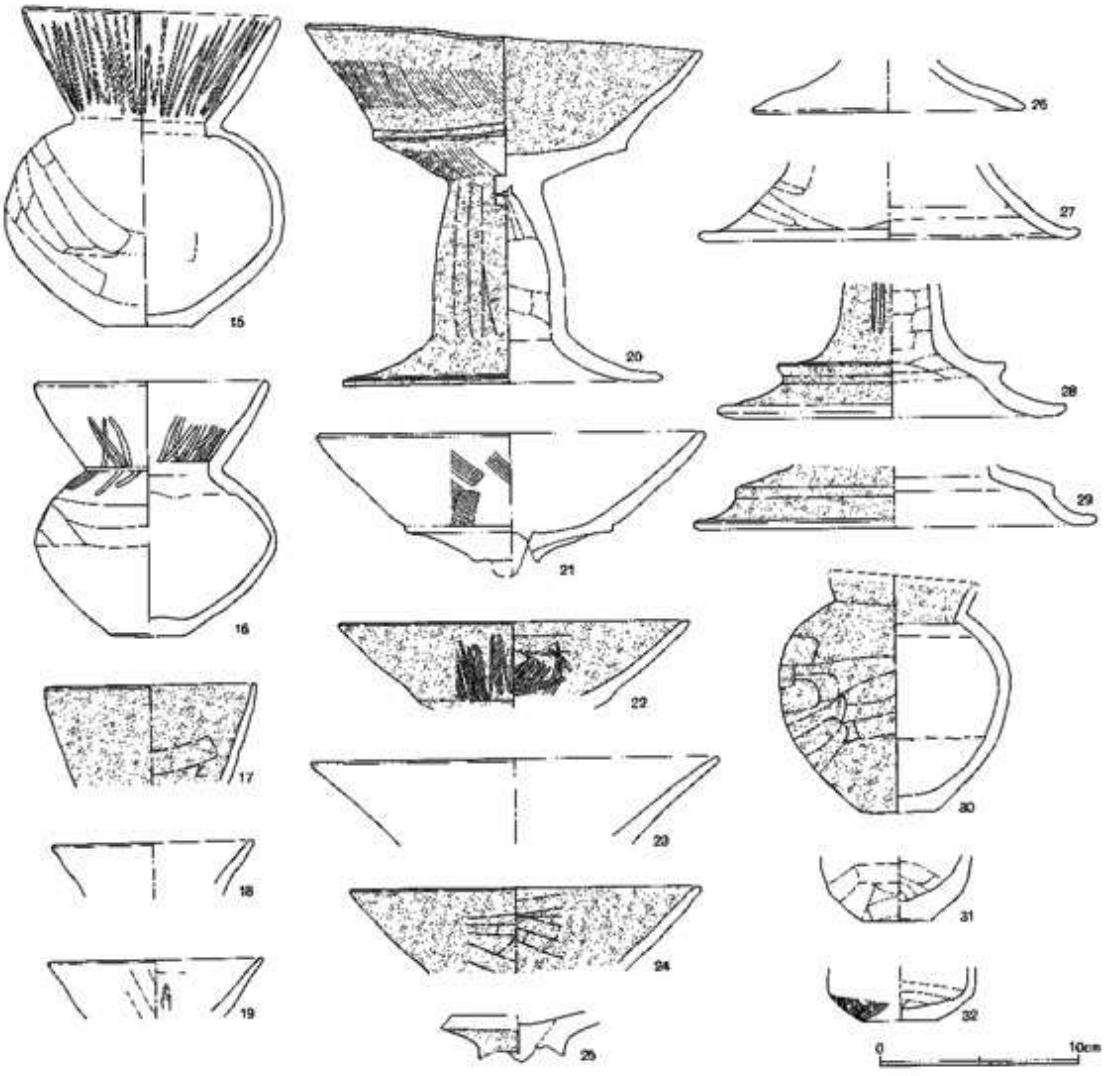
第25図　第13号住居跡遺物出土状況

第１・３・12号住居跡等より若干東に振れる。位置的には、第12号住居跡の南西壁から約4.5m に当る。周辺の遺構の分布状況、地形の変化から、集落の南端に位置する可能性がある。

規模は、長軸方向5.8m、短軸方向5.7m、深度70cm を測る。平面形は、ほぼ正方形である。壁溝は攪乱されている東コーナーが不明だが、全周すると思われる。深さは５cm 程である。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかい。壁は直線的だが、攪乱に壊されている部分もある。柱穴は４本検出された。深さはいずれも床面から40－50cm を測り、しっかりした掘り込みをもつ。北側と東側のものは、浅く掘った中央を更に深く掘り込んでいる。貯蔵穴は南東側と西側の２箇所で認められる。南東側のものは壁に接して掘り込まれ、その部分だけ壁溝が切れる。平面形は、1.0×0.7m の楕円形で、北西側が更に30cm ほど浅く掘り込まれている。断面逆台形で、深度50cm を測る。中から小型壺（15）が出土している。西側のものは径60cm 程の不整円形で、深度50cm、断面逆台形を呈する。この貯蔵穴の北東側には黄褐色粘土を堤状に盛り上げた部分があり、その上から甕等が出土している。炉は、南東側の不整楕円形のものと北東側の不整形なものの二箇所認められる。南西側のものは、二本の柱穴の中央からやや北東に寄る。長軸方向75cm、短軸方向60cm を測



第26図　第13号住居跡出土遺物（１）



第27図　第13号住居跡出土遺物（２）

り、深度は７cm 程で浅く、あまり焼けていない。北東側のものは遺構のほぼ中央から北東へ向かって壁溝まで伸びている。幅50cm ～70cm 前後の溝状の部分が一旦くびれた後、また広がり、それに50～60cm 前後の皿状の掘り込みが２箇所ついている。深度は部位によって異なるが大略15cm 前後である。この形態からは、とても通常の炉として使用したとは考えられず、どのような機能を持つものなのか検討を要する。こちらも、あまり焼けていない。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土で構成され、基本的にレンズ状の自然堆積の様相を呈している。ただし４層は焼土粒子を含み、注意を要する。柱穴の覆土も、基本的に自然堆積の様相を呈する。土質の違いは根の攪乱によるものと思われる。東側柱穴の第19層は、柱の痕跡である可能性を持つ。貯蔵穴の覆土も自然堆積の様相を呈している。

遺物の出土状況（第25図）は、興味深いものがある。これらは床面直上から出土するものと、それ以外に大別できる。前者には完形に近い形で土圧でつぶれたような状態で出土した20・30、西側

の貯蔵穴を取り囲む様に周辺で出土した16、あたかも粉々に割られた破片を遺構内にバラまいたように出土した11・14のようなものがある。上層で出土したものは、単純に流れ込みと考えられるものもあるが、17・22・28・29の様に異なる層位間で接合するものもある。また、11・14がこちらに含まれる可能性もある。上述のような出土状況は、これらの遺物が単なる流れ込み等によってもたらされたものでなく、意図的に、そこに置かれた可能性を示す。後ほど、詳しく分析することにしたい。

遺物（第26・27図）は、土師器の壺・甕・小型壺・高杯・鉢等が出土している。実測可能個体・実測不能の破片のうち、壺・甕の比率が高い。15・16の小型壺は火を受けている。第4層中に含まれる焼土も、先の出土状況と合せ、これらを用いた何らかの行為を示すものとして見逃せない。

第14号住居跡（第28～36図）

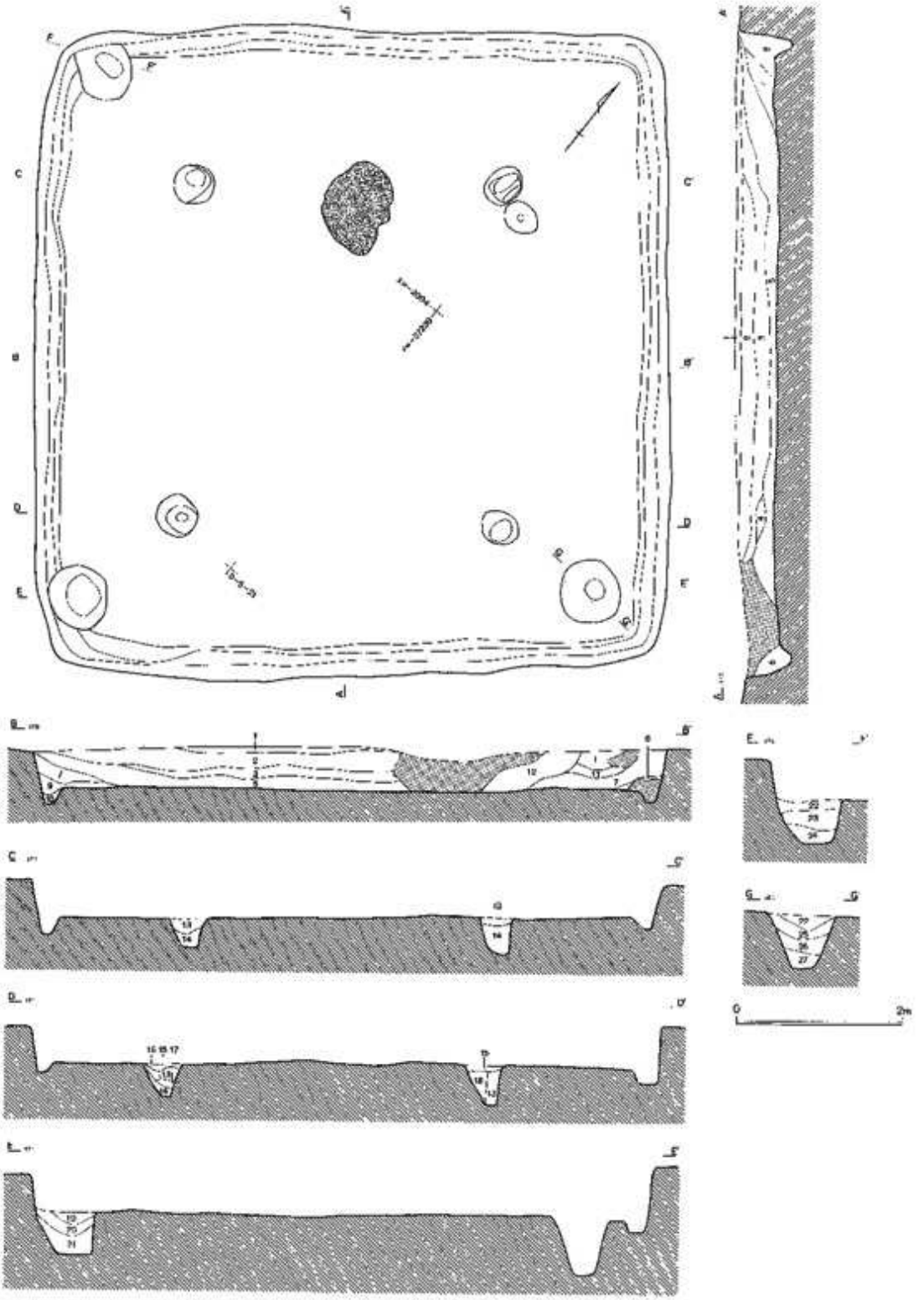
第14号住居跡は、C・D－5グリッドに位置する。北コーナーを中心に木の根による攪乱が入り、一部が床面から壁まで破壊される。主軸方向は、N－38°－Wを指し、第2号住居跡とほぼ同方向で、第1・3号住居跡等と直交する。位置的には、第2号住居跡の南東壁から約8m、第10号住居跡の南西コーナーから約4.5mに当る。

規模は、長軸方向7.8m、短軸方向7.7m、深度50cmを測る。平面形は、ほぼ正方形である。壁溝は全周し、深さは10～20cm程で、平均して15cmである。床面は、根が一面に張っていたためか軟らかい。壁は直線的だが、南西壁が若干張りを持つ。柱穴は5本検出された。深さはいずれも床面から30～50cmを測り、しっかりした掘り込みをもつ。北側の柱穴の内側には、もう一基ピットが認められるが、深さが20cmに至らず、柱穴の機能を持つのか疑問である。現段階では、この柱穴から建て替えが行われたとは考え難い。貯蔵穴は東・西・南側の3カ所で認められる。東側のものは75×70cmを測り、平面形は不整円形を呈する。断面逆台形で深度は60cm程である。西側のものは壁に接して掘り込まれ、その部分だけ壁溝が切れる。平面形は、75×70cmの不整円形である。断面逆台形で、深度50cmを測る。中から小型壺（40）、高杯の柱状部（73）が出土しているが、小型壺の口縁部と体部の大部分は盗難にあって持ち去られてしまった。南側のものは80cm×70cmの不整円形で、深度50cm、断面逆台形を呈し、中から高杯の柱状部（65）が出土している。炉は、北側と西側の2本の柱穴の中央からやや北東に寄った位置にある。長軸方向110cm×短軸方向80cmを測り、深度は15cm～20cm程で、しっかりした掘り込みを持ち、よく焼けている。

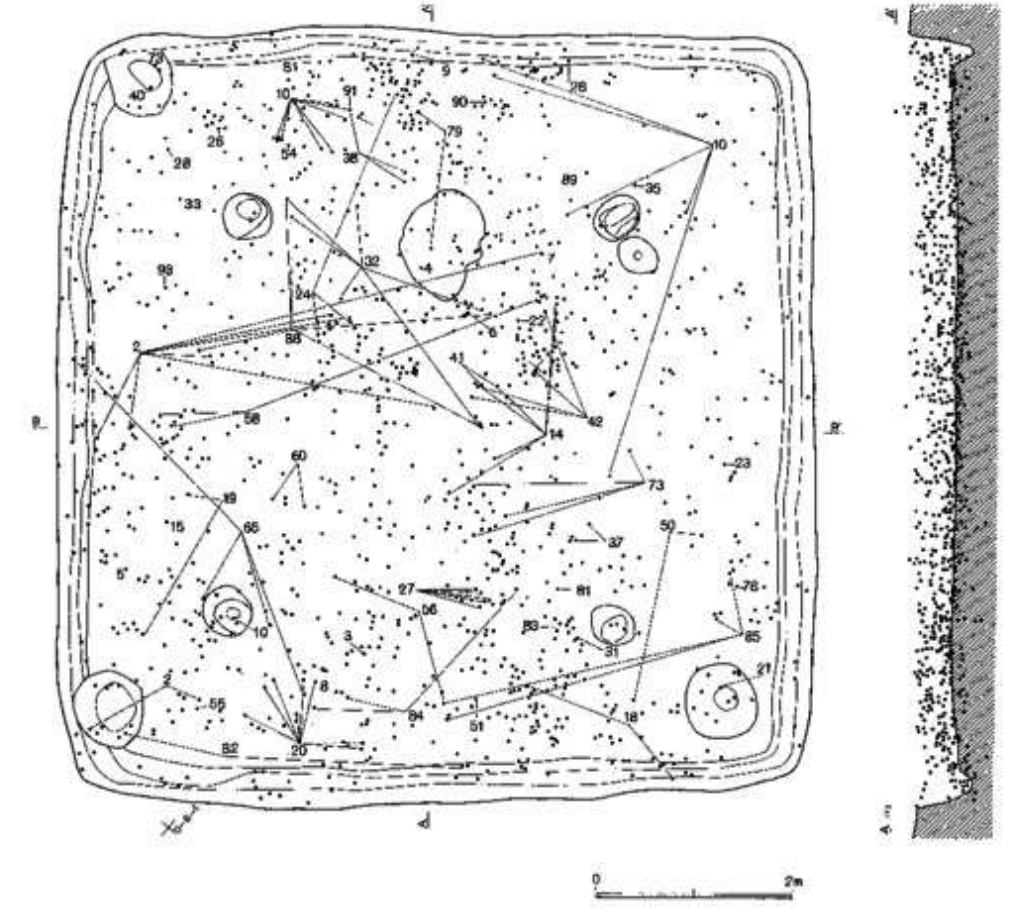
覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土、黒褐色土で構成され、基本的にレンズ状の自然堆積の様相を呈している。壁溝の第10層は硬質で埋め戻しの可能性がある。柱穴の覆土も、基本的に自然堆積の様相を呈する。土質の違いは根の攪乱によるものと思われる。東側の柱穴の第13層は柱痕の可能性がある。貯蔵穴の覆土も基本的に自然堆積の様相を呈しているが、西側貯蔵穴の第23・24層は大型のローム・ブロックを含み、人為的に埋め戻されたと考えられる。

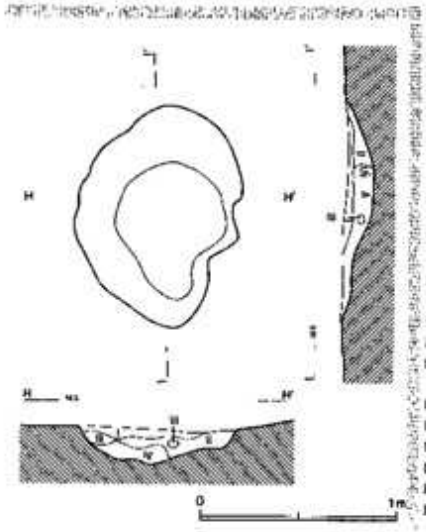
遺物の出土状況（第29・30図）は、第13号住居跡同様興味深いものがある。これらは床面直上から出土するものと、それ以外に大別できる。

第30図で示した前者には完形に近い形で土圧でつぶれたような状態で出土した1・20・38・46・



第28図　第14号住居跡





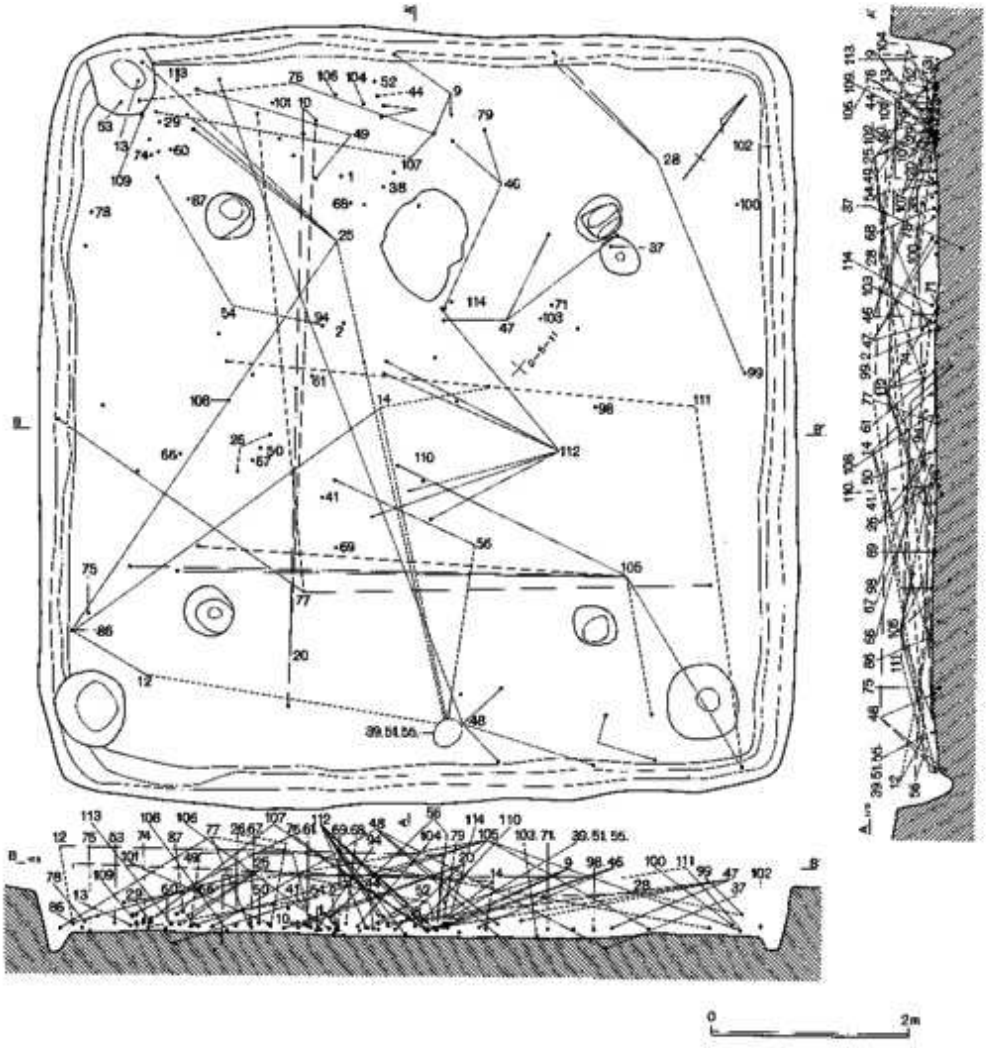
第24号住居跡　土層注

1　黒褐色土（3/2）　ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。
2　黒褐色土（2/2）　ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。
3　暗褐色土（4/2）　ローム粒子（φ0.5～1mm）、同ブロック（3～5mm）微量。
4　暗褐色土（4/3）　ローム粒子（φ0.5～1mm）、炭ブロック（2～3mm）少。
5　暗褐色土（4/4）　ローム粒子（φ0.5～1mm）、同ブロック（2～3mm）ややあり。
6　褐色土（4/3）　ロームブロック（1～2cm）少。しまり、粘性を欠く。根による攪乱著し。
7　褐色土（4/3）　ローム粒子（φ0.5～1mm）ややあり。しまりやや欠く。
8　褐色土（3/3）　ローム粒子（φ0.5～1mm）、同ブロック（3～5mm）多。
9　黒褐色土（4/3）　ロームブロック（5～8mm）多。粘性やや強し。
10　黒褐色土（5/3）　ロームブロック（1～1.5cm）多。硬質。
11　暗褐色土（4/3）　ローム粒子（φ1～2mm）ややあり。同ブロック（3～5mm）。
12　暗褐色土（4/3）　ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。しまりを欠く。
13　暗褐色土（3/3）　ロームブロック（3～5cm）ややあり。
14　暗褐色土（3/3）　ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。
15　褐色土（3/2）　ローム粒子（φ0.5～1mm）ややあり。
16　暗褐色土（3/3）　ロームブロック（2～4cm）多。しまりをやや欠く。
17　暗褐色土（4/2）　ロームブロック（1～2cm）多。しまりをやや欠く。
18　暗褐色土（3/3）　ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。
19　黒褐色土（3/2）　ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。
20　黒褐色土（3/2）　ごみを含む。ローム粒子（φ0.5～1mm）、同ブロック（3～5mm）微量。しまりをやや欠く。
21　暗褐色土（3/3）　ロームブロック（5～10mm）やや少。
22　黒褐色土（4/2）　ローム粒子（φ0.5～1mm）、同ブロック（3～5mm）ややあり。
23　暗褐色土（4/3）　ロームブロック（5～10mm）多。しまり、粘性を欠く。人為的な埋め戻し。
24　暗褐色土（3/2）　ロームブロック（3～5mm）多。しまり、粘性を欠く。人為的な埋め戻し。
25　暗褐色土（3/3）　ロームブロック（3～5mm）微量。
26　褐色土（4/3）　ロームブロック（3～5mm）微量。しまりを欠く。
27　暗褐色土（3/2）　ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。しまりを欠く。

P

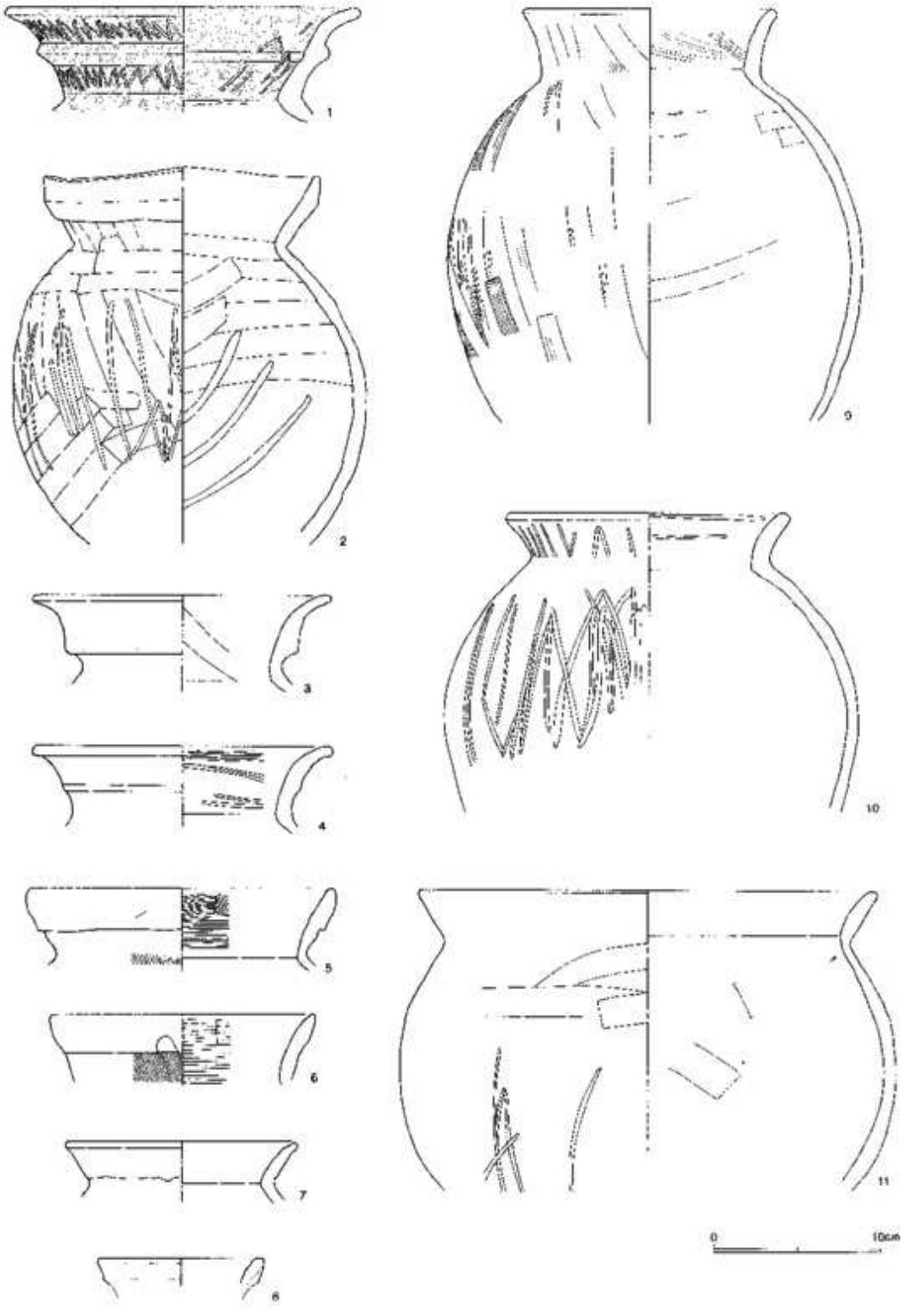
i　暗褐色土（3/4）　焼土粒子（φ0.5～1mm）、同ブロック（3～5mm）少。
ii　暗褐色土（4/4）　焼土ブロック（1～5cm）多。
iii　赤褐色土（5YR7/6）　焼土の純粋層。硬質。粘性を欠く。
iv　暗褐色土（4/4）　焼土粒子微量。粘性を欠く。
v　黒褐色土（4/3）　焼土ブロック（0.5～1mm）、ロームブロック（3～5mm）微量。
vi　暗褐色土（3/4）　焼土ブロック（1～3mm）微量。

第29図　第14号住居跡炉・遺物出土状況（1）

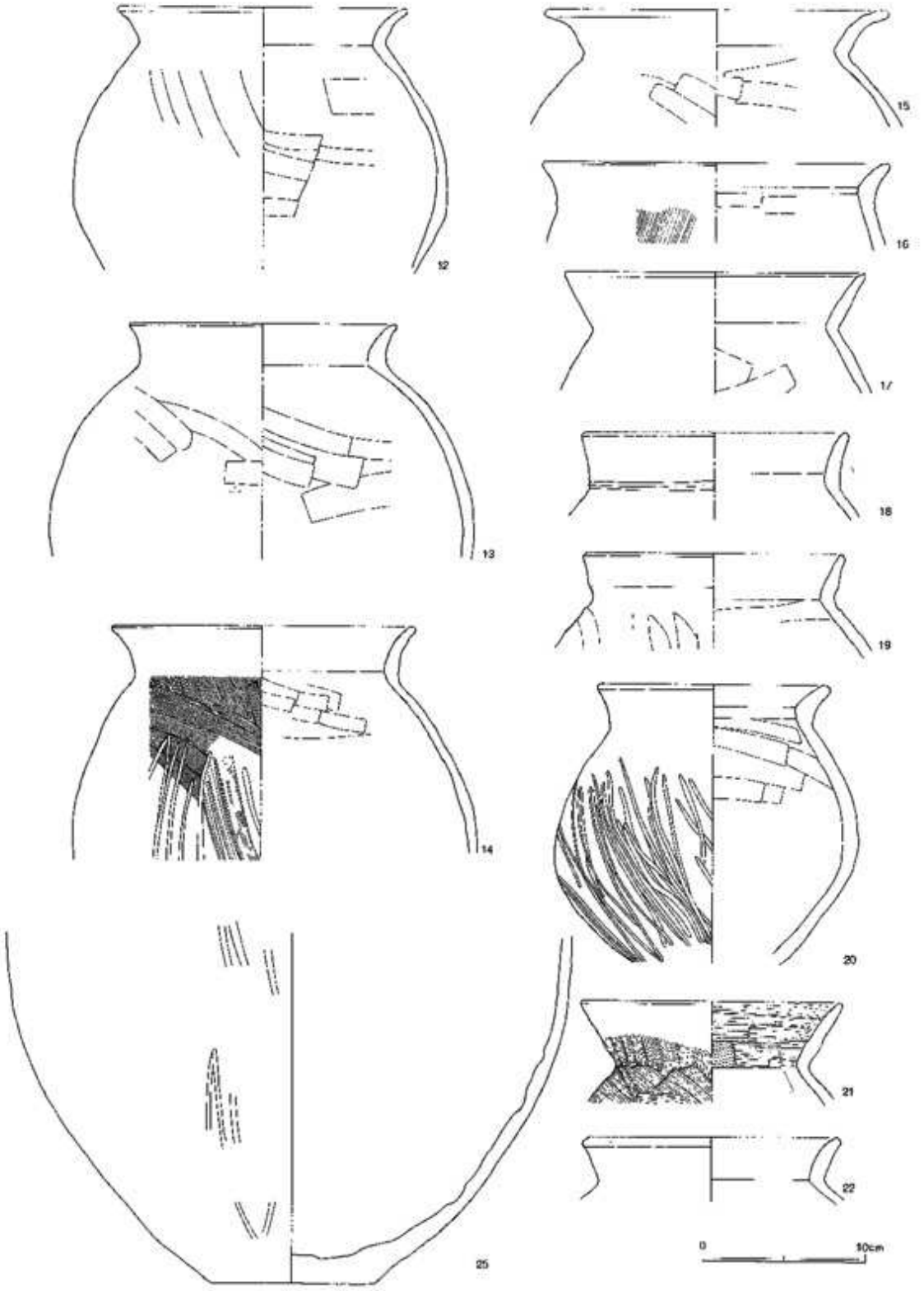


第30図　第14号住居跡遺物出土状況（２）

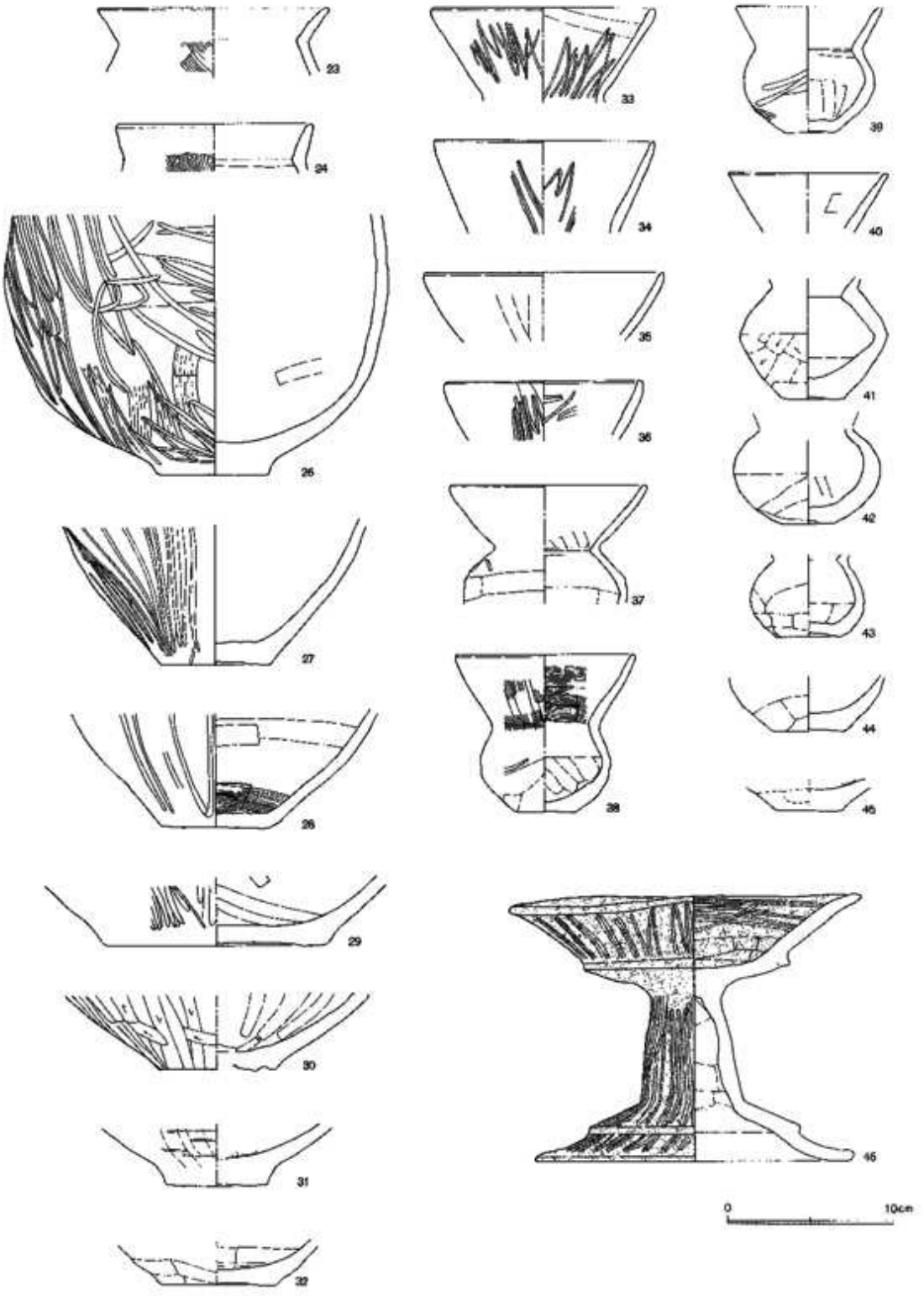
49・106・108・113、立ったままの状態で出土した９、柱穴から出土した小型壺（37）、西側の貯蔵穴からは前述のように小型壺（40）、高杯の柱状部（73）が出土している。あたかも粉々に割られた破片を遺構内にバラまいたたように出土した25・47・48、柱状部のみの60・68・69・74―79のようなものもある。また、99を除く土玉も床面からの出土である。これらについて特に注意される点として、ここでは２点挙げておきたい。まず、西側の貯蔵穴周辺に特に濃密な分布が見られる点である。完形あるいは部分的に完形に近い小型壺（109）、高杯（48・49・60・107）、鉢（113）が集中して出土する。第２に、高杯に対する取り扱いである。完形に近いものも、故意としか考えられない形で、各部分を住居内の異なる位置に置いている。特に49等は１の器台に杯部を外した状態のものが乗ったまま転倒しており、杯部は貯蔵穴のわきに置いた状態で出土している。また、柱状部のみが転倒した形で出土したものもあり、これらはどのように理解すれば良いのだろうか。他の問題点も含めて後論することにしたい。



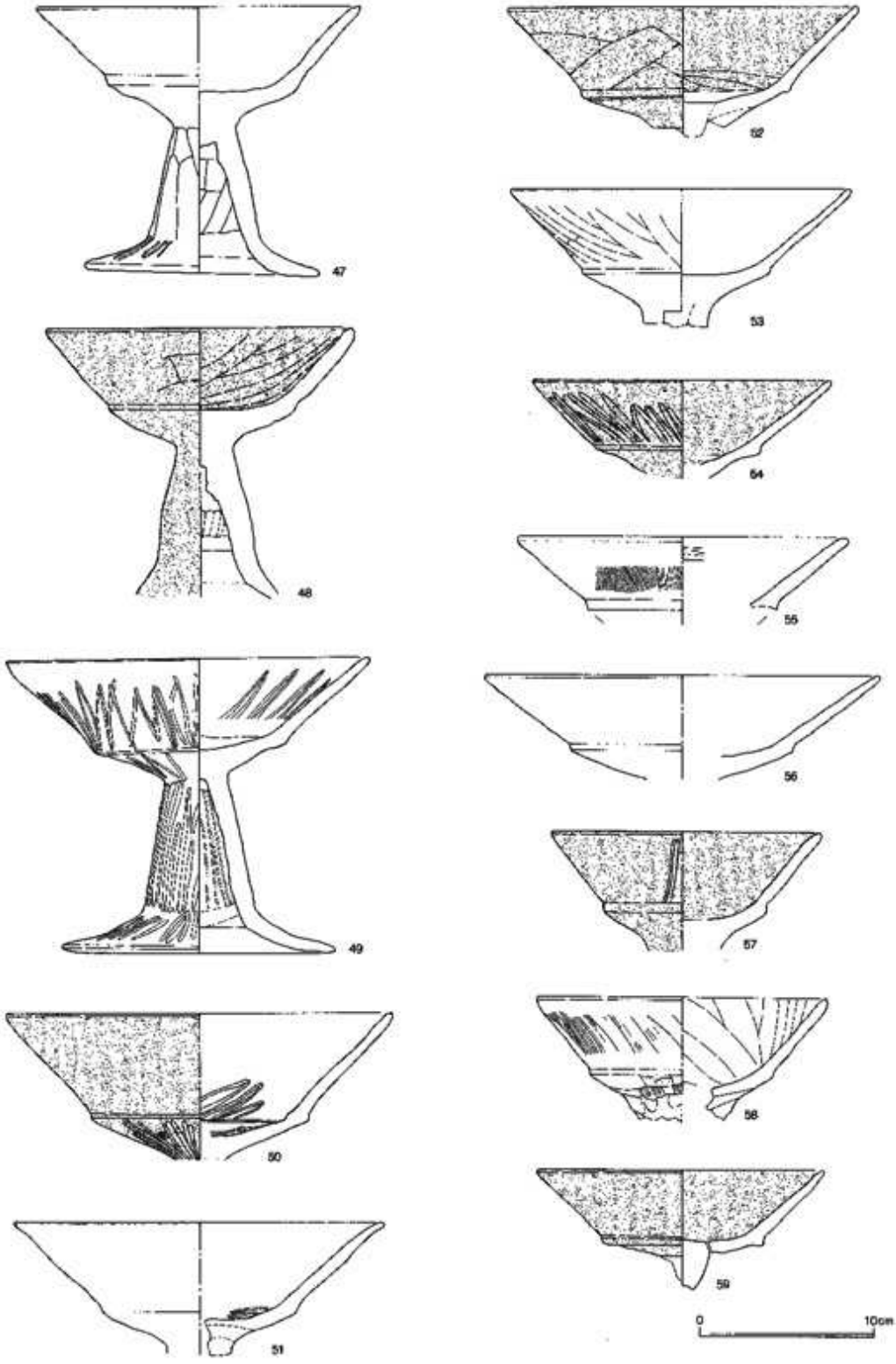
第31図　第14号住居跡出土遺物（1）



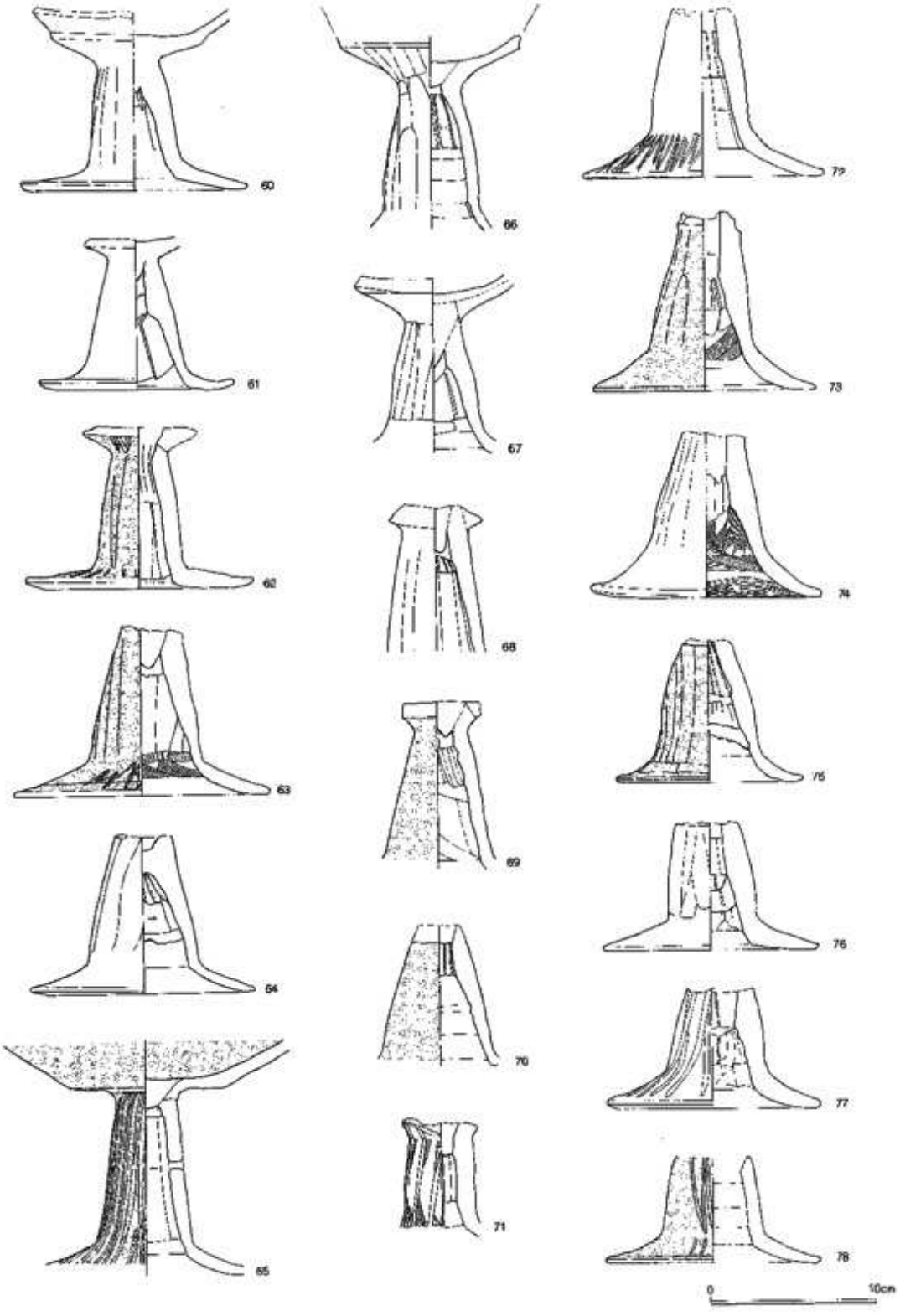
第32図　第14号住居跡出土遺物（２）



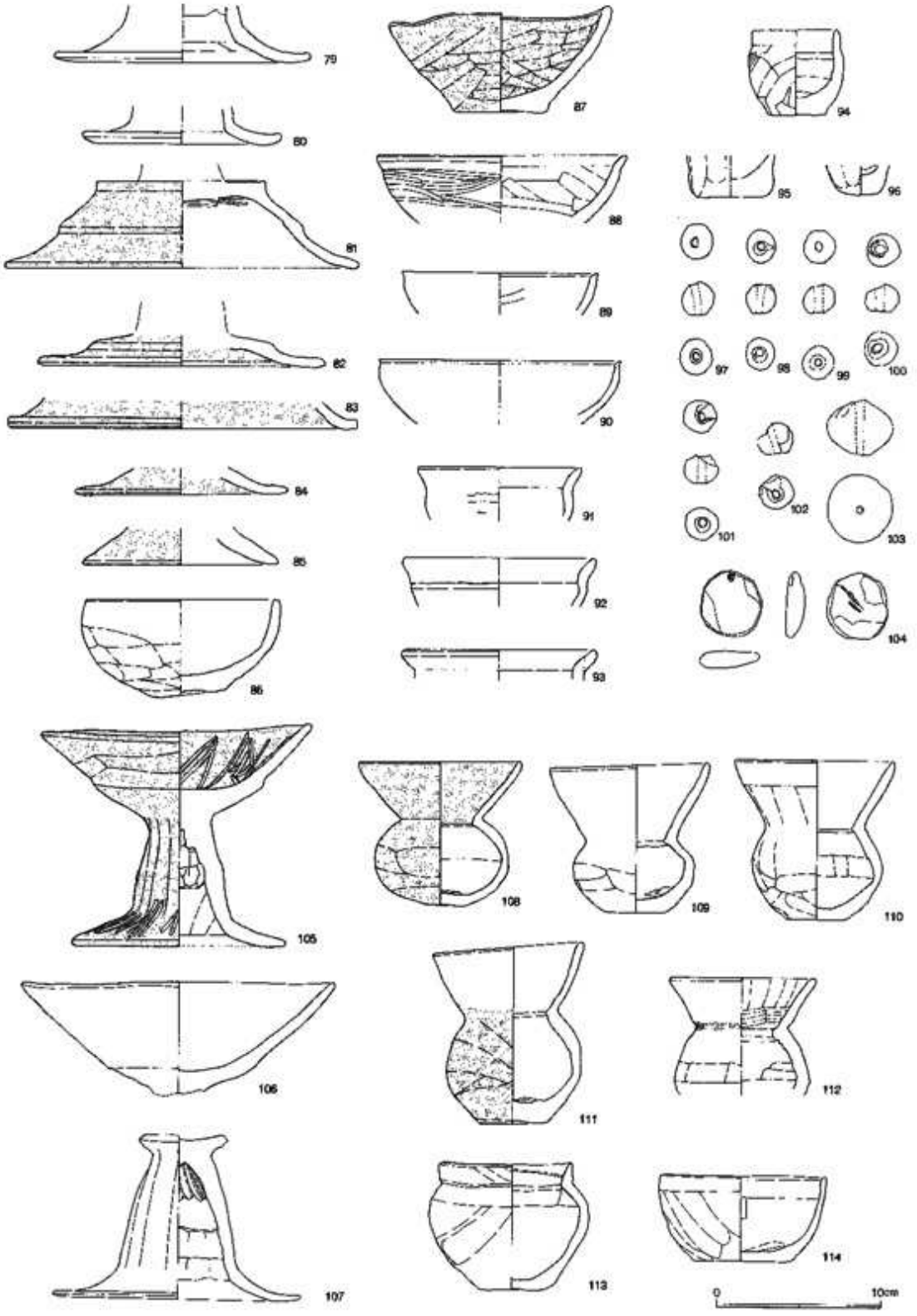
第33図　第14号住居跡出土遺物（3）



第34図　第14号住居跡出土遺物（４）



第35図　第14号住居跡出土遺物（５）



第36図　第14号住居跡出土遺物（６）

床面以外で出土したものは、単純に流れ込みと考えられるものもあるが、あたかも別個体の甕と高杯の破片を混ぜ合わせて廃棄した12・14・25・51・55・56・86・90の様な状態を示すものや、高杯の柱状部のみを廃棄したような状態（61・66・67）を示すもの、25の様に異なる層位間で接合するもの、また小型壷の完形品（109・110）、鉢の完形品（114）等もある。このような出土状況は、これらの遺物が単なる流れ込み等によってもたらされたものでなく、人為的な廃棄行為によるものと考えられる。床面出土のものと合わせて、後ほど詳しく分析することにしたい。

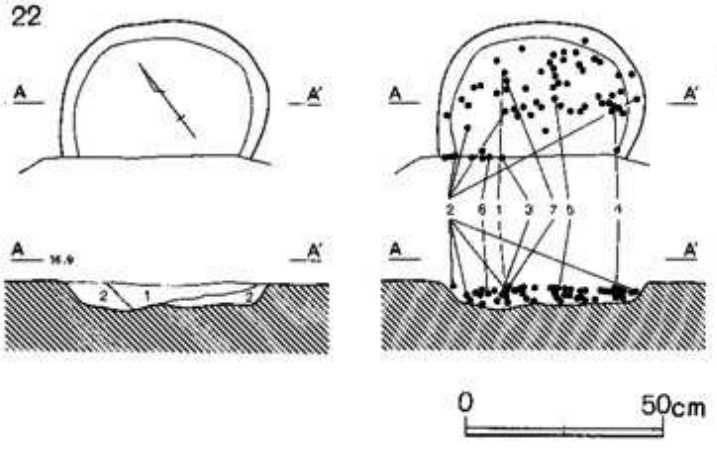
遺物（第31～36図）は、土師器の壷・甕・小型壷・高杯・鉢・ミニチュア・土玉・土製円盤等が出土している。実測可能個体が非常に多く、良好な資料である。全ての破片の中でも、高杯の比率が非常に高い。特に杯部と接合しない柱状部が多く、接合作業中に机一杯にそれらが林立する様は異様であった。1・65は型式的にはその他のものより1段階前のものであり、1は器台に転用され、65は柱状部に穿孔されている。高杯の内53・59は火を受ける。この出土遺物の様相は、先の出土状況と合せ、これらを用いた何らかの行為を示すものとして見逃せない。また、104の土製円盤は特異なものとして注目される。長径3.9cm、短径3.8cm、厚さ1.2cm を測り、色調は10YR6/2で、木口状工具によるナデ後全体をナデている。当遺跡からは、上述のような遺物の出土状況を呈しているにもかかわらず、滑石製品が1点も出土しておらず、その点からも注目されるものである。

b　土　坑

本遺跡からは31基の土坑が検出されているが、古墳時代の土坑と確実に位置付けられるのは、第22号土坑のみである。

第22号土坑（第37・38図）

第22号土坑は、D－6グリッドに位置する。根の攪乱により確認面の色調が判然とせず、当初遺構としての認識がなかったため、一部を旧石器時代の試掘坑によって破壊してしまった。位置的には、第14号住居跡の南コーナーから、南東約4.5m に当たる。主軸方向は、N－53°－W を指すと思

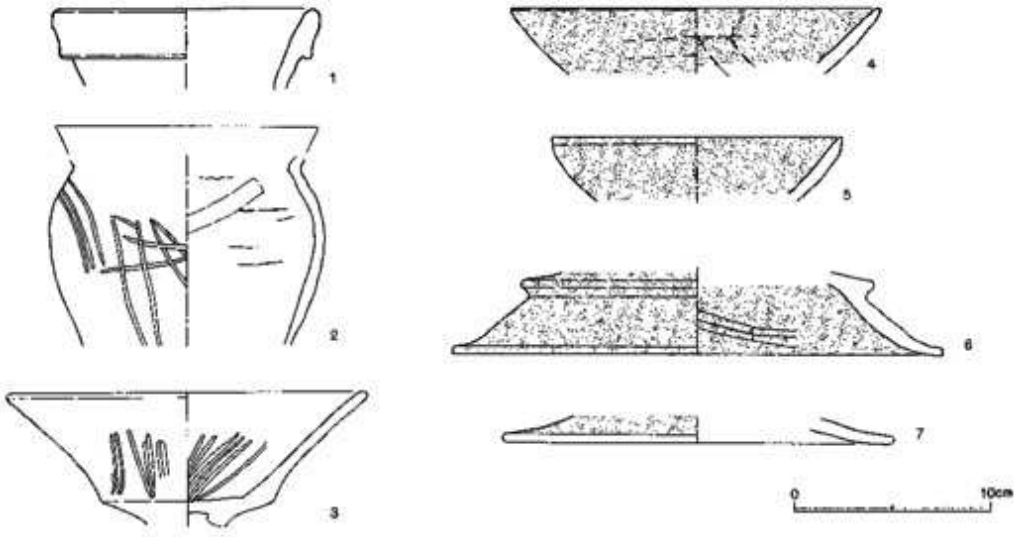


第22号土坑　土層註
1　黒褐色土（2/3）
ローム粒子（φ0.5～1mm）微量。
2　黒褐色土（3/3）
1に比して明度がある。
ローム粒子（φ0.5～1mm）、
同ブロック（2～3mm）微量。

第37図　第22号土坑

われる。規模は、主軸方向1.05m、短軸方向68cm 以上、深度は15cm を測る。平面形は不整楕円形、断面は舟底形を呈する。覆土は黒褐色土によって構成され、自然堆積と思われる。遺物は覆土の中にビッシリと含まれる感じで、壺・甕・高杯が出土している。実測不能の破片も含めて、高杯の比率が高く、注意される。

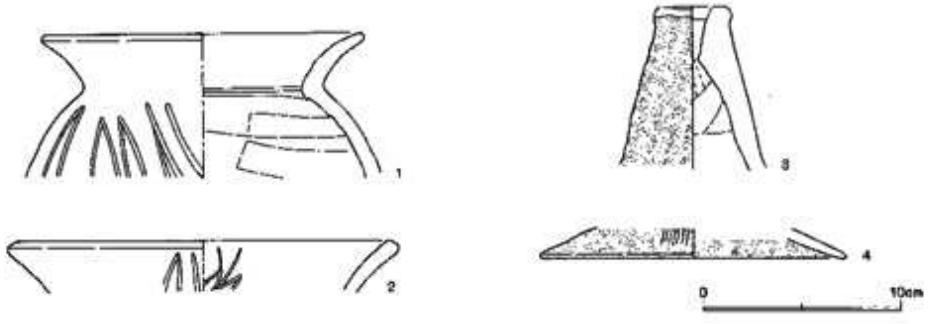
第22号土坑以外の土坑からも土師器が出土している。いずれも古墳時代中期のもので、器種は壺・甕・高杯である。以下に図示可能なものを掲載する。出土遺構については３の土坑一覧表を参照願いたい。（第39図）



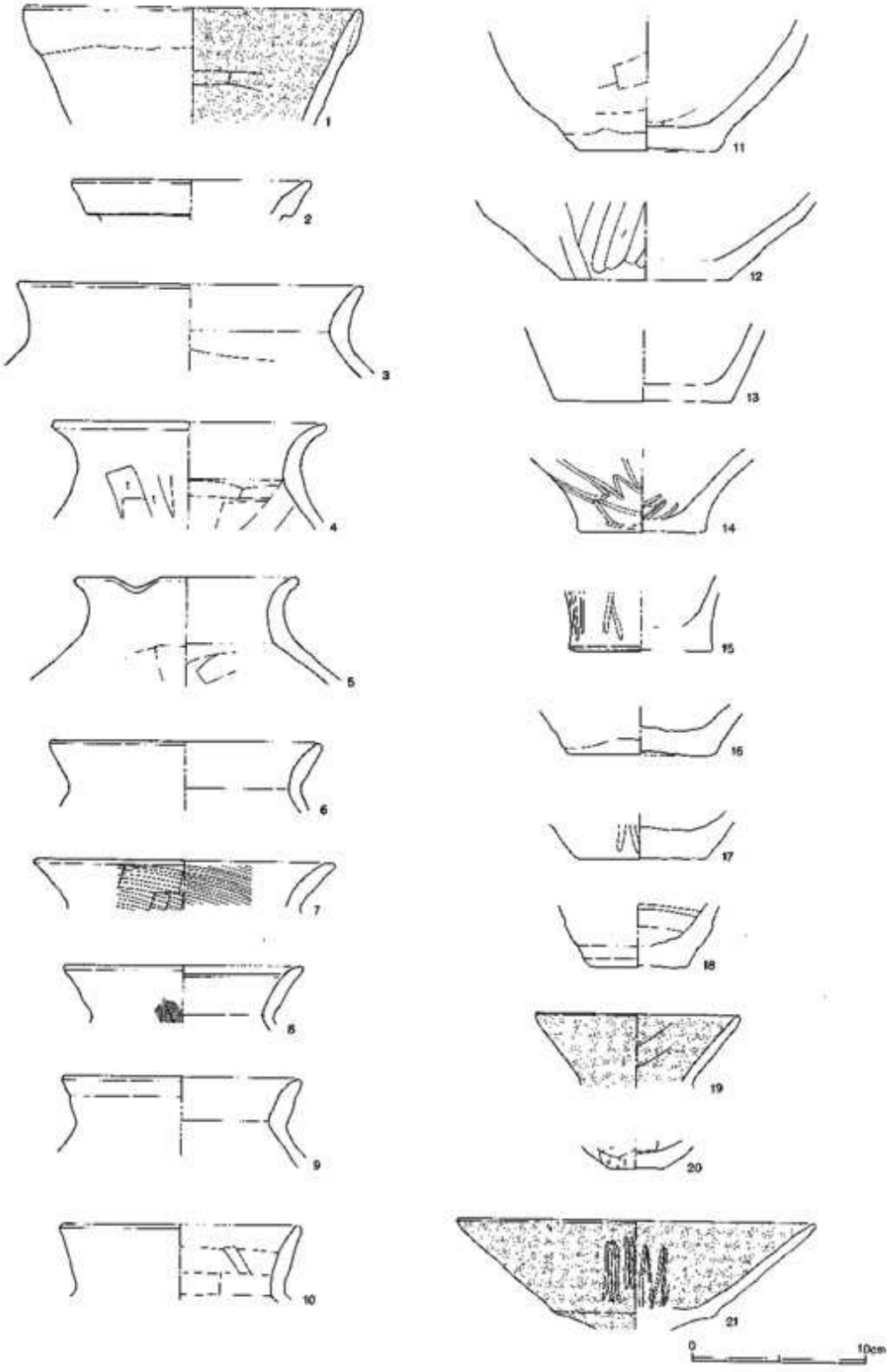
第38図　第22号土坑出土遺物

c　包含層（第40・41図）

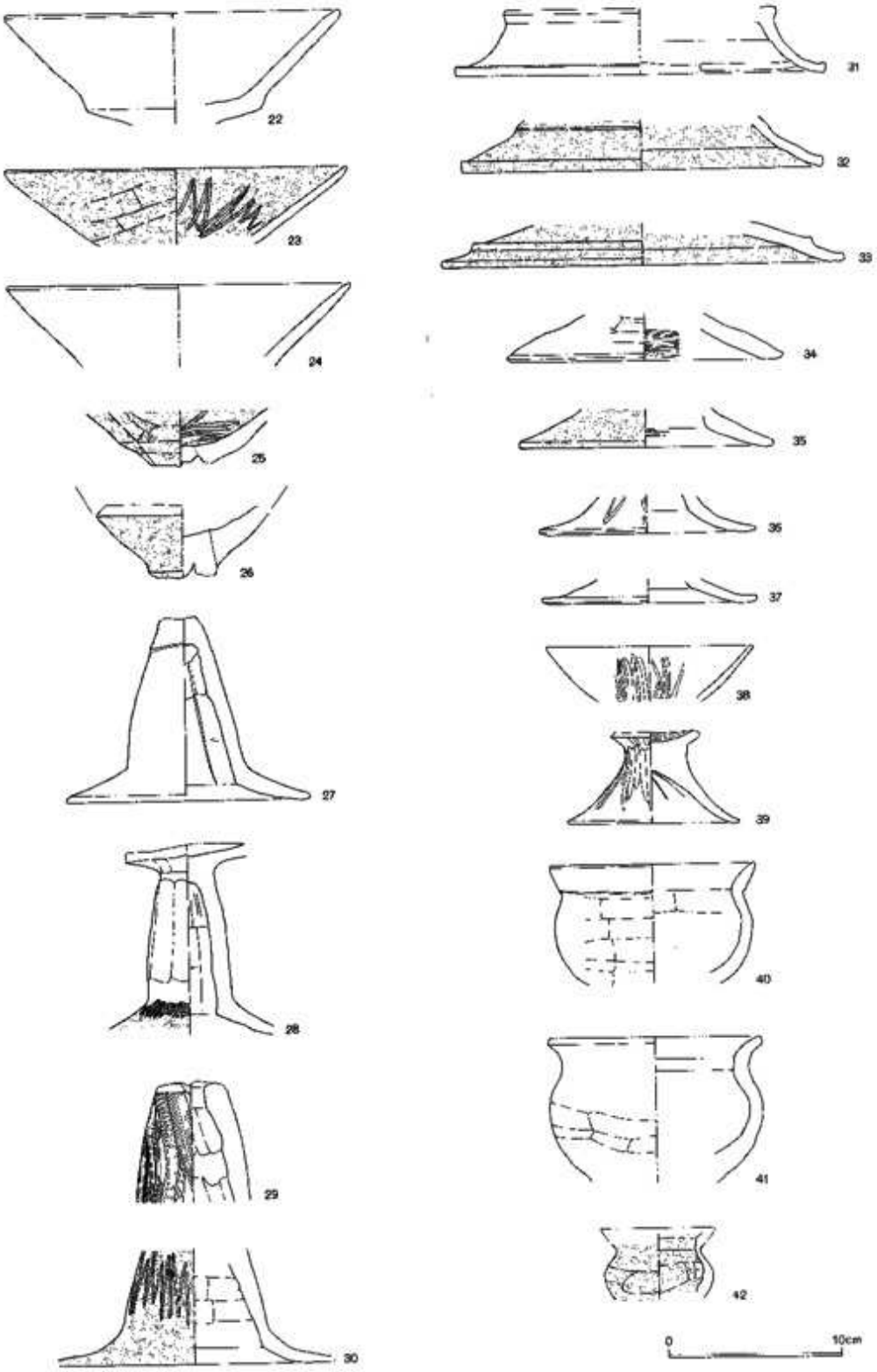
Ⅳで述べたように、調査区内には遺構を覆う形で包含層が形成されていた。その包含層中からも多くの土師器が出土している。以下に、図示可能なものを掲載する。



第39図　土坑群出土遺物



第40図　包含層出土遺物（1）



第41図　包含層出土遺物（2）

第１表　古墳時代遺物観察表（１）

第１号住居跡（第８・９図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	甕	16.6	27.4	7.0	31.3	ロ内外Ha後YN。胴外HK後Ha、内KN。底N。底輪台状を呈す。２次加熱痕有、煤付着。	A~F b	1	10YR6/3	60
2	甕	17.7	26.1	7.3	27.8	ロ内外YN。胴外上Ha、下Ha後KN後HM、内HM。頸内指頭痕。底無調整、種子のついた植物痕有。	A~F b	1	10YR6/4	60
3	甕	16.6	22.3		20.4	ロ内外YN。胴外上HM下KN、内KN。頸内指頭痕。内外面煤付着。	A~E b	1	10YR6/3	60
4	甕	17.3	25.3		16.9	ロ内外YN。胴外Ha、内KN。	A~F b	1	7.5YR5/4	40
5	甕	18.9			3.6	ロ内外Ha後YN。	A~F b	1	10YR6/3	ロ40
6	甕			6.8	6.0	胴内外Ha。内煤付。底無調整、種子つき植物痕。	A~F b	1	7.5YR5/4	胴20
7	甕	10.8	17.9		12.3	ロ内外Ha後YN。胴内外KN後HM。２次加熱痕有。	A~F b	1	5YR6/3	20
8	小型壺		14.6	3.3	11.7	体外KN後HM。内KN。底無調整。	A~F b	1	10YR6/4	胴40
9	小型壺		11.2	3.0	9.5	体外KN後HM、内KN。	A~F b	1	7.5YR6/6	
10	小型壺		8.3	3.2	5.0	体外上KN後N、下HK、内KN。底N。体外指頭痕。	A~F b	1	10YR6/3	胴完
11	高杯	18.3			5.7	杯内外KN後YN。砂粒多。	A~F b	1	7.5YR6/6	杯90
12	高杯	17.6			5.6	内外遺存不良、KN後YNか。	A~F b	1	5YR6/6	杯70
13	高杯	19.3			6.4	杯内外YN後HM。	A~F b	1	7.5YR6/6	杯20
14	高杯	17.7			5.8	内外面遺存不良。杯KN後HMか、内KNか。	A~F b	1	10YR7/4	杯50
15	高杯	18.0			5.5	杯外KN、内HM。遺存不良。	A~E b	1	10YR6/3	杯10
16	高杯	17.0			4.2	杯外YN後HM、内KN後YN。内面煤付着。	A~E b	1	10YR6/4	杯30
17	高杯				8.3	杯内外YN後HM。柱外HM、内HK。	A~F b	1	10YR5/4	40
18	高杯				9.0	柱外HM、内上絞り目、下HK。	A~E b	1	7.5YR6/4	柱完
19	高杯				10.5	柱外HM、内上絞り目、下HK後N。	A~E s	1	10YR6/4	柱20
20	高杯			12.6	2.1	裾外KN後YN、内YN。	A~E s	1	10YR6/4	裾10
21	鉢	29.4		6.8	16.9	ロ内外YN。体外Ha後KN後HM、内KN。底KN。	A~E b	1	10YR7/4	60
22	椀	9.9	10.6	4.0	6.1	内外面遺存不良。ロ内外YN、体KNか。底N。内外面赤彩。ネズミの咬耗痕が著しい。	A~E b	1	2.5YR5/3	90
23	鉢	9.4		3.9	4.7	ロ内外YN。体内外KN。底N。	A~E b	1	10YR7/4	80
24	甑	13.6	11.7	3.3	10.6	ロ内外YN。体内外KN。煤成前穿孔。内外赤彩。	A~E b	1	2.5YR5/6	80

第２号住居跡（第10図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	甕	(15.7)			7.8	ロ外Ha後YN、内YN。胴外Ha→N→HM、内KN。	A~E b	1	7.5YR6/4	ロ胴20
2	甕	(10.6)			2.5	ロ外KN後YN、内YN。	A~E b	1	10YR6/4	ロ10
3	高杯	(21.2)			4.1	ロ内外KN後YN後HM。内外赤彩。	A~E b	1	10YR7/3	ロ20
4	高杯	(18.8)			3.5	ロ内外KN後YN。内外面赤彩。	A~E b	1	10YR7/4	ロ20

第３号住居跡（１）（第13図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	壺	(20.0)			2.3	ロ内外YN。	A~F b	1	10YR6/3	ロ5
2	壺			9.2	6.2	胴外KN後HM、内KN後N。底KN。	A~F b	1	10YR6/3	胴10底90
3	甕	18.2	27.3		27.0	ロ内外YN。胴内外KN。	A~E s	1	10YR6/4	全30
4	甕	19.1			9.5	ロ内外YN。胴外剥落により不明、内KN。	A~EGs	1	7.5YR5/4	ロ完胴10
5	甕	(14.6)			4.3	ロ内外YN。胴外KN、内KN後N。	A~DGs	1	10YR4/2	ロ10
6	甕			(6.0)	2.7	胴内外KN。底N。	A~E s	1	7.5YR4/3	底10
7	甕	(12.4)	(16.2)	6.0	16.8	ロ内外YN。胴風化著しく不明瞭、外KN、一部HM残る。内KN。底円盤をはめ込んだYN後KN。	A~E b	1	10YR6/4	全40 全80

第２表　古墳時代遺物観察表（２）

第３号住居跡（２）（第13図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
8	高杯	14.6		9.0	14.0	杯内外面風化著しい。外HM、内不明。柱外HM、内YuN。裾外HM、内YN。赤彩。	A~F s	1	10YR6/6	
9	高杯	(19.6)			11.0	口内外YN。杯外HM、内剥落不明。柱外HK後N、内HK。赤彩。	A~E b	1	5YR6/6	杯30柱20
10	高杯	(15.2)			6.5	口外YN、杯外KN後HM、内剥落一部HM残。赤彩。	A~E b	1	5YR6/6	杯30
11	高杯	(20.0)			6.1	口内外YN。杯外N、内HM。赤彩。	A~E b	1	5YR6/4	杯20
12	高杯	(17.8)			4.9	口内外YN。杯外HM、内剥落、一部HM残。赤彩か。	A~E b	1	2.5YR6/6	杯20
13	鉢	(13.6)	(11.0)		9.3	口内外YN。体外KN後HM、内KN。赤彩不明瞭。	A~E s	1	10YR6/4	全20
14	鉢		(11.8)	5.4	9.3	体外KN後HM、内KN凹凸多。底KN凹む。赤彩。	A~E r	1	7.5YR6/6	全60
15	鉢	(9.2)	(8.2)		2.7	口内外YN後内HM。体内外KN。赤彩。	A~E b	1	5YR6/6	全10
16	甑	12.8	12.0	4.6	8.4	口内外KN。体内外KN。底KN。中央に焼成前穿孔一孔有。赤彩か。	A~F b	1	2.5YR6/6	全90

第４号住居跡（第15図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	甕	(12.8)			6.4	口内外Ha後YN。胴外Ha、内KN。２と同一個体か。	A~F b	1	7.5YR7/6	口胴40
2	甕				6.3	胴外Ha、内KN。１と同一個体か。	A~F b	1	7.5YR7/6	胴30
3	甕			3.8	7.0	胴外KN後中Ha下N。内KN。２次加熱痕有。	A~F b	1	7.5YR6/6	胴40
4	高杯			11.3	10.9	風化が進んでいる。杯下外HM、内不明。柱外HM、内HK後N。裾不明。	A~F b	1	7.5YR7/4	杯20柱完裾10

第５号住居跡（第17図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	甕	(13.6)			2.5	口内外Ha後YN。	A~EGb	1	10YR6/4	口10
2	甕	(21.6)		4.0	17.0	胴内外剥落顕著。胴外HM、内KN。内外煤底不明。	A~E b	1	2.5Y6/3	胴30
3	台付甕				7.4	脚内外KN。風化顕著。	A~F s	1	10YR7/4	脚50
4	高杯	(15.2)			5.6	口内外YN。杯内外丁寧なHM。	A~E b	1	10YR6/3	杯40
5	高杯	(20.0)			3.8	口内外YN。杯内外YN後HM。	A~E b	1	5YR6/6	杯10
6	高杯	(17.4)			1.8	裾内外風化顕著で不明。	A~E s	2	5YR6/6	裾20
7	鉢	11.2		4.2	6.7	口内外YN。体外Ha、内KN後N。底KN。	A~E b	1	10YR6/3	90
8	鉢		11.4	4.2	8.9	体外Ha後HM、内KN後N。底HKか。内赤彩か。	A~F b	1	10YR5/2	胴40

第６号住居跡（１）（第19図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	壺		19.0	6.0	15.3	胴外上KN後N、下幅0.5mほの工具でビッシリHM、図示不可、胴内KN。底HM。	A~E b	1	2.5Y7/4	胴70
2	壺			7.3	3.8	胴外HM、内KN後N。底KN。	A~E b	1	7.5YR7/4	底60
3	壺			5.8	2.8	胴外HMか、内不明、遺存状態が悪い。	A~E s	1	10YR7/4	底60
4	壺			6.2	2.0	胴外N、内KN。底KN。	A~E r	1	2.5Y6/2	底完
5	甕	(19.5)			5.2	口内外YN。胴外KN、内KN後N。	A~E b	1	10YR6/3	口10
6	台付甕			(8.8)	4.1	脚外HM、内N。	A~E b	1	7.5YR5/4	脚10
7	高杯	(16.6)			5.0	口内外YN。杯内外KN後HM。赤彩。	A~E b	1	2.5YR6/4	杯20
8	高杯		(10.0)		4.0	杯内外HM。	A~E b	1	10YR6/3	杯5
9	高杯			(12.1)	2.6	裾端内外YN。裾内外HM。外面赤彩か。	A~EGb	1	7.5YR6/4	裾50
10	高杯			(14.0)	1.9	裾内外YN後外KN、内HM。	A~E b	1	10YR6/4	裾10

第３表　古墳時代遺物観察表（３）

第６号住居跡（２）（第19図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
11	甕		(12.1)	6.0	6.3	体内外KN。底Ha。径3cm前後の不整形の穿孔有り。外面赤彩。外面黒斑。	A~F b	1	2.5YR4/4	体30
12	ミニチュア	(7.1)		(3.9)	2.1	体内外YN。底KN。赤彩。	A~E b	1	2.5YR4/2	体20

第７号住居跡（第20図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	壺	(12.2)			3.3	口内外KN後YN。	A~EGb	1	10YR6/2	口20
2	壺	(12.0)			2.3	口内外YN。	A~F b	1	7.5YR6/4	口5
3	壺			(7.0)	3.9	胴外HM、内KN。底KN後N。	A~EDb	1	10YR6/4	底20
4	壺			(9.6)	2.9	胴外KNか、内KN。底HKか。	A~EGb	1	7.5YR5/4	底20
5	小型壺	(11.1)			4.6	口内外YN。内KNか。外面赤彩。	A~E b	1	10YR6/3	口20
6	高杯		(10.1)		3.2	杯内外HM。内外面赤彩。７と同一か。	A~F b	1	5YR5/4	杯10
7	高杯		(6.0)		10.8	柱外KN、内HK。外面赤彩。６と同一か。	A~E r	1	5YR6/4	柱20
8	高杯			(14.1)	2.5	遺存状態不良。不明。	A~E b	1	10YR6/4	裾10
9	高杯			(14.0)	2.1	裾内外面YN。外面、内面一部赤彩。	A~F b	1	2.5YR4/4	裾10
10	鉢	(10.7)		(12.0)		口内外YN。体外N。内KN。	A~F s	1	10YR6/3	口20
11	ミニチュア	(5.0)	(5.5)	(4.0)	5.5	口内外YN。体外HK、内KN。底N。黒斑有り。	A~E s	1	10YR5/2	40

第10号住居跡（第21図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	壺			7.6	2.6	胴外Ha、内KN後HMか。底HM。底部　多し。	A~D r	1	2.5YR5/6	底完
2	壺			5.2	2.1	胴外Nか、内KN。底KNか。遺存状態悪し。	A~F s	1	7.5YR6/6	底完

第12号住居跡（第23図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	壺	(17.6)			5.4	複合部外YN。口外KN、　内YN後HM。	A~E s	1	2.5Y6/3	口10
2	高杯	(17.0)			5.6	口内外YN。杯内外N後HM。内外面赤彩。外黒斑。	A~F b	1	2.5YR5/4	杯20
3	高杯	(20.0)			4.0	杯内外YN。内YN後HM。	A~E b	1	7.5YR6/4	杯10
4	高杯			(15.6)	1.3	裾内外YN後HM。	A~E s	1	5YR5/6	裾5
5	鉢	11.6	10.4	3.6	5.7	口内外YN。体外HK後N後HM、内KN後HM。底N後HM。内外面赤彩。	A~Fb	1	5YR5/4	70
6	鉢	(12.6)			1.2	口内外YN。以下不明。	A~Fb	1	5YR5/6	口10
7	鉢	(12.0)			2.2	口内YN。赤彩か。	A~Fb	1	7.5YR6/4	口5

第13号住居跡（１）（第26図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	壺	(16.8)			6.2	口内外KN後YN。胴内外N。	A~F b	1	10YR6/4	口20
2	壺	(15.6)			5.6	口内外KN後YN。胴外KN、内Nか。	A~F r	1	10YR6/4	口10
3	壺	(18.0)			3.9	口外YN、内KN後YN。内HMの可能性有り。	ACDFb	1	10YR6/4	口20
4	壺	(12.1)			8.9	口内外YN。胴外Ha、内KN。摩耗著しく不明瞭。	A~G s	1	7.5YR7/6	30
5	壺			(5.0)	3.9	胴外KN後HM、内KN。底HM。内外面赤彩。	A~E s	1	5YR5/4	底完
6	甕	17.1	22.6		27.5	口内外YN。胴外上中HK後N、下HK。内KN。内外面煤付着。外面２次加熱痕。	A~E b	1	10YR4/2	50
7	甕	(16.2)			10.1	口内外Ha後YN。胴内外Ha後N。内外２次加熱痕。	A~F b	1	10YR6/3	10

第４表　古墳時代遺物観察表（４）

第13号住居跡（第26・27図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
8	甕	(18.4)			8.7	ロ内外YN。胴外KNか、内KN後Nか。遺存不良。	A~F s	1	10YR6/4	10
9	甕	(20.0)			4.3	ロ内外KN後YN。胴外YN、内KNか。２次加熱痕。	A~F b	1	10YR6/4	ロ10
10	甕	(13.0)			4.3	ロ外YN、内KN後YN。胴外KN後YN、内YN。	A~F b	1	5YR6/6	ロ5
11	甕		(22.6)		21.9	胴外KN後HM、内KN。内外面煤付着。	A~F b	1	10YR6/4	胴40
12	甕			(7.0)	7.5	胴外KN後HM、内KN。内外面煤付着。底KN。	A~F b	1	7.5YR5/4	底50
13	甕			(7.4)	2.0	胴内HM。底KNか。外面２次加熱痕、煤付着。	A~E s	1	5YR5/4	底完
14	甕	18.5	18.7	7.5	14.8	ロ内外YN。胴内外KN。底Nか。胴内外底２次加熱痕。底面は加熱のため変色。	A~E b	1	7.5YR6/4	80
15	小型壺	13.1	14.2	4.4	16.2	ロ内外YN後HM。体外KN後N、内KN。底KN後N。	A~G r	1	5YR6/6	90
16	小型壺	11.9	12.3	4.0	12.9	ロ内外YN後HM。体上HM、中下KN後N。内KN。底不明。２次加熱の痕跡を残す。	A~F b	1	10YR6/3	80
17	小型壺	(10.8)			5.1	ロ内外KN後YN。内外面赤彩。	A~F b	1	5YR4/4	ロ20
18	小型壺	(10.2)			2.8	ロ内外YN。	ABD b	1	2.5YR6/3	ロ5
19	小型壺	(11.0)			3.0	ロ外KN後YN、内KN後YN後HM。	A~E b	1	7.5YR5/3	ロ5
20	高杯	20.3		16.3	18.2	ロ内外YN。杯外Ha後YN、内KN。柱HK後N、内上SM後N、下HK後N。裾YN。外面鎬状、杯内赤彩。	A~F b	1	5YR5/4	70
21	高杯	19.8			7.3	ロ内外YN。杯外Ha後YN、内KN後N。煤付着。	A~E b	1	10YR6/3	杯60
22	高杯	(18.0)			4.4	ロ内外YN。杯内外KN後HM。内外面赤彩。	A~E b	1	5YR5/4	杯10
23	高杯	(20.8)			4.4	内外面遺存不良のため調整不明。	A~F b	1	7.5YR5/3	杯10
24	高杯	(18.0)			4.4	ロ内外YN。杯内外KN。内外面赤彩。	A~F b	1	2.5YR5/4	杯10
25	高杯				2.5	杯外KN後HMか、内HM。内外面赤彩。	A~F b	1	2.5YR4/2	接完
26	高杯			(14.0)	2.6	内外面遺存不良のため調整不明。２次加熱か。	A~F b	1	7.5YR6/6	裾30
27	高杯			(19.4)	4.8	裾端内外YN。裾内外KN。内外面赤彩。	A~E b	1	2.5YR6/6	裾30
28	高杯			(17.8)	6.8	柱外HM、内HK後N。裾外YN、内KN後YN。外赤彩。	A~E b	1	7.5YR6/4	裾20
29	高杯			(20.6)	3.8	裾外YN、内面遺存状態不良の為不明。外面赤彩。	ABD b	1	5YR4/4	裾10
30	鉢		11.8	3.8	11.9	ロ内外YN。体外KN、内Nか。底KN。外面、口縁部内面赤彩。	A~F b	1	2.5YR5/4	90
31	鉢			(3.7)	3.2	体内外HK後N。底KNか。	A~E b	1	10YR6/3	体底30
32	鉢			3.8	2.7	体外上N下Ha、内KN。底Ha。外面煤付着。	ABDFb	1	10YR6/3	体底30

第14号住居跡（１）（第31・32図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
1	壺	(21.3)			6.8	器台として転用したと思われる。ロ内外KN後YN後HM。内外面赤彩。	A~F b	1	2.5YR4/4 7.5YR6/6	ロ90
2	壺	16.6	21.2		22.5	ロ外複合部YN下KN、内YN。胴内外KN後HM。煤。	A~E b	1	10YR7/4	60
3	壺	(17.9)			5.9	ロ外KN、内KN後YN。	A~E b	1	10YR7/3	ロ40
4	壺	(18.0)			5.2	ロ外YN、内YN後HM。	A~F b	1	10YR7/3	ロ20
5	壺	(18.6)			4.9	ロ外YN、内Ha。胴外Ha、内遺存部位少なく不明	A~F b	1	10YR6/4	ロ10
6	壺	(15.9)			4.2	ロ複合部外YN、下Ha、内Ha後YN。	A~F b	1	7.5YR6/6	ロ10
7	壺	(13.9)			3.6	ロ内外YN。胴遺存部位少なく不明。	A~F b	1	7.5YR6/4	ロ10
8	壺	(10.0)			1.7	内外面遺存状況悪く不明。	ABDEb	1	5YR5/4	ロ10
9	甕	(15.2)	24.8		24.6	ロ内外Ha後YN。胴外Ha後N、内KN後N。煤。	A~E b	1	10YR6/4	60
10	甕	(17.0)	(24.8)		17.9	ロ内外YN後HM。胴外KN後HM、内KN。	A~E b	1	10YR6/3	50
11	甕	(27.5)	(29.7)		17.9	ロ内外YN。胴外KN後HM、内KN。	A~F b	1	10YR6/3	20
12	甕	(17.9)	(23.1)		16.2	ロ内外YN。胴内外KN。	A~E b	1	7.5YR6/6	20
13	甕	16.5	26.2		14.5	ロ内外YN。胴内外KN。	A~E b	1	5YR6/6	30
14	甕	(18.8)	(25.0)		14.4	ロ外YN、内Ha後YN。胴外Ha後HM、内KN。加熱痕	A~E b	1	5YR5/4	40

第５表　古墳時代遺物観察表（５）

第14号住居跡（２）（第32－34図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
15	甕	(21.2)			7.2	口内外KN後YN。胴内外KN。外面煤付着。	A~F b	I	10YR6/4	5
16	甕	(21.5)			5.0	口内外YN。胴内外KN。	A~E b	I	7.5YR6/6	5
17	甕	(18.5)			7.5	口内外YN。胴内外KN後N。	A~F b	I	10YR7/6	5
18	甕	(16.5)			5.4	口内外YN。胴部遺存部位少なく不明。	A~E b	I	10YR6/3	口25
19	甕	(16.2)			6.3	口内外YN。胴内外KN。	B~E b	I	10YR7/3	口70
20	甕	14.4	18.8		17.0	口内外YN。胴外KN後HM、内KN。	A~F b	I	7.5YR6/6	70
21	甕	(16.2)			6.4	口内外Ha後YN。胴外Ha、内KN。煤付着。	A~F b	I	10YR6/4	口30
22	甕	(16.0)			3.9	口内外YN。胴部遺存部位少なく不明。	A~F s	I	10YR6/3	口10
23	甕	(14.0)			4.2	口内外YN。胴外Ha、内Nか。	A~E b	I	7.5YR6/4	口10
24	甕	(12.0)			3.1	口内外YN。胴外Ha、内遺存度少なく不明。	A~F b	I	7.5YR6/4	口20
25	甕	10.0			21.5	胴内外加熱による変質のため遺存不良。胴外KN後HM、内剥落著しく不明。底KN。	A~F b	I	5YR5/6	胴50
26	甕		23.3	6.2	6.3	胴外中KN後HM。下Ha後HM。内KN煤付着、底KN。	A~E b	I	5YR4/4	胴40
27	甕			6.6	8.4	胴外KN後HM、内KN。底N。	A~E b	I	10YR5/4	胴20
28	甕			6.4	7.1	胴外HM、内上KN下Ha。底N、種のついた植物痕	A~F b	I	7.5YR6/6	底完
29	甕			(6.4)	7.1	胴外HM、内KN。底HM。	A~F b	I	10YR7/3	底20
30	甕			(7.0)	4.5	胴外HK、内KN。底KN。	A~F b	I	2.5Y6/2	底20
31	甕			(6.2)	3.3	胴外KN後HM、内KN。底HM。	A~F b	I	7.5YR5/3	底10
32	甕			6.9	2.7	胴内外KN。底KN。	A~F b	I	5YR5/2	底70
33	小型壺	(13.8)			5.7	口内外KN後YN後HM。	A~E b	I	10YR6/3	口10
34	小型壺	(13.4)			5.4	口内外YN後HM。	A~F b	I	7.5YR6/4	口10
35	小型壺	(14.6)			4.1	口内外KN。内外面赤彩。	A~E b	I	5YR5/4	口10
36	小型壺	(12.0)			3.5	口外KN後HM、内HM。	A~E b	I	2.5YR7/3	口10
37	小型壺	(12.0)	10.0		7.3	口内外KN後YN。体外HK後N、内KN後N。	A~F b	I	10YR6/4	50
38	小型壺	(11.0)	(8.0)	3.7	9.5	口内外Ha後YN。体内外KN。底N。	A~F b	I	10YR5/2	40
39	小型壺	8.9	8.0	2.9	7.5	遺存状態不良。口内外YN。体外HM、内KN。底N。	A~F b	I	5YR5/6	80
40	小型壺	(9.6)			3.6	口内外KN後YN。内面赤彩。外面赤彩か。	A~E b	I	10YR6/2	口10
41	小型壺		8.9	3.3	7.4	体外上Ha後N下KN、内N。底KN。	A~F b	I	10YR6/2	体70
42	小型壺		8.8	3.0	5.7	体内外KN。底N。	CDF b	I	7.5YR6/6	体60
43	小型壺		6.9	3.9	5.0	体内外KN。底N。	A~F b	I	10YR6/3	体完
44	小型壺			6.4	3.3	体外KN、内遺存不良のため不明。	A~E b	I	10YR6/4	体30
45	小型壺			4.0	1.9	体内外KN。底KN。	A~D s	I	10YR6/4	底完
46	高杯	20.4		19.4	16.0	杯内外KN後YN後HM。柱外HK後N後HM、内HK後N。裾外KN後YN後HM、内KN後YN。内外面赤彩。	A~F b	I	10R5/6	90
47	高杯	18.7		13.6	15.5	杯内外KN。口はその後YN。柱外KN、内上SM下N。裾内外KN後YN。	A~F b	I	7.5YR5/3	70
48	高杯	18.0			15.6	口内外KN後YN。杯内外KN。柱外遺存悪く不明。内上SM下N。	A~F b	I	2.5YR5/4	70
49	高杯	21.2		15.8	17.0	口内外KN後YN後HM。杯内外KN後HM。柱外HM、内上SM下N。	A~F r	I	5YR6/6	90
50	高杯	(22.5)			8.4	杯上遺存状態不良、内HM。杯下Ha後HM、内Ha。	A~F b	I	10YR7/4	杯20
51	高杯	(21.5)			7.7	遺存状態不良。杯内HMか。	A~F b	I	2.5YR5/6	杯30
52	高杯	20.3			8.0	口KN後YN。杯内外KN。内外面赤彩。	A~F b	I	2.5YR5/6	杯60
53	高杯	19.8			7.9	杯外HK後YN。内面２次加熱により赤変、遺存悪く調整不明。杯外下N。	A~F b	I	7.5YR6/6	杯90
54	高杯	17.4			5.6	杯外上KN後YN後HM、下YN。内KN後YN、煤付着、内外面赤彩。	A~F b	I	10YR6/3	杯80
55	高杯	(19.2)			4.2	杯外Ha後YN、内Ha後N。	A~E b	I	7.5YR7/6	杯20

第６表　古墳時代遺物観察表（６）

第14号住居跡（３）（第34～36図）

No	器種	大きさ			(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
56	高杯	(22.9)			6.0	杯内外YN。	A~F b	1	5YR5/6	杯30
57	高杯	(15.7)			6.8	杯外KN後YN後HM、内N。内外面赤彩。	A~F b	1	5YR5/4	杯20
58	高杯	(16.8)			7.1	杯外上Ha後YN、下Ha。内KN。柱との接合部に粘土を貼りつけ補強している。	A~F b	1	10YR7/4	杯30
59	高杯	15.6			6.9	杯内外YN。内外面赤彩。内面、口縁に煤付着。	A~F b	1	5YR5/4	杯90
60	高杯			(13.7)	11.1	遺存状態不良。杯外Nか、内KN。柱外HK後N、内上SM、中HK下HK後N。裾内外Nか。	A~F b	1	2.5YR6/6	60
61	高杯			(11.9)	9.2	外面遺存不良。杯内KN、赤彩。柱内HK。裾内KN。	A~F b	1	10YR7/4	60
62	高杯			(13.8)	9.7	杯外HM内Nか。柱外KN、HMの可能性有。内上SM下HK。裾外YN後HM、内KN後HM。内外面赤彩。	A~F b	1	10YR6/3	40
63	高杯			15.6	10.1	柱外HK後N、内上N下Ha。裾外YN後HM、内KN後YN。外面赤彩。	A~F b	1	2.5YR5/4	20
64	高杯			13.9	9.6	柱外HK後N、内上SM中HK下HK後N。裾YN。	A~F b	1	5YR6/6	40
65	高杯				16.3	杯内外遺存不良につき不明。柱外HM、内HK。裾外N後HM、内YN。内外面赤彩。柱に外面からの焼成後穿孔一孔有。	A~F b	1	2.5YR4/4	柱完
65	高杯									
66	高杯				11.7	杯内外KN。柱外KN、内上SM下その後N。煤付着。	A~E b	1	7.5YR7/4	柱完
67	高杯				10.7	杯内外KN。柱外KN、内HK。赤彩の可能性有。	A~F b	1	10YR7/4	柱完
68	高杯				8.8	柱外KN、内上SM下HK。	A~F b	1	7.5YR5/4	柱70
69	高杯				10.1	柱外N、内上SM下HK。外面赤彩。	A~D b	1	2.5YR5/4	柱80
70	高杯				8.5	柱外N、内上HN下HK。外面赤彩。	A~E b	1	5YR5/3	柱60
71	高杯				6.6	柱外Ha後N後HM、内上SM下N。	A~F b	1	10YR7/4	柱完
72	高杯			14.6	10.2	柱外剥離著しく不明、HMか。柱内上SM下HK。裾外YN後HM、内YN煤付着。２次加熱痕。	ABD b	1	5YR6/4	裾柱90
73	高杯			13.8	10.8	柱外HK後N、内上HK下Ha。裾内外YN。外面赤彩。	A~E b	1	2.5YR6/4	柱裾80
74	高杯			14.0	10.0	柱外HK後N、内上SM下Ha。裾内外Ha後YN。加熱痕有。	A~F b	1	2.5YR5/6	柱裾完
75	高杯			10.3	8.5	柱外HK後N、内上SM下無調整。裾外KN後YN。内YN。外面赤彩。２次加熱痕有。	A~E b	1	2.5YR4/4	柱裾70
76	高杯			13.2	7.7	遺存不良。柱外HK後N、内上HK下N。裾内外不明瞭、YNか。	A~E b	1	7.5YR7/6	柱裾80
77	高杯			12.9	7.2	柱外HM、内上HK中SM下KN。裾内外KN後YN。	A~E b	1	7.5YR7/4	柱裾60
78	高杯			(13.2)	6.4	柱外HM、内HK後N。裾外HM、内YN。外面赤彩。２次加熱痕有。	A~E b	1	5YR6/6	柱裾30
79	高杯			15.9	3.5	裾内外KN後YN。	A~E b	1	10YR7/4	裾50
80	高杯			(12.2)	2.2	遺存不良。裾内外YNか。	A~E b	1	7.5YR6/4	裾10
81	高杯			(21.7)	5.3	裾内外YN。内一部HM。内外面赤彩。	A~E b	1	2.5YR5/4	裾20
82	高杯			(17.6)	2.0	裾内外KN後YN。内外面赤彩。	A~F b	1	2.5YR5/4	裾50
83	高杯			(21.6)	1.7	裾内外YN。内外面赤彩。	A~F b	1	10YR4/6	裾5
84	高杯			(13.2)	1.6	裾内外YN。内外面赤彩。	A~E b	1	5YR5/4	裾40
85	高杯			(12.0)	2.2	裾内外KN後YN。外面赤彩。	A~F b	1	7.5YR6/3	裾30
86	鉢	12.0	4.5		5.8	口内外YN。体上HK後N、内KN。底N、輪台状。２次加熱痕有。	A~E b	1	7.5YR6/3	80
87	鉢	13.6	5.4		6.4	口内外YN。体内外KN。底KN。全面赤彩。煤付着	A~F b	1	2.5YR5/3	完形
88	椀	(15.3)			4.1	口内外YN。体外HM、内KN。	A~E b	1	2.5YR4/2	30
89	椀	(12.0)			2.5	口内外YN。体KNか。	A~E b	1	5YR6/3	5
90	椀	(14.8)			3.8	口内外YN。体内外KN後N。	A~F b	1	5YR6/4	10
91	椀	(10.0)			3.3	口内外YN。体外HK、内面Nか。	A~F b	1	10YR6/3	5

第７表　古墳時代遺物観察表（７）

第14号住居跡（４）（第36図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土		色調	残存率
92	椀	(11.8)			3.0	複合口縁を呈する。口内外YN、体外HK、内N。	A~E b	1	10YR6/4	5
93	椀	(12.0)			1.9	複合口縁を呈する。複合部外HK後YN、口内YN。	A~E s	1	7.5YR5/4	5
94	ミニチュア	(5.4)	5.8	3.5	5.1	口内外YN。体内外HK後N。底KN。	A~F b	1	10YR6/3	40
95	ミニチュア			(4.0)	2.5	体外HK後N、内N。底N。	A~F b	1	10YR6/3	20
96	ミニチュア			2.6	1.8	体外KN後N、内KNか。底N。	A~F b	1	10YR5/2	20

第14号住居跡（５）（第36図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土		色調	残存率
97	土錘	2.0	1.9	0.5	0.4	N。端部を平端にする。孔内に縦方向の擦過痕。	A~F b	1	10YR6/4	完
98	土錘	1.8	1.8	0.6	0.4	N。端部に成作時の棒状工具による盛上がり有。	A~F b	1	7.5YR7/4	完
99	土錘	1.9	1.8	0.6	0.5	N。端部を平坦に仕上げる。	A~F b	1	10YR7/4	完
100	土錘	1.6	2.1	0.7	0.6	N光沢有。上下端を平坦に仕上げる。孔は歪む。	A~F b	1	10YR4/2	完
101	土錘	2.1	1.7	0.6	0.6	N。孔内に縦方向の擦痕有。	A~E b	1	10YR7/3	70
102	土錘	2.2	1.9	0.4	0.4	N。端部を平坦に仕上げる。孔内に擦痕。	A~E b	1	10YR4/1	70
103	土錘	3.4	4.0	0.6	0.5	N。２次加熱痕。上方の孔は歪んでいる。	A~F b	1	10YR6/3	完

（長径・短径・上孔径・下孔径）

第14号住居跡（６）（第36図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土	焼	色調	残存率
105	高杯	16.6		13.1	8.5	口内外YN。杯外KN後ON、内KN後HM。柱外HK後N、内上SM下KN。裾外KN後YN後HM、内YN。赤彩	A~F b	1	5YR6/3	完
106	高杯	19.2			7.0	口内外YN。杯内外KN後ON。一部に２次加熱痕。	A~F s	1	2.5YR5/6	杯90
107	高杯	15.2			10.0	柱外HK後N、内上SM下N、輪積痕明瞭。裾内外ON。	AC~Fb	1	10YR7/4	30
108	小型壺	10.0	8.2	2.3	8.8	口内外KN後YN。体内外KN後N。底不明。赤彩。	A~F b	1	5YR5/4	完
109	小型壺	9.8	7.4	3.5	9.1	口内外YN。体内外HK後N。底N。	A~E b	1	10YR7/4	80
110	小型壺	9.9	8.0	3.5	9.7	口内外KN後YN。体外HK後N、内KN。底HK後N。	A~E b	1	2.5Y6/3	80
111	小型壺	9.3	8.3	4.2	11.0	口内外YN。体外KN後N、内N。底N、内HK。赤彩。	b~E b	1	10YR6/3	70
112	小型壺	(9.0)	(8.3)		7.1	口内外KN後YN。体内外KN後YN。	A~E b	1	10YR6/4	40
113	鉢	8.2	9.8	4.0	7.7	口内外KN後YN。体外HK後N、内KN。底N。	A~F b	1	10YR5/2	完
114	鉢	10.2		5.7	5.2	口内外YN。体内外KN後N。底N。	A~F b	1	10YR5/4	完

第22号土坑（第38図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土		色調	残存率
1	壺	(13.7)			4.0	口内外KN後YN。	A~F b	1	10YR6/4	口10
2	甕		(14.1)		9.7	胴外KN後HM、内KN。内外面煤付着。	A~F b	1	7.5YR7/6	胴20
3	高杯	18.5			6.8	口内外YN。杯内外KN後HM、外下KN。２次加熱痕。煤付着。	A~F b	1	7.5YR6/4	杯30
4	高杯	(19.0)			3.4	口内外YN。杯内外KN。内外面赤彩。内面煤付着。	A~E b	1	2.5YR5/4	杯5
5	高杯	(14.8)			3.2	口内外KN後YN。内外面赤彩。	A~E b	1	2.5YR4/6	口10
6	高杯					裾内外KN後YN。内外面赤彩。外面煤付着。	A~E b	1	10R4/4	裾10
7	高杯			(20.0)	1.3	裾内外YN。外面赤彩。	A~E b	1	2.5YR5/6	裾5

土坑群（第39図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土		色調	残存率
1	甕	(16.4)			7.3	口内外YN。胴外KN後HM、内KN。内外面煤付着。	A~E b	1	10YR4/2	10
2	高杯	(20.0)			2.6	口内外YN後HM。	A~E b	1	2.5YR6/4	裾5
3	高杯				8.3	柱外剥落著しい。KNか。内上SM下HK後N。	A~F b	1	7.5YR7/4	柱80
4	高杯			(15.6)	1.5	裾外Ha後YN、内KN後YN。内外面赤彩。	A~F b	1	7.5YR6/4	裾5

第８表　古墳時代遺物観察表（８）

包含層（第40・41図）

No	器種	大きさ			(g)	形態・手法の特徴	胎土		色調	残存率
1	壺	(19.8)			6.8	ロ外遺存不良、不明。内KN後YN。内面赤彩。	A~F b	1	10YR6/3	ロ10
2	壺	(14.0)			2.4	ロ内外YN。	A~F b	1	10YR6/3	ロ5
3	甕	(20.2)			5.3	ロ内外YN。胴内外KN。	A~F b	1	10YR6/4	ロ10
4	甕	(16.0)			6.2	ロ内外KN後YN。胴内外KN。内面煤付着。	A~F b	1	5YR5/4	ロ20
5	甕	(13.2)			6.3	ロ内外YN。極度の歪み。胴内外KN。	A~F b	1	7.5YR5/3	ロ10
6	甕	(16.0)			3.9	ロ内外YN。胴内外KN後N。外面煤付着。	A~F b	1	10YR6/3	ロ5
7	甕	(17.6)			2.9	ロ内外Ha後YN。外面煤付着。	A~F b	1	7.5YR4/1	ロ20
8	甕	(14.0)			3.7	ロ外Ha後YN、内YN。外面煤付着。	A~F b	1	10YR7/4	ロ5
9	甕	(14.0)			5.1	ロ内外YN。胴内外Nか。	A~F b	1	10YR7/4	ロ20
10	甕	(14.2)			4.4	ロ内外KN後YN。	A~E b	1	10YR7/3	ロ10
11	甕			8.0	7.7	胴内外KN。底外周HK。底N。内外面煤付着。	A~F b	1	10YR6/4	20
12	甕			10.0	5.1	胴外HK、内N。底KN。	A~F b	1	7.5YR4/2	胴10
13	甕			10.0	5.1	内外遺存不良。不明。内外面煤付着。	A~E s	1	10YR6/4	胴5
14	甕			7.4	4.9	胴内外HM。底N。	A~E b	1	10YR6/3	胴5
15	甕			8.4	4.4	胴外HM、内KN。底HM。	A~F b	1	7.5YR6/4	胴5
16	甕			9.4	3.0		A~F b	1	10YR5/3	底完
17	甕			7.4	2.7	胴外HM。内N。底N。	A~F s	1	10YR6/3	底50
18	甕			7.6	3.7	胴外遺存不良。内KN。底KN。	A~F b	1	10YR6/3	底20
19	小型壺	(12.0)			4.1	ロ内外KN後YN。内外面赤彩。外面煤付着。	A~D b	1	2.5YR4/3	ロ10
20	小型壺			3.0	1.7	内外HK後N。底KN。内面赤彩。	A~F b	1	10YR6/4	底完
21	高杯	(21.0)			6.3	ロ内外YN。杯内外HM。杯下N。外面煤付着。内外面赤彩。	A~E b	1	5YR6/3	杯10
22	高杯	(19.0)			6.5	ロ内外YN。杯内外KN後丁寧なN。	A~E b	1	5YR6/4	杯30
23	高杯	(20.0)			4.4	ロ内外YN。杯外KN煤付着、内HM。内外面赤彩。	A~F b	1	10YR4/4	杯10
24	高杯	(20.0)			4.7	内外面剥落著しく、調整不明。	A~E b	1	7.5YR6/4	杯10
25	高杯				3.2	杯外KN、内HM。外面煤付着。内外面赤彩。	A~F b	1	10YR4/4	杯10
26	高杯				4.1	杯外KN後N。内剥落著しく不明。外面赤彩。	A~E b	1	2.5YR6/4	杯10
27	高杯			(14.0)	15.6	柱内外N、内上SM下HK。裾内外遺存悪く不明。	A~E b	1	5YR6/6	30
28	高杯				11.0	杯内外KN。柱外HK後N、内上SM下HK。裾外Ha、内KN。裾の外面の一部を積状に塗る。	A~F b	1	7.5YR7/4	30
29	高杯				6.9	柱外Ha、内上SM下YuN。	A~F b	1	10R6/3	柱60
30	高杯			(16.2)		柱外HM、内KN。裾内外YN。外面赤彩。	A~F b	1	10R5/3	10
31	高杯			(21.4)	3.8	裾外YN、内KN後YN。	A~F b	1	10YR6/3	裾10
32	高杯			(21.0)	3.0	裾外YN、内KN後YN。内外面赤彩。	A~E b	1	2.5YR5/4	裾10
33	高杯			(23.4)	2.5	裾内外KN後YN。内外面赤彩。	A~E b	1	10YR5/4	裾10
34	高杯			(16.0)	2.7	裾外HK、内HM、端部YN。	A~E b	1	7.5YR6/4	裾5
35	高杯			(14.8)	2.3	裾外YN、内KN後YN。外面赤彩。	A~F b	1	2.5YR5/4	裾10
36	高杯			(12.6)	2.1	裾外YN後HM、内KN後YN。	A~F b	1	10YR6/4	裾20
37	高杯			(12.6)	1.4	内外剥落著しい。内外ともKNか。	A~F b	1	7.5YR5/4	裾10
38	高杯	(12.2)			3.2	内外KN後YN後HM。39と同一個体の可能性有。	A~F b	1	10YR7/3	ロ10
39	高杯			10.4	5.3	杯内外HM。裾外KN後HM、内KN。端部YN。	A~F b	1	10YR6/4	50
40	鉢	(12.0)	(11.5)			ロ内外KN後YN。体内外KN。	A~F b	1	10YR6/3	20
41	鉢	(12.4)	(12.4)		8.4	ロ内外KN後YN。体外HK後N、内KN。	A~F b	1	10YR7/3	30
42	鉢		(6.3)		3.8	体内外HK後N。内外面赤彩。	A~E b	1	5YR6/4	10

2．縄文時代の遺構と遺物

a　住居跡

概要　本遺跡からは縄文時代早期（鵜ガ島台期）、中期（加曽利Ｅ期）、後期（堀之内期）の住居跡が各１軒検出されている。前２者は、遺構確認時のプランが不明瞭で、覆土と地山の区別がつきにくい。掘り込みも浅く、柱穴も明瞭でない。堀之内期のものはそれらに比して掘り込みが深く、柱穴もしっかりしている。いずれも炉は検出されていない。現在のところ調査区内での状況から、各時期の集落について論ずることはできないが、隣接する狐塚団地の造成時や、調査区東側にあるカッティング面から早期、後期の土器片が出土していることから、北側あるいは東側に集落の範囲が広がる可能性がある。

以下、早期（第９号住居跡）、中期（第８号住居跡）、後期（第15号住居跡）の順に各説する。

第９号住居跡（第42・43図）

第９号住居跡は、Ｄ－２・３グリッドに位置する鵜ガ島台期のものである。プランが不明瞭で、当初は第５号土坑として把握していたが、調査の進展に従って住居跡であることが明らかになった。西側を中心に根による攪乱を受け、東側は１号溝によって切られている。主軸を決める手だてに欠けるが、ここでは現存するプランの長軸方向Ｎ－Ｓを主軸としておきたい。この住居跡と同一時期の遺構は調査区内に見出せない。

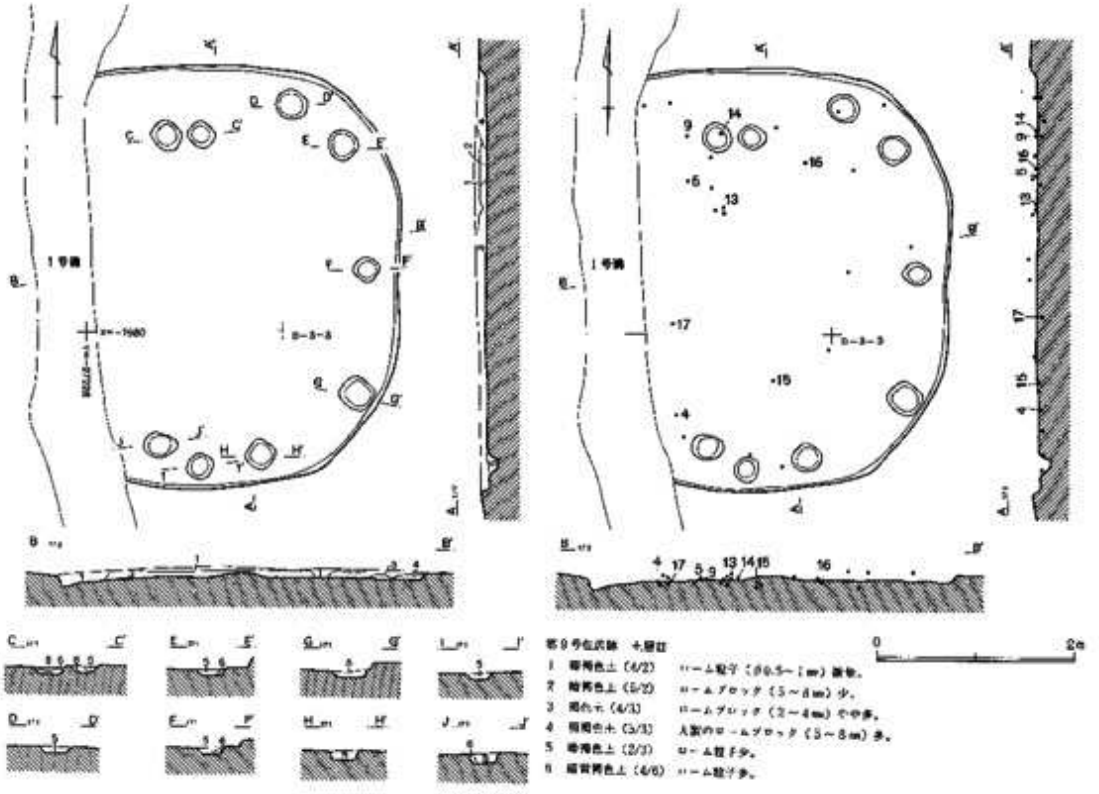
規模は、主軸方向4.2m、短軸方向3.2m、深度10cm を測り、浅い。平面形は方形に近い不整楕円形で、各辺が丸みを持たない。床面は攪乱のためか凹凸が多く、しまりに欠ける。柱穴はいずれも不明瞭で浅く、平面形は不整円形、深度は床面から10cm に満たない。炉は、住居跡中央にサブトレンチを設けたが、認められなかった。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土から構成され、自然堆積と思われる。柱穴も同様である。

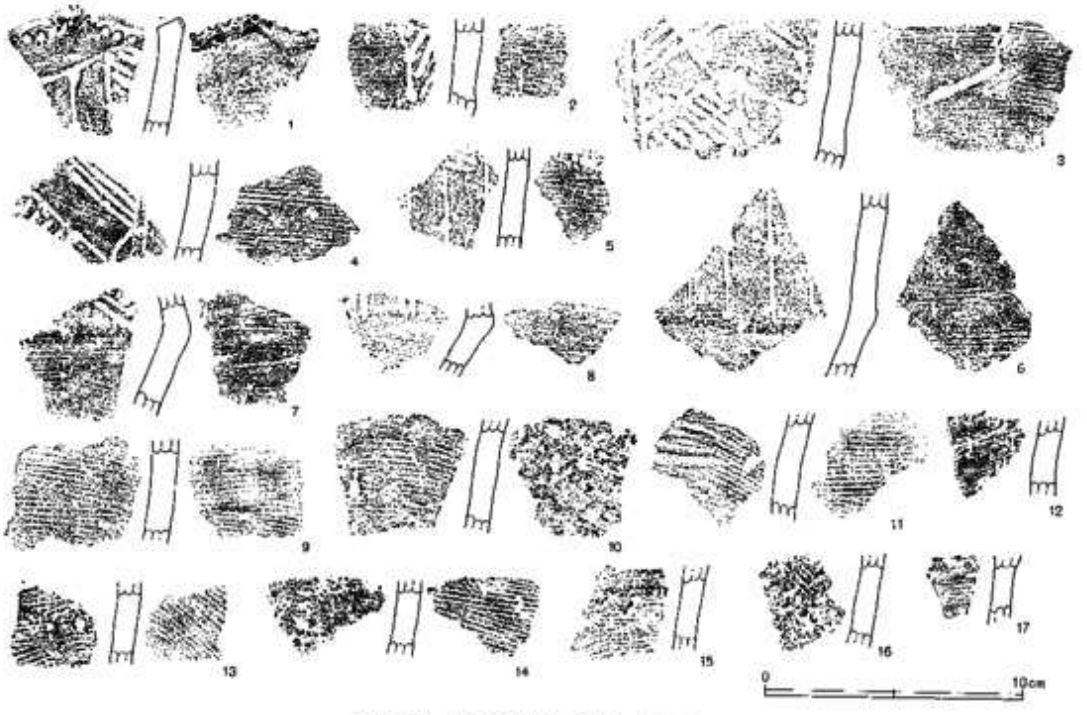
遺物は細片で、ほぼ床面から出土している。

住居跡からは縄文時代早期の条痕文系土器群のみ37点出土しており、土器はその特徴から鵜ガ島台式土器と認識される。

１は波状口縁を呈し、内外端とも若干突出する口唇部が内削状を呈し、やや内彎気味に開く器形を呈する。口唇部外端には押圧状の細かな刻みを施しており、文様は波頂部からややずれて割り付けられている。波状口縁は双頭状を呈する可能性もあるが、いずれにしても波状部分と文様の割り付けは対応していない。モチーフは、細沈線文区画内に集合太沈線文を充填施文するものである。本来ならば、波頂部下から２本対の沈線文や細隆起線文が垂下して文様帯を縦位に分割し、更に、２本対の沈線文で襷状区画文を基本とした幾何学的なモチーフを区画して、区画内に集合線文を充填施文するものであるが、本例は縦位区画線が波頂部下に垂下するが、斜位に垂下する沈線文区画内の細区画要素であることが理解される。従って、縦位区画線は波頂部を中心とする整然とした区画文ではないことが理解される。沈線文区画の交点や、区画文の上に等間隔に円形竹管文を施文



第42図　第９号住居跡



第43図　第９号住居跡出土遺物

し、区画内に集合太沈線文を充填施文する。条痕文は細かな擦痕状を呈するが、表面の文様帯内は擦り消されている。繊維を小量含み、砂粒等をあまり含まず、比較的緻密な胎土である。色調は橙褐色を呈する。

2は文様帯の下端部に当る破片で、隆帯状に膨らむ屈曲部が残存する。モチーフは沈線文が垂下して文様帯を区画するものと思われ、更に破片右上に右下がりの沈線文を施文して、幾何学状の区画文を構成するものと思われる。区画内にはやや間隔の開く集合太沈線文を充填施文する。区画沈線文上には円形竹管文を等間隔に施文している。条痕文というよりも擦痕後の整形を施し、繊維を小量含む。1と同一個体の可能性が高い。

3は間隔の狭い2本対の沈線文で縦位区画と襷状区画を施した後に、1本沈線文で細区画を施している。区画文は部分的に曲線区画となる箇所もあるが、基本的には幾何学状を呈する。区画交点及び区画線文上には円形竹管文を施文するが、規則的ではない。4、7、8は施文手法等からして3と同一個体と思われる。

5、6は縦位の沈線文のみを垂下施文するものであり、6は文様帯の下端部分から胴部にかけての破片である。縦位の沈線文は間隔を開けて垂下するもので、ほぼ等間隔に円形竹管文を施文している。縦位の沈線文のみを施文するものは、2帯の文様帯を持つ土器のⅡ帯目に施文される場合が多く、5、6もその可能性が高い。Ⅰ文様帯構成の場合、縦位の沈線文のみ施文するものは殆ど無いものと思われる。繊維をやや多めに含むが、小礫や砂粒をあまり含まず、緻密な胎土である。条痕文は浅く擦痕状を呈している。色調は橙褐色を呈する。他は胴部破片であり、内外面にあまり明瞭ではない条痕文を施文し、繊維を少量含む。個体数はあまり無いものと思われる。

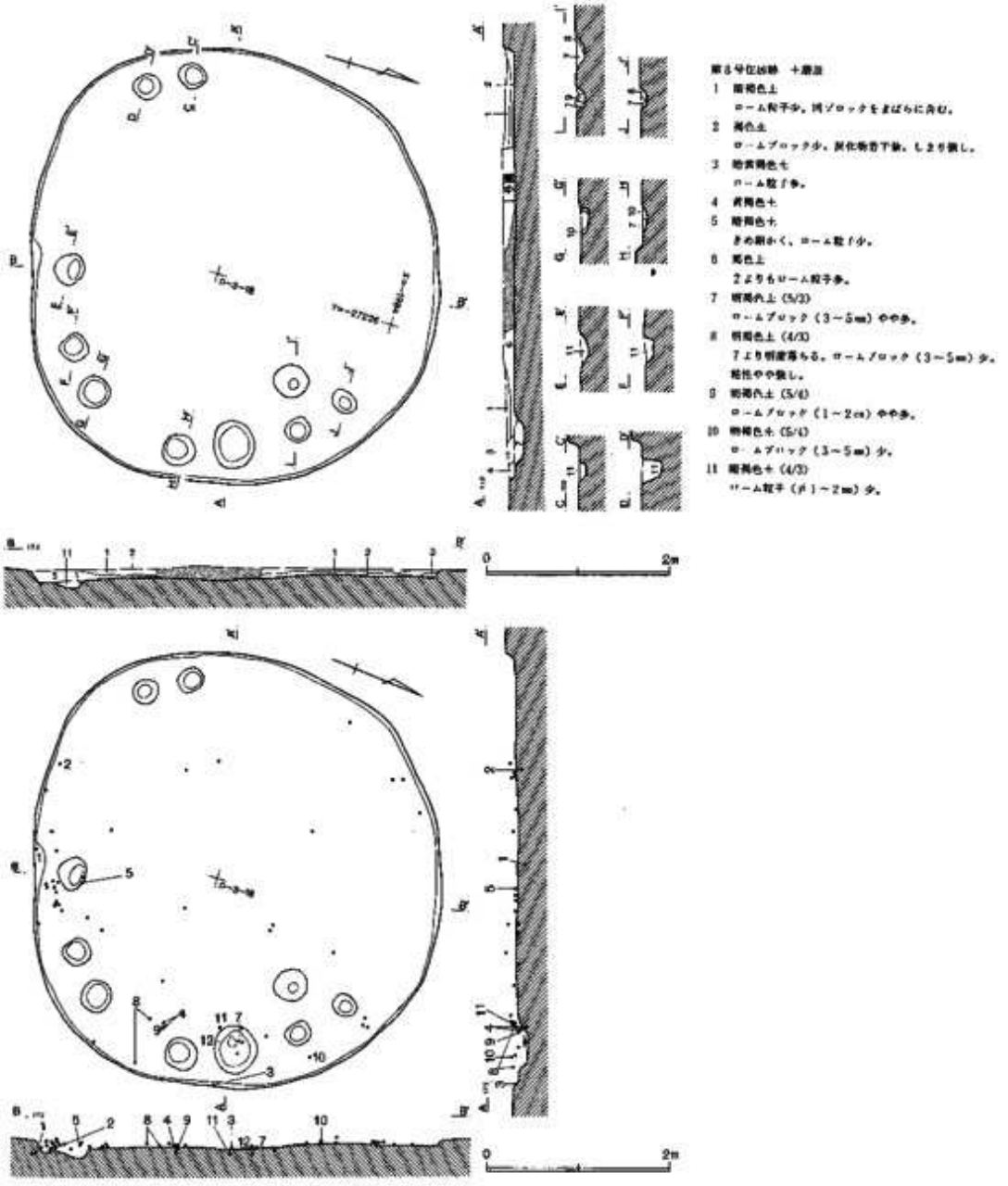
第8号住居跡（第44・45図）

第8号住居跡は、D－3グリッドに位置する加曽利E期のものである。第9号住居跡と同様に、プランが不明瞭で検出は困難であった。中央に大きな根の攪乱が入り、西側の一部は1号溝によって切られているため、遺存状況は決して良好とは言い難い。東側のピットから埋甕の一部と考えられる破片が出土したため、そのピットと住居の中央を通るラインを主軸とした。埋甕側を入り口部と想定すると、S－74°－Wを指すことになる。この住居跡と同一時期の遺構は調査区内には見出せない。

規模は、主軸方向4.7m、短軸方向4.5m、深度10cmを測り、浅い。平面形はやや南東側が張り出す円形である。床面は攪乱のためか凹凸が多く、しまりに欠ける。柱穴はいずれも不明瞭で浅く、平面形は不整円形、深度は床面から10cmに満たない。埋甕の出土したピットは、他のものに比してやや大型で、平面形は不整楕円形、規模50cm×45cm、深度10cmを測る。炉は、住居跡中央にサブトレンチを設けたが、認められなかった。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土、黄褐色土から構成され、自然堆積と思われる。埋甕の出土したピットも、人為的な埋め戻しの感は受けない。

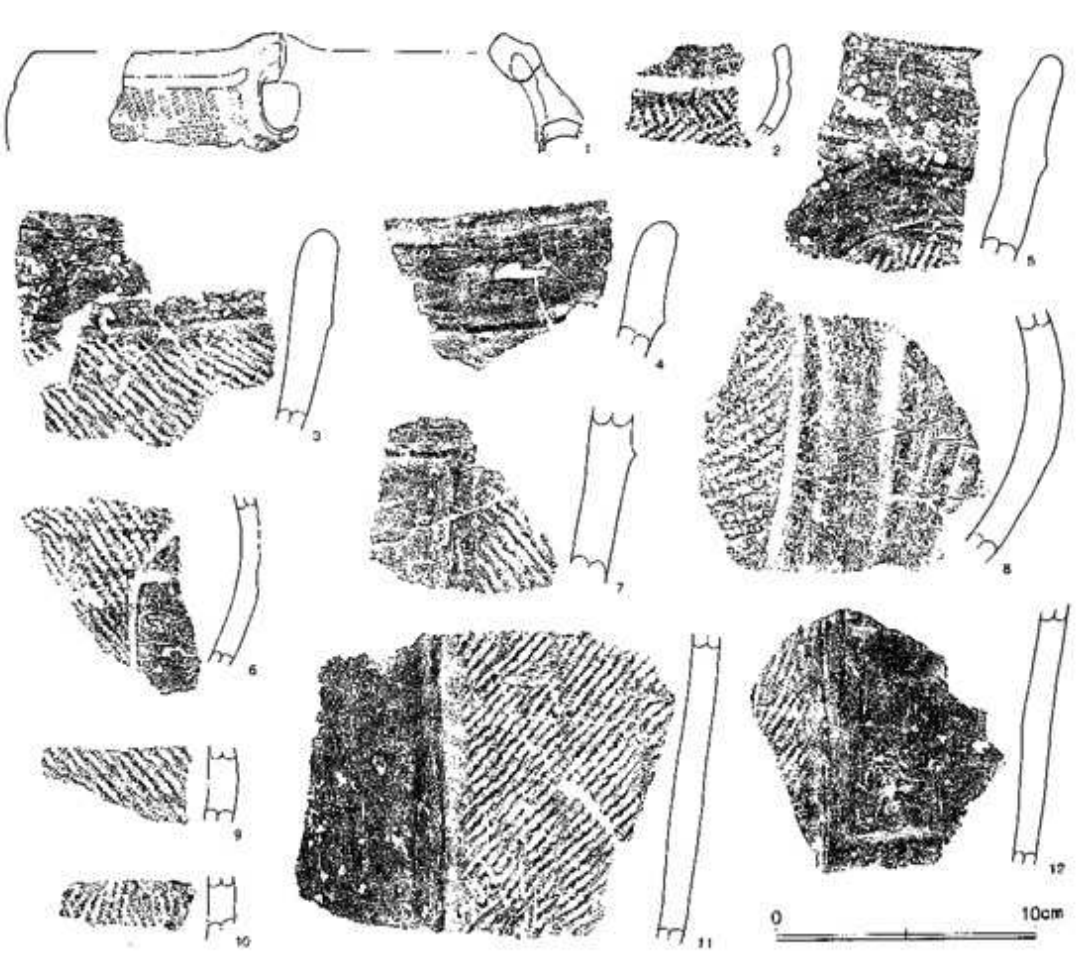
遺物は大型の土器の破片が、床面から若干浮いた状態で多く出土している。また打製石斧（第67図－4）が床面に突き刺さった状態で出土した。



第44図　第８号住居跡

埋甕と思われるものは11であるが、部分的な破片のみが存在しているに過ぎない。11は口縁部が開く大形の深鉢形土器の胴部破片で、微隆起線状の隆帯文で口縁部に無文帯を区画し、等間隔に幅広の無文帯を垂下する構成の土器と思われる。無文帯は微隆起線文の隆帯文で区画されるもので、地文には、０段多条縄文 RL を縦位施文している。12は11と同一個体である。

１はキャリパー形を呈する深鉢形土器で、注口土器である。口縁部が内彎して開き、胴部で強く括れる器形を呈するものと思われ、口唇部がやや肥厚し、内削状を呈している。口縁は注口部を中



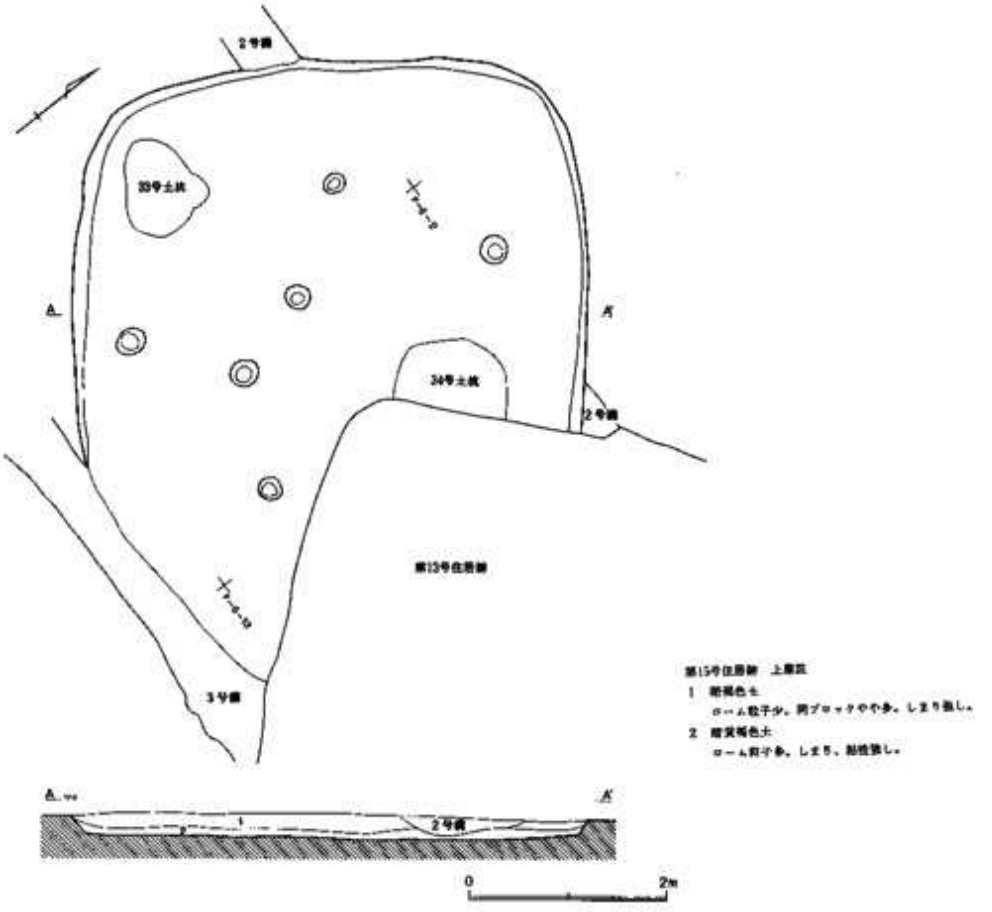
第45図　第８号住居跡出土遺物

心として緩い４単位の波状口縁を呈するものと思われ、口唇部下に太い凹線状の沈線文を巡らせて、幅狭の口縁部無文帯を区画している。注口はやや上向き加減に取り付けられており、現存部から判断して短いものである。注口部分には沈線文は施文していない。地文縄文は単節 RL で、口縁部には横位に１段施文し、以下縦位に施文するものである。器面が風化しており、脆いが、橙褐色を呈する。推定口径18.6cm を測る、比較的小さな注口深鉢形土器である。２は口縁部破片で、１の同一個体と思われる。

５は微隆起線状の隆帯文で口縁部の無文帯を区画し、胴部でやや括れる大形の深鉢形土器の口縁部破片である。口縁部区画の隆起帯から２本対の隆起線文が放物線状に垂下している。このモチーフは上側の隆起線が大きく彎曲して連結し、下側の隆起線が放物線状に解放される構成を取り、４単位に展開される場合が多い。地文は０段多条縄文 RL である。４は５と同一個体と思われる。

３は隆起線文で口縁部無文帯を区画し、区画線から無文帯が垂下する深鉢形土器である。７は同一個体で、いずれも０段多条縄文 RL を横位施文している。

６、８は彎曲の強い胴部破片であり、６は曲線の沈線文が垂下するキャリパー形深鉢形土器の胴部破片であり、８は対の隆起線で施文される両耳壺土器の胴部破片と思われる。



第46図　第15号住居跡

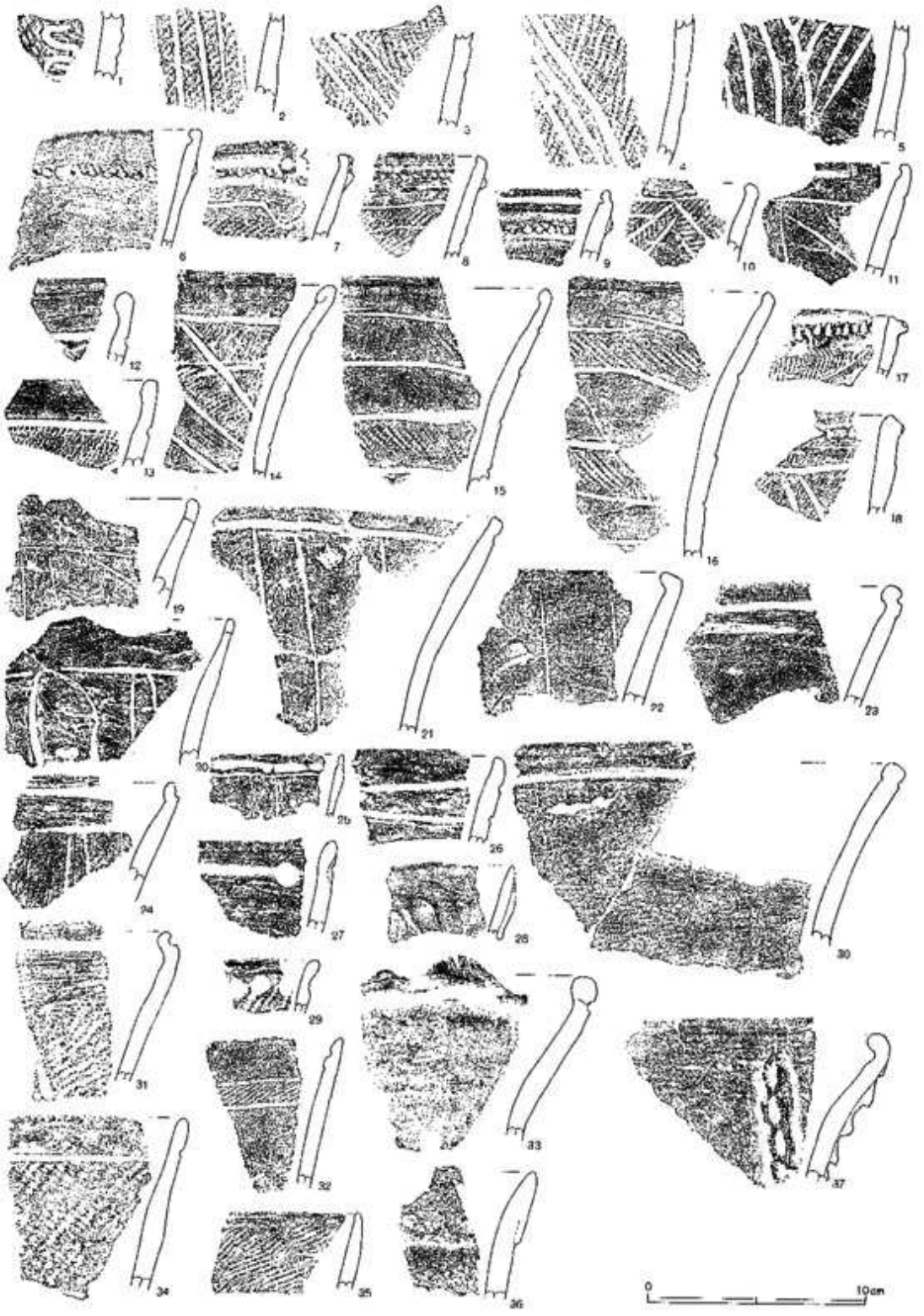
第15号住居跡（第46～49図）

第15号住居跡は、F－5・6グリッドに位置する堀之内期のものである。前述の第8・9号住居跡に比してプランが比較的明瞭であった。第13号住居跡、第2・3号溝、第33・34号土坑に切られ、遺構の南東半分の形態は不明である。主軸方向を決定する手立てに欠けるが、現存する遺構の壁の方向性から、ここではN－51°－Wとしておきたい。本住居と同時期の遺構は、北西8mに位置する第15号土坑、南西3mほどに位置する第32号土坑、南南西に10mほど離れた第24号土坑がある。また、包含層中からは多量の堀之内式土器が出土している。

遺構の規模は、主軸方向6.3m以上、短軸方向5.2m、深度25cmを測る。第8・9号住居跡に比して、こちらの方が掘り込みがしっかりしている。平面形はやや辺に丸みを持つ長方形である。床面は比較的しっかりしている。柱穴はいずれもしっかり掘り込まれており、平面形は不整円形、深度は床面から20～30cmを測る。炉は認められなかった。

覆土は、暗褐色土、暗黄褐色土から構成され、自然堆積と思われる。各柱穴の状況も同様である。

遺物は大型の破片が多く、覆土中から散在して出土している。また、本住居を切って構築される第13号住居跡の覆土上層からも多量の堀之内式土器が出土しており、それも本住居跡に起源をもつ



第47図　第15号住居跡出土遺物（1）

ものと考えて処理した。石器は、石皿、磨石、磨製石斧が覆土中から出土している。(第67図)

第47図1～4は縄文地文の上に太い沈線文を施文する土器群である。1は単節LR縄文地文の上に蕨手状蛇行沈線文を垂下施文するもので、地文は横位施文である。2は単節LR縄文地文の上に数本の沈線文を垂下させるものである。3、4は3本組の沈線文を縄文地文上に施文するもので、地文は両者とも単節LRの横位施文である。5は数本の沈線文を組で施文するもので、斜位と放物線状の組み合せとなる。以上、地文縄文の有無の差はあるが、文様構成に比較的古い要素を残すもので、堀之内Ⅰ式最終末の段階に位置付けられるものと思われる。

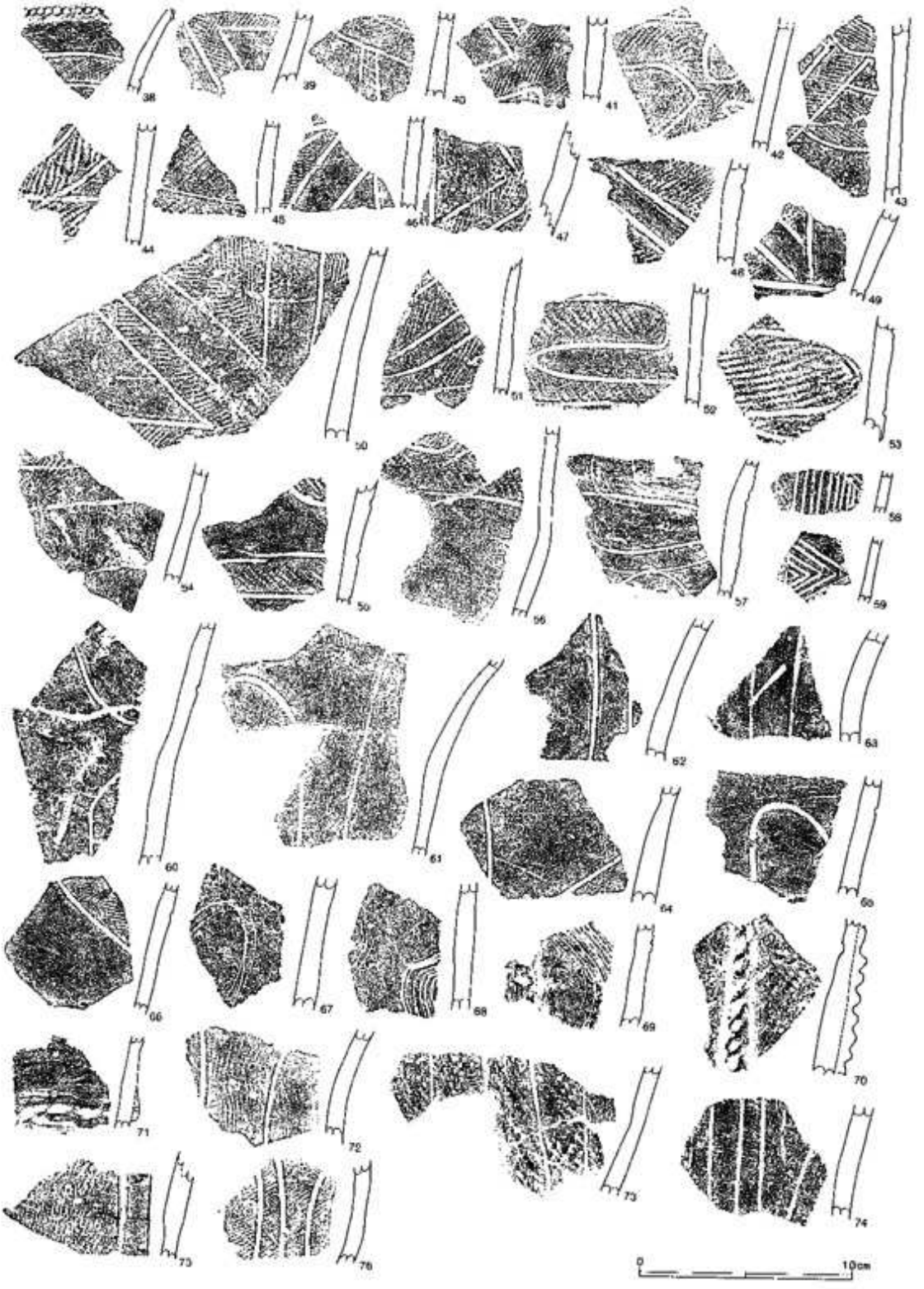
6～16は口縁部が外反気味に開く深鉢形土器の口縁部破片であり、6～9は口縁部に細い隆帯文を巡らすものである。6は口縁部下2cm程に隆帯文を巡らせ、刻みを施している。更に4cm程下に縄文を施文するが、沈線文で区画はしていない。口縁部裏面には凹線状の沈線文を1条巡らす。7は緩い波状口縁を呈し、口唇下にやや太い隆帯文を巡らせ、押圧状の刻みを施す。口唇部と隆帯文は円形刺突文を施す貼付隆帯文で連結されている。この隆帯文の下は磨消縄文の区画沈線文が彎曲して施文される。口縁部裏面には凹線状の窪みが巡る。地文は単節LRである。8は口唇部が外削状を呈し、裏面に浅い沈線文が巡る。口縁部にはやや太い隆帯文を巡らせ、刻みを施す。9は外削状口唇部に沈線文を施文し、裏面にも比較的深い沈線文を巡らすものである。隆帯文は断面が三角形状を呈し、深い刻みを施している。

10～16は口縁部に隆帯を施文しないもので、磨消縄文で文様を区画するものである。10は口唇部直下から磨消の帯縄文で文様を区画するもので、口縁部裏面は凹線が巡る。11は器面が荒れているが磨消縄文で幾何学状の区画文を施文する。12、13は同一個体で、口縁部が若干内彎しながら開く器形を呈する。口縁部は深い沈線文で区画する。14は口唇部が受口状を呈し、大きく開く器形を呈する。文様は磨消縄文の幾何学的な構成をとる。15、16は口縁部に2段の縄文帯を施文するもので、16は彎曲する沈線文が施文されているため、上下の縄文帯が連結される可能性もある。両者とも口裏面に凹線文が巡り、地文は単節RLを施文する。

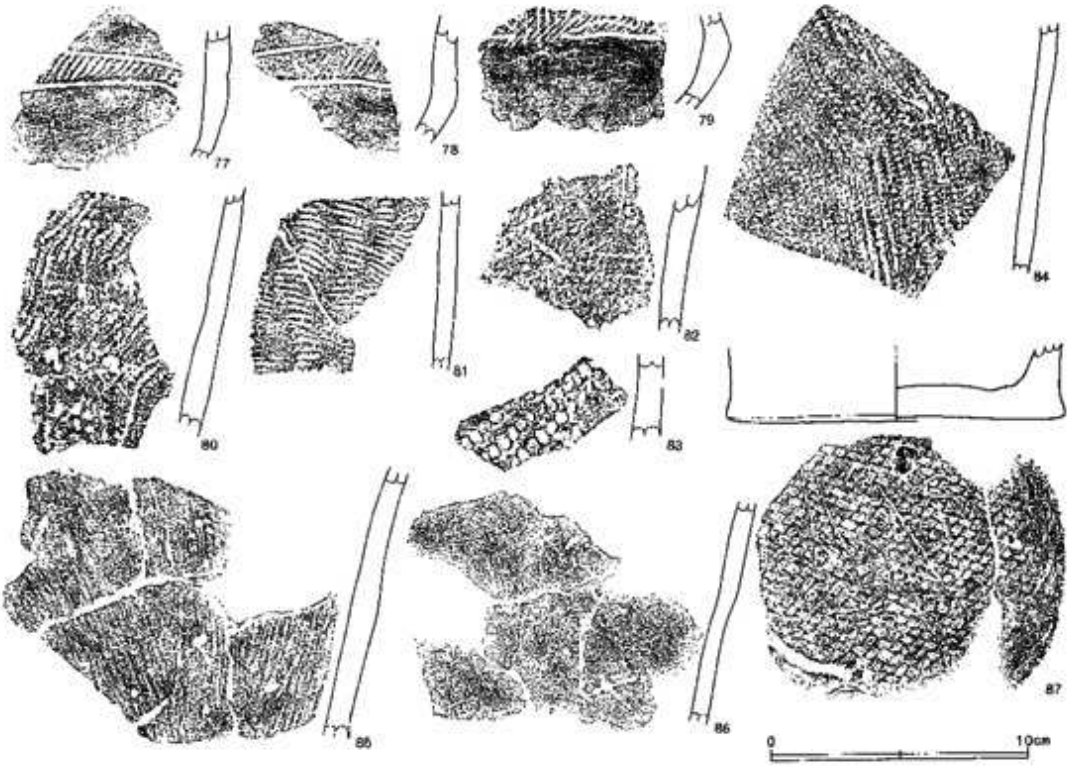
17、18は口唇の外端部に隆帯文を巡らすもので、隆帯文には刻みを施す。口縁部がやや内彎する器形を呈し、隆帯文下に地文単節LR縄文を施文して曲線沈線文モチーフを描くものである。

19～30は口縁部が開く器形を呈し、沈線文のみ施文する土器群である。19～21は口縁部裏面に沈線文を施文せず、沈線文で口縁部を区画するものである。19は口唇部がやや先細りしながら内彎して開き、浅い沈線文で口縁部を区画する。この区画線文から沈線文を縦位に垂下して文様帯を区画し、さらに斜位の沈線文を垂下施文して区画するものである。20も同様な構成をとり、称名寺式からの伝統的なモチーフを簡略化して施文している。21は縦位の沈線文のみが垂下する。22～24は口縁部裏面に沈線文を施文するもので、いずれも開く器形を呈する。22、23は口唇部に沈線文を巡らすもので、22、24は縦位の沈線文を垂下する。25は小形の土器で薄く、やや開く器形を呈する。口唇部内外面に沈線文を施文し、縦位の細沈線文を垂下する。26は口縁部に2本の沈線文が巡り、27は口縁部の区画沈線文上に円形の押圧文を施文する。28、29は口縁部に指頭の圧痕文を列状に巡らすものである。30は口唇部内外面に沈線文を巡らすのみである。

31は口縁部が内彎して開く器形で、口唇部に沈線文を巡らすものである。胴部には単節LR縄文



第48図　第15号住居跡出土遺物（２）



第49図　第15号住居跡出土遺物（3）

を横位に施文する。32は直線的に開く器形で、口縁部に帯縄文を1帯施文する。口縁部裏面には2本の沈線文を巡らす。34、35は開く器形で縄文が施文されるものであり、34は口縁部に沈線文が巡る。36は無文土器で、口縁部が有段状を呈する。33は小波状口縁を呈する無文土器で、胴部が張る器形を呈するものと思われる。口唇部に太くて深い沈線文を巡らす。37は無文口縁部が開き胴部が膨らむ器形を呈し、口縁部から刺突文を施す隆帯文が垂下する。

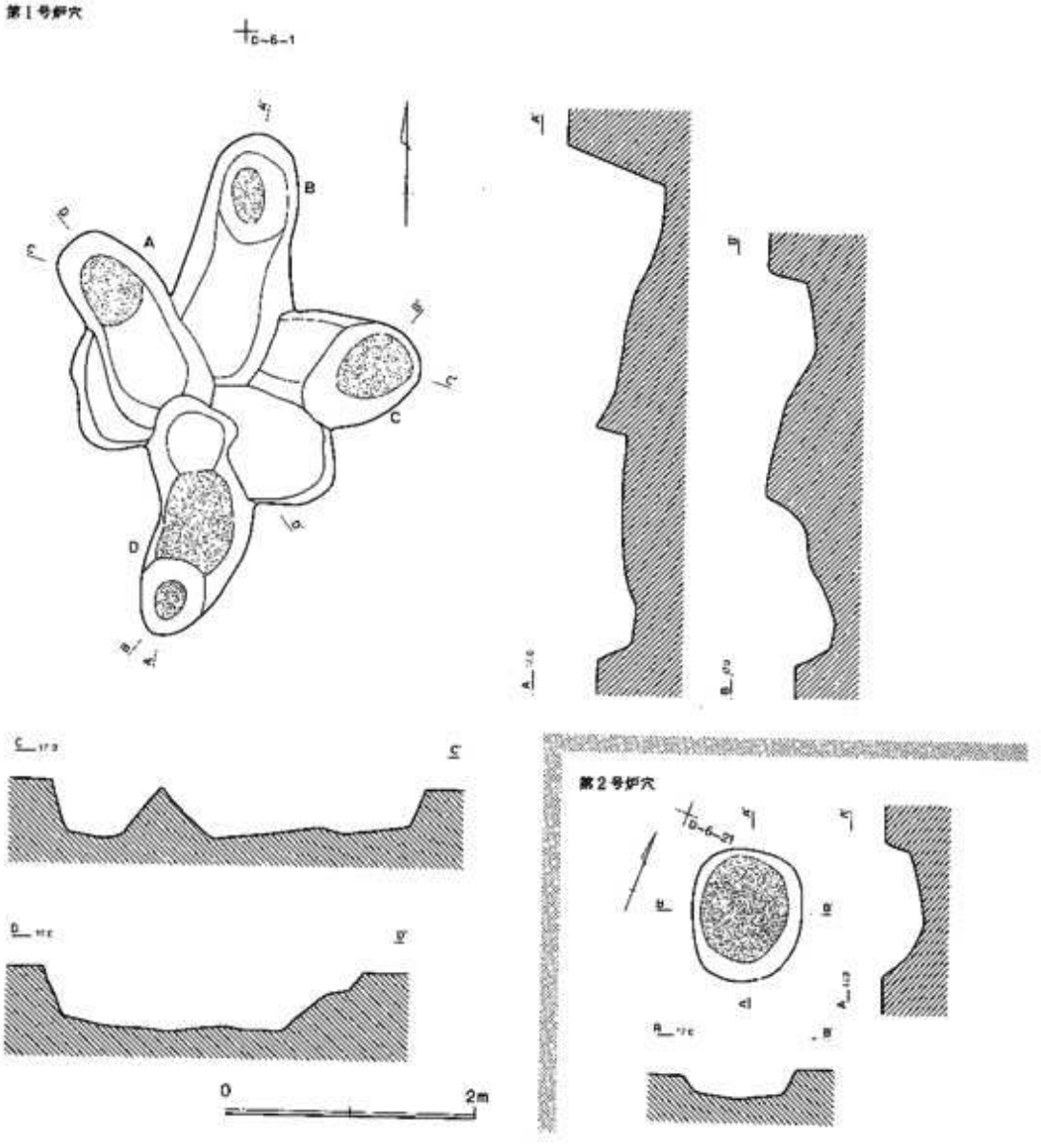
第66図38～56は口縁部が開き、幾何学的な区画文を磨消の帯縄文で施文するものである。三角形を基本としたモチーフが多いが、曲線的なもの、流水文的なもの等も存在する。56は胴部が若干張る器形を呈する。57は磨消縄文ではなく沈線文のみで曲線文を施文する。58、59は集合沈線文でモチーフを描くものである。

60～76は口縁部が開き、胴部が括れて張る器形の深鉢形土器で、称名寺式以来の伝統的なモチーフを施文する土器群である。60～67は縦位区画線間に上下の対弧文を沈線文で施文する土器群である。68、69は蛇行条線文を垂下するもので、70は刻みの施される隆帯文を垂下する。66、72は磨消縄文を施文し、73～76は縄文地文上に沈線文を施文する。

第49図77、78は胴部が大きく屈曲する器形を呈し、曲線的な帯状文を施文する。79は屈曲が強く、整形施文が丁寧であることから注口土器と思われる。胴部破片は単節LRが多い。

以上、住居跡出土土器は不対要素も散見されるが、相対的に堀之内式の中でも新しい要素を持つ土器群が多く、堀之内Ⅱ式の中でも新しい段階に位置付けられるものである。

b　炉穴

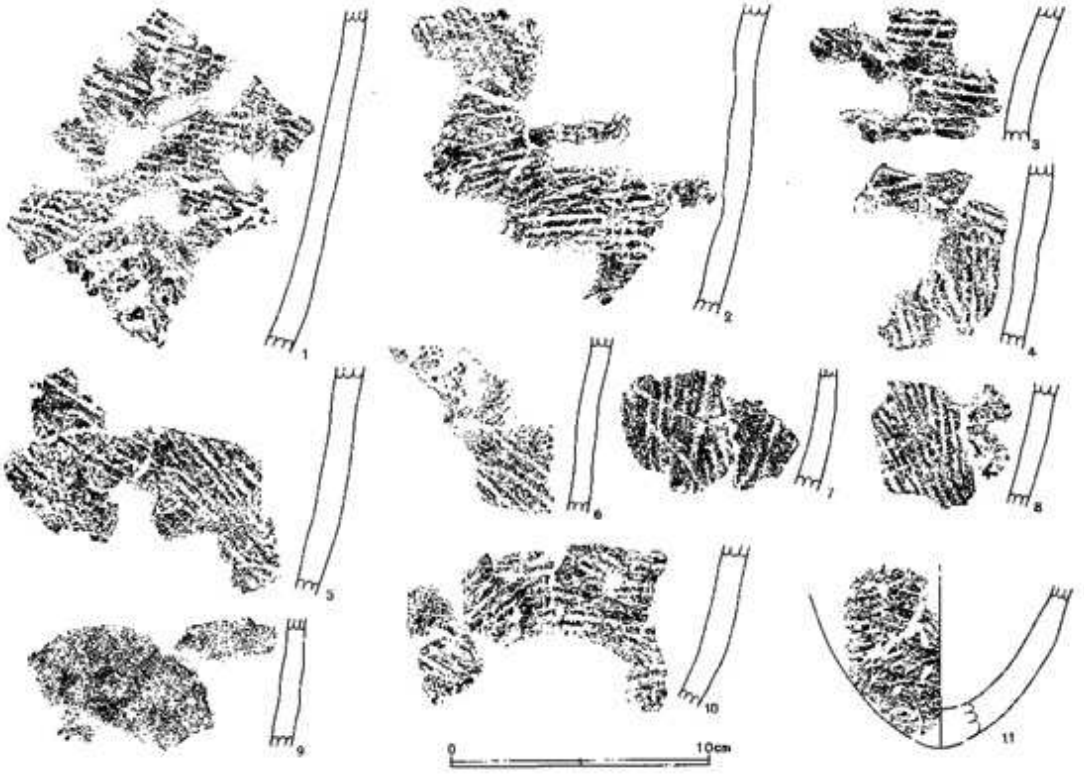


第50図　第1・2号炉穴

概要　本遺跡からは、2基の炉穴が検出されている。いずれも早期のもので、繊維を多く含む条痕文系土器群が出土している。以下、各説する。

第1号炉穴（第50・51図）

第1号炉穴はC・D－6グリッドに位置する。当初は炉穴として認識できず、第23号土坑として調査を始めたのだが、壁の感触が得られず、拡大していった結果炉床を検出し、現状を呈するに至った。第2号炉穴からは北に3m程離れている。なお、今回の調査では、本炉穴群と同時期と考えられる遺構は検出されていない。



第51図　第１号炉穴出土遺物

平面形は長楕円形の４基と不整円形の１基が重複し、放射状を呈する。築造順序は、明らかでない。全体の規模はSP－A～A′で4.1m、C～C′で3.04mを測る。深度は各部によってまちまちだが、30cm程度はあり、かなりしっかり掘り込まれている。覆土は前述の調査の様相からも分かるように、黄褐色でほとんど地山のロームと区別がつかない。

各部は炉跡と足場から構成されている。Aは長楕円形の炉跡に、足場と考えられる張り出しが南西側につく。主軸方向はN－33°－Eを指す。規模は、主軸方向1.5m、短軸方向1.1m、深度は足場10cm、炉跡50cmを測る。炉床は55cm×45cmの範囲でよく焼けている。

Bは長楕円形を呈する。主軸はN－7°－Wを指す。南側の足場に、それより一段深い炉跡がつく。規模は主軸方向2.0m、短軸方向90cm、足場40cm、炉跡80cmを測る。炉床は40×15cmの範囲でよく焼けている。

Cは不整楕円形を呈し、西側をBに壊されている。西側の足場に、それより一段深い東側の炉跡がつく。主軸はN－77°－Wを指す。規模は主軸方向1.25m、短軸方向90cm、深度は足場40cm、炉跡50cmを測る。炉床は60cm×45cmの範囲でよく焼けている。

Dは不整楕円形を呈する炉跡に、南東・北西方向に張り出す足場を持つ。主軸はS－14°－Wを指す。規模は主軸方向2.3m、短軸方向炉跡部分70cm、張り出し部1.5m、深度は足場15cm、炉跡40cmを測る。南側の先端部は更に5cm程掘り下げられている。炉床は北側が75cm×60cm、南側が30cm×25cmの範囲でよく焼けている。

第1号炉穴出土土器は、細片を含めれば各炉床から比較的多くの破片が出土している。しかし、繊維を多量に含み、被熱しているため非常に脆く、取り上げる段階で細片と化したものが多い。その中でもB炉床出土土器が比較的残りが良く、大形破片が多いため、状態の良いものを図化した。

第51図はほぼ2個体分と思われる。口縁部破片や、文様を持つ有文土器が全く出土していないため、所属時期を限定出来ないが、繊維を多量に含み脆弱で、やや器壁が薄いこと等を考慮すると、早期最終末の条痕文土器の可能性が高いものと思われる。

9を外した1～11は同一個体と思われる。器壁は6～8mm前後を測り、多量の繊維を含む。条痕文は概ね斜位に施文するが、底部付近では横位施文に近くなる。成形による器壁の凹凸を多く残し、条痕文による器面整形は粗く施されている。底部は丸底に近い尖底状を呈し、底部内面への条痕文施文は施されない。胎土は繊維を多く含むが純粋な粘土に近く、小礫、砂粒等をあまり含んでいない。色調は橙褐色と暗褐色を呈する。

9は内外面とも条痕文を施文せずに、表面に擦痕状の整形を施している。内面は指頭による整形痕である凹凸が、顕著に認められる。器壁は条痕文が施文されるものよりも若干薄く、5～7mm前後を呈する。胎土は繊維を多く含むが、他のものを含まず純粋であり、条痕文土器よりもより純粋に近い。

遺構では鵜ガ島台式期の住居跡が検出されているが、その時期の炉穴ではないことは明らかである。包含層からは、口縁部を帯文で区画し、隆帯上や、文様帯無いに絡条体圧痕文を施文する土器が出土している。この土器は、茅山上層式以降の在地の土器群として近年注目されてきた土器群であり、東海地方の上ノ山式段階前後に位置付けられている。しかし、条痕文を施文する土器は、中部地方では早期最終末まで施文されており、確たる位置付けは難しい。本遺跡例が上ノ山段階の絡条体圧痕文土器より早期最終末に近い段階の土器群に近似することから、本遺跡出土例を花積下層式直前段階に位置付けることが可能ならば、本炉穴の所属時期もその段階に比定される可能性が高いものと思われる。いずれにしても、早期終末に位置付けられることは確実であろう。

第2号炉穴（第50図）

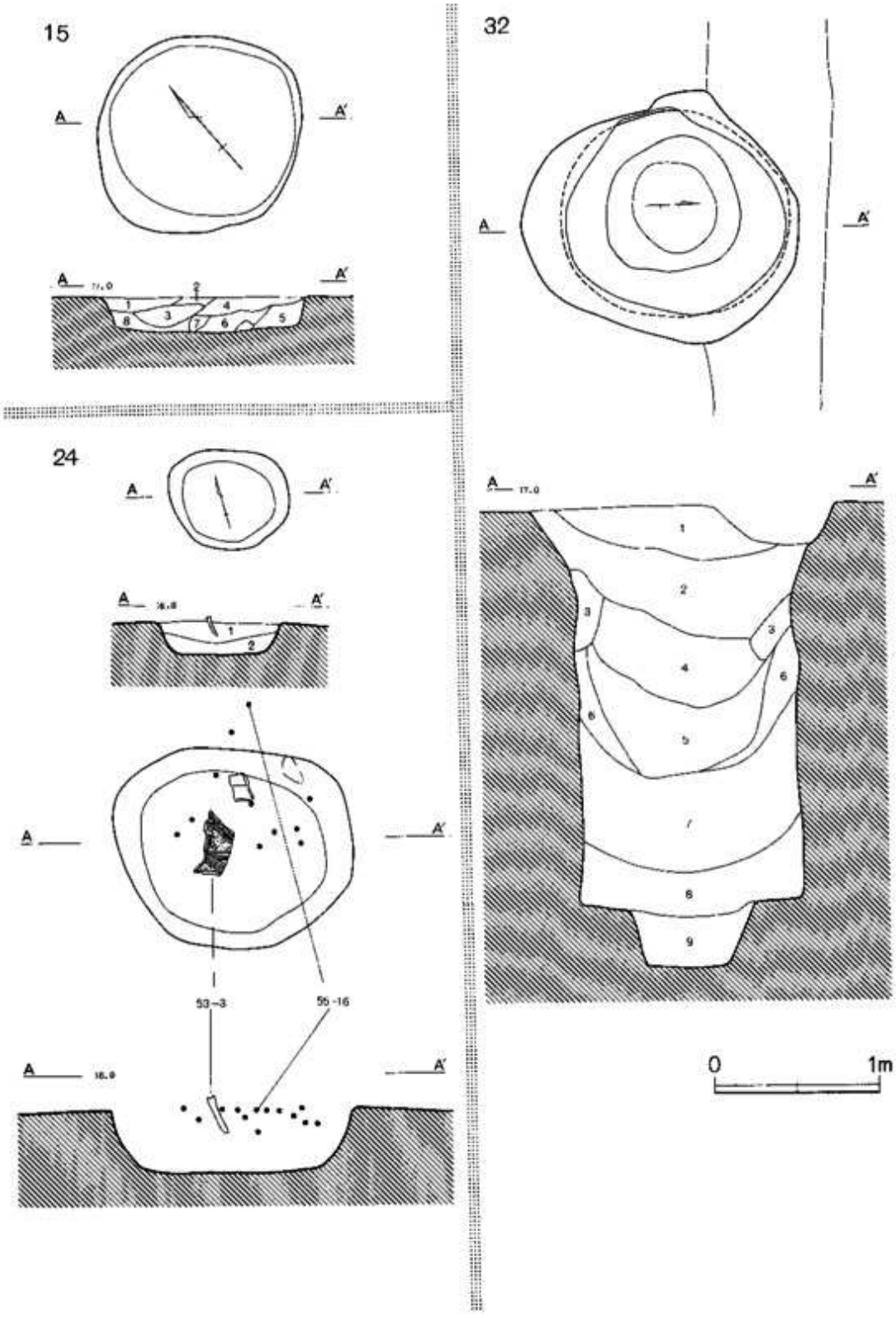
D－6グリッドに位置する。第1号炉穴からは南に3m程離れている。こちらも当初遺構としての認識がなく、若干焼土粒子が浮いていたため掘り下げたところ、現状を呈するに至ったものである。単独での検出である。

形態は楕円形を呈し、主軸はN－Sを指す。炉穴部分のみの検出である。規模は主軸方向1.1m、短軸方向90cm、深度20～35cmを測る。覆土は前述の調査の様相からも分かるように、黄褐色でほとんど地山のロームと区別がつかない。炉床は85cm×70cmの範囲で、よく焼けている。

図示可能な遺物は出土していない。

c　土　坑

本遺跡からは土坑31基が検出されているが、縄文時代のものと確実に位置付けられるのは3基のみである。



第52図　縄文時代の土坑群

第15号土坑（第52図）

第15号土坑はE－5－13グリッドに位置する後期の土坑である。第12～14号土坑と近接するが、それらとの関係は不明である。同時期の遺構としては、南南東12mに第32号土坑が、南東8mに第15号住居跡が所在する。

形態は東西がやや張り出す不整円形を呈し、主軸はN－88°－Wを指す。規模は主軸方向1.4m、短軸方向1.2m、深度20cmを測る。断面形は逆台形である。覆土は明褐色土、褐色土、暗褐色土から構成され、細かに分層が可能だが、砂粒の方向性から自然堆積と思われる。

遺物は、床面から後期の蓋（第55図－22）等の遺物が出土している。

第24号土坑（第52図）

第24号土坑はE－7－9グリッドに位置する後期の土坑である。第5号溝によって南側を壊されている。位置的には、同時期の第15号住居跡の南西12m、第32号土坑の南7mに当たる。

形態は不整楕円形を呈し、主軸はN－77°－Wを指す。規模は主軸方向72cm、短軸方向60cm、深度20cmを測る。断面形は逆台形である。覆土は褐色土、暗褐色土から構成され自然堆積と思われる。

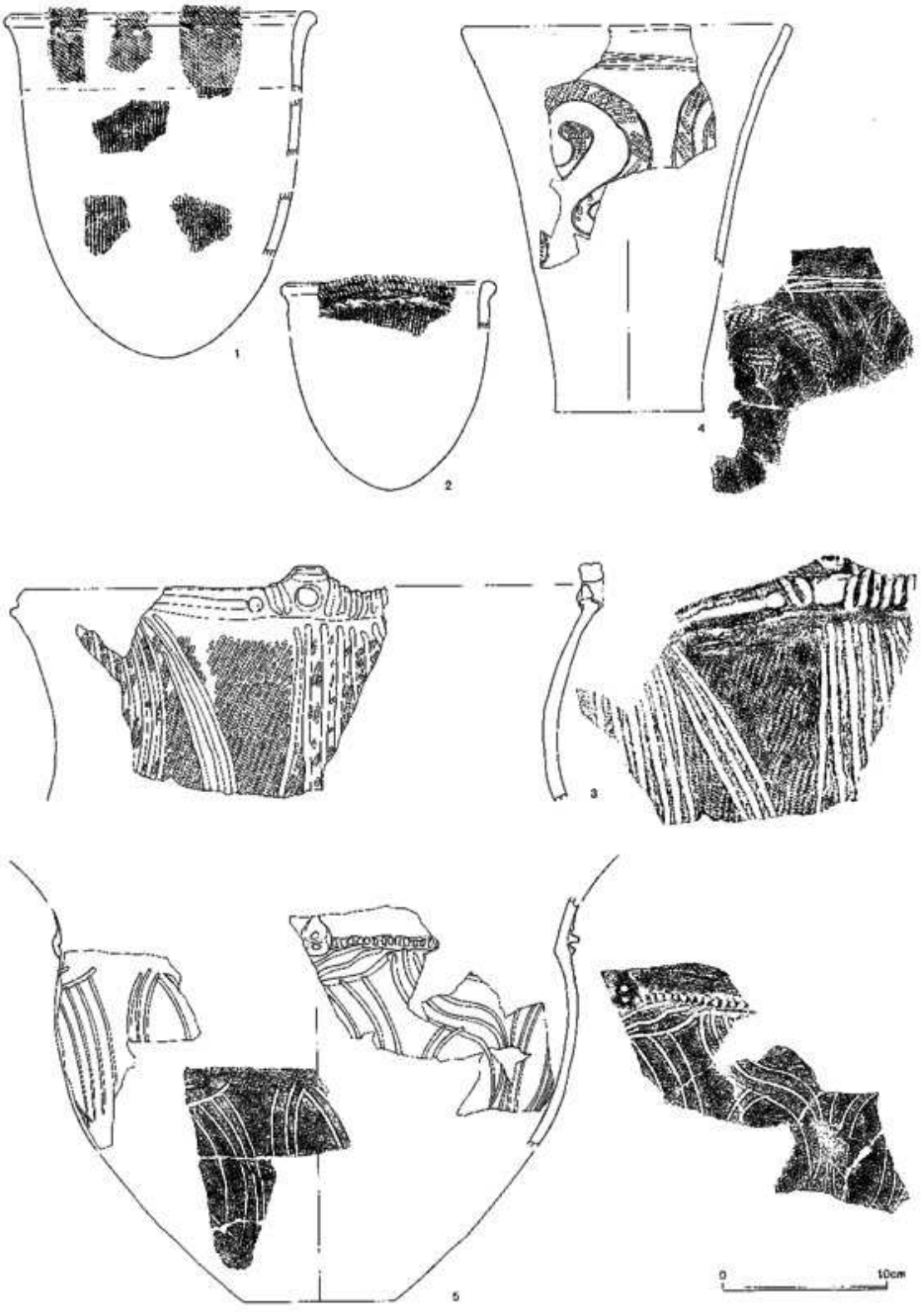
遺物は第1層中から多く出土し、深鉢の大型の破片（第53図－3）が直立した状態で出土している。

第53図3は口縁部の大形破片から復元したもので、推定口径37cm、現存高14.3cmを測る。口唇部が内彎して開き、頸部が括れ、胴部が大きく張る器形を呈する深鉢形土器である。口唇部が内折するため、口縁部裏面に凹線状の窪みが巡る。平口縁を呈し、突起が付き、口縁部には深い沈線文が巡る。突起は山形の板状を呈し、上端面が皿状を呈する。突起の付け根には径1cm程の穴が穿孔され、向って左の裾部には未貫通の穴が穿孔されている。山形の肩部には裏面側から沈線文が、口唇部に帯して直交に施文されている。胴部は単節LR縄文を横位に施文しており、地文縄文上に多条の沈線文を組にして施文している。モチーフはほぼ突起下から6本組の沈線文を縦位に垂下施文して、文様帯を縦位分割し、区画内に3本組の沈線文を斜位に垂下施文する構成をとるものと思われる。口縁部幅も幾分広く、縄文地文上に沈線文を施文する深鉢形土器であるが、沈線文が多条になる点に新しい要素が窺え、堀之内Ⅰ式からⅡ式にかけての段階に位置付けられるものと思われる。第55図16は口縁部が開く器形を呈し、口唇部下から磨消縄文帯で幾何学的なモチーフを施文するものである。堀之内Ⅱ式に比定されよう。

第32号土坑（第52～54図）

第32号土坑はE－6－14グリッドに位置する後期の土坑である。第3号溝によって、遺構の北側を切られている。位置的には、同時期の第15号住居跡の南西2m、第24号土坑の北7mに当たる。

形態は不整楕円形を呈し、主軸はN－2°－Eを指す。規模は主軸方向1.7m、短軸方向1.5m、深度は2.45m垂直に掘り下げ、更にその中央を30cm程掘り下げている。断面形は当初は円筒状の掘り込みに突起がつくような形態であったと思われるが、現状は壁の上部が崩落したために、開口部から40cm程緩やかに傾斜している。壁面には開口部から1.3m程の部分に隆起があったが調査中に



第53図　出土土器実測図

崩落してしまった。床面は平坦だが、前述のように中央に径80cm、深さ20cm 程の不整円形の掘り込みがある。覆土は褐色土、暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土、暗黄褐色土から構成され、概ね自然堆積と思われるが、第3層、第6層はロームブロックの含有が多く、壁面の崩落土と思われる。

遺物は、覆土中から堀之内期の大型の破片が出土している。(第53図4・5、第54図)

第32号土坑出土土器は新旧の要素を持つ土器群が含まれている。第54図1、3～6は堀之内Ⅰ式からⅡ式にかけての土器群である。1は単節LR縄文地文上にやや太い蛇行沈線文を施文するものであり、沈線文は蕨手状蛇行沈線文と思われる。3は口唇部が内折する器形を呈し口縁部に円形の押圧状刺突文を施文する。4は胴部が張る器形を呈し、3～4本の太沈線文を鋸歯状に組み合せて連結する構成をとり、5は外反する器形で同様の文様構成をとる。6は無文の口縁部が開き、胴部が張る器形の深鉢形土器である。口縁部は凹線状の沈線文で区画しており、口唇部裏面に凹線文状の窪みが巡る。胴部は1本の沈線文で区画し、対弧線文状に3～4本の沈線文を垂下施文する。

2、7～9は口縁部が開き、胴部で緩く括れる器形を呈するもので、沈線文のみ施文する土器群である。7は口縁部を沈線文で区画し、斜位の集合沈線文を垂下している。2、8は同一個体で、口唇部が内削状を呈して開いている。口唇下に1本の沈線文を巡らして口縁部を区画し、2本対の斜行沈線文を垂下施文している。9は口唇部が肥厚し、若干内彎内折して開き、口縁部裏面が大きく抉れている。口縁部は沈線を巡らさせて区画し、区画線から縦位の沈線文を垂下施文する。

10～14、17、第54図4は口縁が直線的に開く器形を呈するものである。10は口縁部を2本沈線文で区画し、11は隆帯文で区画するものである。11の隆帯文上には刻みが施される。11、12は磨消縄文帯のみを胴部に施文するものであるが、1段か2段かは判断されない。13は磨消縄文で菱形構成文を施文している。14は口縁部から2本対の沈線文を垂下して文様帯を縦分割し、弧状沈線文を垂下している。第53図4は口縁部の大形破片から推定復元したもので、口縁部が直線的に開く器形を呈し、2本沈線文で口縁部を区画する。胴部には蛇行する磨消縄文で、渦巻文を連結するモチーフ構成になるものと思われる。縄文は単節LRである。推定口径20.5cm、現存高14.7cm を測る。

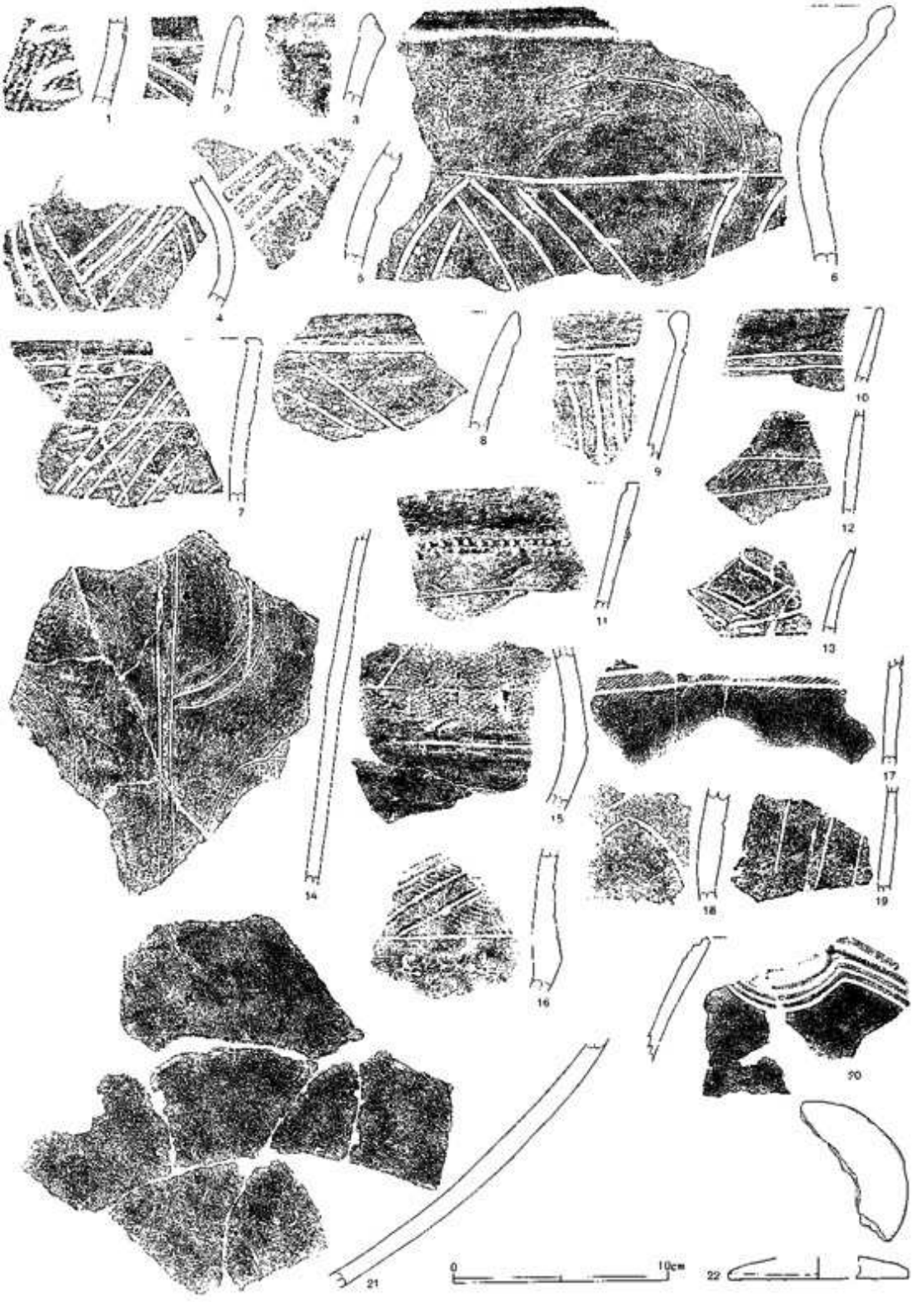
16は胴部がやや強く張る器形を呈し、胴部の幾何学区画は粗くなる。16も胴部が括れる器形を呈し、大柄な区画文を施文する。17は幅狭の磨消帯縄文を施文している。

第53図5胴部の大形破片から推定復元したものである。無文の口縁部が開き、胴部が膨れる器形を呈するもので、胴部は隆帯文で区画し、「8」状の貼付隆帯文が付く。胴部モチーフは、この「8」状貼付文を中心にして囲む様に展開され、集合沈線文を蛇行しながら対弧文状に施文するものである。大形な土器の割りには器壁が薄く、6～7mm 前後を測る。

18、19は胴部が括れる深鉢形土器の胴部破片で、18は上下の対弧文を、19は懸垂文をそれぞれ沈線文で施文するものである。21は開く鉢状の無文土器で、20は口縁部が大きく開く鉢形土器であり、内面に間隔の狭い3本沈線文を巡らせており、円形モチーフを取り囲んで施文する。沈線文間には細かい刻みが施されている。堀之内Ⅱ式から加曽利B式への移行期の土器である。

d　包含層

3で述べたように、調査区内には遺構を覆う形で包含層が形成されていた。その包含層中からも



第54図　第32号土坑出土遺物

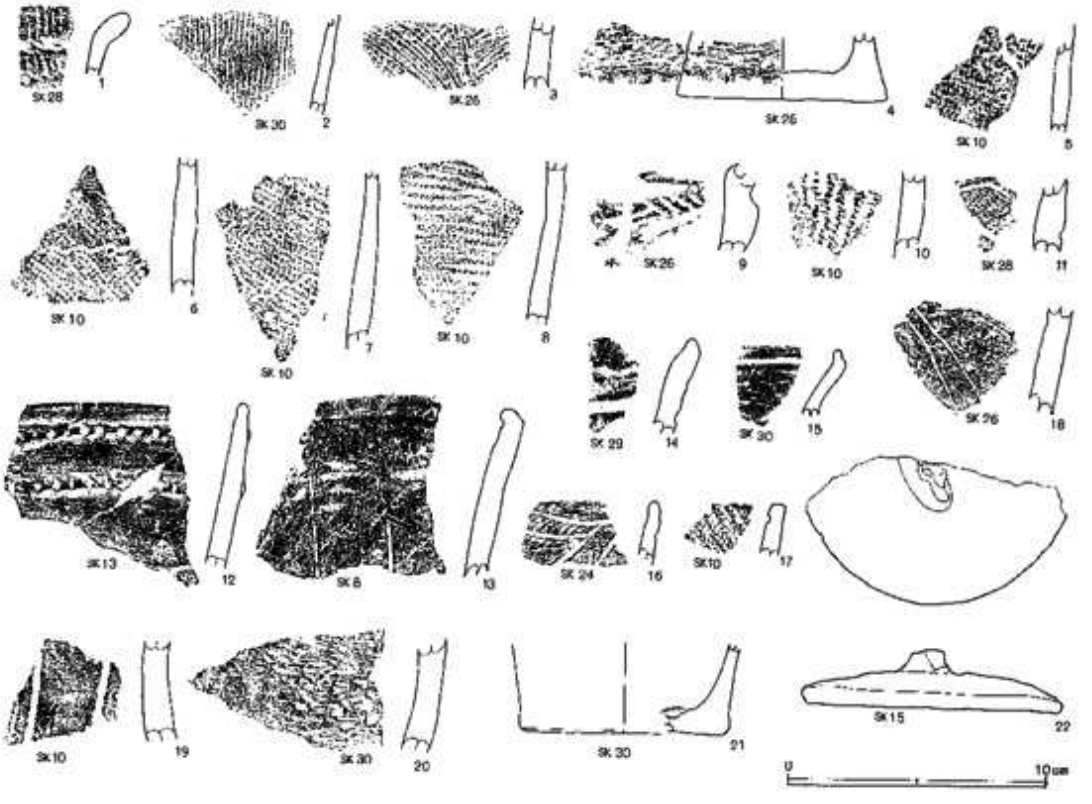
多くの縄文土器、石器等が出土している。(第55～68図)

第Ⅰ群土器 (第56図～第59図)

撚糸文系土器群を一括する。

第1類 (第53図1、第56図1～18)

口唇部文様帯、口縁部文様帯、胴部文様帯の3帯構成からなる所謂第Ⅰ様式の井草Ⅰ式土器を一括する。1は肥厚する丸頭状口唇部が外反し、口縁部が立つ器形を呈する。口唇部への縄文施文は上端面と外端面の2段施文を基本とするが、部分的には3段に施文する箇所もある。口唇部は丸頭状口唇部の外端部に隆帯状に張り付けて肥厚させるもので、外端部が突出した形状を呈する。そして、肥厚口唇部の下端部分を指頭で押圧しながら整形するため、縄文施文後もこの凹凸が残っている。口縁部文様帯は35mm程の幅を持って施文されており、縄文は横位施文される。胴部は縦走縄文を施文する。縄文の原体は全て単節RLで、施文の順序は胴部→口縁部→口唇部上端→口唇部外端の順となる。胴部は口縁部から縦走縄文を施文しており、口縁部はその上から縦走縄文を消す様に斜行縄文を施文する。そのため、下の縦走縄文が微かに残っているのが観察される。胎土は石英、長石類の細砂粒と白色粒子を多目に含むが緻密な胎土であり、焼成も良く堅緻な土器である。色調は赤褐色を呈する。4は1と同一個体である。



第55図　土坑出土の遺物

2は1と非常に類似する器形を呈するが、若干器壁が薄い様である。口端部を欠損するが、1と同様な施文構成をとるものと思われる。4は口唇部の外端部への突出が強くなるもので、口縁部の縄文施文が口唇部下端までにはかかっていない。口唇部は明瞭に3段施文されており、外端部施文が最後の施文の様である。明赤褐色を呈し、白色粒子を中心とした細砂粒を多く含む。

5、6は口唇部下の整形がやや強く、指頭整形痕が明瞭に残る破片である。6は1と同様に口縁部文様帯部分にまで縦走縄文を施し、その後口縁部文様帯内に斜行縄文を施文する。色調が橙褐色と明るくなる。7も口縁部にまで縦走縄文を施文した後、口縁部に斜行縄文を施文している。

8は口縁部の外反がやや強いものであるが、口端部上端ががじりによって削り取られている。口唇部の突出はやや強くなるが、口端部への縄文施文が口唇部下端までに及んでいる。口縁部文様帯幅が25mm程となり、1と比較してやや幅狭となる。石英、長石類の細砂粒を多く含むが堅緻な土器であり、暗赤褐色を呈する。

9、10は肥厚する口唇部がそのまま外折する様な器形を呈する。従って、口唇部の範囲も広がり、特に口唇部外端面の範囲が広がり、縄文施文範囲がやや広がる傾向にある。口縁部の縄文が口端部にまでかかりながら施文されている。10も同様であり、口唇部下に整形時の指頭圧痕が明瞭に残るが、口端部施文を幅広く施文している。原体は太細の撚り合わせの単節RLであり、付加縄文風となる。

11～16、18は口唇の外端部下に縄文施文が認められるものであるが、この縄文は外端部施文より前に施文されており、口縁部への縄文施文時に口唇部にまで横位施文の縄文を施しているものと判断される。その点では8の口端部施文とは識別される。11、18において顕著に認められる。

17は口唇部が捲れる様に大きく外反する器形を呈し、口唇部や口縁部に横走する縄文を施文している。一見すると撚糸文の様であるが、単節LRを斜位施文する。

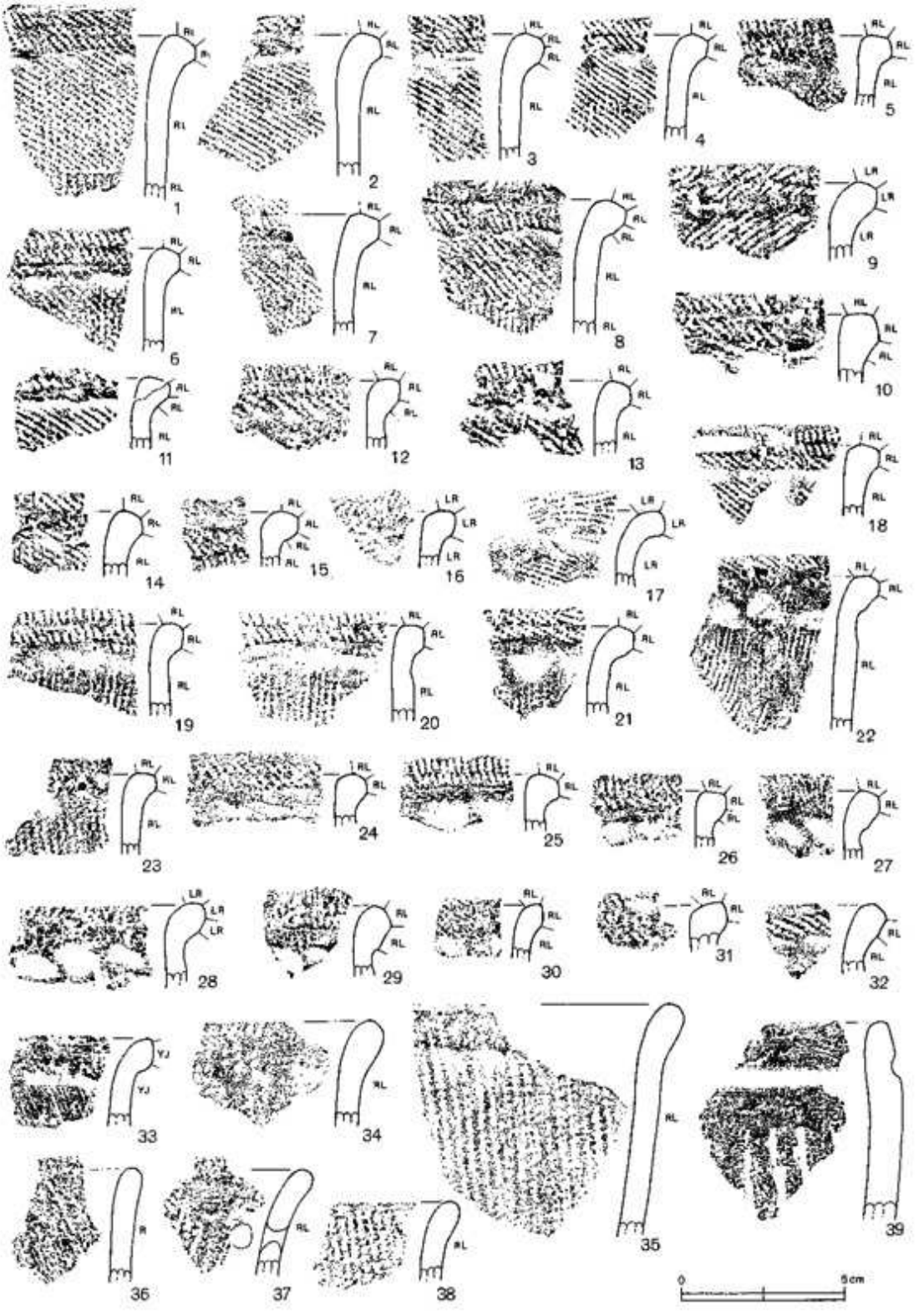
第2類（第53図2、第55図1、第56図19～33）

口唇部文様帯と胴部文様帯の2帯構成をとる所謂第Ⅱ様式の土器群を一括する。口唇部形態は第1類と殆ど同様であるが、口唇部下の指頭整形痕が強く明瞭に残るものが多い。19、20は同一個体であり、推定復原図が第53図2である。口唇部の作り及び施文は第1類と同様である。口唇部から口縁部へ至る器内面のラインがやや直立する点が若干異なる。口唇部下端は整形後軽く撫でられているが、指頭整形痕は明瞭に残る。胴部の縄文は口端部にかからせずに施文している。原体は単節RLで、胎土は細砂粒を余り含まず緻密であり、橙褐色を呈する。

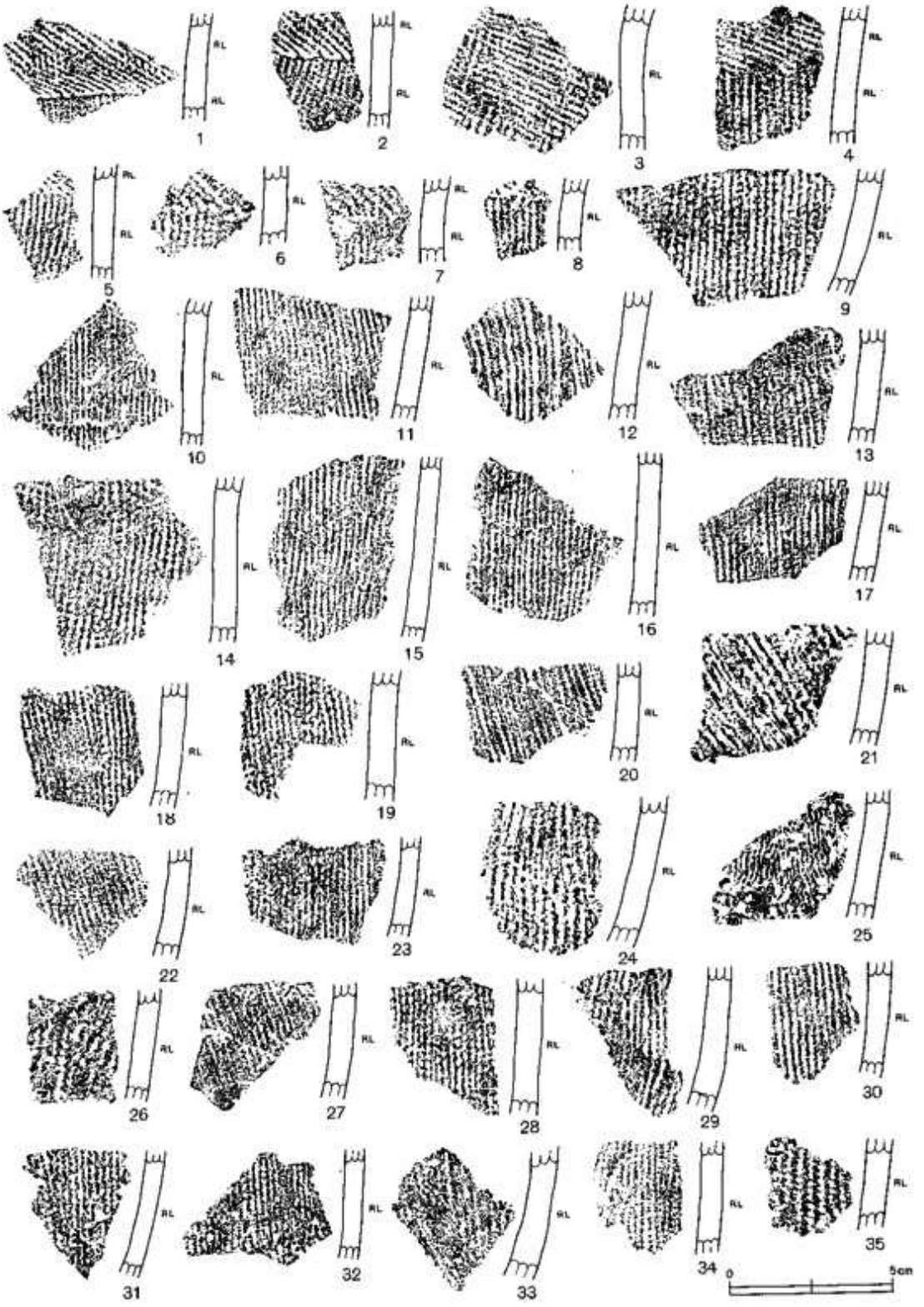
21は口唇部下に指頭圧痕を残すもので、口唇部は大きく外反する。指頭圧痕は右手の親指の先端部であり、爪の跡まで明瞭に残っている。右の親指で口唇下を押え、左手の人指し指と親指で口唇を押しながら成形するものと思われ、右から左へ順次成形して行ったものと思われる。成形後撫で整形は施されていない様である。

22も同様であるがあまり口唇部が外反しない。口唇部下に指頭圧痕を明瞭に残すが、親指を器面に当てる角度が他のものと異なり、圧痕は円形状を呈する。これは器面に対して、親指の先端の腹を垂直方向に押し当てたための痕跡と思われる。

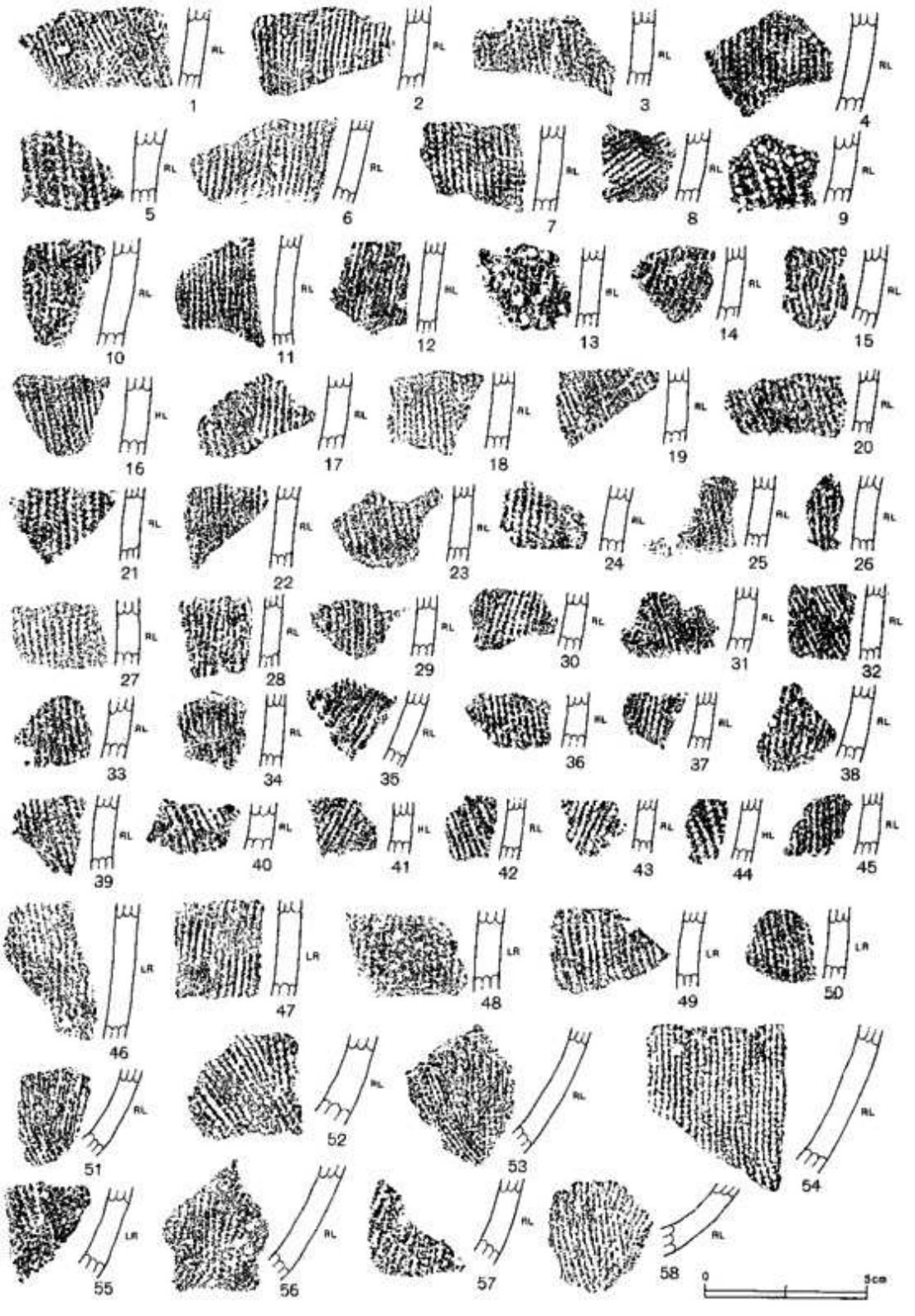
23は口唇部の形態や施文手法が第1類と類似するが、口縁部文様帯を形成しない。24～27はいず



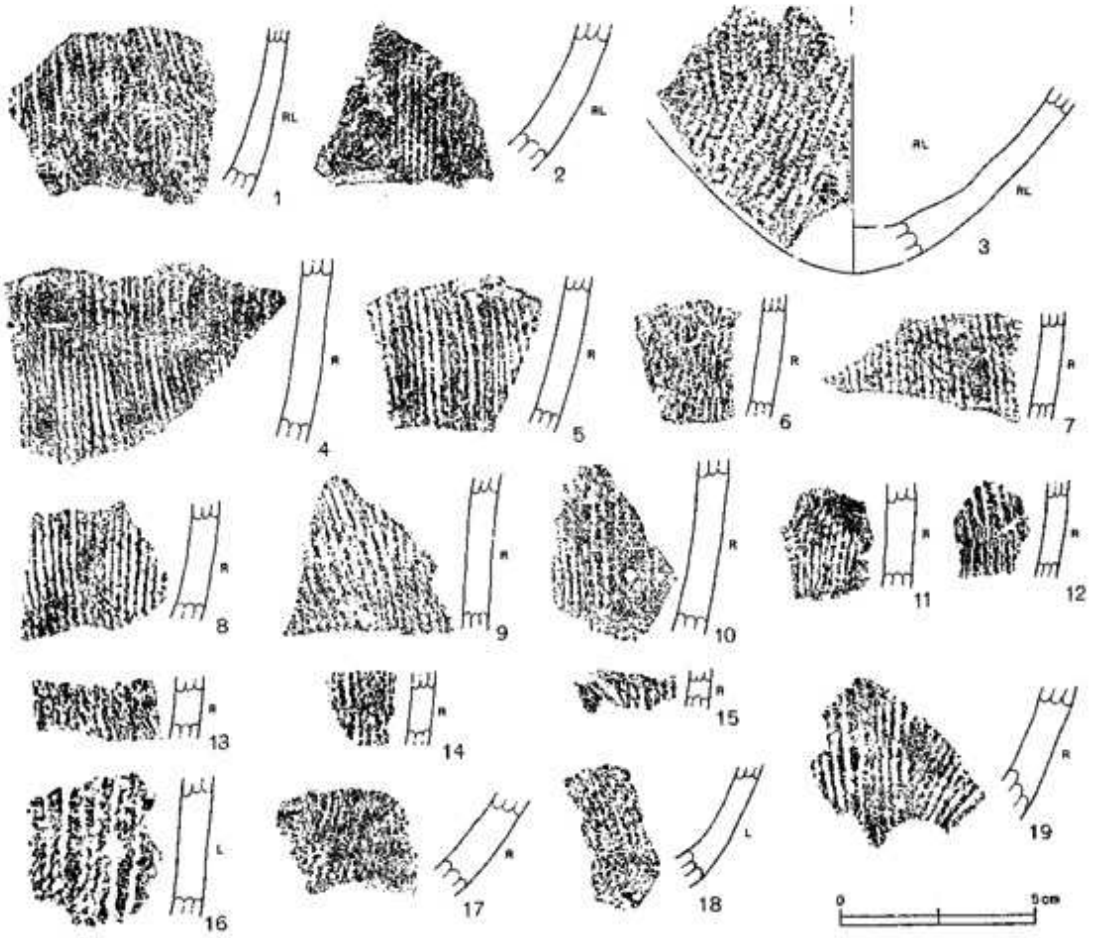
第56図　包含層出土遺物（1）



第57図　包含層出土遺物（２）



第58図　包含層出土遺物（3）



第59図　包含層出土遺物（４）

れも口唇部成形における親指の当て方が21と同様であり、指頭圧痕部分には縄文を施文しない。

28は口唇部が丸頭状に肥厚し、大きく外反する器形を呈する。口唇部下には指頭圧痕が深く明瞭に残されており、単なる成形痕ではなくて、文様の一部の様でさえある。29も同様に指頭圧痕が明瞭である。両者とも口唇部の形状が第１類の９、10に近い。

32は口唇部が肥厚する角頭状を呈し、口唇部上端面のみに縄文を施文している。口唇部下にはやはり指頭圧痕が残る。

33は肥厚する口唇部が外削状を呈し、外端部に横位の条線文を施文するものである。口唇部下にはやはり指頭圧痕を残し、胴部にも条線文を施文する。この条線文は浅く施文されているが、整形の際の擦痕ではなく、絡条体条痕文であると思われる。

第55図１は第28号土壙から出土したもので、やや肥厚する口唇部が外折気味に開く器形を呈する。口唇部下には指頭圧痕が残るが、口唇部直下から縦走縄文を施文している。口唇部にも上面に１段縄文を施文する。原体は単節 RL である。

第３類（第56図34～39）

胴部文様帯のみで構成される所謂第Ⅲ様式の夏島式土器を一括する。34、35は同一個体であり、やや肥厚する口唇部が外折気味に開く器形を呈する。口唇部下には指頭圧痕が微かに残り、縦走縄文を口端部から施文している。胎土は細砂粒や小礫を含むが堅緻であり、暗赤褐色を呈する。縄文原体は単節 RL であるが、器面がまだ柔らかい状態で施文したものと思われ、節の圧痕が不明瞭である。

37～39は殆ど肥厚しない丸頭状口唇部が外反する器形を呈し、口端部から37は撚糸 R を、38、39は単節 RL を施文している。39は口唇部を整形した後に、口端部から縄文を施文するもので、この段階の特徴的な施文法である。

第4類（第56図39）

1点のみ出土しているが、口縁部に沈線文を巡らす土器で、稲荷原式に比定されるものと思われる。内面は荒れているが、器面をよく磨いた後に3本の沈線文を施文している。口縁部がやや内彎して胴部でやや膨らみ尖底部に移行する器形を呈するものと思われる。しかし、堀之内Ⅱ式が変形したものである可能性も残されている。胎土、整形等は堀之内式と異なるため、稲荷原式になる可能性を指摘するに留めたい。

第5類（第55図2、第57図、第58図1～50、第59図4～16）

胴部破片を一括する。第57図、第58図1～50は縄文施文、第59図4～16は撚糸文施文である。

第57図1～8は口縁部文様帯を含む胴部破片で、1、2は口縁部縄文の末端施文が明瞭に残る。1は下に縦走縄文を施文しており、その上に斜行縄文を施文しているのが明瞭である。胴部破片は大半が単節 RL であるが、第58図46～50は単節 LR である。大半は第1類と第2類の胴部破片と思われる。第55図2は第30号土坑から出土したもので、原体は単節 RL である。

第59図4～16は撚糸文施文土器で、撚糸文は比較的細く、密に施文するものである。同一個体の破片が多く、原体は R が圧倒的に多い。口縁部破片では第1類、第2類には撚糸施文土器は存在していないため、確実な位置付けは困難であるが、第3類の胴部破片の可能性が高い。

16はやや太めの撚糸文をやや間隔を開けて施文しており、原体は L である。この破片だけ他のものと異なり、第4類が存在することから、時期の新しいものと思われる。稲荷原式に比定しておきたい。

第6類（第58図51～58、第59図1～3、17～19）

底部破片を一括する。いずれも丸底に近い尖底を呈するものであり、縄文施文のものは原体が RL のみ存在している。撚糸施文土器は17、19が R で、18が L である。

第Ⅱ群土器（第60図1～26）

縄文時代早期の土器群を一括する。

第1類（1～5）

沈線文系土器群を一括する。1は沈線というよりは緩い凹線文状の整形が横位に施されるもので、砂粒が器面に露出している。石英、長石類を多く含み、雲母を少量含む。2は沈線文で横位分割された文様帯内に縦位や斜位の沈線文を施文して、文様帯を重畳するものである。細砂粒を多く

含むが緻密で堅緻な土器であり、裏面整形を丁寧に行う。3は縦位に垂下する沈線文で文様帯を縦位分割し、部分的に横位の短沈線文を施文している。白色粒子、石英、長石類の細砂粒を多く含むが堅緻な土器であり、表面は良く研磨した後に沈線文を施文している。色調は赤褐色を呈する。4は太い沈線文を施文するもので、施文は、器面が柔らかい段階で施されており、鋭さに欠ける。5は胴部が強く括れる器形を呈し、撚糸文状の無節縄文を施文する。原体は判然としないが、0段rの撚糸文の可能性もある。胎土に砂粒、白色粒子を多く含み、暗褐色の粒子も若干含む堅緻な土器で、赤褐色を呈する。いずれも、田戸下層式に比定されよう。

第2類（6～13）

条痕文系土器群の鵜ガ島台式土器を一括する。6は胴部で2段に屈曲する部分であり、Ⅰ文様帯の下端部に相当する。文様は太沈線文で曲線的な区画を施し、区画内に集合太沈線文を充填施文する。区画の交点と沈線文上にランダムに円形竹管による円形刺突文を施文している。内外面とも条痕文は明瞭ではなく、擦痕状の整形を施す。繊維を少量含み、橙褐色を呈する。7～9は2本対の平行沈線文で文様を区画し、区画内に集合太沈線文を充填施文する。区画の交点には円形竹管文を施文する。10はⅡ文様帯部分と思われ、屈曲部で文様帯が分割されている。11は円形竹管文を施文する破片である。12、13は文様は施文されないが、口唇部が内削状を呈し、口唇部上面に押圧状の刻みを施すものである。

第3類（14～24）

条痕文のみ施文する土器群を一括する。

第1種（14～19）

繊維をあまり含まず比較的堅緻な土器群であり、細かな条痕文を施文する土器群を一括する。第2類の鵜ガ島台式の無文土器、胴部破片に相当するものと思われる。14は口縁部破片であるが、口唇部が外削状を呈し、外反する。15～18は細かな擦痕状の条痕文を施文するもので、有文土器の胴部破片と思われる。19は比較的条痕文が明瞭であるが、繊維をあまり含まない。

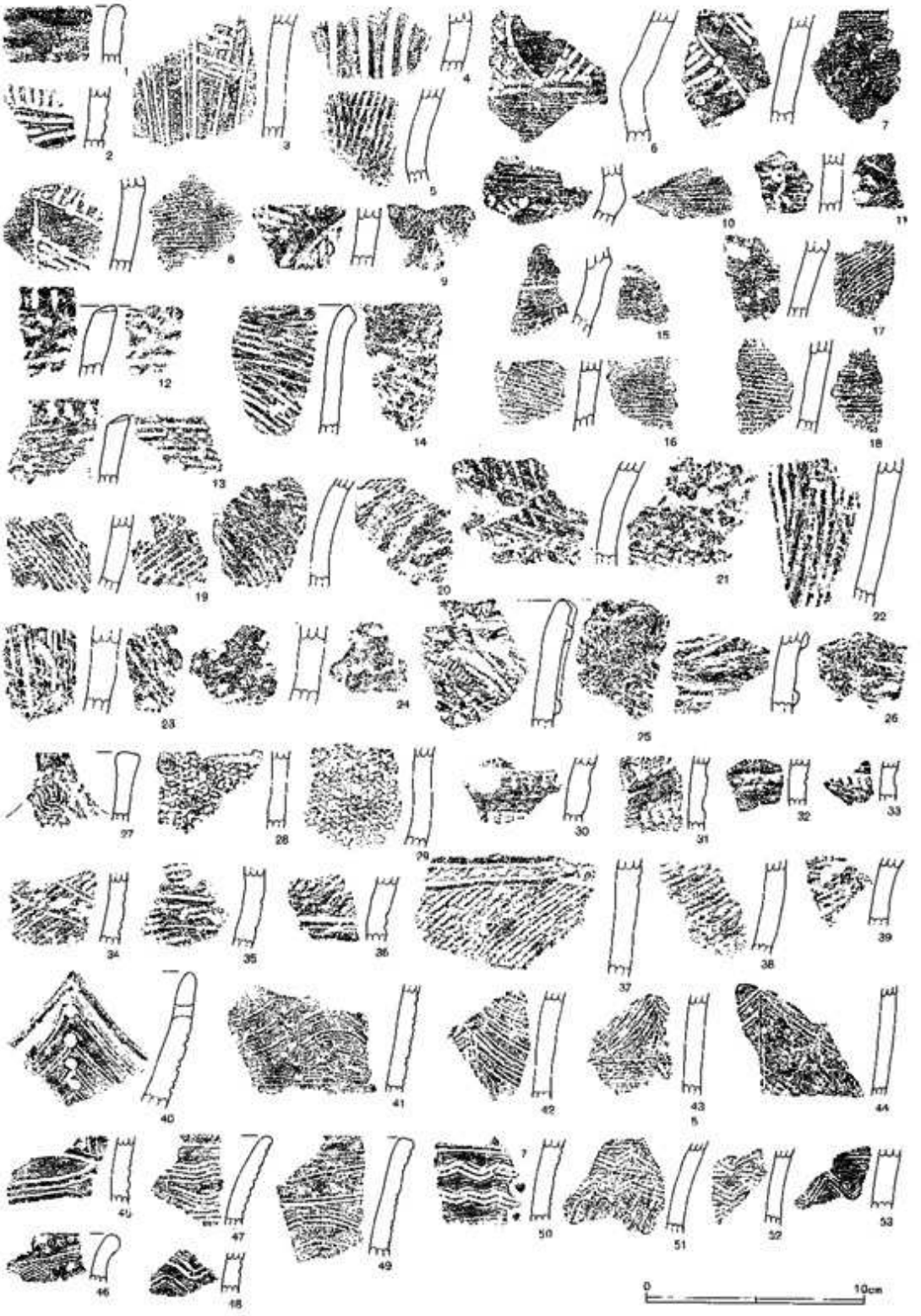
第2種（20～24）

繊維を多く含み、脆弱な土器群を一括する。条痕文は器面がまだ柔らかい段階で施文されており、潰れている部分も多い。繊維を多く含むが、胎土は比較的単純に近い粘土である。第4類の胴部破片の可能性が高い。

第4類（25、26）

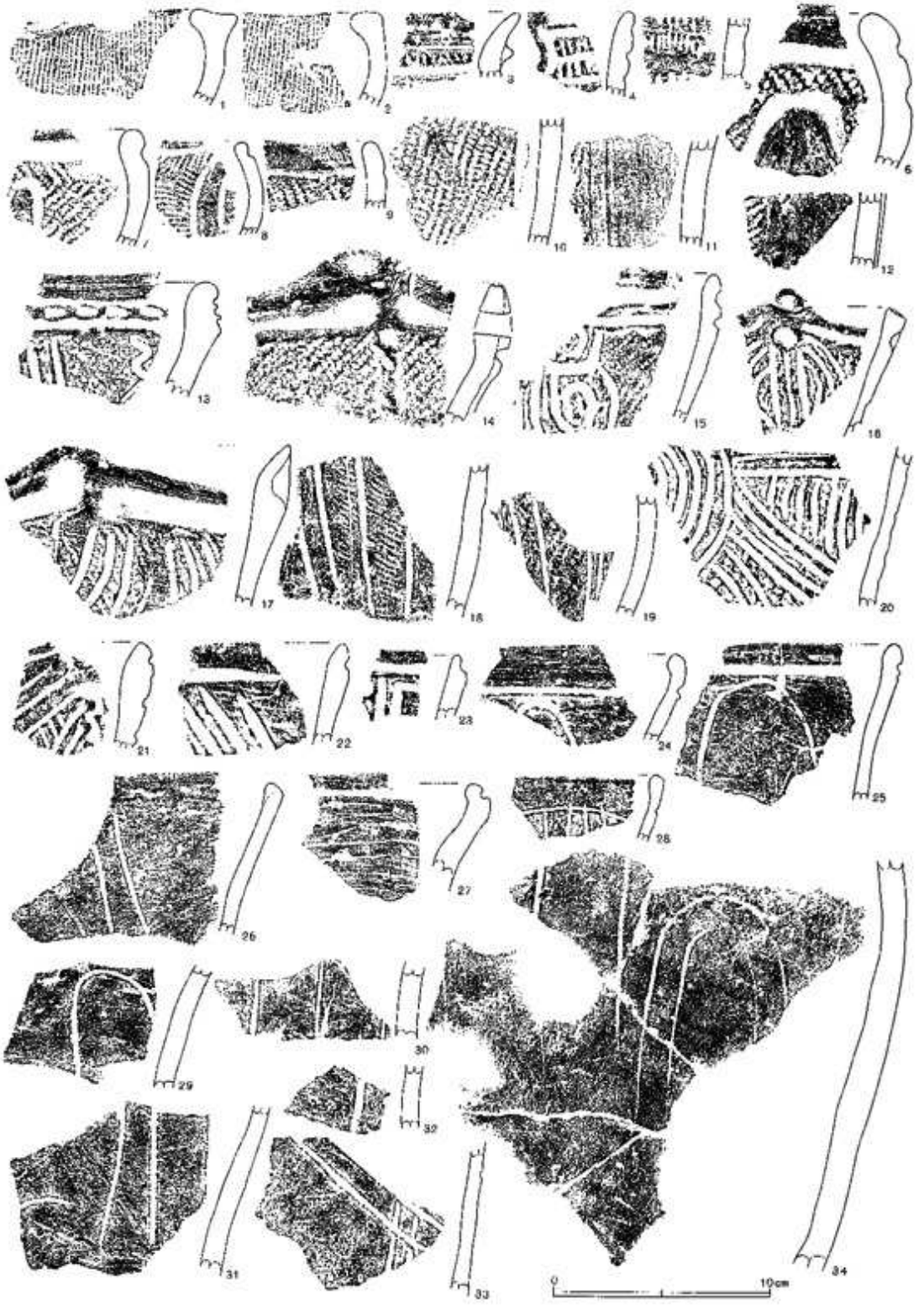
絡条体圧痕文を施文する土器群を一括する。口縁部は背の高い隆帯文で区画され、さらに文様帯内に隆帯文を鋸歯状に配して、隆帯文上に絡条体圧痕文をランダムに施文するものである。繊維を多く含み、脆弱な土器群である。条痕文は内外面に付けられるが、あまり明瞭ではなく、器面の柔らかい段階で施文されている。胎土は細砂粒を若干含むが、単純な粘土に近い。条痕文系土器群終末期に位置付けられるもので、芋山上層式以降の在地の土器群として位置付けられることが多いが、本資料は花積下層式の前段階に位置付けておきたい。

第Ⅲ群土器（第60図27～53、第61図）

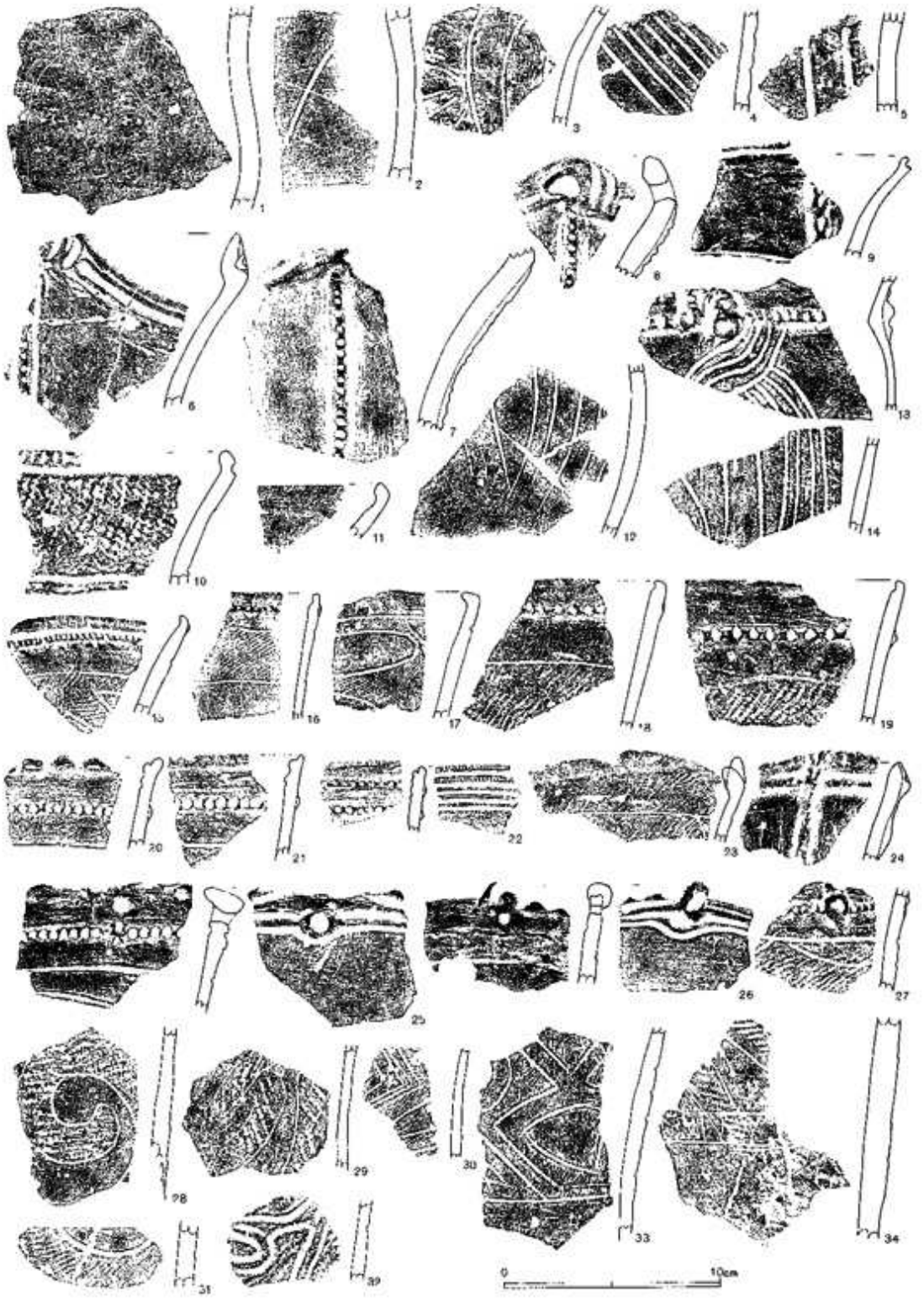


第60図　包含層出土遺物（５）

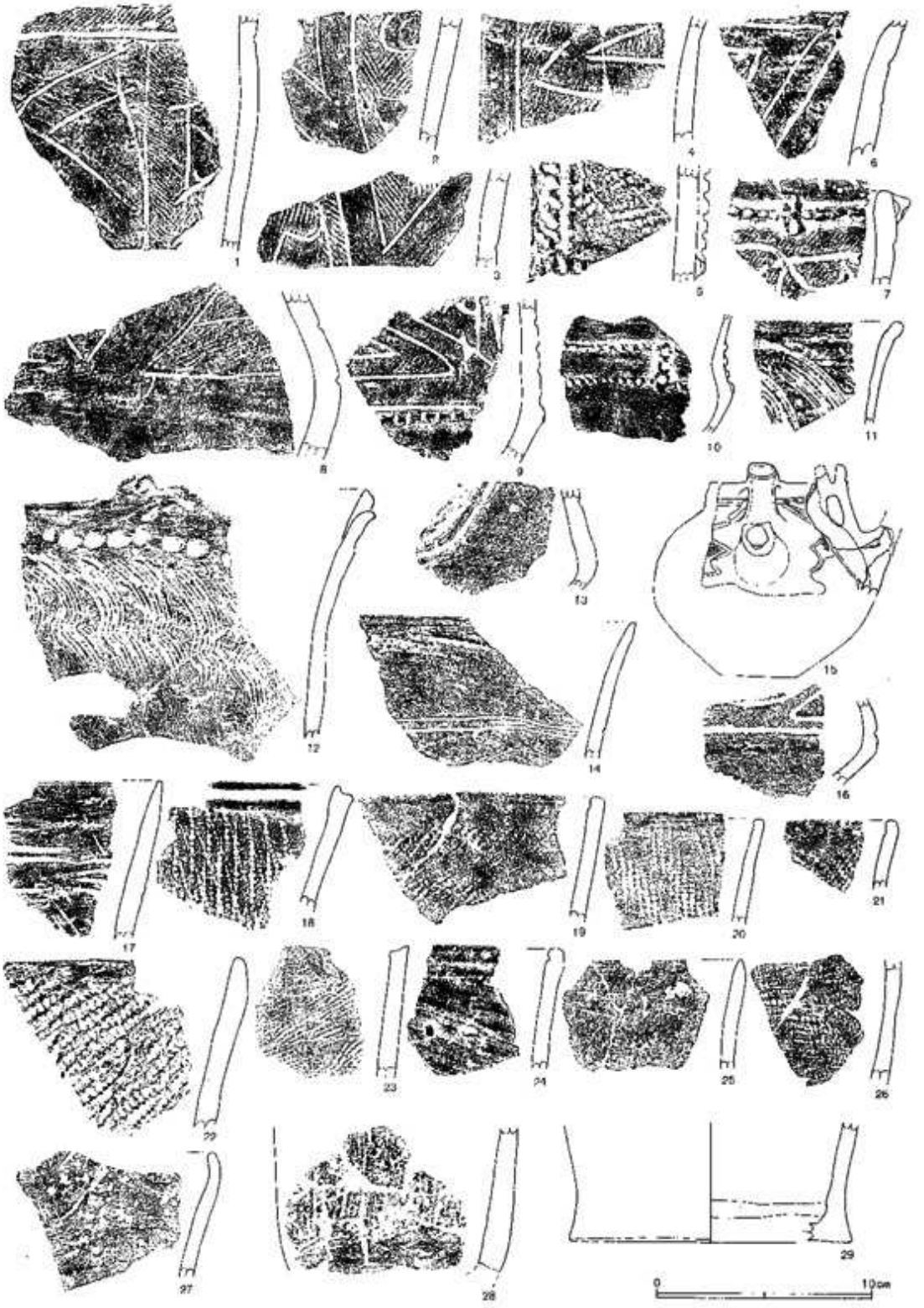
第61図　包含層出土遺物（6）



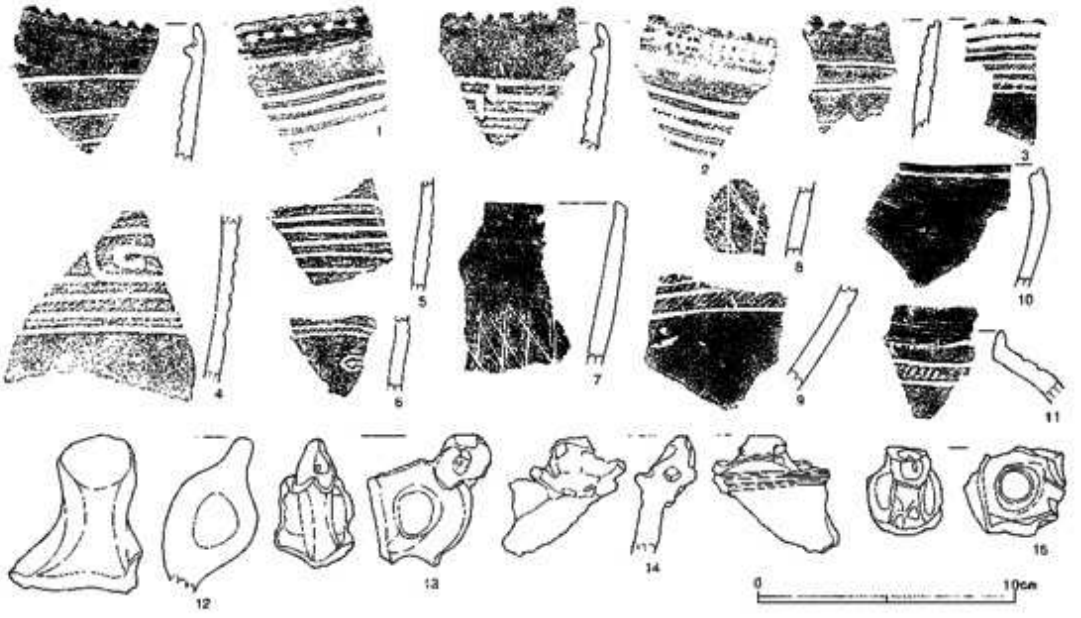
第62図　包含層出土遺物（７）



第63図　包含層出土遺物（８）



第64図　包含層出土遺物（9）



第65図　包含層出土遺物（10）

縄文時代前期の土器群を一括する。

第1類（27～29）

繊維土器である関山式土器を一括する。27は小波状口縁を呈し、波状部に櫛歯状工具によるコンパス文を施文している。地文に単節LRを施文している。内面は良く研磨されており、繊維を多く含む。28、29は組紐縄文を施文するものであり、同一個体である。いづれも繊維を多く含むが、裏面整形は丁寧に施されている。

第2類（30～39）

繊維を含む黒浜式土器を一括する。30～33は幅広の工具による連続刺突文を施文する土器群である。30はやや間隔を開けて横位に2列施文するもので、文様帯を分帯するものと思われる。31は横位と斜位に施文するため、モチーフを描くものと思われる。繊維を多く含み、裏面整形は第1類程丁寧ではない。34～37は縄文地文の上に半截竹管による平行沈線文を施文するものである。原体は判然としないが、無節Lと思われる。36、37は平行沈線文で、文様帯を分割するものである。いずれも繊維を多く含み、裏面整形は比較的丁寧である。

第3類（第55図3、4、第60図40～53、第61図1～8）

諸磯a式土器を一括する。40～45は肋骨文系の土器群である。40は波状口縁を呈し、波頂部から幅狭の平行沈線文を垂下して文様帯を縦分割し、左右に肋骨文を施文する。肋骨文と分割線の交点上に円形刺突文を施文する。施文順位は縦位分割線→肋骨文→円形刺突文の順である。41は3本単位の平行沈線文で肋骨文を描出するもので、40と同じである。肋骨文は左右で弧が逆となる。42、43は半截竹管の平行沈線文を重ねて施文するものである。45は肋骨文が木葉状を呈する。44は「米」状文系のモチーフを平行沈線文で施文するものであり、薄身の堅緻な土器である。

46～53は平口縁が朝顔状に大きく開く器形を呈し、横位の平行沈線文間に波状文を施文する土器群である。46、47は口縁部で、櫛歯状の条線文で幅狭に区画し、区画内に同種の条線文で鋸歯状文を施文するものである。49は平行沈線文間がやや広く、波状文も大柄となる。50は平行沈線文区画1帯の中に波状文を2段に施文するもので、円形竹管文列が垂下する。51は文様帯の下端部分で、波状文を最下段に施文している。

第61図1は単節RL縄文地文上に、円形竹管文列を垂下するもので、暗赤褐色を呈する。

2～8は口縁部が朝顔状に開く器形を呈し、口縁部に幅狭な無文帯を区画する土器群である。2は丸頭状の口唇部が開き、幅狭な平行沈線文の上に刺突文を施した爪形文で、幅狭な口縁部文様帯を区画している。3は先細り状の口唇部が大きく開く器形を呈し、口唇部からやや間隔を開けて細い爪形文で、口縁部無文帯を区画している。4は角頭状を呈する口唇部がやや内彎気味に開く器形を呈し、口唇部下から爪形文で幅狭な無文帯を区画している。5、6は口縁部が大きく開き、爪形文で無文帯を区画するが、5は区画線下に縄文施文がみられない。7、8は櫛歯状工具の連続刺突文で、口縁部無文帯を区画するものである。

第4類（第61図9～27）

諸磯b式土器を一括する。9、10は沈線文系の土器群である。9は口縁部が強く内彎するキャリパー形を呈し、平行沈線文を重ね施文して口縁部を区画している。口縁部文様帯内には、斜位の沈線文を施文する。10は胴部の破片であり、半截竹管による平行沈線文を縦横に施文する。

11～17は爪形文系の土器群である。11は先端が尖る外削状の口唇部が開く器形を呈し、口唇部下から爪形文で区画を行うものである。爪形文間に棒状工具の刺突文を施文する。12、13、15は同一個体と思われ、幅広の爪形文を施文し、赤褐色を呈する堅緻な土器である。14は隆帯文で文様帯を区画しており、隆帯文上には押圧状の刻みが施されている。16は幅広の爪形文で文様帯を分割しており、胴部には単節縄文LRを施文する。17は地文に薄く縄文を施文して、その上に切り込む様な爪形文を列状に施文する。胎土に小礫、砂粒を多く含み、器面に凹凸を持つ。

18～27は浮線文系の土器群である。18は緩く内彎する口縁部が開き気味に立つ波状縁を呈し、突起を持つ。また、口唇部上にも等間隔で貼付文が付く。浮線文には斜位の刻みが施される。19～22は同一個体であり、口縁部が大きく内彎するキャリパー形を呈する深鉢形土器である。口縁部のモチーフは上下に水平に配された浮線文を斜位または曲線状の浮線文で連結するもので、曲線状のモチーフは釣針状に渦を巻き、先端部を止めるモチーフとなる。23～27は同一個体であり、細く繊細な浮線文を施文する土器である。口縁部が強く内折して胴上半部が大きく開く器形の、波状口縁土器である。浮線文は2～3本を単位として施文し、幅狭な施文帯を多段に区画するものである。浮線文上には細かな刻みを、それぞれ隣接する浮線文で異方向に施している。浮線文間には細かな刺突文列を施文する。地文は単節RL縄文である。器壁は5～6mm前後と薄く、砂粒を多く含まず堅緻な土器であり、器面整形も丁寧である。

第5類（第61図28）

浮島式系統の土器群を一括する。1点のみ出土している。28は貝殻復縁文をロッキング施文しているものと思われるが、施文具は判然としない。板上の工具を使用している可能性もある。ロッキ

ングの末端がやや貝殻と異なる感じを受ける。細砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。

第6類（第61図29、35、51～56）

興津式を一括する。29、35は沈線文の菱形区画文内に縦位の密接する貝殻腹縁文を施文するものである。菱形文のアウトラインを先に施文し、貝殻腹縁文を施文した後、菱形文の内側のラインを最後に施文している。細砂粒、白色粒子を多く含むが、内面に丁寧な整形を施している。

51～56は同一個体と思われるが、53の口縁部が他と同一個体であるかは不明である。胎土は類似する。53は無文の板状の口縁部に押圧を加えて小波状口縁にしている。砂粒を多く含み、暗赤褐色を呈する。54～56は口縁部付近の破片であり、器面を襞状に整形し、三角陰刻文を施している。51、52は胴部破片で、貝殻腹縁を細かくロッキング施文するものである。ロッキングは器面を押し付ける様に施文し、器肉の寄りがみられる。いずれも砂粒を多く含み、器面がザラツクもので特徴的な胎土である。

第7類（第61図30～34、36、37）

諸磯c式土器を一括する。条線文を施文する土器群である。30は口唇部が外側に大きく外反して内削状を呈し、胴部で緩く膨らむ器形で、大きな円形貼付文と棒状貼付文を縦位に施文する。地文には横位の条線文を施文する。31～34は条線文を地文とし、叉状の刺突文を施す貼付文をランダムに施文している。地文の条線文はやや放物線状に彎曲して施文される。36、37は貼付文を持たないもので、横位の条線文で文様帯の上端を区画し、区画線からやや放物線状の条線文を垂下施文するものである。

第8類（第61図38～50）

十三菩提式及び前期最終末の土器群を一括する。38～41は同一個体で、やや太い沈線文を縦位を基本にして施文するもので、部分的に蛇行したり、短沈線文を組み合せたりしている。42は整然とした鋸歯状文を平行沈線文で重複施文しており、一部方向を変えてクランク状に平行沈線文を施文する。両者とも一見異質な土器で、中期初頭に近い段階とも思われるが、前期終末の土器群として位置付けて置きたい。

43～51はミミズ腫れ状の結節浮線文を施文するもので、浮線文が太いものと細いものとに分けられる。43は丸く肥厚する口唇部がやや開きながら立つ器形を呈し、内面に稜を持つ。文様はミミズ腫れ状の結節浮線文を横位に数段施文して区画し、その間に鋸歯状の浮線文を充填施文している。この鋸歯状浮線文は細かく切りながら貼付されるもので、何段にも施文されるものである。同様の構成は48にも見られる。48は地文に単節LR縄文を施文している。44は口縁部がやや内彎する器形を呈し、浮線文を格子目状に施文する。45は口縁部破片で、裏面に稜を持つ。46、47は平行する結節浮線文を水平に施文するものであり、46は地文に単節LRを施文する。

49は口縁部に比較的太い結節浮線文を3段に施文しており、地文に単節LRを施文する。口縁部内面は強く屈曲し稜を持つ。50は口縁部が内彎し、口端部に太い結節浮線文を貼付して口縁部を区画している。両者ともやや器壁が厚いが、太い結節浮線文を施文することや、口縁部内面に稜を持つなど大歳山式に類似する要素を持っている。

第9類（第55図5～8、第61図57～72）

縄文のみ施文される土器群を一括する。57、65～72はS字状結節文がみられ、前期末葉に位置付けられる。他は比較的撚りの硬い縄文を施文しており、大方諸磯式に伴うものと思われる。

第Ⅳ群土器（第55図9～11、第62図1～12）

縄文時代中期の土器群を一括する。1、2は同一個体であり、口縁部が内彎する器形で口唇部上端面が平坦面を形成し、内側に突出する。撚糸Lを密に施文する。3は口縁部が外反し、口縁部に隆帯文が巡り、隆帯文上に刻みを施す。4は沈線文で口縁部を区画し、短沈線文を充填施文する。5は幅広の爪形文を施文する。以上、勝坂式の後半期から終末的な様相を持つ土器群である。

6～12は加曽利E式終末の土器群で、6、7は口縁部に沈線文の波状文を施文するもので、8は楕円状のモチーフになるものと思われる。いずれも、口縁部に一段縄文を横位施文し、以下縦位に充填施文する。原体は6、7がRL、8がLRである。9は口縁部に沈線文を巡らせて、無文帯を区画するもので、単節RLを施文する。10は沈線懸垂文が、11、21は隆起線文の懸垂文が垂下する。6、7、10は加曽利EⅢ式、他は加曽利EⅣ式に比定されよう。

第Ⅴ群土器（第55図12～21、第62図13～34、第63図～第65図）

縄文時代後期の土器群を一括する。

第1類（第62図13～34、第63図、第64図）

堀之内式土器を一括する。大半が堀之内Ⅱ式でもやや新しい段階のものが多いが、堀之内Ⅰ式及び、Ⅱ式最終末の土器群等を含んでいる。13～20は縄文地文の上に沈線文でモチーフを描く土器群である。13は肥厚する口縁部の平行沈線文間に刺突文列を施文し、縦位の懸垂文と蛇行懸垂文を施文する。14は口唇部が肥厚し、口縁部に突起を持ち縁孔が開く。口縁部には円線状の沈線文が巡り、突起から刻みを施した隆帯文が垂下する。両者とも、口縁部の内傾がやや強く、地文に単節LRを施文するもので、堀之内Ⅰ式の新しい段階に位置付けられよう。

15～17は口縁部の内彎が弱くなり胴部で緩く括れる器形を呈する深鉢形土器である。15は口縁部に渦巻文を施文し、16は縦位の懸垂文を中心にした対弧文を施文している。17は14と突起が類似するが、口縁部の内彎度合が緩くなる。16は直線的に開く器形になるものと思われる。18、19は沈線文が垂下するのみで、20は円形モチーフを中心として多条の沈線文で文様を描いている。堀之内Ⅰ式からⅡ式にかけての土器群である。

21～34、第63図1～5は口縁部が内彎して開き、胴部で緩く括れる器形の深鉢形土器で、縄文を施文せず沈線文のみでモチーフを描出する土器群である。21は口唇部が肥厚し、蛇行沈線文が垂下するものである。22、23は口縁部に沈線文を施文し、縦位斜位の沈線文を施文するものである。いずれも堀之内Ⅰ式からⅡ式にかけての土器群と思われる。

24～34、第63図1～5は口縁部が開き胴部で緩く括れて張る器形を呈し、口縁部から胴部にかけて沈線文を垂下したり、上下の対弧文を施文したりする土器群である。4は多条の斜位の沈線文を施文する。

第63図6～14は胴部で強く括れ、無文の上半部が大きく開く器形を呈するものである。6～8は

同一個体で、口縁部が内折し、胴部で強く括れる波状口縁土器である。口縁部に沈線文を巡らせ、波頂部から刻みの付いた隆帯文を垂下する。9、13は同一個体で、胴部の括れ部を隆帯文で区画し、口縁から隆帯文を垂下して、その交点部に8字上の貼付文を付ける。この貼付文を中心にして胴部に対弧文状のモチーフが展開される。12、14も同様の胴部破片である。10は地文に単節LRを施文し、11は無文であるが、胴部で大きく括れるものである。

15～34、第64図1～6は口縁部が胴部から直線的に開く深鉢形土器で、口縁部には隆帯文を付けるものと、付けないものとがある。15、16、18、19は口唇部裏面に沈線文が巡り、17、23は口唇部が内折する。15、16、18、19、24は隆帯文を施文する。17、23は沈線文のみ施文する。

20～22、25、26は口唇部上端面に沈線文を施文するもので、20は口端部外側に貼付文を施文するため口唇部が受け口状となる。堀之内Ⅱ式から加曽利B式への過渡期の土器群である。

胴部破片は三角形を基本とした幾何学的なモチーフを磨消縄文帯で描出するが、渦巻文や曲線モチーフも存在する。

7はやや内彎する口縁部破片で、口端部に隆帯文を施文し、8字状貼付文を付ける。8～10は胴部が屈曲する器形を呈するもので、8は三角形の粗いモチーフ、9は沈線文のみ、10は隆帯文が2本配するのみである。

13、15、16は注口土器で、15は小形であり、注口部を境に左右対称のモチーフが描かれる。

11～14、17～27は口縁部の開く深鉢形土器で文様をモチーフ構成をとらない土器群である。11、12は条線文を施文する深鉢形土器で、12は口縁部に円形の刺突文列が巡る。14は口縁部に横位の沈線文が巡り、17も横位の短沈線文を施文している。18は口唇部上に沈線文を巡らせ、胴部に縦走縄文LRを施文する。19～23は口縁部裏に沈線文を施文し、22は口唇部が外削状を呈する。24、25、27は無文土器で、28、29は底部破片である。

第2類（第65図1～11）

加曽利B式土器を一括する。1～6は口縁部がやや内彎気味に開く深鉢形土器で、口唇部が受け口状を呈するものである。口唇部の沈線文内には刺突文を施し、内面の沈線文間には細かな刻みを施している。2、4の縄文帯にはかぎ状の刻みを施すが、4は先端が渦を巻く。

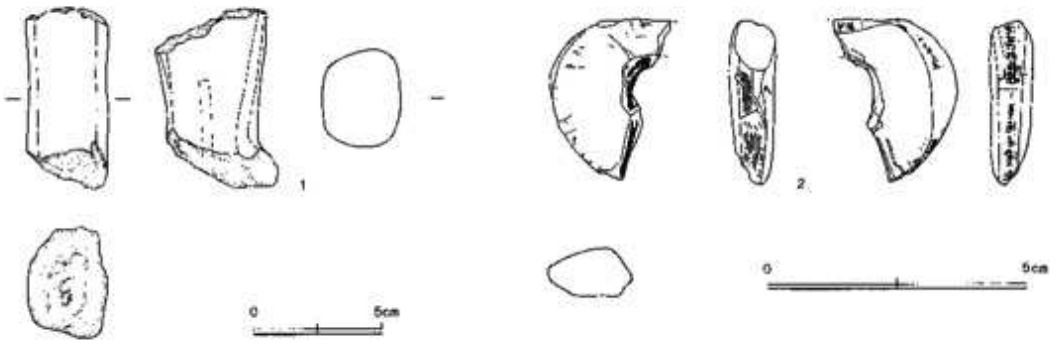
7、8は沈線文の格子目文を施文するもので、7は角頭状口唇部が内彎気味に開く器形を呈する。10は椀形土器、9は浅鉢、11は注口土器と思われる。いずれも器面をよく研磨している。

土製品（第55図22）

蓋である。約半分を欠損するが、摘みの部分も若干現存している。推定径約10cmを測る。堀之内式期の所産と思われる。

土偶（第66図1）

1点のみ出土した。土偶の右足部分と思われる。ほぼ中央部に下からの穿孔が開く。砂粒を多く含むが器面は良く研磨されている。胎土の類似から堀之内式期所産と思われる。



第66図　土器以外の出土遺物

石製品（第66図２）

　　決状耳飾りである。１点のみ出土したが、半分が現存する。上端部が平坦で、肩の張る形を呈する。スリット部分は１方向からの磨り切りが深く施されている。滑石製で、重さ7.5g を測る。縄文時代前期の諸磯式期所産と思われる。

石器（第67図、第68図）

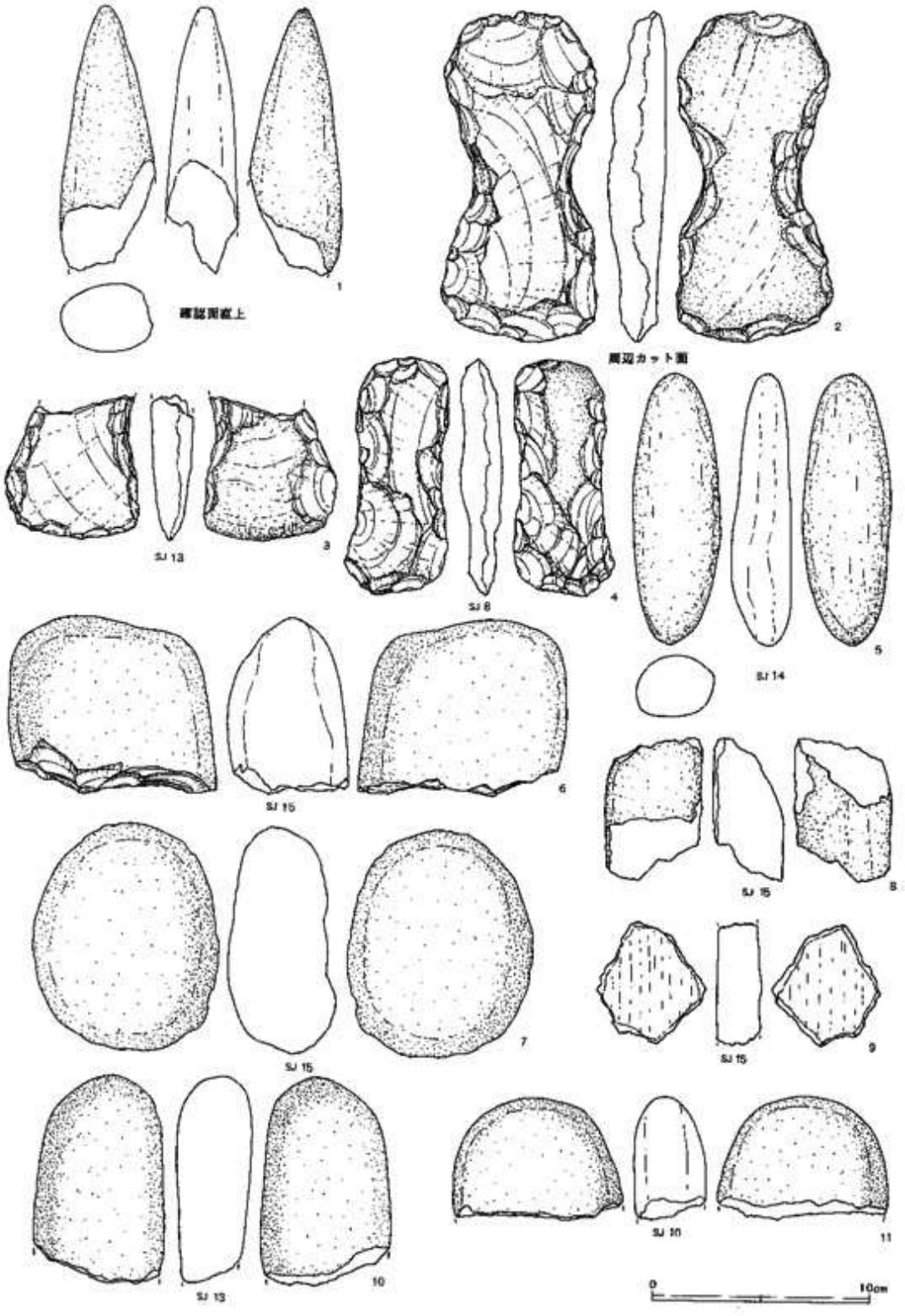
　　土器に比して出土量が少ない。１は刃部を欠損するが、前期の乳棒状磨製石斧である。２－４は打製石斧で、２は中央部がやや抉れるため分銅形石斧であり、後期の所産と思われる。３は頭部を欠損するが、刃部は摩滅している。４は中期の短冊形石斧であり、刃部には摩耗が認められる。６は早期の礫器であり、礫表から垂直に近い刃角を持つ。13はスタンプ形石器で底面は摩耗する。側縁部には調整加工を施さない。６と同様に早期撚糸文期の所産である。５、７、８、10～12、14は磨石であり、９、15、16は石皿である。15、16は扁平礫を使用し、あまり凹面を呈さず、撚糸文期所産の可能性が高い。

第９表　石器一覧表

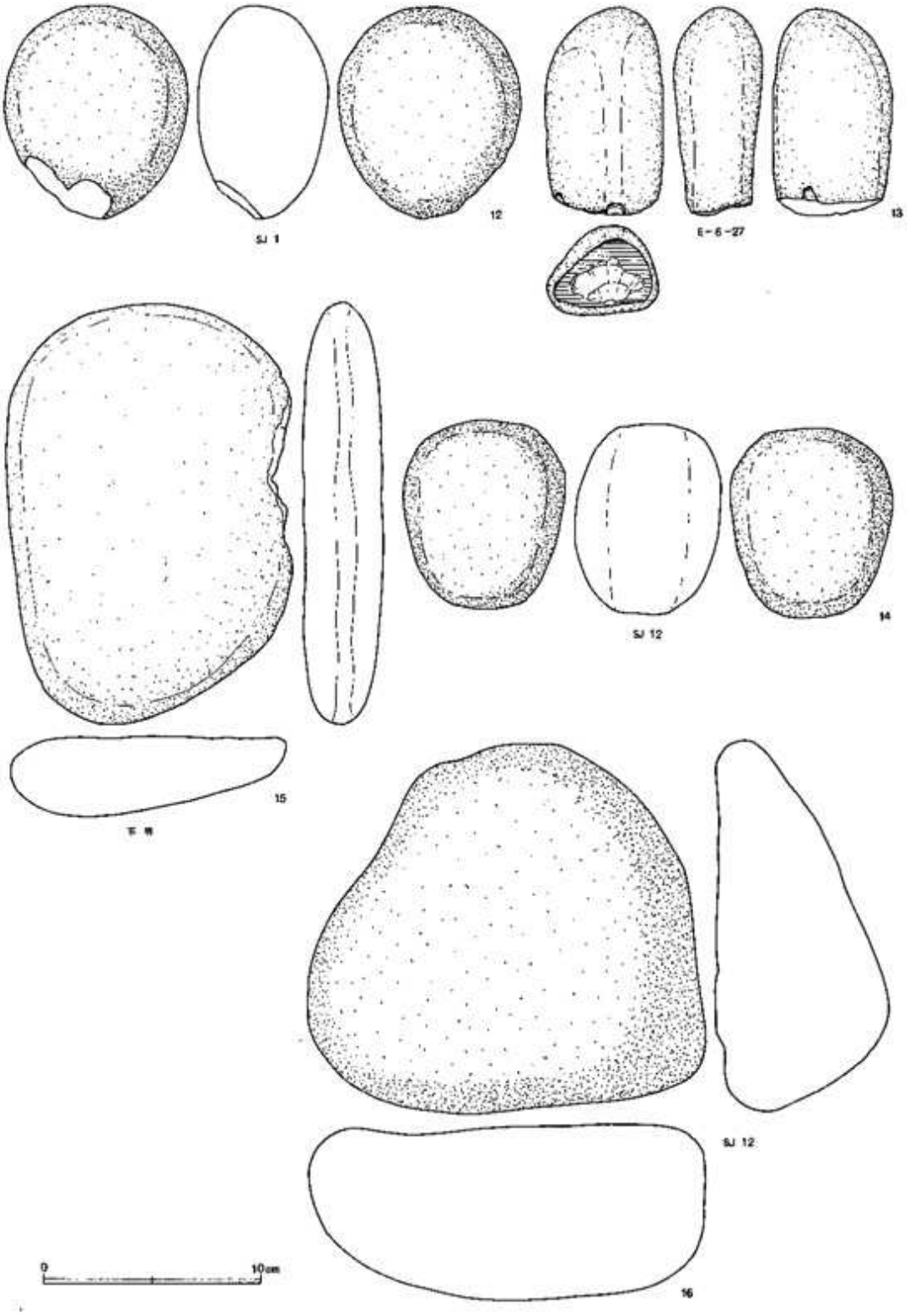
No	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
1	確認面直上	11.8	4.2	3.4	204.8	凝灰岩
2	周辺カット面	15.1	7.2	2.6	354.6	砂岩
3	13号住居跡	6.2	6.0	1.8	91.7	ホルンフェルス
4	８号住居跡	10.6	4.5	1.9	105.6	ホルンフェルス
5	14号住居跡	12.4	4.0	2.8	203.1	凝灰岩
6	15号住居跡	8.1	9.3	5.5	605.2	ホルンフェルス
7	15号住居跡	10.3	8.5	4.5	734.4	チャート
8	15号住居跡	6.1	4.5	3.2	107.8	凝灰岩

No	出土位置	長さ	幅	厚さ	重さ	石材
9	15号住居跡	5.3	4.9	2.1	67.9	閃緑岩
10	13号住居跡	9.5	6.0	3.5	293.8	閃緑岩
11	10号住居跡	5.4	7.8	3.3	191.5	閃緑岩
12	１号住居跡	9.2	8.5	6.0	722.8	砂岩
13	E－６－27	9.5	5.5	4.1	309.5	閃緑岩
14	12号住居跡	8.6	7.5	6.7	649.2	砂岩
15	不明	19.3	13.2	3.7	1382.2	閃緑岩
16	12号住居跡	16.7	18.2	8.0	3228.0	砂岩

（単位：cm，g）



第67図　出土石器実測図（1）



第68図　出土石器実測図（２）

3．縄文時代、古墳時代以外の遺構と遺物

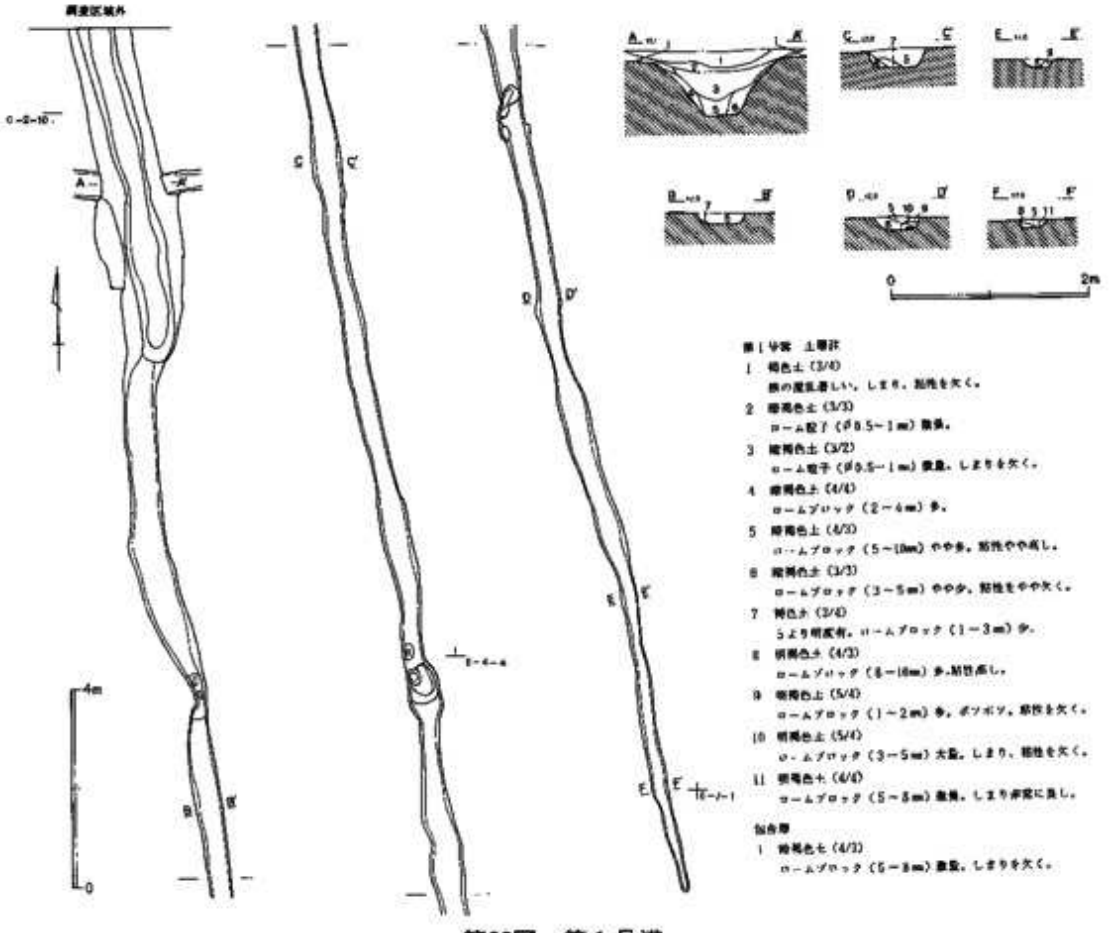
a　溝

概要　本遺跡からは、５条の溝状遺構が検出されている。帰属時期は今一つ明瞭でないが、第1号溝から板石塔婆片と思われる緑泥片岩片が出土していることから、中世以降に掘削されたと考えられる。また、遺構間に重複が見られることから、数時期に分けて掘削された可能性がある。

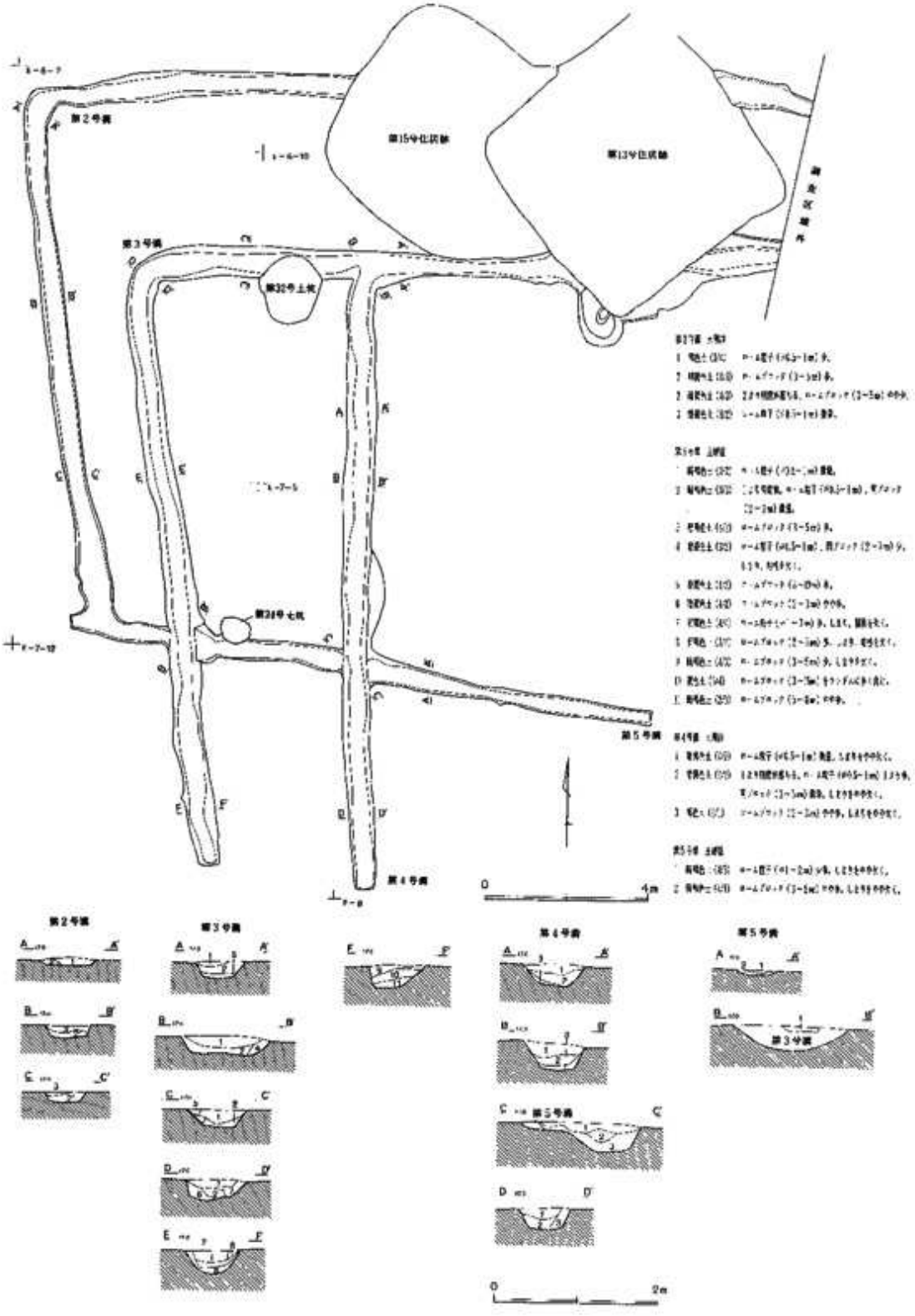
第１号溝（第69図）

第１号溝は、D－２～７グリッドに位置する。北側は調査区域外に伸び、南端はD－７グリッドで立ち上がる。第８・９号住居跡を切っている。走行方向はN－11°－Wを指す。D－２グリッド近辺が最も幅が広く、深い。この位置で幅1.2m、深さ50～70cmを測る。南へ行きD－２－16グリッドで、段をもって浅くなり、深さ10～20cmとなる。幅もそれ以南で徐々に細く、40cm程となる。更に、D－７－５グリッドで幅、深さともになくなり立ち上がる。溝の断面形は概ね逆台形である。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土から構成され、D－２グリッドでは自然堆積の様相を示す。



第69図　第１号溝



第70図　第2～5号溝

それ以南では深度がないため確定的ではないが、所々に大型のロームブロックを混入する土層があり、人為的埋め戻しの可能性もある。

本遺構に伴うと考えられる陶器等の遺物はなく、板石塔婆片と思われる緑泥片岩破片が出土しているのみである。

第2号溝（第70図）

第2号溝は、E～G－6グリッドに位置し、東側は第13・15号住居跡を切り、調査区域外に延びる。南端はE－7－7グリッドで、第5号溝と重複して終わる。両者の先後関係は不明である。第5号溝とともに方形の区画溝になる可能性もある。走行方向は、W－EからN－8°－Wへと屈曲している。幅は平均して40～60cm、深さはコーナー部分が浅くなるがほぼ均一で10cmを測る。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土から構成され、概ね自然堆積の様相を示す。

本遺構に伴うと考えられる遺物は出土していない。

第3号溝（第70図）

第3号溝は、E～G－6～6グリッドに位置し、東側・南側は調査区域外に伸びる。東側で第13・15号住居跡を切っている。第4・5号溝とも重複関係にあり、前者とはF－6－11で、後者とはE－7－9で切り合う。先後関係は第4号溝との関係が判然とせず、第5号溝とでは第5号溝の方が新しい。走行方向は、第2号溝同様、W－EからN－8°－Wへと屈曲する。幅は平均して60～70cm、深さは20～30cmを測る。断面形は大略逆台形で、底面はほぼ平坦である。

覆土は、明褐色土、褐色土、暗褐色土から構成され、一部ブロックを多く含むが概ね自然堆積の様相を示す。

本遺構に伴うと考えられる遺物は、出土していない。

第4号溝（第70図）

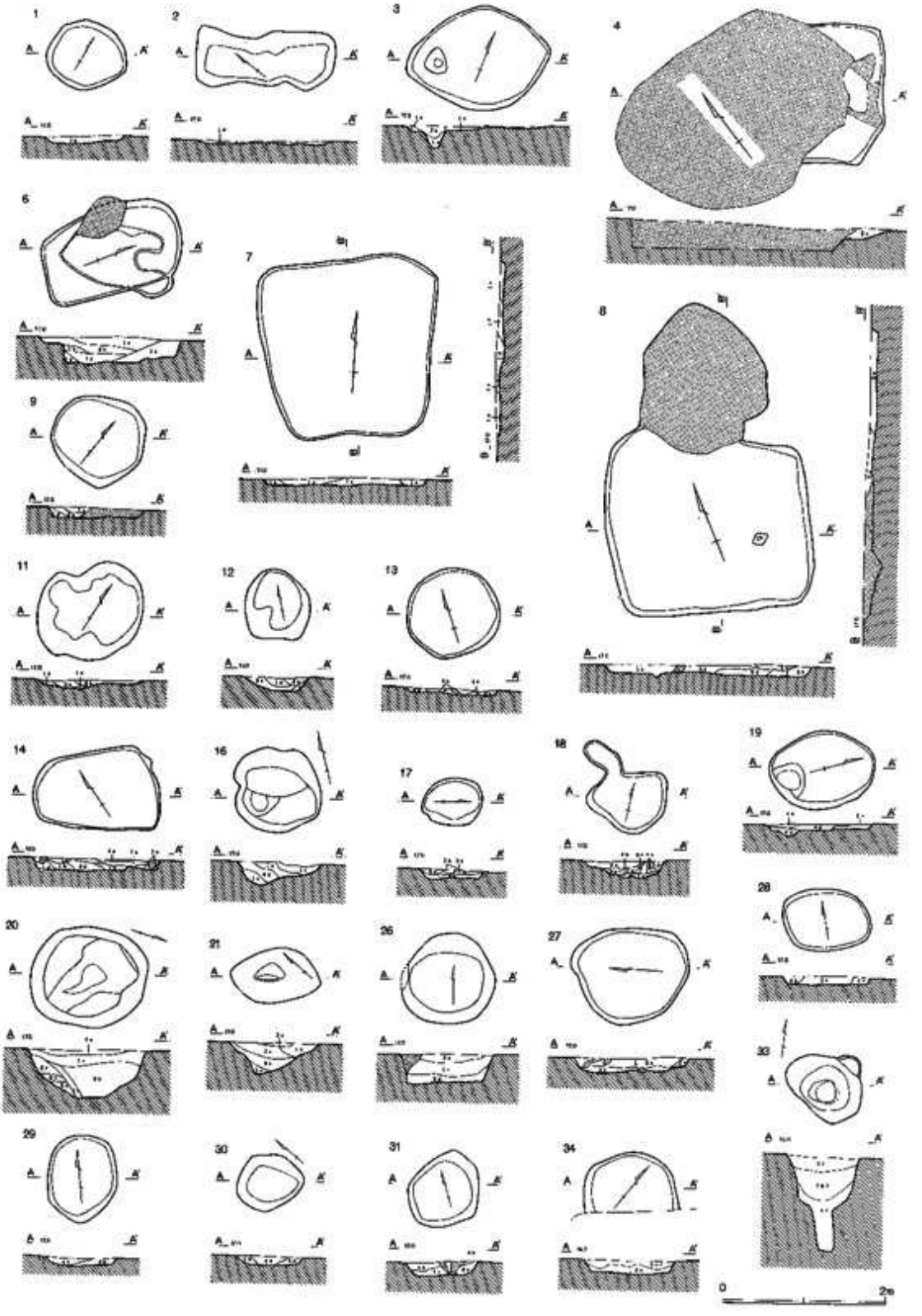
第4号溝は、F－6～8グリッドに位置し、北側はF－6－11で第3号溝に重複して終わり、南側は調査区外に伸びる。第5号溝とF－7－11で重複し、本遺構の方が新しい。走行方向は、N－2°－Wである。幅は平均して60～70cm、深さは20～30cmを測る。断面形は大略逆台形で、底面はほぼ平坦である。

覆土は、褐色土、暗褐色土から構成され、概ね自然堆積の様相を示す。

本遺構に伴うと考えられる遺物は、出土していない。

第5号溝（第70図）

第5号溝は、E・F－7グリッドに位置する。西側はE－7－12で第2号溝に重複して終わり、東側は調査区域外に伸びる。第2号溝とともに方形の区画溝を構成する可能性がある。他遺構との重複関係は、第3号溝とE－7－9で、第4号溝とF－7－11で重複し、前者とは本遺構の方が新



第71図　時期不詳の土坑

第10表　土坑一覧表

No	グリッド	長軸	短軸	深度	軸方位	遺　　物
1	G-3-3	99	86	10	N-57°-E	土師器（第39図２～４）
2	G-3-8	172	67	5	N-38°-W	無
3	F-3-23	172	128	27	N-63°-E	縄文土器片
4	E-3-6	172	85	10	N-38°-E	縄文・土師器
5	欠番					
6	B-2-15	176	123	32	N-5°-W	縄文・土師器
7	F-4-8	228	219	10	N-16°-W	縄文
8	F-4-10	252	242	14	N-72°-E	縄文（第55図13）・土師器
9	D-3-7	115	109	14	N-89°-E	縄文
10	F-5-5	196	155	24	N-47°-E	縄文（第55図５～８・10・17・19）
11	E-4-13	131	115	11	N-47°-E	無
12	E-5-2	85	80	15	N-11°-E	無
13	E-5-3	114	106	8	N-86°-E	縄文（第55図12）
14	E-5-8	155	103	15	N-62°-W	縄文・土師器
15	E-5-13	137	123	22	N-87°-W	縄文後期（第55図22）
16	F-5-11	106	103	28	N-80°-W	無
17	D-5-10	72	59	13	W-E	無
18	F-5-15	127	89	32	N-52°-W	無
19	C-3-18	130	95	16	N-5°-E	無
20	C-3-23	139	122	58	N-3°-E	無
21	D-4-24	112	69	40	N-33°-W	縄文・土師器
22	D-6-6	101	69	9	N-53°-W	土師器
23	欠番					
24	E-7-9	72	60	20	N-77°-W	縄文後期
25	欠番					
26	C-4-19	116	110	36	N-85°-E	縄文（第55図３・４・９・18）・土師器
27	C-4-25	136	118	17	N-20°-W	土師器（第39図１）
28	F-7-17	107	77	10	N-80°-W	縄文（第55図11）・土師器
29	F-8-22	108	85	9	N-7°-E	縄文（第55図14）・土師器
30	F-7-17	85	70	11	N-50°-W	縄文・土師器（第55図２・15・20・21）
31	F-7-13	99	85	17	N-50°-E	土師器
32	E-6-14	170	155	282	N-2°-E	縄文後期
33	F-6-1	100	85	116	N-63°-W	土師器
34	F-6-2	113	73	16	N-47°-E	縄文・土師器
35	欠番					

第76図土層凡例

1　褐色土　　2　暗褐色土　　3　黒褐色土　　4　明褐色土　　5　淡褐色土　　6　黄褐色土

a　ローム粒子・ロームブロックを微量含む　　b　ローム粒子・ロームブロックを少量含む

c　ローム粒子・ロームブロックをやや少なく含む　　d　ローム粒子・ロームブロックをやや多く含む　　e　ローム粒子・ロームブロックを多く含む　　f　炭化物を含む

しく、後者とは本遺構の方が古い。走行方向は、N－81°－W で、第２号溝の北溝とは緩く東に向かって開く関係になっている。幅は平均して40～60cm、深さは5～10cm で、浅い。断面形は舟底形で、底面はほぼ平坦である。

覆土は、明褐色土、暗褐色土から構成され、概ね自然堆積の様相を示す。

本遺構に伴うと考えられる遺物は、出土していない。

b　土　坑（第71図）

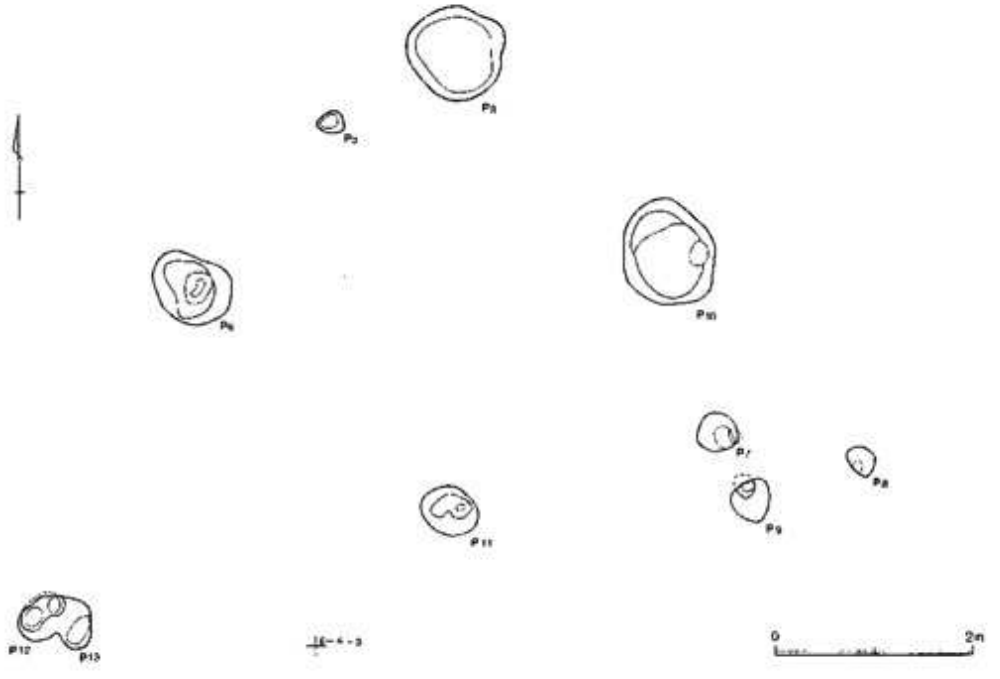
本遺跡からは、31基の土坑が検出されている。そのうち帰属時期の明らかな、第15・22・24・32・33号土坑については、１・２で述べたとおりである。

それ以外に、帰属時期は明らかでないが、第７・８号土坑は他のものに比してかなり大型で、平面形も方形の特異なものであり、注意される。また第33号土坑は、中央が深く掘り込まれる断面形を呈し、15号住居跡内に位置することもあり、注意を要する。

上述のもの以外は、現段階では資料としての評価を保留せざるを得ない。その様相について概括しておくと、平面形は様々で、不整円形、不整楕円形、不整方形を基本とし、それに突起がつくようなものもある。断面形は舟底形、逆台形を基本に、一部をピット状に掘り窪めるものがある。覆土については略号で示した。概ね三角堆積、レンズ状堆積が認められ、自然堆積と思われる。規模は、長軸方向1.0～1.3m、短軸方向80cm ～1.2m、深度10～30cm の範囲に収まるものが最も多く、一般的である。

遺物は、縄文土器、土師器の細片が流れ込みの状態で出土している。（第39～55図）

詳しい位置、規模等については一覧表を参照願いたい。



第72図　ピット群

c　ピット群（第72図）

本遺跡からは、12基のピットが検出されている。これらは、E－3グリッドとF－5グリッドに分布する2群に分けられる。規模等もまちまちでピット相互に関連性があるとは考え難い。

以下に、その概要を表化した。

第11表　ピット一覧表

No	グリッド	長軸	短軸	深度	軸方位	No	グリッド	長軸	短軸	深度	軸方位
1	F-5-18	50	42	13	N-S	8	E-3-25	30	25	41	N-45°-W
2	F-5-19	33	31	11	N-60°-E	9	E-3-25	49	42	64	N-15°-W
3	E-3-13	96	98	20	N-30°-W	10	E-3-19	108	97	43	N-26°-W
4	欠番					11	E-3-23	54	52	25	N-75°-E
5	E-3-13	28	22	18	N-70°-E	12	E-3-21	56	40	42	N-55°-E
6	E-3-17	84	66	23	N-67°-W	13	E-3-21	44	30	37	N-32°-E
7	E-3-20	46	40	45	N-77°-W						

作業風景（4）

d　包含層

1・2で掲出した、古墳時代、縄文時代の遺物以外にも、包含層中から中・近世の陶磁器、砥石等が出土している。(第73図)

1は、甕の口縁部から胴部上半にかけての破片である。推定頸部径28.0cm、残存高7.0cmを測る。胎土は大型の赤色粒子、石英（2～3mm）を含み、焼成は良好である。色調は淡黄橙色(7.5YR3/6)を呈する。無釉の素焼きで、在地産の焼物である。

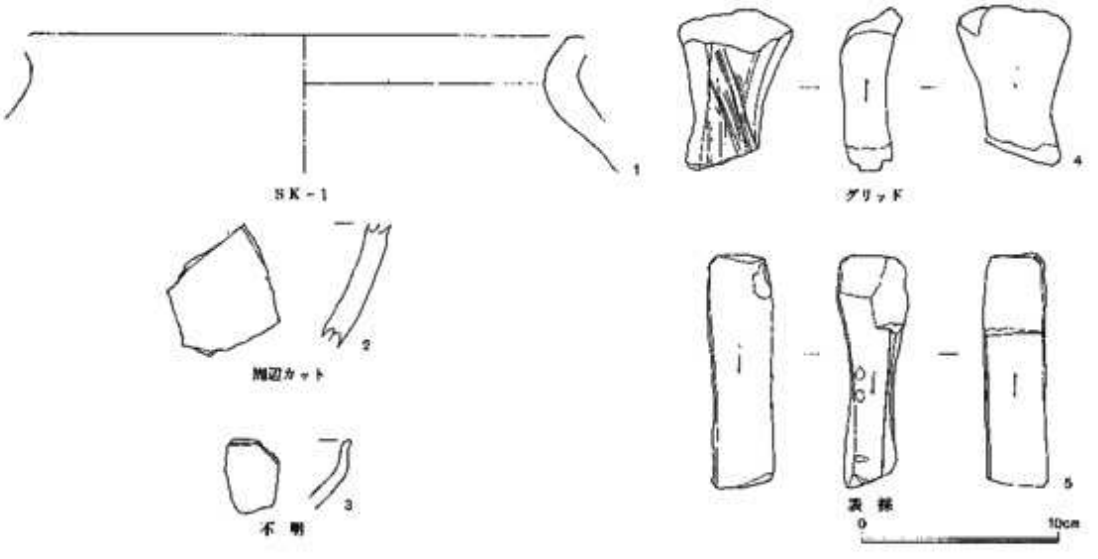
2は、常滑窯系陶器の甕の胴部上半破片と思われる。白色微粒子（0.5mm程度）を多く含む胎土で焼成は良好である。色調は表面が鈍い赤褐色（7.5YR3/5)、裏面が鈍い黄褐色（2.5Y6/4）を呈する。無釉である。

3は、天目茶碗の口縁部から体部上半にかけての破片である。現存する部分には全て天目釉がかかる。胎土は精選され、黒色微粒子（0.1mm）を含むのみである。色調は表面黒（5Y2/1)、裏面くすんだ黄褐色（2.5Y3/3）を呈する。

4・5は、凝灰岩製の砥石である。4は両端部を欠失しており、全体の形状は不明だが、おそらく分銅状を呈するものと思われる。各面ともかなり使い込まれており、滑らかな触感がある。一面のみ、縦方向に中央がへこみ、斜めの使用痕がある。現存長8.1cm、最大幅5.8cm、厚さ2.1cm、重量125.8gを測る。色調は灰白色（5Y8/1）を呈している。

5は両端を欠失している。本来は直方体であったと思われる。全ての面を使用しているが、特に表裏面がよく使われており、滑らかな触感を受ける。左右両面は、製作時の切り出しの際についたと思われる段を有している。現存長11.8cm、幅3.2cm、厚さ2.2cm、重量174.3gを測る。色調は灰白色（2.5Y7/3）を呈している。

これらの他に、龍泉窯系青磁の鎬蓮弁文碗の細片、瀬戸美濃系の陶器片、焙烙等が出土している。

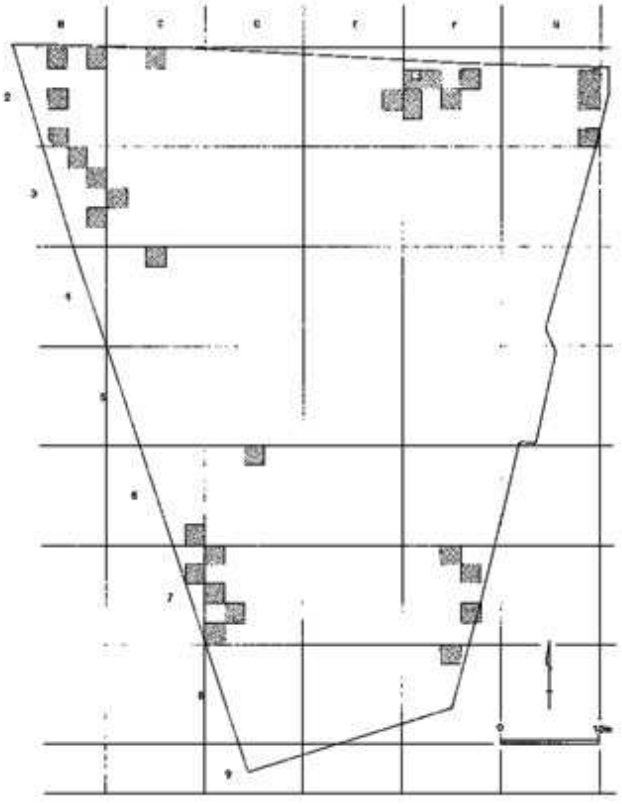


第73図　中・近世の遺物

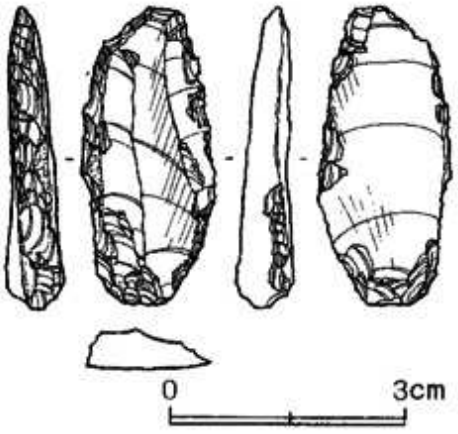
e　旧石器時代の遺物について

今回の調査区の旧状が雑木林であったのは既に何度も述べて来たところだが、その時点の踏査の際に、第75図に掲出したナイフ形石器を一点採集している。そのため、各遺構の調査と平行して、遺物検出に向けて武蔵野ローム第Ⅹ層に比定される第Ⅵ層まで試掘を行ったが、文化層の検出には至らなかった。(第74図)

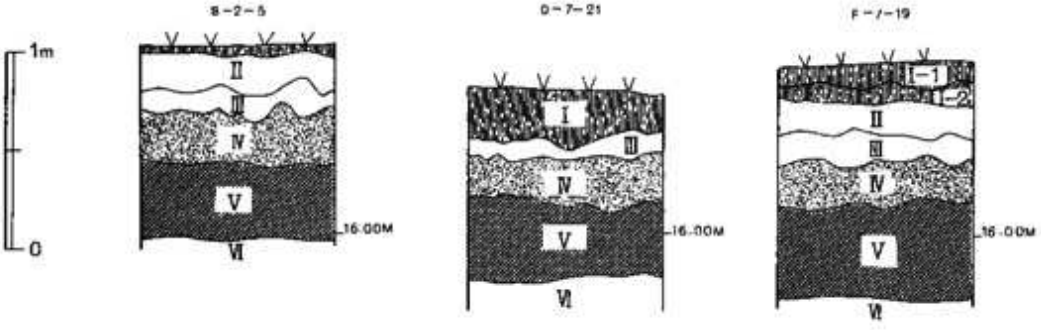
ナイフ形石器は、長さ3.8cm、幅1.7cm、厚さ0.7cm、重量4.50gを測る。石質は黒曜石である。両側縁に後世の欠損がある。



第74図　旧石器時代試掘坑位置図



第75図　表採のナイフ形石器



第76図　東西方向土層対応図

V　分析結果（胎土分析）

X線回折試験及び電子顕微鏡観察

（株）第四紀地質研究所　井上　厳

1　実験条件

1－1　試料

分析に供した試料は第12表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する遺物試料は洗浄し、乾燥したのちに、メノウ乳鉢にて粉砕し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する遺物試料は断面を観察できるように整形し、10m/m の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1－2　X線回折試験

土器胎土に含まれる粘土鉱物及び造岩鉱物の同定はX線回折試験によった。測定には日本電子製 JDX－8020 X線回折装置を用い、次の実験条件で実験した。

Target：Cu、Filter：Ni、Voltage：40Kv、Currrent：30mA、ステップ角度：0.02°、計数時間：0.5SEC。

1－3　電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物及びガラス生成の度合についての観察は電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T－20を用い、倍率は、35，350，750，1500，5000の5段階で行い、写真撮影をした。

35～350倍は胎土の組織、750～5000倍は粘土鉱物及びガラスの生成状態を観察した。

2　実験結果の取扱い

実験結果は第12表胎土性状表に示すとおりである。

第12表右側にはX線回折試験に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の組織が示してあり、左側には、各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物及び造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をm/m単位で測定したものである。

電子顕微鏡によって得られたガラス量とX線回折試験で得られたムライト（Mullite）、クリストバーライト（Cristobalite）等の組織上の組合せとによって焼成ランクを決定した。

2－1　組成分類

1）Mo－Mi－Hb 三角ダイアグラム

第77図に示すように三角ダイアグラムを1～13に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

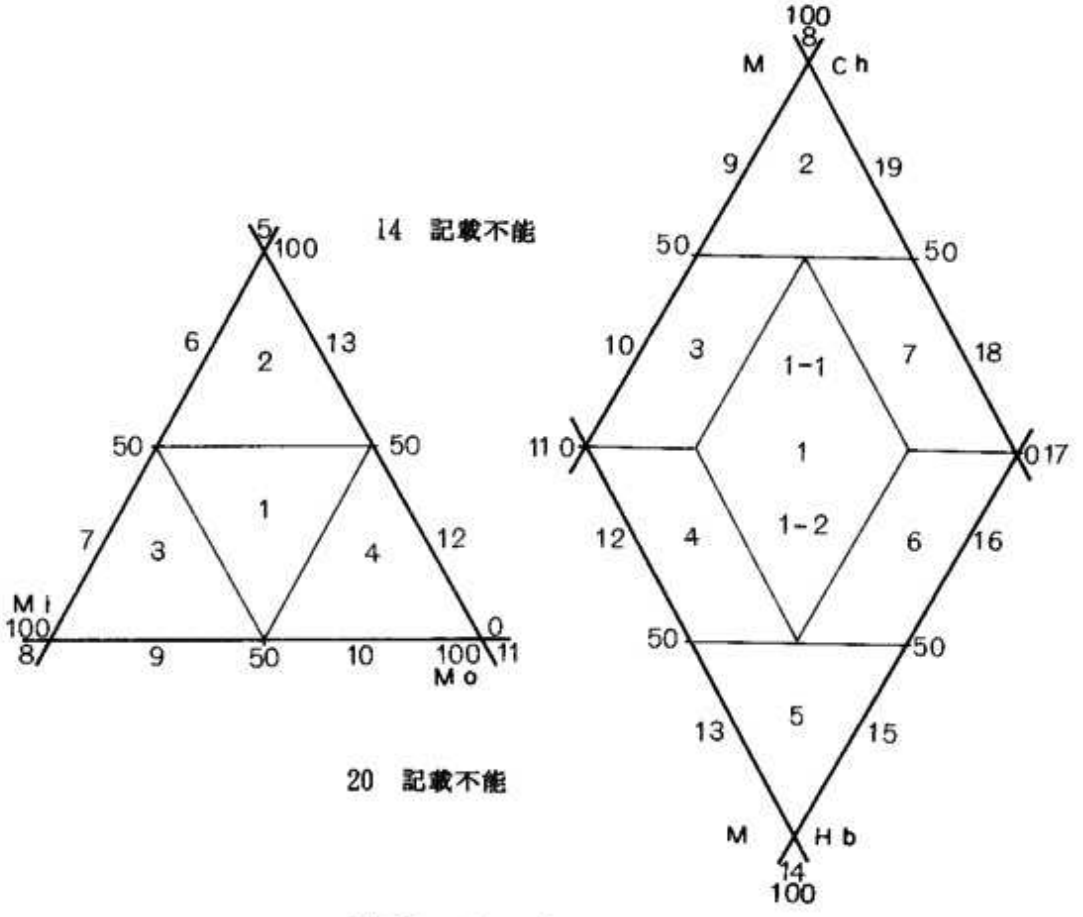
Mo, Mi, Hb の三成分の含まれない胎土は記載不能として14にいれ、別に検討した。三角ダイアグラムはモンモリロナイト（Mont）、雲母類（Mica）、角閃石（Hb）、のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、パーセント（%）で表示する。

モンモリロナイトは Mo/Mo＋Mi＋Hb×100 でパーセントとして求め、同様に Mi, Hb も計算し、三角ダイアグラムに記載する。

三角ダイアグラム内の1～4は Mo, Mi, Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分によりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第77図に示すとおりである。

2）Mo－Ch、Mi－Hb 菱型ダイアグラム



第77図　ダイアグラム位置分類図

第77図に示すように菱型ダイアグラムを1～19に区分し、位置分類を数字で記載した。記載不能は20として別に検討した。

モンモリロナイト（Mont)、雲母類（Mica)、角閃石（Hb)、緑泥石（Ch）のうち、a）3成分以上含まれない、b）Mont, Ch の2成分が含まれない、c）Mi, Hb の2成分が含まれない、の3例がある。

菱型ダイアグラムは Mont－Ch、Mica－Hb の組合せを表示するものである。Mont－Ch、Mica－Hb のそれぞれのX線回折試験のチャートの高さを各々の組合せ毎にパーセントで表すもので、例えば、Mo／Mo＋Ch×100と計算し、Mi, Hb, Ch も各々同様に計算し、記載する。

菱型ダイアグラム内にある1～7は Mo, Mi, Hb, Ch の4成分を含み、各辺は Mo, Mi, Hb, Ch のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。

位置分類についての基本原則は第77図に示すとおりである。

2－2　焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

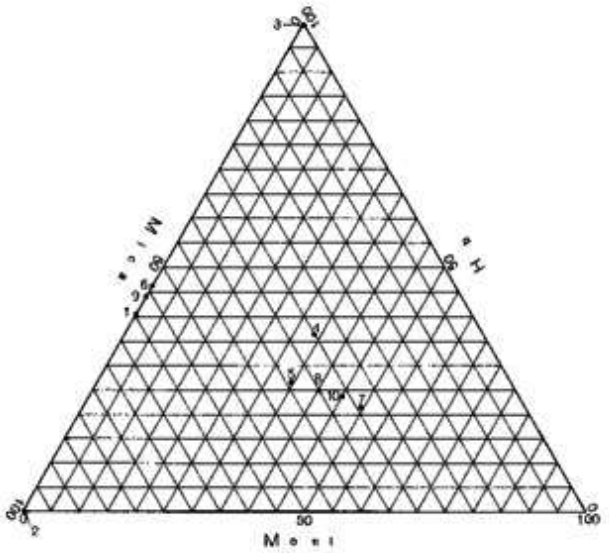
ムライト（Mullite）は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト（Cristobalite）はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成する。

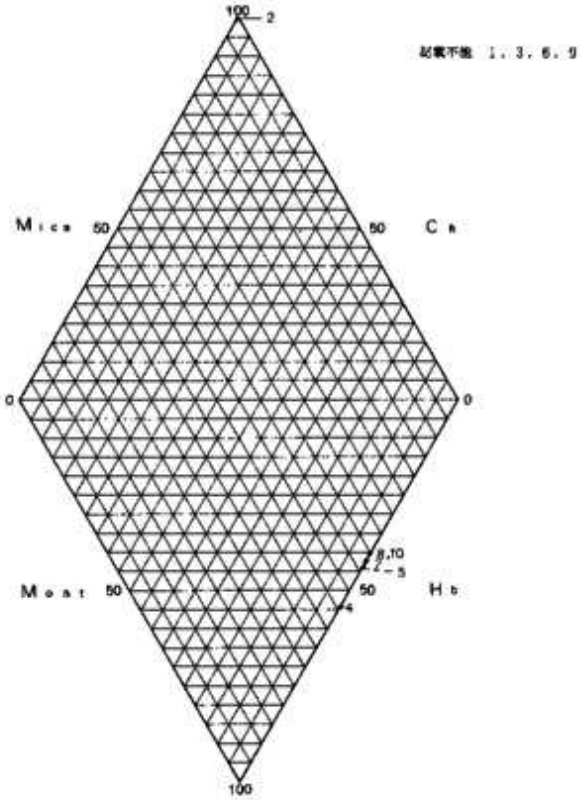
これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

a）焼成ランクⅠ：ムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広く、ガラスは発砲している。
b）焼成ランクⅡ：ムライトとクリストバーライトが共存し、ガラスは短冊状になり、面積は狭くなる。
c）焼成ランクⅢ：ガラスの中にクリストバーライトが生成し、ガラスの単位面積が狭く、葉状断面をし、ガラスのつながりに欠ける。
d）焼成ランクⅣ：ガラスのみが生成し、原土（素地土）の組織をかなり残している。ガラスは微小な葉状を呈する。
e）焼成ランクⅤ：原土に近い組織を有し、ガラスは殆んどできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則であるが、胎土の材料、すなわち、胎土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバーライトなどの組合せといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第12表の右端の備考に理由を記した。

2－3　タイプ分類





第78図　Mo—Mi—Ch 三角ダイアグラム（上段）
Mo—Ch, Mi—Hb 菱型ダイアグラム（下段）

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムの位置分類による組合せによって行った。同じ組成を持った土器胎土は、位置分類の数字組合せも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイアグラムの位置分類における数字の小さいものの組合せから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組合せのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば、三角ダイアグラムの1と菱型ダイアグラムの1の組合せはA、三角ダイアグラムの2と菱型ダイアグラムの15はBという具合いにである。なお、タイプ分類のA, B, C, などは便宜上つけたものであり、今後試料数の増加にともなって統一した分類名称を与える考えである。

3　実験結果

3－1　タイプ分類

狐塚遺跡出土土器の胎土分析は第12表胎土性状表に示すように10個行った。土器胎土は第1表に示すように、三角ダイアグラム、菱型ダイアグラムによる位置分類、焼成ランクに基づいてA～Eの5タイプに分類された。Bタイプは4個検出され最も多いタイプである。ついでDタイプの3個、他は各々1個ずつである。

電子顕微鏡によるガラスの分析では中粒のガラスが生成した焼成ランクがⅢのものがほとんどで、中～粗粒のガラスが生成した焼成ランクがⅡ～Ⅲのものは狐塚－3だけである。

狐塚遺跡の土器と既に分析が済んでいる御伊勢原、女堀、札ノ辻、代正寺、広面の各遺跡の胎土の分析結果との比較対比を行った。

Aタイプ…狐塚－4

Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch 1成分にかける。組成的にはBタイプと類似するが検出強度が異なるために、位置分類が違っている。

Bタイプ…狐塚－5，7，8，10

Mont, Mica, Hbの3成分を含み、Ch 1成分にかける。個体数は4個で、最も多く、個体数の多さから判断して、在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

Cタイプ…狐塚－3

Hb成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分にかける。

Dタイプ…狐塚－1，6，9

Mica, Hbの2成分を含み、Mont, Chの2成分にかける。個体数は3個で、Bタイプについで多い。このタイプは御伊勢原遺跡でも多く検出されている。

Eタイプ…狐塚－2

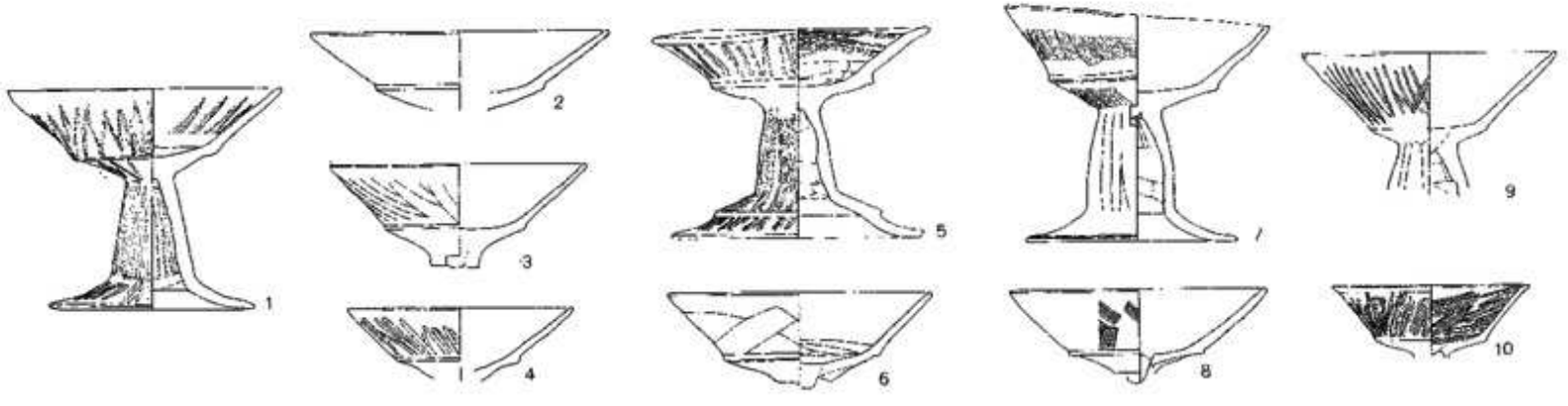
Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分にかける。

狐塚遺跡の土器の胎土の主流はMont, Mica, Hbの3成分を含むタイプであるが、女堀遺跡の土

第12表　胎土性状表

試料 No	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類 Mo-Mi-Hb	Mo-Ch,Mi-Hb	粘土鉱物 および 造岩鉱物 Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Cr	Mu	Kaol	K-fels	Mu	ガラス	備考
塩塚－1	D	Ⅲ	7	20		92	63			3502	414						中粒	中粒砂を混入した砕屑性粘土
2	E	Ⅲ	8	8		139		161		2070	494	163					中粒	細粒砂を混入した砕屑性粘土
3	C	Ⅱ～Ⅲ	5	20			92			1903	538	218					中～粗粒	細粒砂を混入した砕屑性粘土
4	A	Ⅲ	1	15	136	127	150			1678	1063	200					中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
5	B	Ⅲ	1	16	204	147	117			2044	852	187					中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
6	D	Ⅲ	7	20		107	93			1984	563	174					中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
7	B	Ⅲ	1	16	219	129	96			1910	542	182					中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
8	B	Ⅲ	1	16	174	150	103			2029	449	164					中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
9	D	Ⅲ	7	20		113	89			1925	655	206					中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土
10	B	Ⅲ	1	16	232	163	114			2107	580	184					中粒	細粒砂を含む砕屑性粘土

焼成ランク　Mu：Ⅰ　Mu－Cr：Ⅱ　Cr－glass：Ⅲ　glass：Ⅳ　原土：Mont：モンモリロナイト　Mica：雲母類　Hb：角閃石
Ch：緑泥石　Ka：カ　Hy：紫蘇輝石　Qt：石英　Pl：斜長石　Cr：クリストバーライト　Mu：ムライト



器の胎土は Mont, Mica の２成分タイプ、Mica１成分のタイプの２タイプで構成され、明らかに組成が異なっている。御伊勢原遺跡の土器の胎土は Mica, Hb の２成分タイプと Mont, Mica, Hb, Ch の４成分を含まないタイプの２タイプであり、明らかに、狐塚遺跡や女堀遺跡の土器とは組成が異なっている。又、札ノ辻遺跡の土器は Mica, Hb, Ch の３成分タイプで、これも異質である。広面遺跡の７と12、代正寺遺跡の12は御伊勢原遺跡の Mont, Mica, Hb, Ch の４成分を含まないタイプと類似している。代正寺遺跡の24は Mont, Mica, Hb の３成分を含む狐塚遺跡の土器と組成が類似している。

３－２　石英（Qt）－斜長石（Pl）の相関について

土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るということは個々の集団が持つ土器製作上の個有の技術であると考えられる。

自然状態における各地の砂は個々の石英と斜長石の比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地域における砂は各々個有の石英－斜長石比を有しているといえる。

この個有の比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは前記のように各々の集団の有する固有の技術の一端である。

第79図 Qt－Pl 相関図には狐塚遺跡の土器と併せて御伊勢原、女堀、札ノ辻、代正寺、広面の各遺跡の土器も記載した。土器はⅠからⅩの10グループと“その他”に分類された。

Ⅰグループ…狐塚－４，５

斜長石の強度が高いグループで、タイプはＡとＢの類似する組成を持つものが共存している。

Ⅱグループ…狐塚－２，３，６，７，８，９，10

胎土はＢタイプを主体とし、Ｄタイプが共存している。個体数は７個で、集中度も比較的高い。組成及び固体数の多さから推察して在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

Ⅲグループ…御伊勢原－８、札ノ辻－５

Ⅳグループ…女堀－11，14，19，札ノ辻－３

このグループは女堀の Mica１成分を含む胎土で統一されているもので、札ノ辻遺跡の土器も組成が同である。

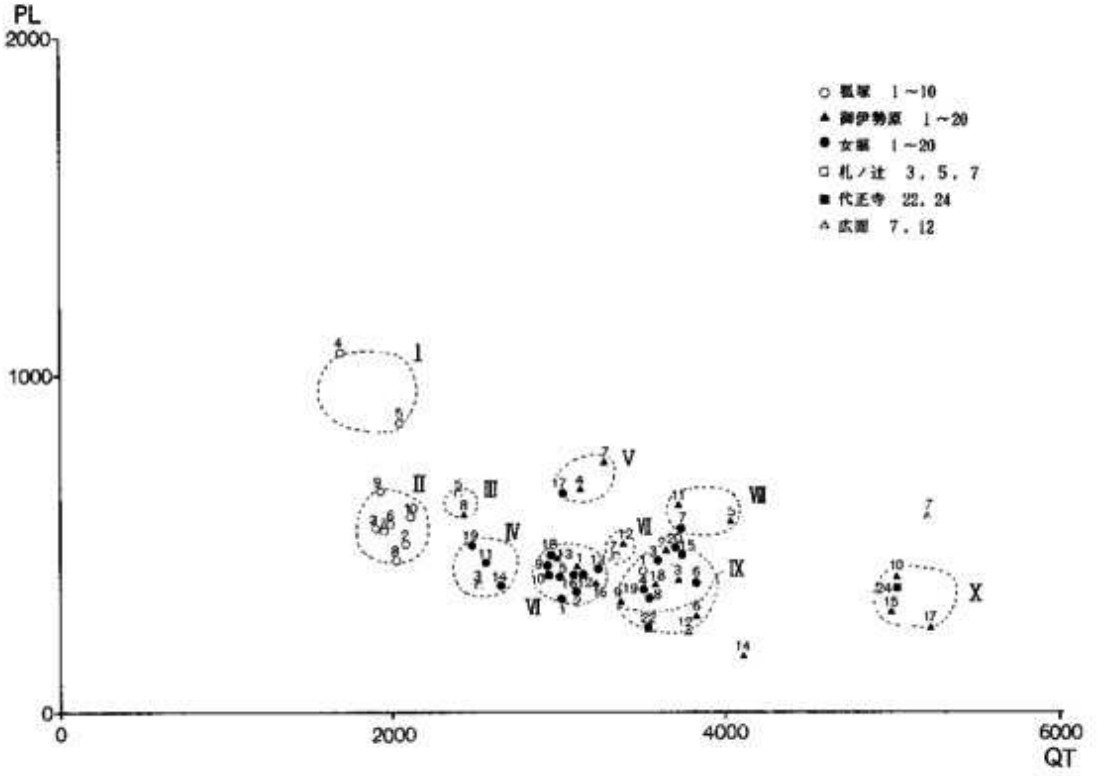
Ⅴグループ…御伊勢原－４，７，女堀－17

御伊勢原と女堀遺跡の土器が共存するグループで、斜長石の強度が高い。

Ⅵグループ…女堀－１，２，５，９，10，12，13，16，18

御伊勢原－１，13，16

女堀遺跡の土器が９個集中するグループで、御伊勢原遺跡の土器が集中する。他の遺跡の土器は含まれておらず、両遺跡の関連性が強く伺われる。



第79図　Qt－P1相関図

第13表　試料一覧表

狐塚（124集）

No	出土遺構	挿図No	時期	器種
1	第14号住居跡	第34図-49	和泉	高杯
2	第14号住居跡	第34図-56	和泉	高杯
3	第14号住居跡	第34図-53	和泉	高杯
4	第14号住居跡	第34図-54	和泉	高杯
5	第14号住居跡	第33図-46	和泉	高杯
6	第14号住居跡	第34図-52	和泉	高杯
7	第13号住居跡	第27図-21	和泉	高杯
8	第13号住居跡	第27図-20	和泉	高杯
9	第3号住居跡	第13図-9	和泉	高杯
10	第5号住居跡	第17図-4	和泉	高杯

女掛II（68集）

No	出土遺構	挿図No	時期	器種
1	第135号土坑	第44号135-3	和泉	高杯
2	第135号土坑	第44図135-5	和泉	高杯
3	第7号住居跡	第19図-2	和泉	高杯
4	第10号住居跡	第25図-9	和泉	高杯
5	第10号住居跡	第25図-10	和泉	高杯
6	第3号住居跡	第11図-5	和泉	高杯
7	第9号住居跡	第23図-7	和泉	高杯
8	第12号住居跡	第30図-3	和泉	高杯
9	第10号住居跡	第25図-8	和泉	高杯
10	第10号住居跡	第25図-11	和泉	高杯
11	第135号土坑	第44図135-4	和泉	高杯
12	第8号住居跡	第21図-1	和泉	高杯
13	第14号住居跡	第34図-1	和泉	高杯
14	第10号住居跡	第25図-6	和泉	高杯
15	第2号住居跡	第9図-1	和泉	高杯
16	第135号土坑	第44図135-2	和泉	高杯
17	第136号土坑	第44図136-5	和泉	高杯
18	第9号住居跡	第23図-5	和泉	高杯
19	第10号住居跡	第25図-7	和泉	高杯
20	第9号住居跡	第19図-3	和泉	高杯

札ノ辻（55集）

No	出土遺構	挿図No	時期	器種
3	第30号住居跡		鬼高	甕
5	第9号住居跡	第153図-3	和泉	甕
7	第21号住居跡	第170図-11	鬼高	甕

代正寺（110集）

No	出土遺構	挿図No	時期	器種
22	第68号住居跡	第122図-14	五領	壺
24	第68号住居跡	第123図-22	五領	台付甕

広面（80集）

No	出土遺構	挿図No	時期	器種
7	SZ-18	第66図-2	五領	装飾器台
12	SZ-6	第26図-2	五領	高杯

Ⅶグループ…御伊勢原－12，札ノ辻－7

Ⅷグループ…女堀－7，御伊勢原－5，11

斜長石の強度が幾分高いグループで、女堀と御伊勢原遺跡の土器だけで構成される。

Ⅸグループ…狐塚－1，女堀－3，4，6，8，15，20

御伊勢原－2，3，6，9，18，19

代正寺－22，広面－12

狐塚－1はMica, Hbの2成分を含むタイプで、御伊勢原遺跡の土器の中で多く検出されたものである。グループの上半分には女堀と御伊勢原遺跡の土器が12個集中し、共存するグループと下半分の御伊勢原、代正寺、広面が共存するグループとに分かれているように見受けられる。

Ⅹグループ…御伊勢原－10，15，17、代正寺－24

石英の強度が高いグループで、Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠けるタイプの胎土が主体となる。

"その他"…御伊勢原－14，20、広面－7

御伊勢原－14は斜長石の強度が低く、異質である。御伊勢原－20は石英の強度が高く異質である。広面－7は石英と斜長石の強度が高く異質である。

以上の結果から明らかなように、狐塚遺跡の土器は石英の強度が2200以下の領域でグループを形成し、明らかに女堀や御伊勢原遺跡の土器とは領域が異なっている。狐塚－1はⅨグループに属し、胎土の組成も御伊勢原のタイプと同じものであることから判断して、御伊勢原の土器ではなかろうか。御伊勢原遺跡の土器と女堀遺跡の土器はともに共存し、集中度も高い。この様な現象から推察して、御伊勢原遺跡と女堀遺跡の土器は関連性が高いと考えられる。札ノ辻遺跡の土器は御伊勢原遺跡の土器と共存してⅢとⅦグループを形成するがその関連性は明確ではない。札ノ辻－3は御伊勢原遺跡の土器で構成されるⅣグループに属し、胎土の組成も同じであることから推察して、御伊勢原の土器である可能性が考えられる。代正寺遺跡の土器も御伊勢原遺跡の土器と共存する。広面遺跡の土器はあまりはっきりした傾向がつかめない。

4　まとめ

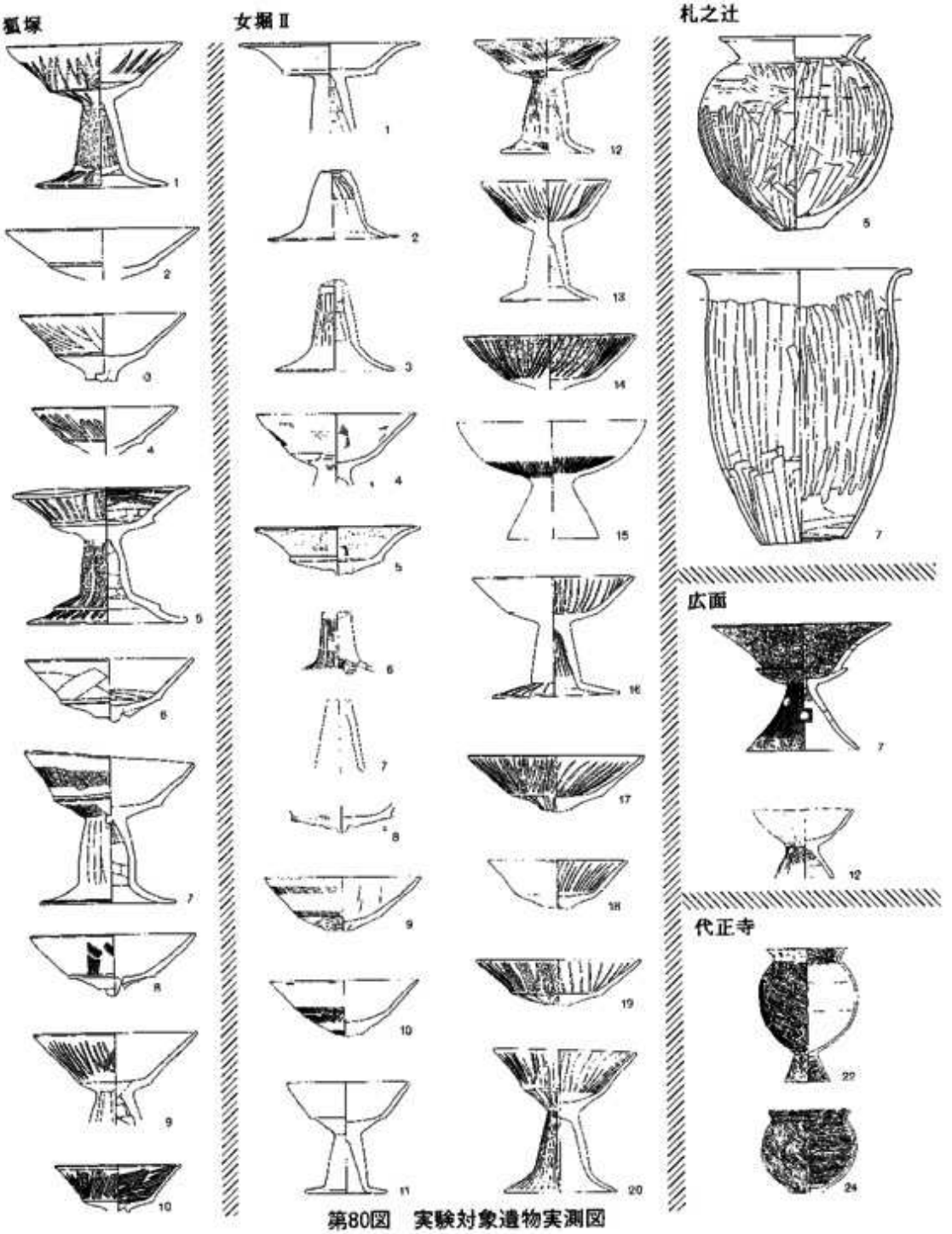
i）土器胎土はMont, Mica, Hbの3成分を含むタイプがAとBタイプが主体で、Mont, Mica 2成分タイプが主体となる女堀、Mica, Hb 2成分タイプが主体となる御伊勢原遺跡の土器とは組成的には明らかな相違がある。

Bタイプの胎土が在地あるいは在地近傍の可能性が高い。

ii）電子顕微鏡によるガラスの分析では、中粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅢとあまり高くない。狐塚－3だけが中から粗粒のガラスが生成し、焼成ランクはⅡ－Ⅲと幾分高い。

iii）石英と斜長石の相関ではⅠ－Ⅹの10グループと"その他"に分類された。狐塚遺跡の土器は石英の強度が2200以下の領域でグループを形成し、女堀、御伊勢原、札ノ辻、代正寺、広面など

の遺跡の土器とは明らかに異なっている。狐塚－1は御伊勢原タイプの胎土で、御伊勢原と女堀遺跡の土器で形成されるⅨグループに属し、御伊勢原遺跡の土器との関連性が高い。御伊勢原遺跡の土器と女堀遺跡の土器は共存してグループを形成し、両遺跡の関連性の高さが伺われる。御伊勢原遺跡の土器はいくつかのグループに分散しており、その内のいくつかは札ノ辻、広面、代正寺などと小グループを形成するのが特徴である。



第80図　実験対象遺物実測図

Ⅵ 考 察

1．古墳時代

Ⅳ－1で述べたように、当遺跡からは古墳時代中期の集落が良好な形で検出されている。

ここでは、今回の調査で得られた資料について、a遺物、b遺構、c集落の変遷の各説を行い、特に問題と思われる点についてd・eの二項を設け検討することにしたい。

a．遺物

今回の調査では、古墳時代中期の土器、紡錘車、土玉、土製円盤が出土している。

(1) 土器

(i) 「様式」名の定義

まず、土器について取り扱うことにしたい。今回の調査では、古墳時代中期の所謂「和泉式」に該当する土器群が出土している。

杉原荘介氏が提唱した「和泉式」が、「両遺跡（五領遺跡、鬼高遺跡：福田注）出土土器の中間」（文献30Ｐ７ℓ28）の「一応土師時代中期の土器」（同ℓ29）で、「中期古墳の造営された時期と、どこかの時点で併行関係にある」（同ℓ20）「５世紀に位置するもの」（同Ｐ８ℓ３）といった黎明期の研究ではいたしかたのない幅のある概念でしか捉えられていなかったのは広く知られているところである。

ところが、これまでのこの時期の土器研究ではこの幅のある「和泉式」の概念が、既にその内容の固まった一つの「様式」の内容（註１）として、取り扱われてしまっている。

土器研究に対する基本的な姿勢として「自らの分類方法や基準」を明示することは不可欠のことで（文献31）、同様に「一式」といった「様式」名を使用する場合にはその定義を行う必要性がある。

この点について明確な定義を行なっているのは坂野和信氏である。坂野氏は「和泉式」を「大要、布留式土器、韓式土器、須恵器の系譜三部門の在地における選択的模倣が始まる、東国で最初の土器型式」（文献32Ｐ72ℓ９～10）と定義し、「模倣行為」を指標とする「様式」と理解している。

坂野氏の定義は土器研究における正当な手続きであり、重要である。

近年では、この「和泉式」の様式内容の不明瞭さからか「５世紀代の土器群」という表現を使用する傾向があるが、その際にも何故そういう表現を使用するのかを明示する必要がある。

筆者はこれまで和泉式を漠然と「布留式土器」の模倣が顕在化する「様式」として捉えてきたが、それが先の坂野氏が言う「布留式」「韓式」「須恵器」の「選択的模倣」と合致するのか判断する用意はできていない。従って、ここでは安直に「和泉式」の呼唱を使用せずに「５世紀－の土器」という表現を用いることにしたい。

(ii) ５世紀の土器研究の方向性（註２）

所謂「和泉式」を含む5世紀の土器研究には、現在2つの大きな潮流がある。

一つは、型式論、分布論的方法に重きを置くもので、立石盛詞、村井好文、坂口一、坂野和信の各氏によって行われている。(文献32－37)

もう一つは、現在ほぼ共通の時代指標として捉えられている須恵器の編年を援用するもので、比田井克仁、長谷川厚氏の研究に見られるものである。(文献38・39)

ここでこれらの研究についての是非を問う用意はないが、坂野氏が指摘するように「土師器の研究を行おうとするのに、ほかの事象を借用して代用する」(文献32 P 69 ℓ 13～14) 方法には疑問がある。

また各々の研究についても問題点を指摘できるが、自らの方法と成果を提示できない現段階で、それらを論うことは正当でないと考える。

分類方法の提示、あるいは研究に対する方法等については別稿を用意することとし、本稿では上述の研究の中から、武蔵地域を対象とする立石盛詞、坂野和信、比田井克仁の各氏の研究成果と本報告の成果を対照するにとどめたい。

(iii) 出土土器の分類 (第81図)

本遺跡の出土資料については、拙稿「鍛冶谷・新田口遺跡出土土器の分析－前篇－」(文献31) で提示した以下の3段階の分類法をとる。

第1段階としては、形式分類のうち推定される機能差をもとにした器種の大別を行う。寺沢氏 (文献40) の要素1＝機能素1の段階である。壺、甕、高杯というように表記する。

第2段階としては器種の細別を行う。寺沢氏の要素2＝機能素2の段階である。「広口」壺、「細頸」壺、「台付」甕というように、第1段階の大別器種に形容詞を付けて表記する。

第3段階としては、細別された器種を更に形態的特徴によって細分する。寺沢氏の形態素1＝要素3とほぼ同義だが、筆者は形式をあくまで機能差に基づく概念と考えるため、これを第3次的形式とは呼称しない。

この第3段階では、最も形態的特徴の表れやすい口縁部の形態を重視し、それらと共に、プロポーションによる形状差を用いて分類する。壺A、甕Bというようにアルファベットによって表記し、更にその中で細分される場合にはB1、B2というように数字を付すこととする。

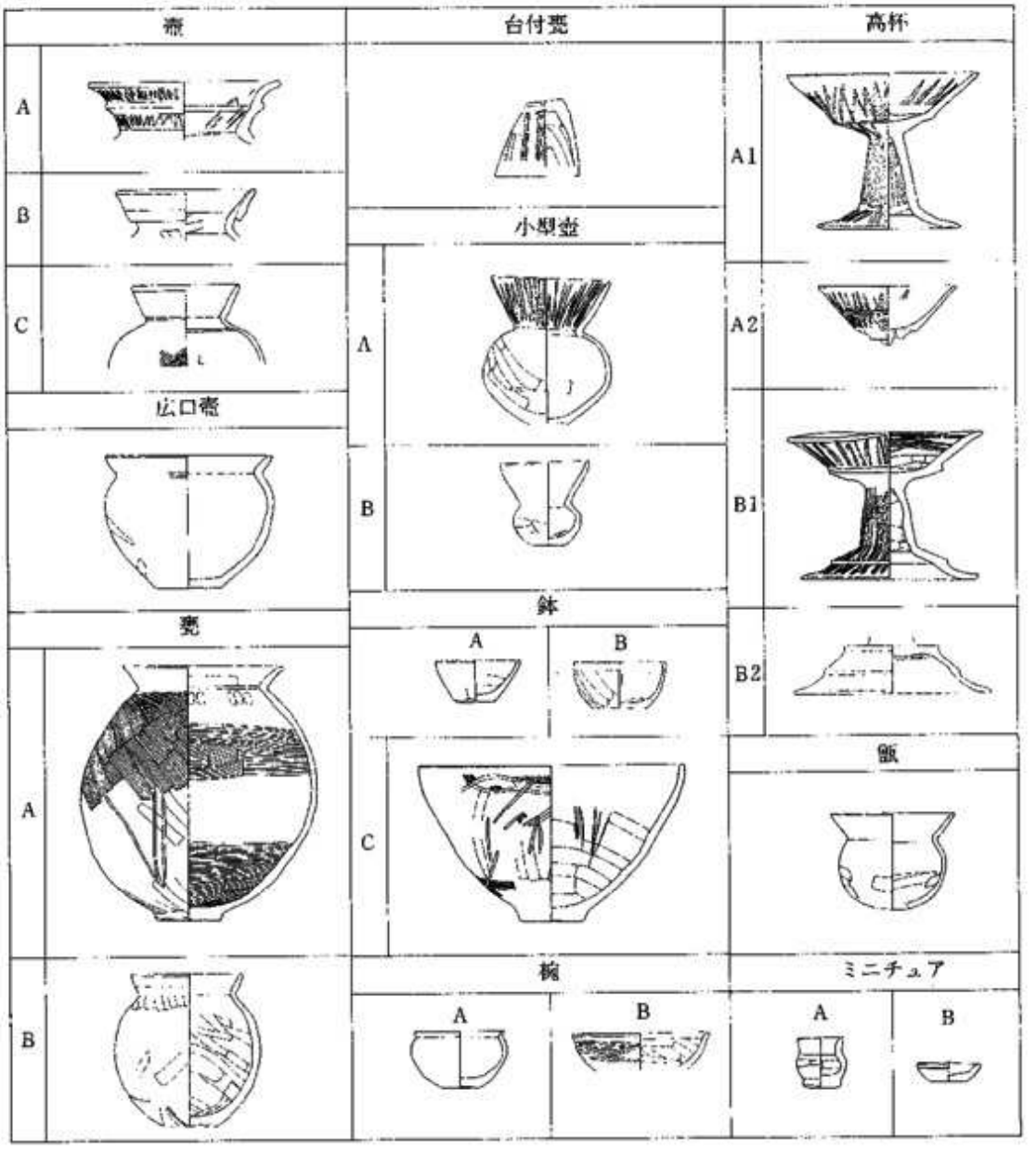
また調整技法等の差異については、その都度説明を加えることにしたい。

壺 本遺跡出土の土器群は、壺と甕の用途が混乱し、両者の区別がつきづらくなる時期の所産であるため、ここでは二重口縁・複合口縁を有するもの、直立する長い口縁部を持つものを壺としておきたい。

A 二重口縁を持つものである。口縁端部は外側に大きく伸びる。

B 複合口縁を呈するものである。頸部から比較的直線的に「ハ」の字状に開く口縁部の外側に複合部を貼付することにより口縁を造り出している。

C 直立する長い口縁部を持つものである。



第81図　出土土器の分類

この他に密なヘラ磨きを施す胴部片と考えられるものがある。

広口壺　口径、胴部径が器高を上回るもので頸部が「く」の字状に屈曲する。

甕　単純口縁のものを、ここでは甕として一括する。口径の大小によりA・Bに二分した。

A　口径が15.0cm以上を測る大型のものを一括した。

B　口径15.0cm未満のものを一括した。

台付甕　脚台部のみの破片である。全体の器形の知れるものは出土していない。

小型壺　口径15.0cm以下で逆「ハ」の字状に開く直線的な口縁を持つものを小型壺とした。大型

のAと、所謂「坩形土器」と呼ばれるBがある。

A　逆「ハ」の字状に直線的に開く口縁部を持ち、口縁部より体部が大きいものである。

B　所謂「坩形土器」である。逆「ハ」の字状に開く長い口縁部に、それより小さい体部がつくものである。

鉢　口径が器高を上回り口縁部を折り返さないものを鉢とした。体部の形状によりA・Bに二分する。

A　底部から直線的に開く体部を持つもの。

B　底部から開いた後、体部下位で屈曲して立上がるものである。

C　甕の製作途中の胴部下半を転用したと考えられるもので、大型である。

椀　体部の形態は、ほぼ鉢と同じだが短く屈曲する口縁部がつくものである。口径・体部径と器高の関係からA・Bに分けた。

A　器高が口径の1/2以下にならないものである。

B　器高が口径の1/2以下のものである。

高杯　杯部・裾部の段の有無によりA・Bに大別し、更にその形態的特徴から各々1・2に細分する。

A　杯部外面、裾部に明瞭な段を持たないものである。杯部高に対して口径が大きい1と、杯部高に対する口径が小さい2がある。

B　杯部外面、裾部に明瞭な段を持つものである。裾部の段が1段のみの1と、2段の2がある。

甑　広口壺・鉢の底部に一穴の穿孔を有する甑である。

ミニチュア　口径が8㎝以下のものをミニチュアとした。(註3) A・Bがある。

A　椀形を呈するものである。

B　鉢形を呈するものである。

(iv)　各器種の様相

型式群としての各「期」(註4) を設定する前提として、各器種の型式変化等の様相について述べておかねばならない。以下、細別した器種毎に述べる。

壺　壺のA～Cは、各々4世紀代の土器からの系譜が求められるものである。完形品、あるいは口縁～胴部の形態がわかるものが皆無に等しく、型式変化を把握するのは困難だが、口縁部の形態を中心にそのおおよその推移を推定できる。

Aは、口縁端部が大きく長く伸びヘラ磨きを密に施すものから、外反度が弱くヘラ磨きが省略されるものへと変化する。

Bは、口縁部の外反度が強く端部が短かいが外側へ伸びる複合部の幅が広いものから、外反度が弱く直線的で複合部の幅の狭いものへと変化する。

Cは、単一の個体のため、その型式変化等は推定できない。

前述のように、全体の知れるものがほとんどないことから、胴部を含めた型式変化について述べるのは難しいが、破片から球形胴が胴部中位に最大径を持つ長胴へ変化すると考えられる。

広口壺　やや肩の張る球形に近い胴部に「く」の字状に口縁部が接合する。単一の個体で、その型式変化を推定できない。

甕　甕A・B共に4世紀代の土器にその系譜を求め得るものである。

Aの口縁部は、外反度が大きいものから直線的で外反度の小さいものへ、胴部は球形から長胴へと変化する。器面の調整法は刷毛目主体から、木口状工具によるナデ・胴部下半のヘラ削りへと変化する。ヘラ磨きも一部の個体に見られるが、長胴化が明瞭になってくると客体的になり、最終的には省略される。

Bの変化も基本的にAと同様だが、長胴化が進む段階で頸部の厚みが増し、ボテッとした印象を受ける。個体数が少ないため、普遍的な変化なのかは慎重に判断する必要があるだろう。

台付甕　2個体のみの出土である。そのうち1個体は微小な破片のため変化の推定は困難だが、薄手で後出的なものと思われる。

小型壺　A・B共に4世紀代の土器にその系譜を求め得るものである。

全体の器形が知れるものが少ないため、ここでは胴部の形態を中心に型式変化を推定することにしたい。Aの胴部は球形から肩の張る球形、最大径を中位に持つソロバン玉状の胴部へと変化する。器面の調整法は、当初丁寧なヘラ磨きだったものが省略され、木口状工具によるナデあるいはヘラ削りへと変化する。特に胴部の下半はその傾向が顕著で、中位に稜を持ちそれ以下が直線的に仕上げられるものすら見られる。口縁部の調整は、破片から推定して当初縦方向の丁寧なヘラ磨きだったものが粗雑となり、やがて省略されるようになると思われる。

Bは、中位に最大径を持つ扁球状の胴部から、やや肩が張り丸味がなくなる胴部を持つもの、ソロバン玉状の胴部を持つものへと変化する。口縁部の変化は明瞭でないが、外傾度が大きいものから小さいものへと変化する。また、器高と口径・胴部最大径の関係も当初は口径が器高を上回っていたものが、最終的には器高が口径・胴部最大径を凌駕する横長から縦長の変化が見られる。器面の調整法は、口縁部は変化が明瞭でないが、胴部は下半の木口状工具によるナデ、ヘラ削りの頻度が高まり、A同様に中位に稜を持ち下半が直線的に仕上げられるものへ変化する。

鉢　A・B共に4世紀代の土器群に、その系譜を求められるものである。Cは特異な一例である。

A・B共に個体数が少なく、明瞭な変化を抽出できないが、体部内外面のヘラ削り、木口状工具によるナデが顕著になり、小型壺等の胴部に見られるような変化が推定される。

Cは単独の個体で、型式変化等は把握できない。

椀　Aは4世紀代の土器群にその系譜を引き、Bは新出的なものと考えられる。

Aは、外反するやや長い口縁部に肩の張らない半球形の体部を持つものから、口縁部の短い、やや肩の張る扁球状の胴部を持つもの、体部高が高く中位が張るものへと変化する。器面の調整法は刷毛目から木口状工具によるナデ・ヘラ削りへと変化し、小型壺同様に体部下半に変化が顕著に現れる。

Bは、全体の器形が知れるものがなく、変化の推定は困難である。口縁部の長・短により2分できる可能性を持つ。

高杯　Aは4世紀代の土器群に系譜が求められ、Bは新出のものである。

Aは、全体の器形の知れるものがほとんどなく、各部分によって変化を推定せざるを得ない。A1は、杯部の形態的変化は明瞭でないが、器高に占める杯部高の割合が高くなる。柱状部には最も明瞭な変化が認められ、長い張りのない直線的な柱状の柱状部から、下半が広がって短く、太く、中位に張りがあるものへ変化する。裾部は良好な資料が得られず、変化は不明だが、短くなっていくものと思われる。器面の調整は当初丁寧だったヘラ磨きが粗雑になり、やがて省略されていく。柱状部の内面も、当初造作を加えていたものが省略され、上半は無調整のままとなる。

A2は、杯部のみの遺存例しか明らかでない。当初直線的で外傾度が強く、器高に対する口径の比率が高かったものが、直線的で外傾度が弱く杯部高の高いものへ変化する。器面の調整法は、丁寧なヘラ磨きが粗略になり、木口状工具によるナデを行うのみとなる。

Bは、器形の知れるものが少なく型式変化を推定できない。基本的に柱状部の形態、各部位の器高に占める比率がA同様の変化を示すと思われる。

甑　広口壺と椀の中間的形態に一孔を穿つ当遺跡出土の甑は特異なもので、その系譜をたどり難い。赤彩が施される例があり、あるいは「底部穿孔壺」と評価すべきかもしれないが、ここではとりあえず甑として扱っておく。

個体数が少ないため不確定要素が高いが、口縁部は長く伸び外傾するものから短いものへ、胴部が球形からやや肩の張る扁球形へ変化する。胴部の変化は小型壺と一致するものと思われる。調整法は、木口状工具によるナデが頻繁に使用されるようになり、特に体部の下半において顕著である。

ミニチュア　ミニチュアA・Bの系譜は不明である。個体数が少なく変化等は明らかにできない。Aはヘラ削りの痕跡が明瞭である。

(v)　編年に関する問題

各器種の様相に基づいて編年を行う前に、申し述べておかねばならない問題点がある。

筆者が「様式」を「それぞれの形式の縦方向の時間的な形式の組列を、型式論的に共通する属性によって横断する同時代性を持つ型式群として捉えている」（文献31 P79ℓ3～4）のは前述した。また「それを検証する方法として、空間的な広がりを持つ複数列の層位論的同時性をもつ一括遺物が使用されるのが望ましい。」（同P79ℓ4・5）のも前稿の通りである。

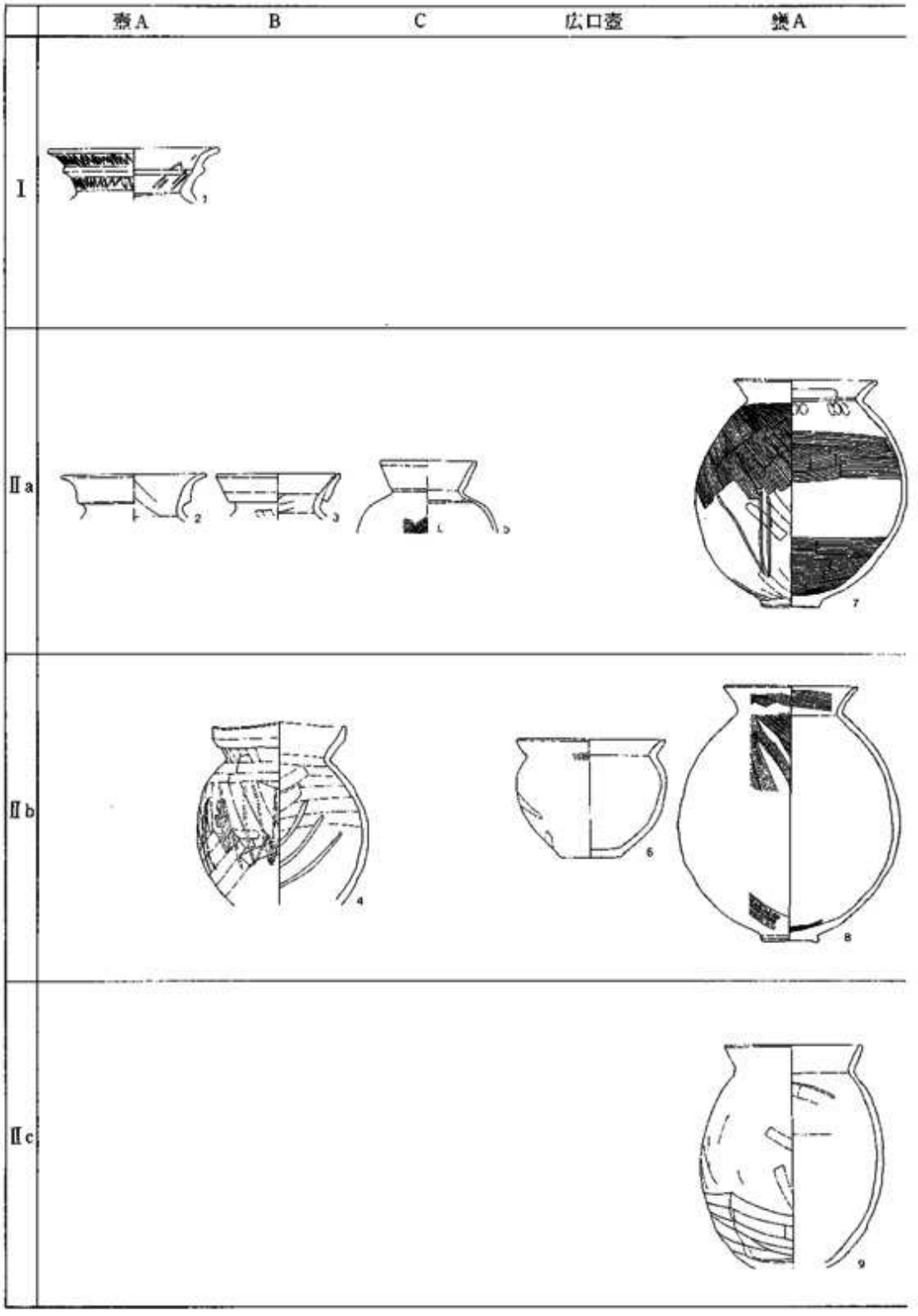
だが、本遺跡出土の土器群は、型式論的方法によって抽出した型式群が、複数の遺構において一括性をもって出土する様相が見られ、「期」を分布論的な一括性を使用した同時性によって検証する方法をとるならば、当然それらは異なる「型式」を含む「期」として認定されてしまうわけである。

型式論的方法論によって抽出された型式群としての「様式」は、土器の生産における同時性を反映するものである。

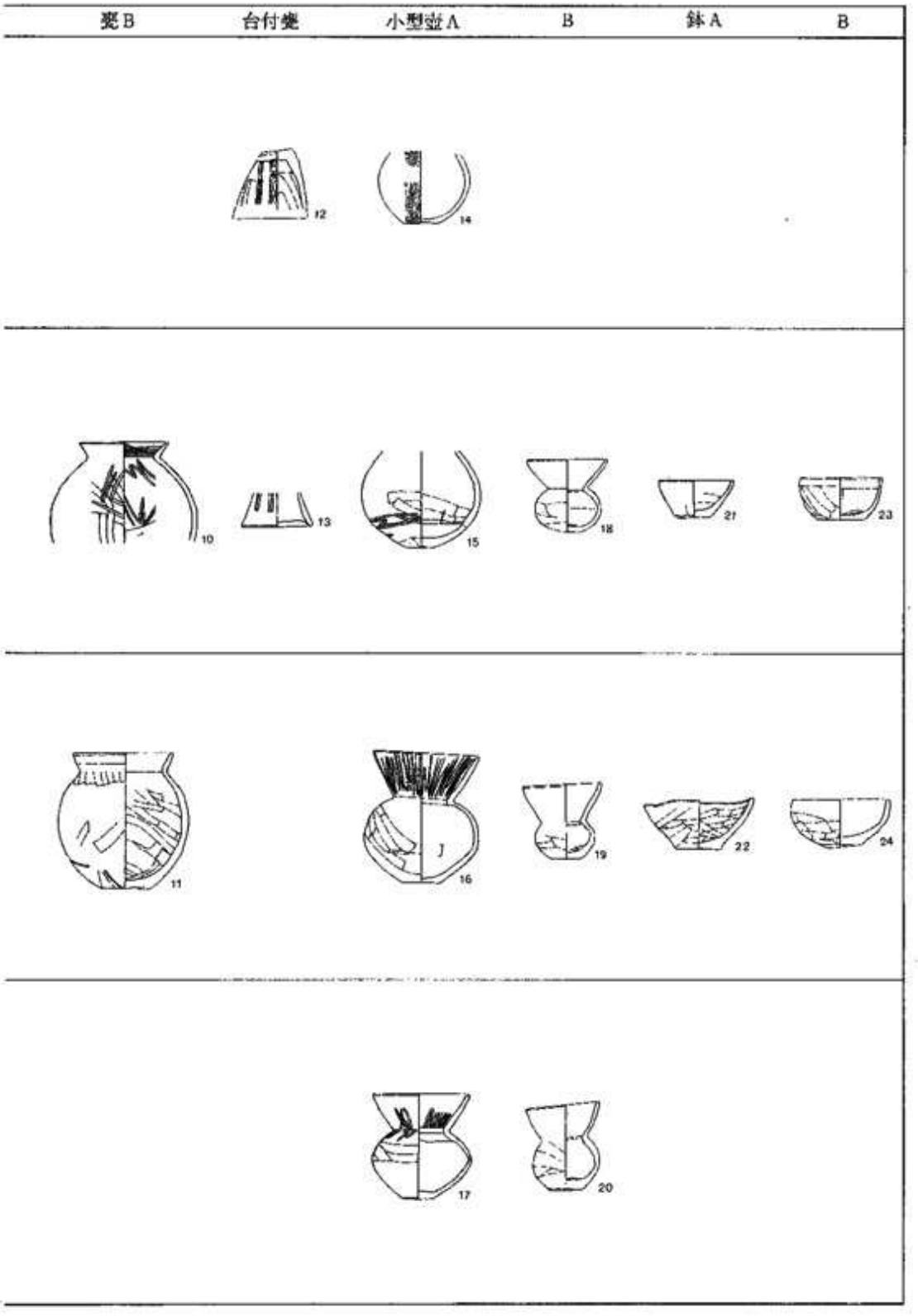
それに対して分布論的一括性は、土器の廃棄の同時性を反映するものである。

従って、型式論的変化のスピードが遅く、廃棄行為がそれより短い時間帯でなされるならば、両者は方法論的に整合性のある「様式」として認識できる。

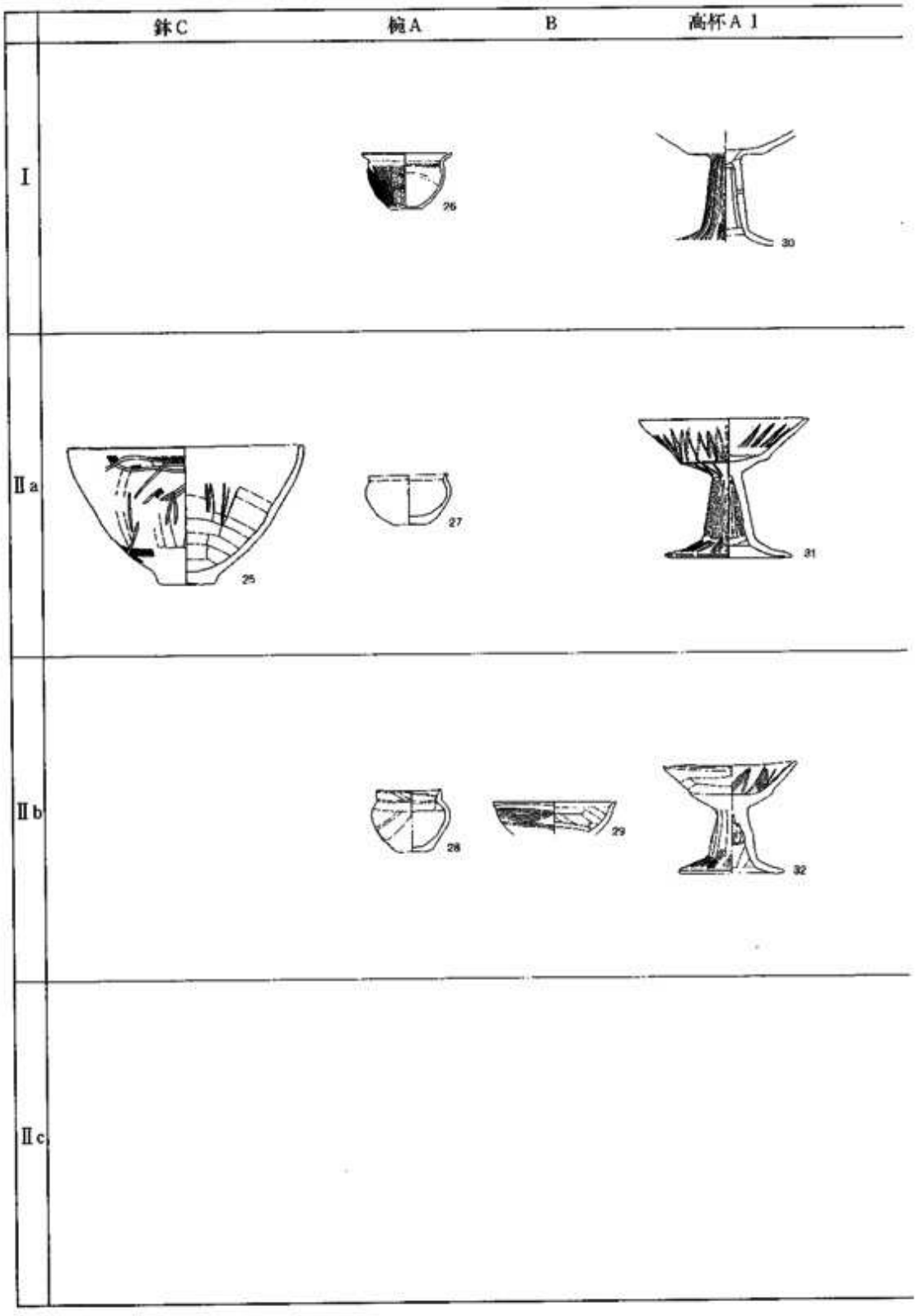
しかし、その逆の場合、即ち型式変化のスピードが速く、廃棄行為が異なる型式論的特徴を持つ



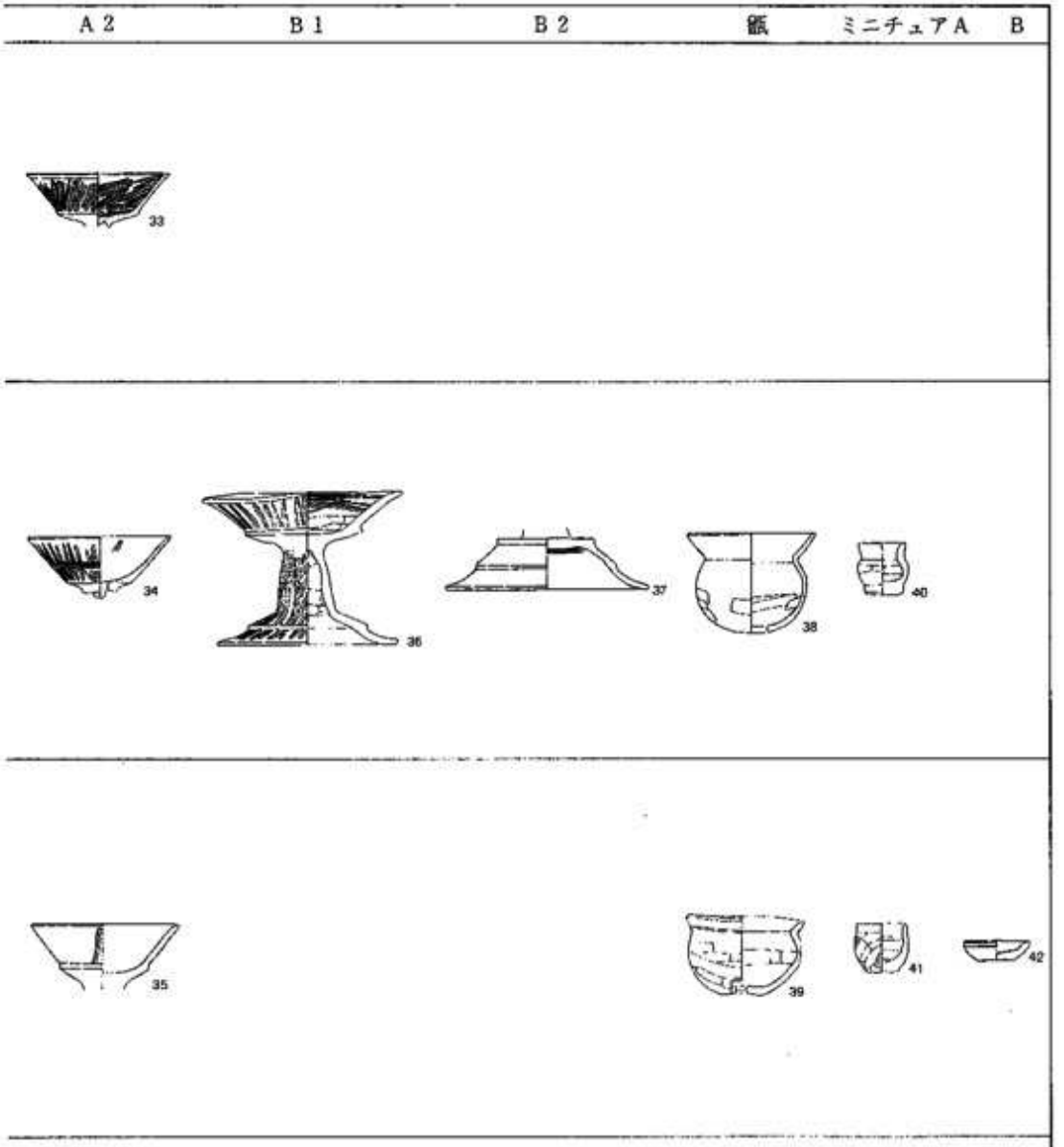
第82図　狐塚遺跡出土土器の編年（1）



第83図　狐塚遺跡出土土器の編年（２）



第84図　狐塚遺跡出土土器の編年（3）



第14表　各氏の編年との対応

狐塚	立石	坂野	比田井
Ⅰ	後張Ⅲ	Ⅰ－1	Ⅰ
Ⅱa	後張Ⅲ～Ⅳ	Ⅰ－1～2	Ⅱ
Ⅱb	後張Ⅳ～Ⅴ	Ⅱ－1	Ⅲ
Ⅱc	後張Ⅴか	Ⅱ－2か	Ⅳか

編年表掲載土器出土遺構一覧

第1号住居跡　7・8・10・15・21・25・27・38
第3号住居跡　11・34・39
第5号住居跡　12・14・26・33
第6号住居跡　13・42
第7号住居跡　40
第13号住居跡　3・5・6・9・16・17
第14号住居跡　1・2・4・18・19・20・22・23・24
28・29・30・31・32・35・36・37・41

第85図　狐塚遺跡出土土器の編年（4）

土器群にまたがる時間帯を含んでなされた場合には、方法論的に整合性を持たない遺物群が分布論的一括性をもって出土することになる。即ち、前者は考古学の方法と生活相が一致する「様式」、後者は方法と生活相に齟齬のある「様式」なのである。本稿における「期」は後者に該当し、型式論的方法と廃棄にみる一括性が一致していない。

ここでは実生活を反映するものとしてⅠ・Ⅱの大別期を設け、更に型式論的方法によって抽出された遺物群による期を細別期としてａ～ｃと表現することにした。

(vi) 編年（第82～85図）

Ⅰ期　第５号住居跡、第14号住居跡出土遺物に代表される。器種構成の整った明瞭な土器群としては認定できないが、明らかに古相を示すものである。甕Ａ、台付甕、小型甕Ａ、高杯Ａ１が認められる。壷Ａは口縁部の外傾度が強く、端部が外反するものである。胴部は破片から球形胴を呈すると思われる。丁寧なヘラ磨きが施されている。高杯は張りのない長い柱状部を持つもので、丁寧なヘラ磨きが施される。小型壷Ａはヘラ磨きが丁寧に施され、球形胴を呈する。椀Ａは器高が高く、調整は刷毛目である。

Ⅱ期　同一住居跡からの出土遺物が、ａ～ｃに３分される型式群として認定できる。

Ⅱａ期　第１・４・６・７・14号住居跡出土遺物に代表される一群である。甕Ａ～Ｃ、広口壷、甕Ａ・Ｂ、椀Ａ、甑、高杯Ａ１・Ａ２・Ｂ１が認められ、全器種が出揃う。壷・甕は口縁部の外反度が大きく、球形胴で、木口状工具によるナデやヘラ削りが盛行し、刷毛目の後退が始まる。台付甕は今期を最後になくなるようである。小型壷は球形胴で、ヘラ磨きが粗略となり、木口状工具によるナデを施すものが多くなる。椀や甑等も同様である。高杯はヘラ磨きが粗略となり、柱状部の下半が広がるようになる。Ｂはこの時期から認めることができる。

Ⅱｂ期　第１・３・13・14号住居跡出土遺物によって代表される。壷Ｂ、甕Ａ・Ｂ、小型壷Ａ・Ｂ、椀Ａ、甑・高杯Ａ１・Ａ２・Ｂ１が認められる。

壷はＡ・Ｃがなくｂのみである。口縁部は外反せず、直線的に外傾し、複合部の造作も粗雑になる。甕は口縁部の外反度が弱くなり、外傾度も低い。壷・甕とも長胴化が始まる。器面の調整はヘラ磨き、刷毛目が客体化して粗雑になり、木口状工具によるナデ、ヘラ削りが一般的になる。特に甕の胴部下半は、それが顕著である。小型壷Ａは、肩が張る球形の胴部を呈する。胴部の調整にはヘラ磨きがほとんど使われず、下半をヘラ削りする個体も見られる。Ｂは肩が張る扁球状の胴部となる。調整はＡ同様である。椀ａは口縁部が直立し、体部の形状は小型壷Ｂと同様である。甑も木口状工具が多用される扁球状の胴部を持つものになる。高杯Ａは、柱状部が短く、下半が広がるものになる。杯部高の比率が高くなり、頭でっかちの印象を受ける。調整はヘラ磨きが施されず、木口状工具によるナデ、ヘラ削りが多用される。Ａ２も同様の様相を呈すると思われる。Ｂの様相は不明だがこの時期にも継続していると考えられる。

Ⅱｃ期　甕Ａ、小型壷のみしか認識できず、ｂに包括される可能性もある。３・13号住居跡出土遺物に代表される。

甕Ａは長胴になり、胴部下半にヘラ削りが施される。ヘラ磨き、刷毛目は行われない。小型壷Ａ

・Bは胴部中位に最大径を持つソロバン玉状の直線的な胴部を持つ。器高に占める胴部の割合が高くなり、口縁部高を凌駕する。ヘラ磨きは一部残存するが基本的に使われなくなり、胴部下半はヘラ削りされるものがある。

鉢、椀B、高杯B２、ミニチュアは型式論的位置づけが難しいが、その調整法から鉢A～CをⅡa・Ⅱb期に、椀BをⅡb期に、高杯B２をⅡa期に、ミニチュアAをⅡa・Ⅱb期、BをⅡa期としておきたい。もちろん、これらは変動する可能性がある。

(vii) 立石編年・坂野編年・比田井編年との対比（第14表）

(ii)で述べたように、ここでは本遺跡の「期」と立石編年、坂野編年、比田井編年における「様式」とを対比することにしたい。

図中に大まかな対応関係を示したが、北武蔵を対象とする立石・坂野氏の編年とは型式変化の方向性自体は一致するものの、本遺跡の「期」が、各々の編年の「様式」にまたがるものとなっている。比田井氏の編年とは大枠で一致するものの、高杯や椀・鉢の型式変化、共伴関係の捉え方が異なる。

もちろん、これらの「様式」とのずれは、基本的に一遺跡内の資料のみを用いた「期」しか提示し得ない筆者に非がある。近隣遺跡群の資料との間で操作を重ねた上で、再論したいと考えている。

いずれにせよ、比較的一括性が高いと考えられる遺物群中に異なる複数の型式が存在することは、上述の対比からも明らかである。それは何に起因するのであろうか。

(viii) 「期」の混在の様相

Ⅳ－１ａでは、遺物の出土状況について、①床面から土圧でつぶれたような状態（13・14号住居跡）②貯蔵穴から出土する状態（４号住居跡）③住居の窪みに土器を人為的に廃棄した状態（１・３・６・13・14号住居跡）④流れ込みの状態（２・７・10・11・12号住居跡）の４態を報告した。

①～④のうち最も一括性が高いと考えられるのは、①②だがそれが「型式論的に共通する」属性を持っているわけではない。例えば、14号住居跡の床面出土遺物は大部分がⅡｂ期に相当するが、46の高杯はⅡａ期の、器台として転用された壺はⅠ期の所産である。

同様に、13号住居跡でもⅡｂ期と考えられる床直の土器群にⅡｃ期の６が入っている。

③は④との区別が難しいと考えられるが、14号住居跡のドット・ナンバー1282=12・14・25・51・55・56・86・90のように甕と高杯の破片を混ぜ合わせて集中して廃棄した状態、小型壺・鉢の完形品、高杯の柱状部のみの遺棄と見られる状態が③の人為性を示唆している。これらの土器群の大部分がⅡｂ・ｃ期であり、一括性が高いことも単なる流れ込みの結果でないことを示している。

即ち、14号住居跡に見られる①～③の出土状況を示す遺物群は、住居の生活停止時のⅡａ、Ⅱｂ期混在の床面一括廃棄遺物群、Ⅱｂ・ｃ期の上層廃棄の遺物群の複合として理解される。これは住居を実際に使用していた期間がⅡａ～Ⅱｂ期に渡ること、Ⅱｂ期に廃絶した後、一定期間後のⅡｃ期に土器を「廃棄」した結果と見られる。

この14号住居跡に見られる様相が、本遺跡における土器群の在り方を代表し、各住居の様相も同

様に説明できる。

即ち「期」の設定期間が短いために、複数の「期」にまたがる住居跡が存在してしまうわけである。この「期」は生活相を反映したものではなく、単なる時間的スケールの意味しか持たないのだろうか。

実は、この問題は本遺跡に限ったことではなく、当該期の集落を整理した者なら誰しもが感じていることであろう。これは住居における「生活」と土器の「遺棄」「廃棄」を考える上で、大きな問題となると思われる。詳しくは一項を設け、後述することにしたい。

(ix) ネズミの歯痕のある土器

考古学的な問題とは別に、本遺跡出土土器に特徴的なものとしてクマネズミ属のネズミによる歯痕を挙げることができる。第15・16表は歯痕のある土器の一覧と、その住居出土の同一器種の総個体数に対する割合、住居出土の全器種の総個体数に対する割合を示したものである。各住居内における数値は何らのまとまりも見せず、個別には理解しがたいが、その何らのまとまりも見せない点と全体の数値の集計値（総個体数273個中歯痕のあるもの114個:41.8%、壺22個中11個:50.0%、小型壺23個中10個:43.5%、甕50個中24個:48.0%、鉢13個中7個:53.8%、椀7個中4個:57.1%、高杯103個中56個:54.4%、甑2個中2個:100%）から、①被害のある住居跡出土土器の実測総個体数のうち約4割に歯痕が認められること、②歯痕は器種による片寄りがほとんど見られず、各器種の大よそ半分の割合に歯痕が見られることが明らかになった。

この2点は、ネズミが特定の器種に限定して入れられた誘引物質によって、歯痕を残した対象の土器を選択したのではないことを示す。

考古学的な調査によって得られた遺物に残されたネズミの歯痕については、その存在によって遺体を埋葬しないモガリの期間があることを証明した千葉市石神2号墳での検討が知られている。（文献41・42）その中でも指摘されているが、「ネズミ類の門歯は上下とも終生成長を続ける」（同P515ℓ27）ため、「適当な堅さのものをかじって、門歯の伸びすぎを常に調節する本能があるらしい。」（同P515ℓ32～33）石神2号墳の場合には、調整用の「砥石または鑢」（同P515ℓ33～516ℓ1）として立花等の石製品が使われていた。

この習性は、本遺跡の歯痕のある土器が選択されたものでないこととよく合致する。ネズミにとってみれば、適当な固さのあるものなら何でも良いのである。これらの土器は、クマネズミ類にとっての「砥石または鑢」であったと考えて差し支えないだろう。

「このような砥石または鑢は、ふつうネズミの行動圏の中の通路に沿ったところにある適当な堅さのものを使うらしい。」（同P516ℓ2～3）居住空間として機能している間の住居がその通路にあったとは考え難く、そうなるのは居住空間としての機能を喪失した後、即ち住居の廃絶後と考えられる。またクマネズミ類は地中に穴を掘ることが良く知られているが、歯痕の残る土器片の個体数、出土遺構の多さから、それがたまたま地中にあった時点でついたものとは考え難く、地上に露出している時につけられたと考える方が自然であろう。

石神2号墳の場合には割竹形木棺という、本来ネズミの通路になり得ない場所にネズミの歯跡が

第15表　歯痕のある土器一覧表（1）

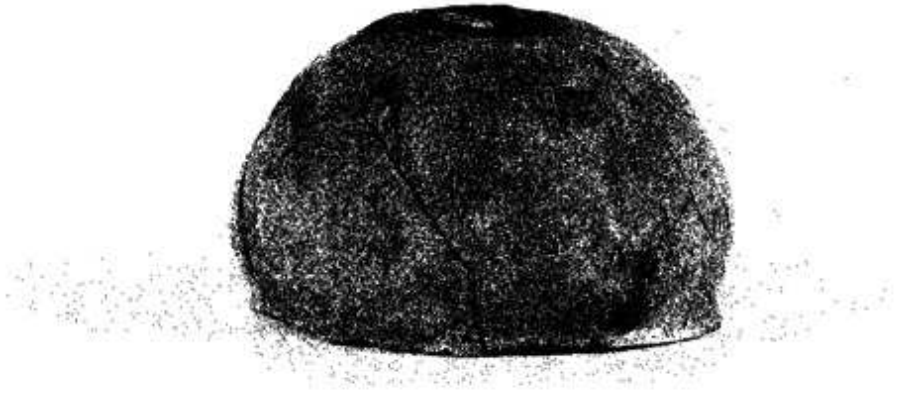
遺構	No	器種	種内比	総数対比
1号住	10	小型壺	100	41.6
	11	高杯	60.0	
	12	高杯		
	13	高杯		
	14	高杯		
	15	高杯		
	16	高杯		
	22	椀	100	
	23	鉢	100	
	24	甑	100	
3号住	11	高杯	20.0	12.5
	16	甑	100	
5号住	6	高杯	33.3	25.0
	8	鉢	50.0	
6号住	5	甕	100	16.7
	7	高杯	25.0	
7号住	1	壺	25.0	18.1
	8	高杯	25.0	
10号住	2	壺	50.0	50.0
12号住	1	壺	100	42.9
	3	高杯	33.3	
	7	鉢	33.3	
13号住	2	壺	40.0	40.6
	4	壺		
	8	甕	33.3	
	13	甕		
	14	甕		
	15	小型壺	40.0	40.6
	16	小型壺		
	20	高杯	60.0	
	21	高杯		
	24	高杯		
	25	高杯		
	27	高杯		
	28	高杯		

遺構	No	器種	種内比	総数対比
14号住	2	壺	56.5	50.9
	3	壺		
	5	壺		
	6	壺		
	8	甕	56.5	
	9	甕		
	10	甕		
	12	甕		
	13	甕		
	16	甕		
	18	甕		
	19	甕		
	20	甕		
	21	甕		
	23	甕		
	28	甕		
	29	甕		
	30	甕		
	34	小型壺	41.2	50.9
	35	小型壺		
	37	小型壺		
	39	小型壺		
	42	小型壺		
	43	小型壺		
	46	高杯	65.9	
	47	高杯		
	48	高杯		
	49	高杯		
	50	高杯		
	51	高杯		
	52	高杯		
	53	高杯		
	57	高杯		
	58	高杯		
	59	高杯		

第16表　歯痕のある土器一覧表（2）

遺構	No	器種	種内比	総数対比
14号住	61	高杯	65.9	50.9
	62	高杯		
	64	高杯		
	65	高杯		
	66	高杯		
	67	高杯		
	68	高杯		
	71	高杯		
	75	高杯		
	76	高杯		
	77	高杯		
	78	高杯		
	80	高杯		
	85	高杯		
	86	鉢	75.0	50.9
	87	鉢		
	88	椀	50.0	
	90	椀		
	95	椀		
	105	高杯	65.9	
	107	高杯		
	109	小型壺	41.2	
	113	鉢	75.0	

遺構	No	器種	種内比	総数対比
22号土坑	1	壺	100	71.4
	2	甕	100	
	3	高杯	80.0	
	4	高杯		
	5	高杯		
	6	高杯		
包含層	3	甕	43.8	38.1
	6	甕		
	9	甕		
	11	甕		
	14	甕		
	16	甕		
	18	甕	43.8	38.1
	21	高杯	44.4	38.1
	22	高杯		
	23	高杯		
	24	高杯		
	27	高杯		
	31	高杯		
	33	高杯		
	37	高杯		
	40	鉢	33.3	

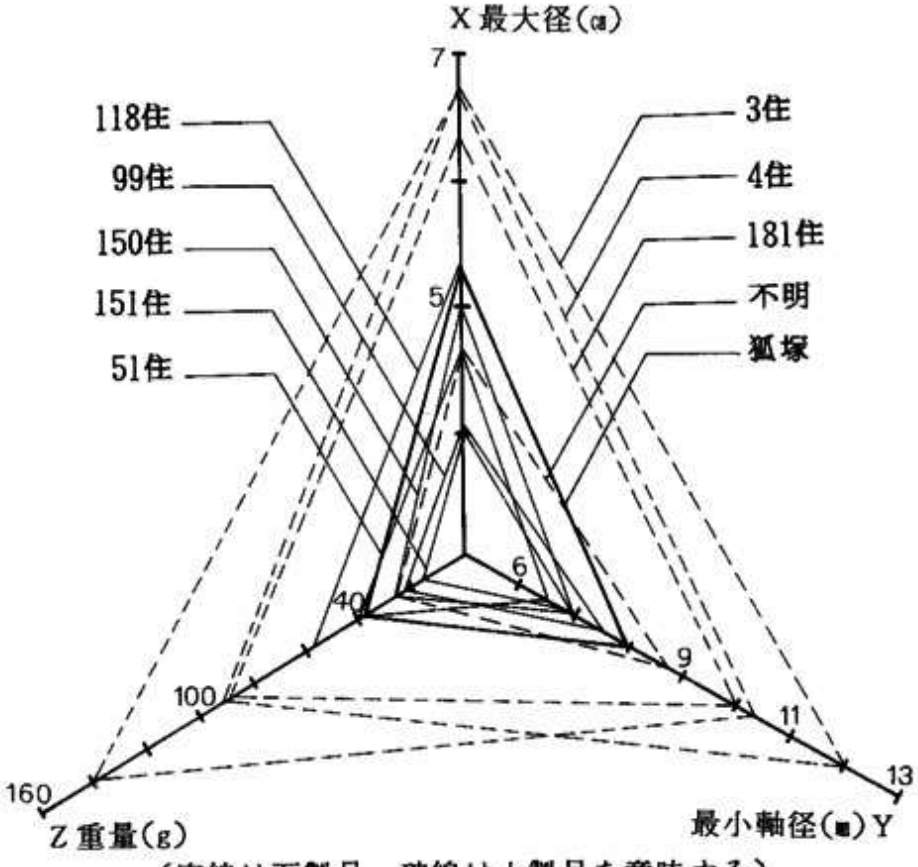


ネズミの歯痕のある土器

検出されていることから、遺体のネズミに対する誘引性とそれが地上にあったこととが推定されている。本遺跡の場合、誘引性のある食物によってネズミの通路が形成されたとは一概に言えないが、例えば1号住居跡の22等は内面が咬耗痕によって著しく破損しており、それらに誘引性の高い食物が入れられていた可能性が残る。

また、「クマネズミ属のクマネズミは、本来は森林棲で主として樹上で生活し、人家内では天井裏などにすむことが多い。これに反してドブネズミは草原の地上棲で主として水辺に穴居し、人家付近では下水や流しなどに出没する。」(同P515ℓ19～22) というように環境の選択性があり歯痕を類系化し、種別の判定が可能となれば遺跡周辺の環境を理解する一助になり得ると思われる。

いずれにせよ、集落遺跡の出土土器につけられたクマネズミ属のネズミの歯痕を分析した論考は寡聞にして知らず、検討はこれからと言えよう。たまたま筆者が今回特に取り上げた訳だが、これまでにも恐らく多くの人が意識しているものと思われ、類例を集成分析することにによって、その検出遺跡の立地等に特徴的な傾向を見出し、遺跡の環境復元や集落の廃絶に関する理解の一助になるのではないかとおぼろげに考えている。後考を期したい。



第86図　後張出土紡錘車との対比

(2) 紡錘車

本遺跡では、1号住居跡の床面から滑石製の紡錘車が出土している。

ここで紡錘車に関する論述をする用意はないため、先学の成果と対比しようと考え、資料を検索したのだが、同じ古墳時代の滑石製品でも所謂石製模造品を検討対象としたものばかりで、紡錘車について取り扱ったものは驚く程少ない。

鈴木孝之氏は後張遺跡出土の紡錘車について様々な問題点を挙げ、主として加工、装飾、法量の点から分析を行っている（文献43 P 265～272）。

今、論点の各々について述べることはできないが、試みに鈴木氏が作製した後張遺跡出土紡錘車の計測グラフに、当遺跡出土のもののプロットを行った。本遺跡のものは150号住居跡出土製品と形態が類似する、一回り大きなものとして位置づけることができる。（第86図）

また、使用痕については実体顕微鏡で観察したが、明瞭には見出せなかった。同時に穿孔の方法についても観察を行い、表裏からの各2回計4回の、恐らく鉄製品（刃子か）による穿孔の痕跡を認めた。

いずれにしても準備不足の感は否めない。本格的な検討は別稿に委ねたい。

(3) 土錘（土玉）

本遺跡からは、土玉が7点出土している。（第36図）法量等は、第7表に掲出した通りである。第Ⅰ群の遺跡中でも土玉の検出例が多く、八幡耕地、宮前、楽上の各遺跡で出土している。

第87図は、本遺跡出土例と第Ⅰ群の遺跡出土例の、径と重量の関係をグラフ化したものである。A・Bの二群は土錘の総体としての大きさに関係し、重量が重い程自然に径も大きくなることがわかる。

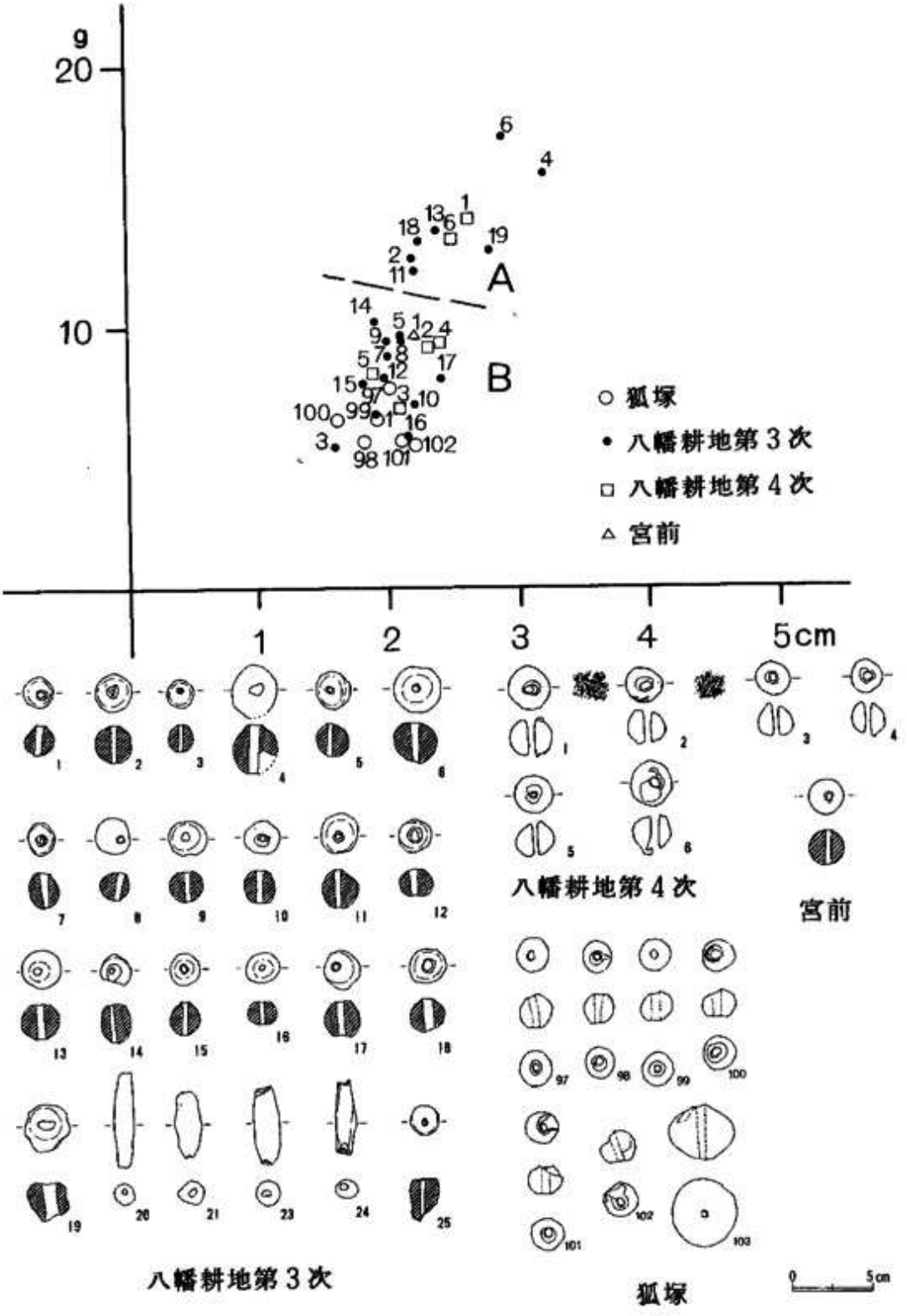
この大きさの差異について、筆者は戸田市鍛冶谷・新田口遺跡の土錘（土玉）を検討した際に、グループの大小の差異が「時期によるものではなく、機能による」（文献44）ことを指摘したが、ここでも同様に考えて良いだろう。即ち、土錘の大小は対象とする魚種、漁場の環境、漁法に左右され、その結果としてグループが形成されると考えられる。

本遺跡における土錘（土玉）の成形は、基本的に細い棒に粘土を巻きつけ、それを引き抜く手法をとり、それに伴って内面につく縦の引抜痕やひずみが見られる。使用痕は100・102・103の3例で認められ、使いこまれた感を受ける。

これらは14号住居跡の床面から、99を除く全個体が出土している。特に使用痕が認められないものや、火を受けたものがあることは注意を要するだろう。

荒川沿岸流域の土錘・石錘については既に田部井功氏が集成・分析を行い、「弥生時代～古墳時代では有孔土錘が主体である。」（文献45 P 92 ℓ 13）ことを明らかにしている。本遺跡の様相も、その一端を示すものと考えられる。

また、田部井氏は「鴻巣市生出塚では有孔土錘C種が古墳周堀から検出され、出土遺構の性格に注意される。これは錘の有する機能が象徴化され、葬送儀礼にともなう祭祀に使用された」（文献45 P 91 ℓ 11～13）と評価している。筆者も文献44における検討の際に周溝墓出土の土玉が見られる



第87図　第Ⅰ群出土の漁具

ことに注目した。これらは、土玉の「祭祀具」としての機能を示唆するものだが、ここでは性急な評価は控えたい。土玉は本来的には漁具であり、その集成と評価の上に立って性格づけがなされるべきだと考えるからである。

本遺跡出土の土玉も「祭祀具」として位置づけたいのはやまやまだが、上記の理由から、その評価は後日としたい。

(4) 土製円盤（第88図）

本遺跡からは土製円盤が1点出土している。これまで県内においては、ほとんど類例が知られておらず、わずかに庄和町尾ヶ崎遺跡K7号住居跡、与野市小井戸遺跡8号住居跡で認められるのみである。（文献46、註5）関東地方の他県でも同様の例はほとんど知られていない。

合田芳正氏は弥生時代から古墳時代前期に渡る「土製垂飾品」を集成し、本遺跡例と同様の氏の分類A群について「A群は南関東地方では弥生後期に現れるが、愛知県朝日遺跡などでは弥生中期にすでに存在している。その後弥生後期から古墳前期にいたって主に東海地方から南関東地方にかけて点在するものと思われるが、南関東地方では荒川下流域に分布している。岡谷市橋原遺跡でも発見されていることを勘案すると数は少ないものの中部高地にまで拡がる」（文献47）ことを明らかにしている。また氏は、「古墳時代中期以降に引き継がれてはいない」としているが、本例や小井戸遺跡例、あるいは千葉県千葉市有吉遺跡（文献48）等の例があり、性格を変えて継続していることは明らかである。弥生時代から連綿と続く祭祀具と評価して良いだろう。

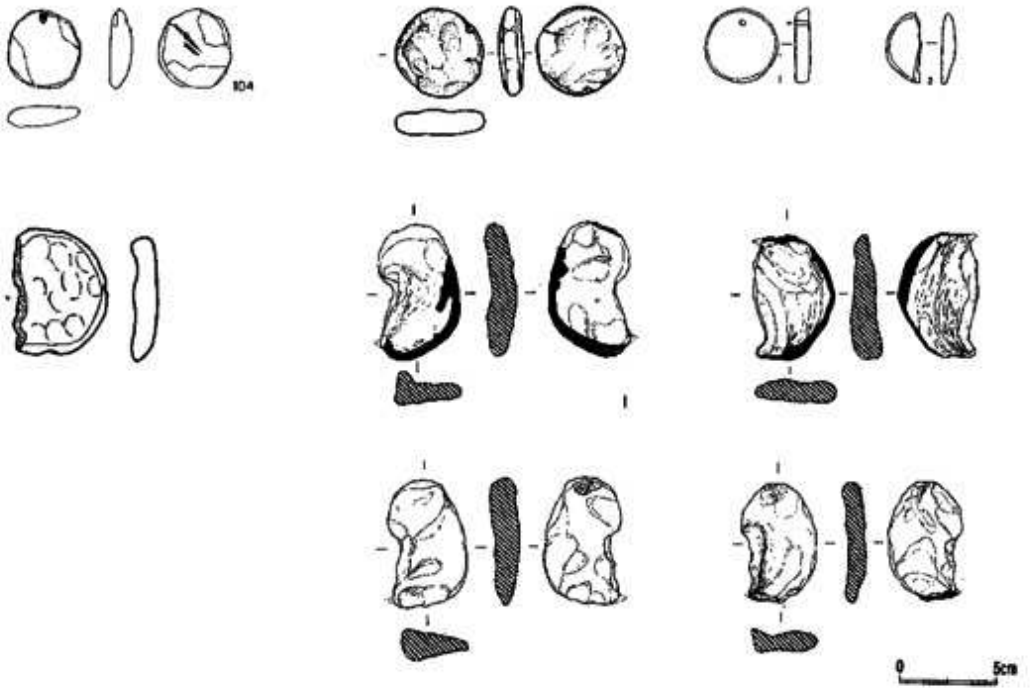
これらの土製円盤の性格について合田氏は「装身具」と捉え、「身につけることによってなんらかの呪力を願う」という機能を推定している。

合田氏の集成資料は、原則的に一孔を有するものであり、その点から言えば蓋然性の高い判断と言えよう。ただ、筆者がここで問題にしているものはいずれも穿孔がなく、垂飾品とは見做し難い。別の性格を考えねばならないであろう。筆者は当初これを鏡形模造品や有孔円盤と同義のものと解釈しようと考えたのだが、各々に固有の形態的指標（前者は紐、後者は穿孔）があり、混同することはできない。

独自の性格づけを行うには、あまりにも情報量が少ないが、ここでは憶測と承知しつつ、次のようなものと考えたい。

昨年、5世紀後半の帆立貝式古墳である舞台1号墳の報告書が刊行された（文献49）が、その造出部から「供物を表現した土師器高杯」（同P39ℓ26）が出土している。各々の供物については表現の抽象性から同定には至っていないが、「土製品」を「供物」に見立てているこの例は注目に値する。また、さきたま稲荷山古墳ではこの「供物」の部分が出土しており（文献50P121）、「神饌埴輪」と報じられている。舞台1号墳と同種のものと考えて良いだろう。

何かの製品の一部ではないが、同様の形態を呈する本遺跡出土例はこれらと同じ性格を持つものと考えても良いではないだろうか。舞台1号墳に見る「土製模造行為」＝「供物の表現」という連関性は、その可能性を高めるものと思われる。ひとまずここでは、これを高杯に盛る「供物」模造品としておきたい。



第88図　各遺跡の土製円盤

また、実測図中の上部に窪みを表現しているが、これはイネ科の植物種実を埋め込むことによってつけられたものである。この窪みがその性格づけの助けになるのかは不明だが、今後の検討のために銘記しておきたい。

本例の他にも幾つか類例を収集したが、それは稿を改めて検討することとする。

b．遺　構

(1)　竪穴住居跡

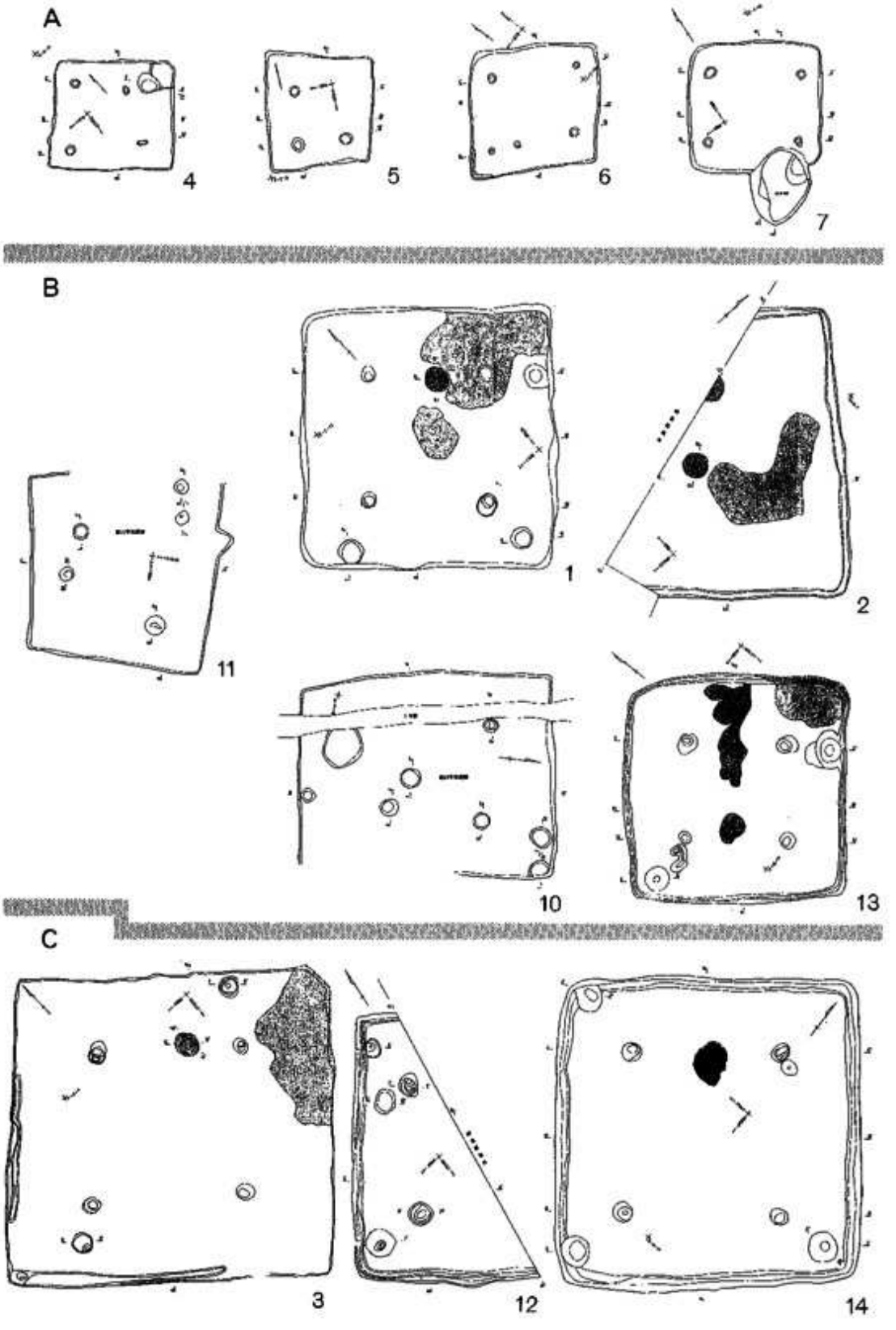
本遺跡からは12軒の竪穴住居跡が検出されている。本項では、Ⅵ a -(1)で設定した各期毎に、それらの住居跡の諸属性について検討を加えることにしたい。

(i)　住居跡の帰属時期

a -(1)-(iii)で述べたように、本遺跡では住居跡が各期にまたがって機能している。従って住居跡検討の前提として、各住居の帰属時期を明示しておく必要がある。

第17表には、各住居の床面出土遺物をもとにした継続期間と覆土上層の土器群の時期、主軸方位と長・短軸の規模、深度、炉の規模を示した。

(ii)　住居跡の規模と主軸方位



第89図　住居跡集成図（S＝1：160）

第17表　住居跡一覧表

No	床面	上層	主軸	長軸	短軸	深度	炉
1	－	Ia・b	N-40-E	6.5	6.5	45	63×53
2	－	Ib	N-55-W	7.2	(6.2)	30	72－62
3	－	Ia～c	N-37-E	8.3	7.7	10	65×55
4	Ia	Ic	N-48-W	3.1	2.8	15	－
5	－	I	N-16-E	3.0	2.8	15	－
6	－	Ia	N-43 W	3.4	3.3	15	－
7	－	Ia	N 59-W	3.4	3.3	15	－
10	不明	不明	N-9-W	6.5	5.1	10	－
11	不明	不明	W-E	4.4	4.4	10	－
12	－	Ib	N-48-E	7.7	(4.7)	20	－
13	Ib・c	Ia～c	N-55-E	5.8	5.7	70	2.6－75
14	Ia・b	Ib・c	N-38-W	7.8	7.7	50	110×80

第18表　貯蔵穴一覧表

NO	位置	形態	規模	特記事項
1	右	不整円形	70×60×40	
	左右	左不整円形	65×60×40	
		右不整円形	55×50×55	
3	右	不整円形	55×50×25	浅い
	左	不整円形	50×50×10	
4	右	方形＋円形	65×60×10	甕出土
			60×50×20	
12	左	不整円形	80×70×55	
13	右	楕円形	100×70×50	小型壺出土
	左	不整円形	60×60×50	
14	左	不整円形	75×70×50	小型壺、高杯出土
	左右	左不整円形	80×70×50	高杯出土
		右不整円形	75×70×50	

第90・91図は、全時期と各期毎に住居跡の長軸をＸ軸、短軸をＹ軸にとり、規模の分布を示したものである。

本遺跡の住居跡は正方形プランを基本とするため、Ｘ軸、Ｙ軸は、ほぼ正比例の関係にある。

住居跡全体では、それらが１辺2.5～3.5ｍ内外の４～７号、4.5ｍ内外の11号、５～７ｍの１・２・10・13号、７～８ｍの３・14号の四つのグループを形成していることがわかる。各々のグループをＡ～Ｄと呼ぶことにしたい。

Ⅰ期はＡの５号住居跡のみである。Ⅱａ期になるとＡ・Ｃ・Ｄの３グループが認められ、大局的に見れば大小２通りの規模の住居跡が認められる。Ⅱｂ期には、小型の一群はなくなり大型のＣ・Ｄのみとなり、Ⅱｃ期には大型の３・14号住居跡が残り、その後住居跡は見られない。

規模から見た住居群の大まかな流れは、Ⅰ期の小型なものから、Ⅱ期に大小規模に分化し、Ⅱｂ期に大型のもののみが残るという展開を見せている。

第90・91図には、全時期、各期毎に主軸方位の分布を示した。全体的な傾向としては、Ｎ－45°－Ｅ、Ｎ－40°－Ｗを中心とする２方向に集中する傾向があり、同方向もしくは直交する方向に軸を持つ住居群が形成されていたことがわかる。ただし、５・10・11号はその範囲を大きく外れており、特異性が窺れる。

時期毎の分布傾向は、まずⅠ期に南北方向の指向性が高い５号住居跡が造営され、Ⅱａ期以降先の２方向へと分化する。そのあり方は集落の廃絶まで継続している。

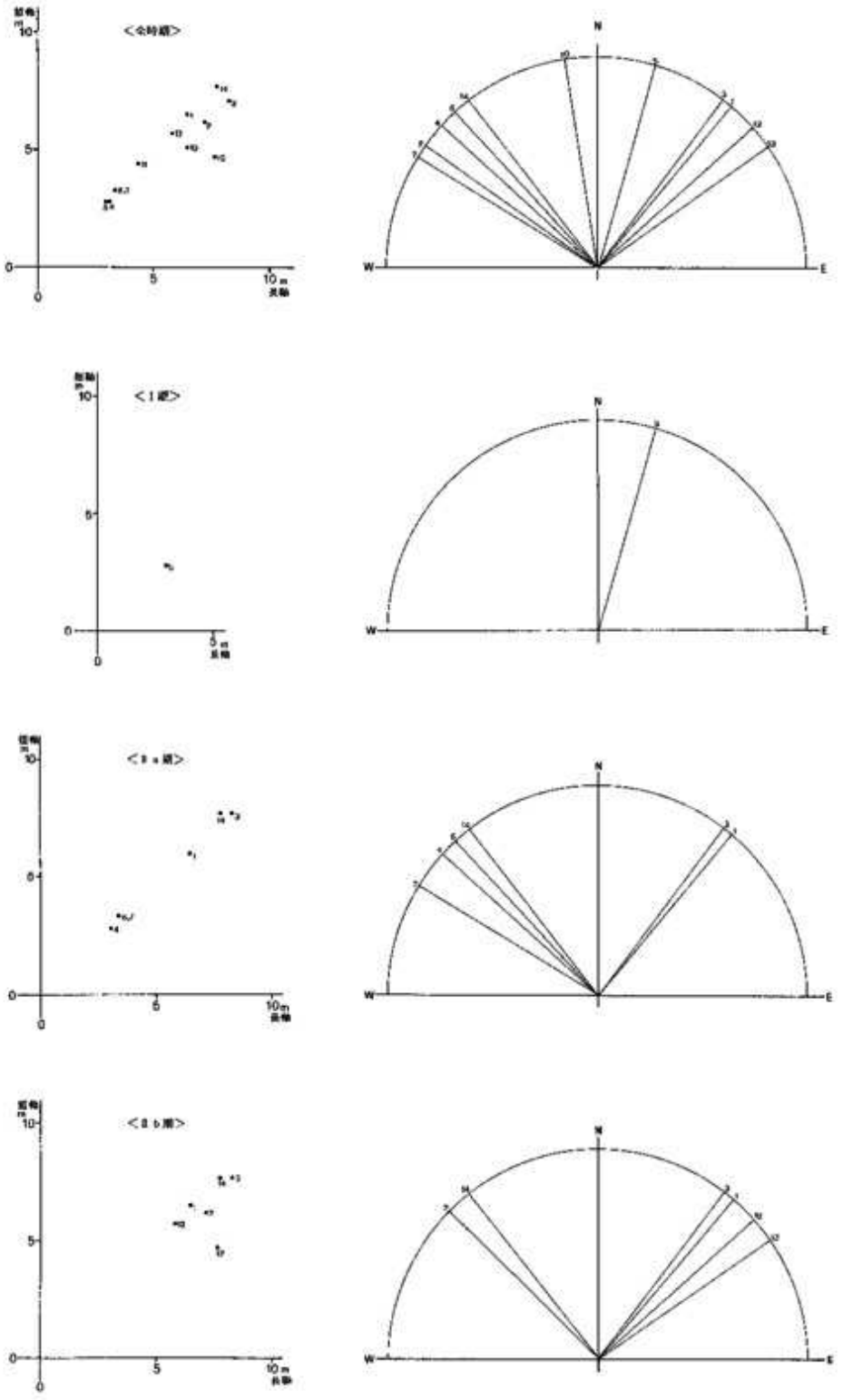
(iii)　炉跡

本遺跡では５軒の住居跡から炉跡が検出されている。そのあり方は次の２通りである。

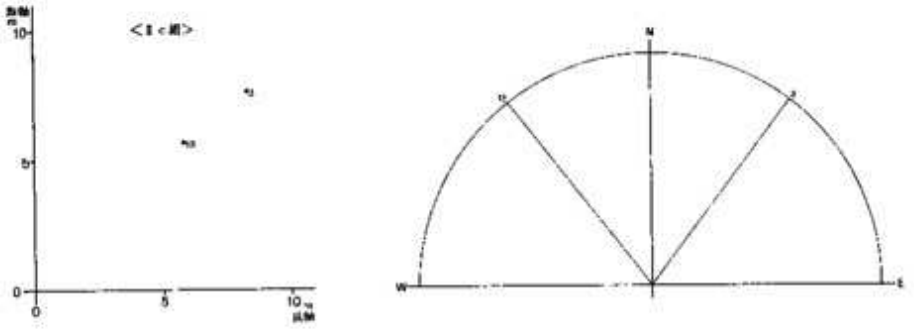
①主軸方向に向かって、奥の２本の柱穴を結んだ中心からやや右に寄る場合…１、３、14号住居跡

②複数の炉跡が存在する場合…２、13号住居跡

このうち前者は、不整楕円形で65×65㎝（１・３号住居跡）、110×80㎝（14号住居跡）の二種類の規模がある。



第90図　住居跡の規模・主軸方向（１）



第91図　住居跡の規模・主軸方向（２）

後者は２号住居跡が径72cm×62cmの不整円形、13号住居跡が2.6×0.5～0.7ｍ、75cm×60cmの溝状、不整円形のものである。

また、その設置方向は、北東方向が１・３・13号、北西方向が２・14号で主軸方位の分布傾向と、当然ながら一致する。

これらの規模や形状が、住居の他の属性、軸方向や大きさ、造営時期等と関連があるかどうかの判断は現段階では保留せざるを得ない。

ただ13号住居跡の不整形の掘り込みは、この時期が初源期のカマドがつくられる時期だけに注意を要するだろう。本例に関して言えば、天井部や袖、燃焼面等を検出していないため、その類のものではないと考えられるが、例えば川越市御伊勢原遺跡（文献51）等にも同様の例があり、今後類例の増加を待って検討する必要がある。

(iv)　貯蔵穴

貯蔵穴は１・３・４・12－14号の６軒の住居跡に認められる。第18表に主軸方位に対して炉側の左右、入口側の左右のどちらに貯蔵穴が位置するかを示したが、全く同じあり方を示すものは一軒もなく、傾向を抽出できるに過ぎない。これらの築造に対して、特に重視されているのは入口側のコーナーと思われ、左右のいずれかに必ず見られ、１・14号では左右両方のコーナーに見られる。また、１・13号は炉側の柱穴の沿長線上右側に設けられ、住居間で柱穴を意識する共通の設置基準があったことを窺せる。平面形は大部分が不整円形である。それ以外に４号住居跡で方形の部分を円形のものが掘り込む形、13号住居跡東側ではスロープ状の張出しが見られる。規模は50～70cmの範囲のものが大部分で、13号住居跡東側のものが大型と言えるだろう。深度は40～50cmの深いものと、10～20cmの浅いものがあり、住居自体の掘り込みが浅いものはやはり浅い。住居の他の属性、大きさや主軸、時期等との関連は明瞭でない。

特筆されるものとしては13号住居跡の西側貯蔵穴（第24図）が挙げられる。Ⅳ－１でも述べたが、北東側に黄褐色粘土を堤状に盛り上げた部分があり、周囲から広口壺、小型壺等が出土している。

この状況と類似した例は御伊勢原遺跡、川越市上組Ⅱ遺跡（文献52）でも見られ、貯蔵穴を中心

とする特別な行為の痕跡として注目される。

また、4・13・14号住居跡の貯蔵穴中からは、甕、小型壷、高杯の出土が見られ、14号住居跡の西側貯蔵穴周辺では特異な出土状況が見られる。上述の13号住居跡の例と合わせて注意する必要があろう。

尚、この出土状況の問題については後程別項を設けて検討する。

(v) 柱穴、壁溝

柱穴は基本的に4本柱穴である。3・14号住居跡で芯々間を結んだ方形から外れた柱穴が検出されているが、各々1本のみで、これをもって建て替えが行われたとは考え難い。また、10・11号住居跡は多くの柱穴が検出されているが、浅く不明瞭である。この4本柱穴以外の柱穴は何に使われたのだろうか。「建て替え」や「拡張」は、これらの解釈として最も普遍的に用いられているが全ての例がそうである確証は、実のところまだ得られない。再考が必要であろう。

概して掘り込みのしっかりした大型のものは、深いしっかりとした柱穴を持ち、浅い小規模なものには浅い不明瞭な柱穴しか見られない。

これは、上屋構造の重量の大小によるものと当然考えられるが、それ以外に建物の根本的な性格の違いによって上屋の構造が異なるという推定もできる。

大小の住居跡の規模の差異については後論するため、ここでは柱穴の深度の差異のみを指摘するのにとどめたい。

壁溝は、2・3・12～14号住居跡で認められる。全周するタイプがほとんどで、3号住居跡のみが部分的に見られる。幅には広狭が見られるが、特に張り出すというようなことはない。深さは様々だが、およそ5～10cmほどである。14号住居跡のものは、部分的に20cmほどの深い部分がある。壁溝は基本的に大型の住居跡のみにしか認められず、規模の大小が掘削の要因の一つとなっている可能性が高い。時期的な傾向等は認められない。

(2) 土坑

古墳時代の土坑として特定できるものは22号土坑のみである。14号住居跡の南西壁の延長線上に位置し、両者に何らかの関係が推定される。

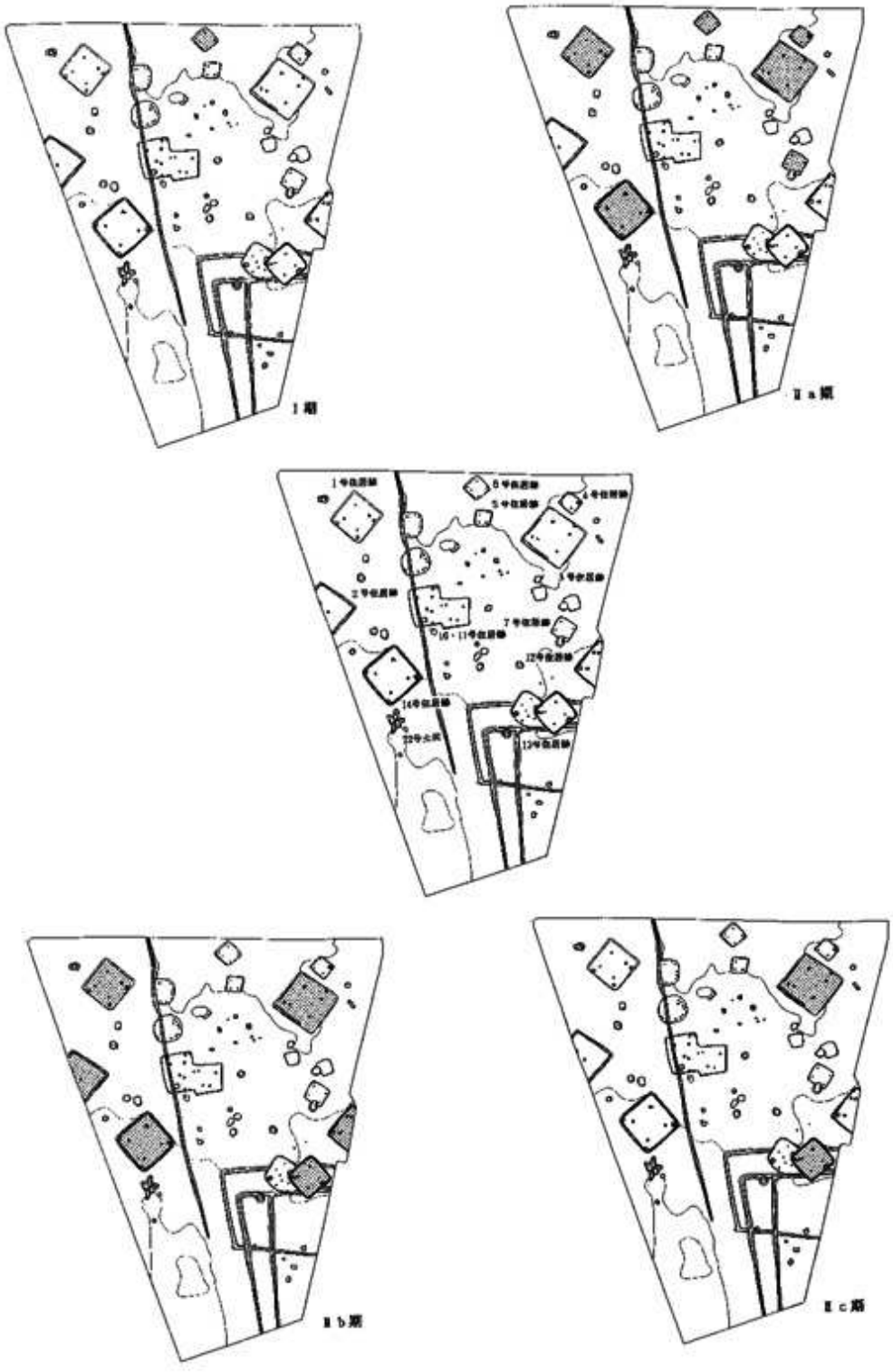
Ⅳでも述べたように、遺物の密な分布が見られ、性格等が問題になるだろう。時期はⅡb期に位置づけられる。

c．集落の変遷（第92図）

bで検討した住居跡の各属性を踏まえ、集落の変遷の様相を各期を追って見ていくことにしたい。尚、10・11号住居跡については時期を特定できないため、本項では扱っていない。次項にて評価を試みることにしたい。

Ⅰ期

5号住居跡のみが認められる。調査区内での集落の造営は本格化しておらず、調査区の北側現狐



第92図　集落の変遷

塚団地部分が該期の中心域と考えられる。

Ⅱａ期

1・3・4・6・7号住居跡が認められる。集落の造営が本格化し、居住域として機能し始める。規模A・C・Dの大小の住居跡が規則的配置をもって造営されている。主軸方位もこの段階から2分化しており、集落造営における基本的方針が確立している。

1・3・14号住居跡はⅡｂ期に継続する。尚、大小の住居の関係性については後論する。

Ⅱｂ期

1～3・12～14号住居跡、22号土坑が認められる。規模Aに属するものは認められなくなり、大型住居のみが集落を構成している。主軸方位も前段階同様二分しているが、東西関係の比率が逆転する。

集落の本格的な経営はほぼ本期をもって終わり、3・13号住居跡のみがⅡｃ期に継続する。

Ⅱｃ期

3・13号住居跡が認められる。集落の衰退期に当たり、今期をもって居住域の機能がなくなる。主軸方位は、この段階まで2方向のまま継続している。

集落の変遷の大よその流れとしては、調査区の北側に中心域を持つⅠ期から、大小の住居が展開するⅡａ期、大型住居のみによって構成されるⅡｂ期を経て、Ⅱｃ期に至り終息すると捉えられる。

集落の中心的な経営時期はⅡａ・Ⅱｂ期である。

d．生活空間としての集落景観の復元に向けて

(1) 住居の規模の大小について

本遺跡ではⅡａ期に、規模AとC・Dの大小の住居が併存する。既に本文中で何度も述べているが、大型のものは掘り込みがしっかりしており、明瞭な4本柱穴で炉・壁溝を持つ。それに対して小型のものは掘り込みが浅く、柱穴が不明瞭で炉を持たない。

この差異を当初は単なる住居間の較差と考えていたのだが、調査の進展に連れ掘り込みが浅く炉も持たず、柱穴も不明瞭なこの竪穴を恒常的居住施設である住居跡とすることに疑問を持つようになった。それは、第3・4号住居跡が同時存在することによって決定的となる。(註6)

Ⅳで述べたように両者は1ｍ程しか離れておらず、同時に別棟として屋根を葺けない関係にある。即ち、両者には単一の屋根がかかっていた可能性があり、複合的な居住空間を形成していた可能性が高いということになる。従って4号住居跡は、無理に本来的な意味での住居としてではなく、大型の住居跡に対応する別機能を持つ平地式に近い建物跡と考えても良いのではないだろうか。同様の様相を示す6・7号住居跡にも同様の評価を与えられるのではなかろうか。

さて、上述の観点から、同時期の他遺跡の報告書を見てみると、川越市御伊勢原遺跡の14、16、20、27、50、54、65号住居跡、川越市女堀遺跡第3号住居址（文献53)、大宮市御蔵山中遺跡のH－10号住居跡（文献54）等でも同様の小竪穴が見られ、時間的制約からそれらを編年的に位置づけて評価したわけではないものの、当遺跡のⅡａ期と同様の状況が見られると思われる。対象地域を広

げれば更に類例は増すであろう。

この小竪穴が住居以外の機能を持つとすると、集落内でどのような性格を持っていたかが問題となる。

(2) 生活空間としての景観の復元

近年の群馬県黒井峯遺跡を代表とする調査成果は、従来行われてきた集落論を大きく超え、生活相の複合体としての集落景観を復元するのに画期的な情報をもたらした。(文献55、56等)

黒井峯遺跡では、榛名山噴火に伴う降下軽石による災害によって、その時点の生活単位群が把握されている。

各単位群は、竪穴式住居と「方形プランの平地式住居、同平地式建物、円形平地式建物、高床式建物、家畜小屋」(文献55 P 169 ℓ 4) によって構成され、群内で完結する生活の様相が見出せる。

黒井峯遺跡に見る各単位群の様相は、集落における生活が、当然のことながら一竪穴住居のみを用いて完結するものではないことを示す。恐らく、それはどの時代の集落を通しても言えることだろう。

上述の本遺跡を始めとする各遺跡における大型で炉を持つ竪穴住居跡と小型で炉を持たない竪穴の併存する様相は、黒井峯に見る竪穴住居跡と平地式建物の関係を彷彿とさせるものである。平地式住居跡こそ検出されていないが、この小竪穴を生活に関わる施設と推定するのは、そう難しいことではない。当時の倉庫を高床式建物と想定すれば、この小型竪穴群はそれ以外の場、黒井峯で見られる「釜屋的なものや作業小屋的要素を持っている建物」(文献55 P 168 ℓ 19) とも考えられる。

10・11号住居跡も同様の平地式に近い建物の可能性があるだろう。各住居跡からほぼ等間隔の位置にあることも、共同の作業場であることを想像させる。

だが、現段階ではこれらの推定は想像の域を出ないのも事実である。

本遺跡におけるⅡa期の様相は、上述した竪穴住居跡と、それを中心に構成される集落内の生活に関する施設が並び立つ複合的景観を推定させるものである。今後該期の諸遺跡の検討を進め、この推定の是非を確かめることにしたい。

e. 住居跡の遺棄と廃棄の評価

(1) 遺物の出土状態に対する評価

本遺跡の13・14号住居跡における遺物出土状況の特異な様相についてはⅣで述べた通りである。この両住居の遺物に対する評価は、本遺跡のみにとどまらず該期の同様の住居を検討していく上で、重要な視点を提供すると思われる。

竪穴住居跡の遺物出土状況については小林達雄氏の「吹上パターン」(文献57 P 14・15) を先駆に、数多くの論考が提出されている。そのいちいちについて触れることは到底かなわないため、ここでは最近の研究の中で最も整理された分類体系を持つ桐生直彦氏の諸論考 (文献58～61) をもとに、両住居跡出土遺物の評価を行うことにしたい。

(2) 桐生直彦氏の分類

桐生氏は、Ⅱ期とした弥生時代－古墳時代中期の「竪穴住居址を中心とした遺物出土状態分析の基本である。「分類」について」（文献58Ｐ２ℓ６）以下の分類基準を示している。（同Ｐ２ℓ21～Ｐ３ℓ12）

「(0) 転用－その遺物に製作された時点とは異なる二次的機能が与えられたもの。次の２者に区分できる。

０ａ　埋設転用－住居の付帯施設として、埋設されることによって機能していたもの。

０ｂ　可搬転用－二次的機能の与えられた道具として、移動することが可能なもの。

(1) 遺棄－廃絶時の住居内に残されたと認定できるもの。次のように区分される。

１ａ　放置遺棄－床面上や厨房施設（炉・カマド）内などから、放置されたと思われる状態で発見されるもの。

１ａ'転落遺棄－１ａの変形ケースで、遺物が放置されていた本来の場所から、貯蔵穴内や壁際などに転落した状態で発見されるもの。

１ｂ　安置遺棄－相対的にみて非日常的な背景により、意図的に置かれたと思われる出土状態を示すもの。実際上の識別は難解である。

１ｃ　破損遺棄－同一個体が床面やカマド内などに散乱しており、破損した遺物を残していったと考えられるもの。

(2) 廃棄－廃絶後の住居址内に捨てられたと認定できるもの。遺物の帰属関係から次の２者に区分できる。

２ａ　もどす・送る廃棄－住居址を埋め戻し、その住居で使用された遺物を廃棄したもの。

２ｂ　他住居からの廃棄－他住居などで使用されて不要となった遺物を捨てに来たもの。

(3) 流入－住居の周囲などに廃棄されて散乱していた遺物が、自然営力や人為的な埋めもどしなどによって住居址埋没時に入り込んだもの。次の３者に区分できる。

３ａ　逆流入－その住居で使用された遺物が一旦住居外周に廃棄されてから、住居址埋没時に竪穴内に戻ったと考えられるもの。

３ｂ　時期的疑似流入－その住居で使用されたものではないが、時期的に同じか、あるいは近似した遺物が流入したもの。３ａとの識別がつきにくい。

３ｃ　混入－その住居とは時期的に全く無関係な遺物が流入したもの。」

氏はこの分類基準を住居構築から埋没完了までの中で、第93図のように位置づけている。

(3) 13号住居跡の遺物出土様相

13号住居跡の遺物出土状況についてはⅣでも述べたが、検討を行う前に再度見ておきたい。第19・20表に実測図Ｎｏ、破片数、遺存率、出土位置、その土器の評価、桐生分類との対応を整理した。

この表からは、13号住居跡の出土遺物が①床面に遺棄したものと、②流入したものの二者に明瞭に分類できることがわかる。

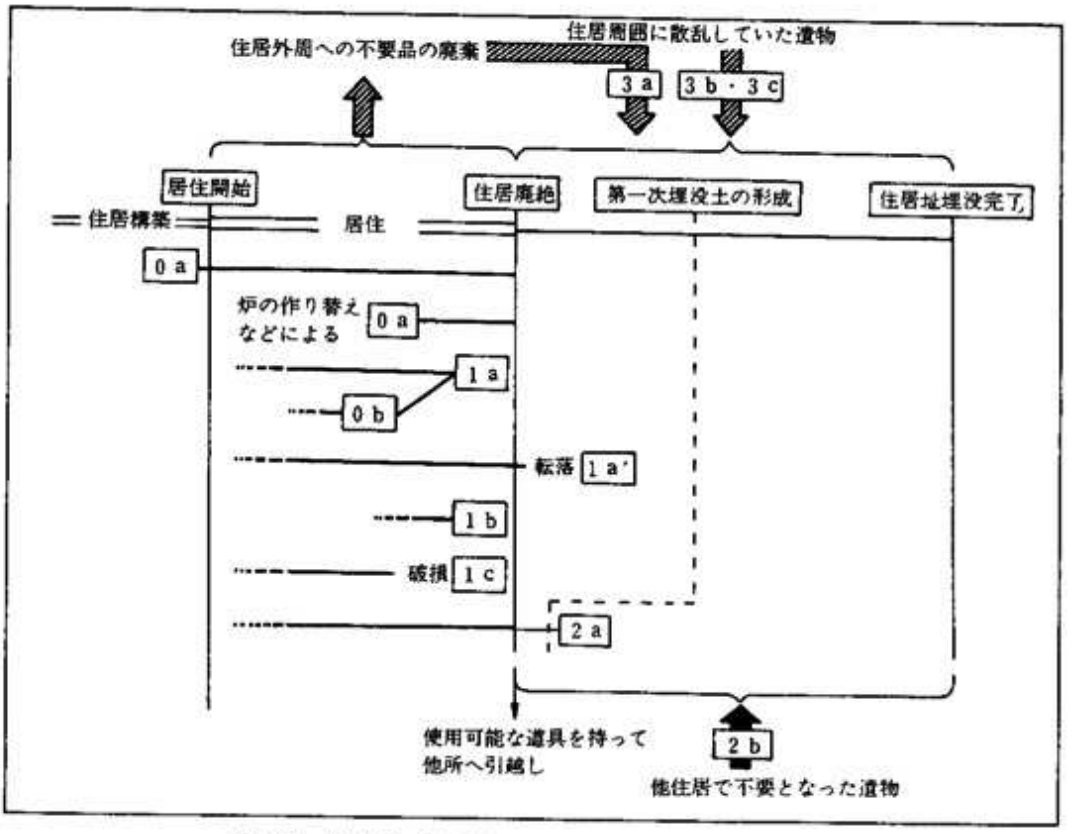
遺棄された遺物群は、更に桐生分類の１ａ～１ｃの様相を呈し、甕・広口壺・小型壺・高杯・鉢

第19表　第13号住居跡出土遺物の評価（1）

NO	破片数	遺存率	出土層位	出土位置	評価	分類	備　考
1	2	ロ20	確認面 3層堆積後	住居中央	流入	3a・b	
2	1	ロ10	6層堆積後	南東壁傍	流入	3a・b	
3	3	ロ20	4層堆積後	住居中央	流入	3a・b	
4	14	30	床面・確認面 4層堆積後	住居中央	流入	3a・b	
5	2	底完	4層堆積後	住居中央	流入	3a・b	
6	1	50	床面	北東壁傍	遺棄か	1a´か	
7	1	10	確認面	南東壁傍	流入	3a・b	
8	1	10	4層堆積後	南ピット傍	流入	3a・b	
9	1	ロ10	5層堆積後	南コーナー傍	流入	3a・b	
10	1	ロ5	確認面	南ピット傍	流入	3a・b	
11	18	胴40	床面	住居内に散在	遺棄・破砕	1c	
12	6	底50	5層堆積後 9層堆積後	住居内に散在	流入	3a・b	
13	1	底完	床面	東ピット傍	流入	3a・b	
14	34	80	床面	床面貯蔵穴周辺を中心に住居内に散在	遺棄・破砕	1c	
15	25	90	17層堆積後	東貯蔵穴内	遺棄	1a	
16	1	80	床面	西側貯蔵穴傍	遺棄	1a・b	煤付着
17	2	ロ20	2・3層中	住居中央	流入	3a・b	
18	1	ロ5	4層堆積後	南西壁傍	流入	3a・b	
19	1	ロ5	7層中	南ピット傍	流入	3a・b	
20	24	70	床面	北東側炉	遺棄	1a・b	煤付着
21	18	杯60	床面	北東壁傍を中心に散在	遺棄か	1cか	煤付着
22	5	杯10	床面・3層	住居西側を中心に散在	流入	3a・b	
23	1	杯10	床面	撹乱内	流入	3a・b	
24	1	杯10	不明	北東側炉周辺	流入	3a・b	
25	1	接完	3層中	南西壁中央	流入	3a・b	
26	1	裾30	床面	撹乱内	撹乱	3a・b	
27	8	裾30	5・6層中	南西壁傍	流入	3a・b	
28	3	裾20	確認面・5層	住居中央・西コーナー傍	流入	3a・b	
29	6	裾10	床面・5層	東貯蔵穴傍・北東側炉	流入	3a・b	

第20表　第13号住居跡出土遺物の評価（２）

NO	破片数	遺存率	出土層位	出土位置	評価	分類	備　考
30	1	90	床面	住居中央	遺棄	1a	煤付着
31	2	体底30	4・5層中	東貯蔵穴周辺	流入	3a・b	
32	1	体底30	床面	南西壁傍	撹乱	3a・b	



第93図　遺物出土状状態のパターン（文献61より転載）

から構成されている。

これらのうち、16・20・21・30の小型壷・高杯・鉢は２次加熱あるいは煤の付着が認められる。また15は、貯蔵穴内がある程度埋まった後、その中に落ちこんだものである。

流入した遺物は、当初その中に「廃棄」したものが含まれていると考えていたが、再度点検した結果、３ａもしくは３ｂの流入の結果によるものと評価するに至った。

上記の結果から、13号住居跡では床面上で一回限りの遺棄が行われたと考えられる。

(4)　14号住居跡の遺物出土様相

13号住居跡同様第21～23表を作製した。これに従って見ていきたい。

第21～23表からは、13号住居跡の①②の様相に加えて、③第５層堆積後の廃棄という三者が認められる。

第21表　第14号住居跡出土遺物の評価（1）

NO	破片数	遺存率	出土層位	出土位置	評価	分類	備　考
1	1	口90	床面	西柱穴傍	遺棄	1b・0a	
2	28	60	5層中	南西壁を中心に散在	廃棄	2b	
9	23	60	床面	北西壁傍	遺棄	1b	
10	34	50	床面	西コーナー	遺棄・破砕	1c	
12	12	20	5層堆積後	南東壁中央 南西壁傍	廃棄1282	2aか	
13	7	30	22層堆積後	西貯蔵穴上	遺棄か	1a′か	
14	43	40	5層堆積後	住居中央を中心に散在 南東壁中央	廃棄1282	2a	
20	30	70	床面	南東壁傍	遺棄・破砕	1c	
25	47	胴50	床面	住居南側を中心に散在	遺棄	1c	
26	35	胴40	床面	西・南柱穴間	遺棄	1a	
28	10	底完	5層内	北東・北西壁傍	流入	3aか	
29	1	底20	床面	西貯蔵穴傍	流入	3b	
37	8	50	柱穴内	北柱穴	遺棄	1a′	
38	6	40	床面	炉西側	流入	1a・b	
39	1	80	5層堆積後	南東壁傍中央	廃棄1282	2aか	
40	2	口10	24層堆積後	西側貯蔵穴内	遺棄	1a′	
41	3	体70	床面	住居中央	遺棄か	1a	
44	4	体30	床面	北西壁中央	流入	3aか	
46	7	90	床面	炉周辺・西貯蔵穴	遺棄	1b	
47	10	70	床面	炉東側	遺棄・破砕	1c	
48	9	70	床面	南東壁傍・西貯蔵穴	遺棄	1a	煤付着
49	2	90	床面	西コーナー 炉・西柱穴中心	遺棄	1b	
50	3	杯20	3層中	西・南柱穴間	流入	3a・b	
51	5	杯30	5層堆積後	南東壁傍中央	廃棄1282	2a	
52	4	杯60	床面	北西壁中央	遺棄	1a	
53	8	杯90	22層堆積後	西貯蔵穴上	遺棄	1a	煤付着
54	7	杯80	床面	西柱穴傍	遺棄・破砕	1c	煤付着
55	2	杯20	5層堆積後	南東壁傍中央	廃棄1282	2a	
56	10	杯30	5層堆積後	住居中央 南東壁傍中央	廃棄1282	2a	

第22表　第14号住居跡出土遺物の評価（2）

NO	破片数	遺存率	出土層位	出土位置	評価	分類	備　考
60	7	60	床面	西貯蔵穴傍	遺棄	1b	
61	4	60	床面	住居中央	遺棄	1b	
66	2	柱完	5層堆積後	西・南柱穴間	廃棄	2a・b	煤付着
67	1	柱完	5層堆積後	西・南柱穴間	廃棄	2a・b	煤付着
68	2	柱70	床面	西柱穴・炉間	遺棄	1b	
69	3	柱80	床面	住居中央	遺棄	1b	
71	1	柱完	床面	北柱穴傍	遺棄か	1bか	
73	9	柱裾80	床面	西貯蔵穴内	遺棄	1a′	
74	10	柱裾完	床面	西貯蔵穴傍	遺棄	1b	
75	7	柱裾70	床面	南西壁傍	遺棄	1b	
76	10	柱裾80	床面	北西壁中央 西貯蔵穴	遺棄	1b	
77	3	柱裾60	床面	北東・北西・南西壁傍	遺棄	1c	
78	2	柱裾30	床面	西コーナー	遺棄	1b	
79	3	柱裾50	床面	炉北側	遺棄か	1cか	
86	12	80	床面	南西壁傍	遺棄	1b	
87	1	完形	5層堆積後	西柱穴傍	廃棄	2	煤付着
94	1	40	床面	住居中央	遺棄	1c	
98	1	完形	床面	北・東柱穴間	遺棄	1a・b	
99	1	完形	5層堆積後	北東壁中央	廃棄	2aか	
100	1	完形	床面	北コーナー傍	遺棄	1a・b	
101	1	70	床面	西コーナー	遺棄	1a・b	
102	1	70	床面	北コーナー	遺棄	1a・b	
103	1	完形	床面	炉東側	遺棄	1a・b	
104	1	完形	5層堆積後	北西壁中央	廃棄	2aか	
105	8	完形	5層堆積後	住居南側を中心に散在	廃棄	2	
106	3	杯90	床面	北西壁傍中央	遺棄	1c	
107	5	30	床面	北西壁傍	遺棄か	1a・b	
108	1	完形	床面	西・南柱穴周辺	遺棄	1b	
109	7	80	床面	西貯蔵穴傍	遺棄	1b	
110	6	80	床面	住居中央	遺棄	1a・b	
111	2	70	床面	東コーナー・南西壁傍	遺棄	1c	
112	6	40	床面	住居中央	遺棄か	1cか	

第23表　第14号住居跡出土遺物の評価（３）

NO	破片数	遺存率	出土層位	出土位置	評価	分類	備　考
113	1	完形	床面	西貯蔵穴傍	遺棄	1b	
114	1	完形	床面	炉南東側	遺棄	1b	

①の遺棄された遺物群には、桐生分類１ａ～１ｃの各種が認められる。これらは大きく、床面上に置かれたもの（１ａ）と、粉々に割ってバラまいた（１ｃ）の二者に分けられ、13号住居跡と同様の様相を呈している。特に前者は炉の北西側と西側貯蔵穴周辺に分布が集中し、壺・甕・高杯・小型壺・鉢・ミニチュアがあり、一通りのセットが揃っている。中でも高杯の比率が高く、Ⅳで述べたように故意に杯部と脚部を分解して別置したり、柱状部のみを置いたりするような特別の処理が行われている。１ａ～１ｃの様相によって器種構成が異なるということはないようである。

また、13号住居跡では高杯や小型壺・鉢に煤や炭化物などの火の使用の痕跡が顕著に認められたが、本住居跡でも48・53・54の高杯に煤の付着、２次加熱痕が認められる。

③と認められる土器群には、ドット・ナンバー1282に含まれる甕・高杯・小型壺と、66・67のような高杯の柱状部のみ、87・105のような完形になるものの三態が認められる。このうち66・67・87には煤の付着が認められる。

(5)　遺棄遺物群と廃棄遺物群の持つ意味

(3)(4)で述べたように、13号住居跡では遺棄の、14号住居跡では遺棄と廃棄の２度に渡る遺物に対する人為的行為が確認された。

では、その人為的行為とは何なのであろうか。ここでは、行為の行われた場と行為の結果である遺物を検討し、それを複合することによって理解を試みたい。

まず、遺棄行為について見てみると、遺棄されたと評価できる遺物の分布から炉の周辺と貯蔵穴が、その際特に意識された場であったことがわかる。13・14号居跡の西側貯蔵穴周辺、炉の周辺の様相がそのことを雄弁に物語っている。

貯蔵穴の機能・性格についての諸説は笹森健一氏によって、①文字どおりの「貯蔵穴」、②「土器・工具の収蔵施設」、③「戸口に胎盤を埋めた」施設、④「貯水用の木製桶」の４つに大きく整理されている（文献62）。笹森氏は、群馬県渋川市中筋遺跡における「木枠状」の痕跡や、貯蔵穴より原位置と考えられる遺物が出土しないことから、「貯蔵穴は木製の（堅牢な）蓋の存在が明らかで、器材の収納あるいは器材を使用した収納施設」（同Ｐ52ℓ14～15）ではないと評価する。また、その内容物は「空か、炭化しにくい有機物の保管しか想定でき」ず、貯蔵穴の周囲に「密閉するために使われた」「粘土の土堤が巡っている」場合があることから、貯蔵穴を「戸口に胎盤を埋めた」施設とする木下忠氏（文献63）の説を支持している。

筆者も深谷市城北遺跡の６世紀の集落において確認した横木を渡した貯蔵穴の様相等から、基本的に木下氏の説を支持したいと考えている。

また、笹森氏は貯蔵穴内からの出土遺物について「貯蔵穴から流れ込むように出土する土器は、

貯蔵穴を密閉したであろう蓋の上や周囲に置かれていた」（P52ℓ27）ものが落ち込んだものと判断しているが、13号住居跡の15や、14号住居跡の40・65・73も同様の状態を示し、氏の見解を補強するものとなっている。

炉が住居跡で持つ意味は、調理や暖をとるという実用的側面も含めて、人間生活において火が持つ意味の一つとして考えられる。「火は実に人間が人間となるために不可欠の要因であった。」（文献64 P13ℓ2）と清水昭俊氏が述べるように、人間生活の最も基本的な道具である火は、生活のあらゆる局面に立ち現れる。「火には様々な側面があるが、それはおおまかに“特定グループを象徴する”側面、“日常生活（家族生活）の中心・象徴”としての側面、“物的媒介物”としての側面を持つ。」（文献65）

炉が持つ調理や暖をとるといった実用的な側面は、「様々なものを具体的な物質レベルで、あるいは象徴的なレベルで異なる者へと媒介する」（文献65）火が持つ「“物的媒介物”」としての側面にかかわるものと言えよう。死者儀礼・出産の際に家の火と別の火によって調理を行う所謂「別火」のような民俗例は、竪穴住居というイエの火が「“日常生活（家族生活）の中心・象徴”」として機能していたことを類推させる。

上述のような、貯蔵穴、炉の様相は、両者の住居内における特異な性格を示すものと言えよう。炉は「生活」そのものの指標であり、貯蔵穴は人間生活の始点である「生誕」に関する儀礼と密接な関係が予想される。極論すれば両者は、住居における生活の象徴として捉えることが可能である。

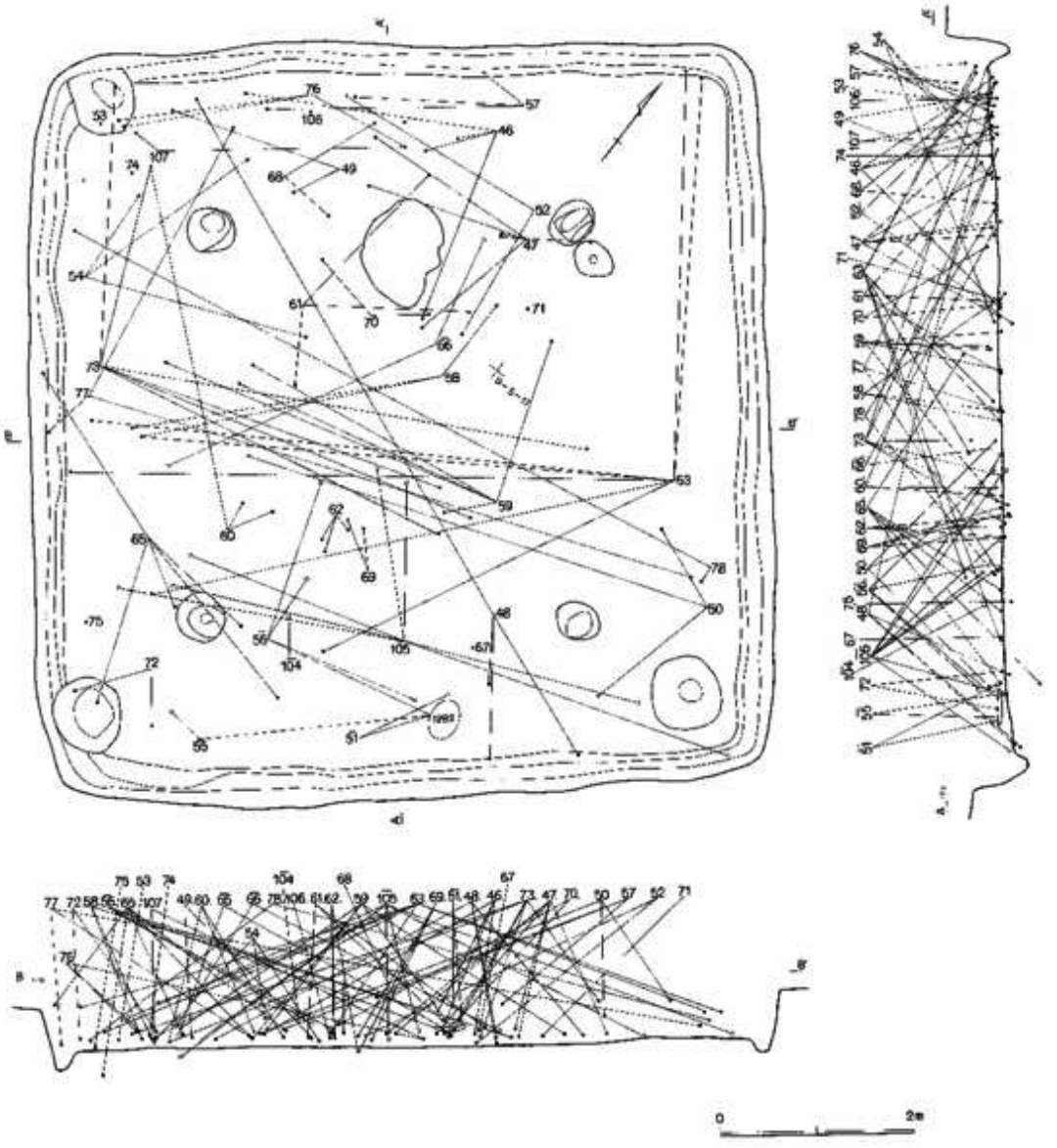
所謂「住居内祭祀」は、住居が生活空間として機能している間の祭祀を示すものではない。住居内の生活における「祭祀」は13・14号の両住居跡に限らず、黒井峯の様な特殊なケースや、住居内に祭壇でもしつらえてある場合を除いてほとんど認定不可能なものである。遺棄された遺物群は、桐生氏の述べる様に「廃絶時の住居内に残された」ものであり、それが祭祀的行為に伴うものであれば、その行為は住居の廃絶に関するものと考えるのが自然であろう。住居内の生活の象徴である炉・貯蔵穴の両者を特に意識した13・14号住居跡の遺棄された遺物群の様相は、「廃絶」に伴う儀礼行為を示すものと考えるのが適切である。

上述のように遺棄されている場の意味づけに基づいて、遺棄された遺物群を住居の廃絶に伴う儀礼の痕跡として理解したわけだが、それは遺物そのものにはどのように現れているだろうか。

その点から高杯に対する処理は見逃せない。第94図は、第14号住居跡の特に高杯のみの出土状況を図化したものである。住居内の各所に分散する遺物の分布状況は、本来的には「流入」の結果として理解されるが、本跡の場合にはそれは杯部と柱状部以下の別置によるものである。また、柱状部のみの遺棄も特異である。

このような処理は現段階では他遺跡に認められず、本遺跡独自のもののようである。高杯それ自体の持つ意味については窺い知れないが、その「供膳」という機能がこのような行為を生むのかも知れない。いずれにせよこの高杯の様相も本跡の遺棄が何らかの儀礼的行為であることを示すものである。

また、高杯や小型壺に付着する煤は、その際に火が使用された可能性を示すものとして注目される。



第94図　第14号住居跡高杯出土状況

次に、廃棄について取り扱う。14号住居跡における廃棄の様相については先述の通りである。同様の廃棄行為は上組Ⅱ遺跡第97号住居跡等でも見られ、認定に多大な労力を必要とするが、該期の集落に一般的に見られる可能性が高い。また、1・3号住居跡では、廃棄された土器群に焼土や炭化物が伴っている。上組Ⅱ遺跡では、87号住居跡で埋没過程に火を焚いた痕跡が検出されており、この廃棄行為に伴っても火を使用する場合があることがわかる。これは14号住居跡に見られる先の三態の出土状況と合わせて、この行為が単なる不用物の廃棄ではなく、特別な意図を持ったものであることを示している。

このように、住居廃絶時、埋没時の二度に渡る行為を抽出できたわけだが、これはどのような性格を持つ行為なのだろうか。

前者は前述のように住居の廃絶に伴う「儀礼」行為の結果と考えられる。住居における生活の象徴である炉と貯蔵穴を巡る本遺跡に見られる様相は、そのことを雄弁に物語る好例と言えよう。

後者については様々な解釈が可能である。(註7) 一つの考え方としては、その埋没途中の住居を含む生活空間の、生活の場としての機能を停止する際に行った儀礼の結果とも考えられる。また関係が今一つ明瞭でないが、土製円盤の存在も注意される。あるいは解釈の鍵となる可能性もあるだろう。いずれにせよ類例の集積と分析を経て解釈を行う必要があるため、ここではこれ以上述べることは避けたい。

このような基礎的作業の積み重ねとそれに対する担当者の評価が、今後の検討の際には肝要であることを申し添えておきたい。

註

1　筆者は「様式をそれぞれの形式の縦方向の時間的な型式の組列を、型式論的に共通する属性によって横断する同時代性を持つ型式群として捉えている。そしてそれを検証する方法として、空間的な広がりを持つ複数例の層位論的同時性をもつ一括遺物が使用されるのが望ましいと考える」(文献31 P 79 ℓ 3 ～ 5) ため、杉原氏の「和泉式」という「様式」の認定は不充分と考える。

2　所謂「和泉式」土器の研究には、杉原荘介、中山淳子、小出義治、玉口時雄、岩崎卓也、松浦宥一郎の各氏による先駆的な研究がある。ここでは研究史に関わる部分はとりあえず除外し、研究の現状のみに対象をしぼることにしたい。

3　1個の粘土塊から工具を使わずに指のみによって成形するものを手捏ねとする。14号住居跡－96等が該当する可能性がある。

4　筆者は、「様式」を「空間的な広がりを持つ複数例の層位論的同時性を持つ一括遺物によって」(文献31 P 92 ℓ 4 ～ 5) 検証される型式群と考え一遺跡内における資料では「型式論的な型式群の抽出、分布論的な一括性による同時性の検証」が充分でないため、一遺跡内の「様式」として「期」を使用している。

5　同様の遺物の検索については文献66を用いた。小井戸遺跡例は山川守男氏に御教示頂いた。

6　桐生直彦氏 (文献60) が指摘するように、防火対策上の観点からすれば、この近接関係は「住居期」としての先後関係を持つ可能性が高い。その点も含めて、今後の検討課題としたい。藤田憲司氏の指摘についても、同様に今後検討していきたい考えている。(文献67)

7　例えば鈴木敏弘氏が主張する「「纒向型」を原型とし、その影響下にある」(文献68 P 66 ℓ 14) 「集落内祭祀」が5世紀に至って変容したものとも考えられるが、情報量の限られた現状でこれ以上述べるのは控えたい。

文献

1．堀口万吉　1986　「埼玉県の地形と地質」『新編　埼玉県史別編3　自然』 P 7 ～80　埼玉県

2．橋本富夫・今井正文　1986　「八幡耕地第2次発掘調査」『昭和60年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』 P 17～64　桶川市教育委員会

今井正文・関根訪・粒良紀夫・守屋薫　1989　「八幡耕地遺跡第４次発掘調査」『昭和63年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』Ｐ１～55　桶川市教育委員会
関根　訪　1991　『八幡耕地遺跡』　桶川市文化財調査報告書第21集　桶川市教育委員会
3．粒良紀夫　1990　『宮前遺跡』　桶川市文化財調査報告書第20集　桶川市教育委員会
粒良紀夫　1991　『平成２年度桶川市遺跡発掘調査報告書』　桶川市教育委員会
4．増田逸朗・坂本和俊・佐藤好司・江口尚史　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』　埼玉県史編さん室
5．今井正文・関根訪・粒良紀夫・豊田敏彰　1988　「楽中遺跡発掘調査」『昭和62年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』Ｐ１～61　桶川市教育委員会
6．吉川國男・土肥孝・赤石光資・金子正之・鈴木秀雄・加藤公一　1977　『砂ヶ谷戸Ⅰ・Ⅱ遺跡楽上遺跡』桶川市文化財調査報告書第９集　桶川市教育委員会
関根　訪　1990　「Ⅵ楽上遺跡第３次発掘調査」『平成元年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』Ｐ25～57　桶川市教育委員会
7．赤石光資・金子智江・福島正義　1979　『殿山遺跡』　上尾市文化財調査報告第６集　上尾市教育委員会
山崎広幸・荒井幹夫・実川順一　1991　『殿山遺跡－第２次調査－』　上尾市文化財調査報告第36集　上尾市教育委員会
8．小宮山克巳　1992　『雲雀遺跡』　上尾市文化財調査報告第38集　上尾市教育委員会
9．埼玉県　1982　『新編　埼玉県史資料編２　原始・古代』Ｐ191・192
10．車崎正彦　1990　「江川山の鏡－古墳出土鏡をめぐって－」『上尾市史調査概報創刊号』Ｐ25～45　上尾市教育委員会
11．赤石光資・小島清一　1983　「小谷津遺跡」『小谷津遺跡・下遺跡・宿前Ⅰ遺跡』　上尾市文化財調査報告第16集　上尾市教育委員会
12．安岡路洋・増田正博・神田徳男・高橋俊男・土肥　孝・須永章一　1974　『後山遺跡』　上尾市教育委員会
13．今井正文・早坂廣人　1990　『西Ⅰ遺跡』　下日出谷西遺跡群発掘調査会
14．柳田敏司・吉川国男・下村克彦ほか　1969　『高井遺跡』　桶川町文化財調査報告Ⅲ　桶川町教育委員会
15．江坂輝弥・吉川國男・岡島　格・市川正史　1976　『高井北遺跡』　桶川市文化財調査報告書第８集　桶川市教育委員会
16．今井正文・関根訪・粒良紀夫　1988　「愛宕遺跡発掘調査」『昭和62年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』Ｐ19～61　桶川市教育委員会
17．橋本富夫　1990　『愛宕耕地遺跡第３次発掘調査報告書』　上日出谷南遺跡群発掘調査会
18．今泉泰之　1978　『宮遺跡』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第19集　埼玉県教育委員会
19．吉川國男　「槻戸Ⅱ遺跡」『北本市史　第三巻上　自然原始資料編』Ｐ549～560　北本市教育委員会

20. 橋本富夫・今井正文　1983　「丸山遺跡発掘調査」『昭和57年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』P49～67　桶川市教育委員会
今井正文　1985　「丸山遺跡第２次発掘調査」『昭和59年度桶川市遺跡群発掘調査報告書』P31～53　桶川市教育委員会
21. 塩野　博・増田逸朗　1970　『西台遺跡の発掘調査』桶川町文化財調査報告Ⅳ　桶川町教育委員会
22. 粒良紀夫　1992　『東台Ⅰ遺跡』桶川市文化財調査報告書第22集　桶川市教育委員会
23. 今井正文・関根　訪　1989　「バチ山遺跡発掘調査」『泉野遺跡（第２次）・バチ山遺跡』P13～25　桶川市文化財調査報告書第18集　桶川市教育委員会
24. 塩野　博　1969　「川田谷ひさご塚古墳」　『桶川町文化財調査報告Ⅱ』P１～24　桶川町教育委員会
25. 塩野　博・駒宮史朗　1978　『川田谷古墳群』桶川市文化財調査報告書第10集　桶川市教育委員会
26. 下村克彦　1990　「第１節　荒川沿岸の遺跡」　『北本市史　第三巻上　自然・原始資料編』P302～307、314～349、352～357、368～378、447～497、502～528　北本市教育委員会
27. 埼玉県立浦和第一女子高等学校社会クラブ　1960　「八重塚（一号墳）発掘報告」『ゆうかり』P34～41　浦和第一女子高等学校
28. 安岡路洋　1963　「桶川町川田谷狐塚発見の石器」『埼玉文化　第136号』　P５～７
29. 塩野　博　1969　『桶川町文化財調査報告Ⅰ』　桶川町教育委員会
30. 杉原荘介　1972　「中期の土師式土器」『土師式土器集成　本編２　中期』P７～11　東京堂出版
31. 福田　聖　1992　「鍛冶谷・新田口遺跡出土土器の分析－前篇－」『研究紀要　第９号』P59～102　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
32. 坂野和信　1991　「和泉式土器の成立について－序論－」『土曜考古　第16号』P69～92　土曜考古学研究会
33. 立石盛詞　1983　「土器について」『後張　本文編Ⅱ』P236～258　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
34. 村井好文　1983　「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所集報Ⅴ』P42～78　日本考古学研究所
35. 坂口　一　1987　「群馬県における古墳時代中期の土器の編年－共伴関係による土器型式組列の検討－」『研究紀要４』P29～48　（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
36. 坂野和信　1988　「和泉式後期土器の様相－竈導入期の土器群－」『紀要　第２号』P１～41　本庄市立歴史民俗資料館
37. 坂野和信　1991　「和泉式土器の成立過程とその背景－布留式後期土器との編年的検討－」『埼玉考古学論集』P585～633　（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団
38. 比田井克仁　1988　「南関東五世紀土器考」『史館第20号』P52～75　史館同人

39. 長谷川厚　1991　「7 関東」『古墳時代の研究 6　土師器と須恵器』 P 95～106　雄山閣出版
40. 寺沢　薫　1980　「弥生土器の形式分類」『六条山遺跡』 P 27～38　奈良県文化財調査報告書第34集　奈良県立橿原考古学研究所
41. 沼沢　豊・深沢克友ほか　1977　『千葉市東寺山石神遺跡』　(財) 千葉県文化財センター
42. 鳥海光弘　1977　「千葉市石神 2 号墳出土石製品にしるされた動物の歯痕について」『千葉市東寺山石神遺跡』 P 512～516　(財) 千葉県文化財センター
43. 鈴木孝之　1983　「5　紡錘車について」『後張　本文編Ⅱ』 P 265～272　埼玉県埋蔵文財調査事業団報告書第26集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
44. 福田　聖　1993　「鍛冶谷・新田口遺跡の漁具－前篇－」『研究紀要　第 8 号』　戸田市立郷土博物館 (未刊のためページ未詳)
45. 田部井功　1987　「荒川流域の土錘・石錘」『荒川人文Ⅰ』 P 69－92　埼玉県
46. 笹森紀巳子　1984　『尾ヶ崎遺跡』 P 156　庄和町尾ヶ崎遺跡調査会
宮　昌之　1986　『札之辻・小井戸』 P 284　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第55集 (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
47. 合田芳正　1992　「弥生時代土製垂飾品の二・三について」『青山考古　第10号』 P 13～21　青山考古学会
48. 種田斉吾・阪田正一　1975　『千葉市東南部ニュータウン 3 －有吉遺跡 (第 1 次) －』 P 445　日本住宅公団首都圏宅地開発本部・ (財) 千葉県都市公社
49. 西田健彦・杉山秀宏　1992　『舞台・西大室丸山』　群馬県教育委員会
50. 埼玉県教育委員会　1980　『埼玉稲荷山古墳』 P 121
51. 立石盛詞　1989　『御伊勢原』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第79集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
52. 黒坂禎二　1989　『上組Ⅱ』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集　(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
53. 小泉　功・増田逸朗　1976　「川越市女堀遺跡－和泉式土器の編年的位置－」『埼玉考古　第15号』 P 50～76　埼玉考古学会
54. 渡辺正人・鍋島直久・田代　治・山形洋一　1992　『御蔵山中遺跡Ⅱ』　大宮市遺跡調査会報告第33集　大宮市遺跡調査会
55. 石井克巳　1990　「黒井峯遺跡」『古墳時代の研究 2　集落と豪族居館』 P 167～171　雄山閣出版
56. 石井克巳　1986　『黒井峯遺跡確認調査概報』　子持村文化財調査報告第 4 集　子持村教育委員会
石井克巳　1987　『昭和61年度黒井峯遺跡発掘調査概報』　子持村文化財調査報告第 6 集　子持村教育委員会
57. 小林達雄　1965　「遺物埋没状態及びそれに派生する問題 (土器廃棄処分の問題)」『米島貝塚』 P 14・15　庄和町文化財調査報告第 1 集　庄和町教育委員会

58. 桐生直彦　1984　「カマドを有する住居址を中心とした遺物の出土状態について（素描）」『神奈川考古　第19号』P221～246　神奈川考古学会
59. 桐生直彦　1986　「新刊紹介　宇津木台遺跡群Ⅳ」『東京の遺跡　No11』P８　東京考古学会
60. 桐生直彦　1987　「遺物出土状態の分析に関する覚書ーカマド出現前の住居址を中心としてー」『貝塚38』P１～20　物質文化研究会
61. 桐生直彦　1987　「竪穴住居址を中心とした遺物出土状態の分類についてー研究史と整理ー」『東国史論　第２号』P１～19　群馬考古学研究会
62. 笹森健一　1990　「竪穴住居の使い方」『古墳時代の研究２　集落と豪族居館』P47～68　雄山閣出版
63. 木下　忠　1970　「戸口に胎盤を埋める呪術」『考古学ジャーナル　No42』P12～19　ニュー・サイエンス社
64. 清水昭俊　1974　「火の民族学」『日本古代文化の探求　火』P13～95　社会思想社
65. 福田　聖　1993　「方形周溝墓と火」『戸田市史研究　第９号』　戸田市立郷土博物館（未刊のためページ未詳）
66. 国立歴史民俗博物館　1985　『研究報告第７集　共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇』　国立歴史民俗博物館
67. 藤田憲司　1984　「単位集団の居住領域ー集落研究の基礎作業としてー」『考古学研究　第31巻２号』P58～78　考古学研究会
68. 鈴木敏弘　1991　「集落内祭祀の諸問題」『赤羽台遺跡ー八幡神社地区－２』P66～100　東北新幹線赤羽地区遺跡調査会・東日本旅客鉄道株式会社

２．狐塚遺跡の縄文時代について

狐塚遺跡の縄文時代では、早期から後期にかけての遺構が検出されるとともに、量的には多くはないものの貴重な遺物が出土しているため、ここでは若干の私見を混じえて総括して置きたい。

縄文時代の遺構は、早期では条痕文期鵜ガ島台式期の住居跡１軒、早期末の炉穴２基、中期では加曽利ＥⅣ式期の住居跡１軒、後期では堀之内Ⅱ式期の住居跡１軒、土壙３基が検出されている。

土器は、早期の撚糸文系土器群から後期の加曽利Ｂ式までが連綿と出土しており、堀之内式土器を中心とするが、各時期少数でも重要な土器群が出土している。

ａ．撚糸文系土器群について

遺構は検出されなかったものの、本遺跡からは井草式から夏島式までの良好な土器群が出土している。特に、井草Ⅰ式とⅡ式は量的にも纏まっており、荒川中流域左岸の桶川、上尾市付近では質量的にも群を抜いているものと思われる。撚糸文期の遺跡は大枠での安行台地や大宮台地の先端部で多く発見されており、しかも、比較的小さな河川沿いに形成されている場合が多い。狐塚遺跡は大河川である荒川沿いに形成されているが、やはり荒川に注ぐ小河川で開析された谷沿いに存在しており、大河川の氾濫からは逃れられる位置に形成されている。

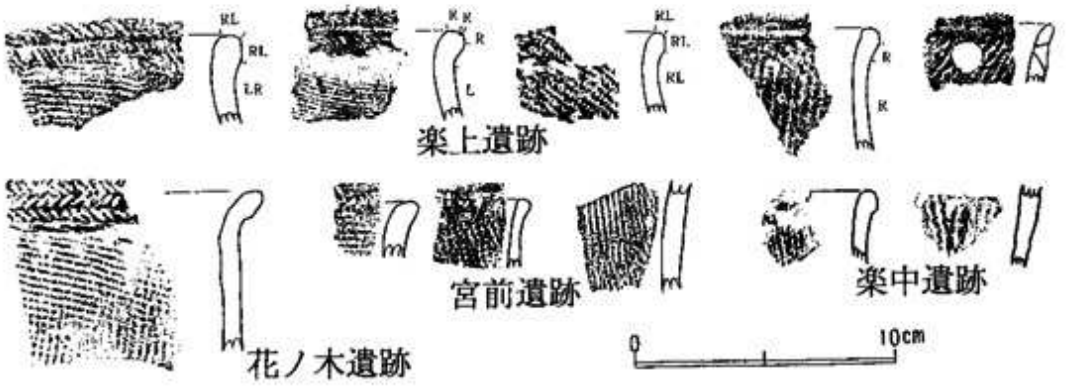
撚糸文系土器群は合計216点出土しており、口縁部が45点、胴部が171点である。その内の大半が井草式土器である。撚糸文系土器群は、縄文施文土器が194点で89.8％を占め、撚糸文施文土器が20点で9.3％である。この割合は、大宮台地に見られる井草式特有の様相である。夏島式でもこの特徴を受け継ぎ圧倒的に縄文施文が優勢であるが、条線文施文土器が１点、稲荷原式期では不確定要素を残すが沈線文施文土器が１点出土している。原体では最終段でＲ撚りのものが多く、縄文ではＲＬが188点に対しＬＲが６点であり、97％がＲＬである。撚糸文ではＲが16点、Ｌが４点で、４：１の割合となるが、破片数が少ないためその比率は低いが、実際はさらに高率でＲが多いものと思われる。口縁部で時期の確定されるものは、井草Ⅰ式23点、井草Ⅱ式15点、夏島式８点、稲荷原式１点であった。

本遺跡の井草Ⅰ式は口縁部文様帯が比較的広く、構成もしっかりしていることから、典型的な井草Ⅰ式とされるものであるが、口縁部文様帯の施文手法に特徴がある。第56図１、６は口唇部から縦走縄文を施文した後に、口縁部に横位施文による斜行縄文を施文している。つまり、最終工程として口縁部文様帯施文が行われるものであり、胴部破片の第57図１、２、５、８等からもそれは明白である。殆どの口縁部破片で、口縁部文様帯が最後に施文されていることが確認されるが、その下に縦走縄文が確認される破片は約半数を占めている。この口縁部の縦走縄文上に斜行縄文を施文しないとすると、口縁部文様帯を持たない井草Ⅱ式となる。本遺跡出土の井草Ⅱ式土器の中には、井草Ⅰ式とほぼ同様な口唇部形態を呈し、口縁部文様帯を持たないものが存在する。非常に近接した時間差を感じざるを得ないが、所謂文様帯構成からでは厳然と区別されるものである。

本遺跡の井草式の口唇部文様帯は上端面と外端面の２段に縄文施文するものが多く、口唇部形態でもⅠ式とⅡ式では類似する。確かにⅠ式の中には口唇部に３段に亙って施文するものが存在するが、基本的には２段構成である。口唇部直下には指頭による整形痕が明瞭に付くが、Ⅰ式ではやや浅いものが、Ⅱ式では深く明瞭に施文するものが多くてアクセント化している様である。口縁部の指頭圧痕が強い程、口唇部の外反度合は大きくなる。

本遺跡の井草Ⅰ式とⅡ式との関係は、口唇部形態、口唇部施文、口縁部施文、口縁部指頭整形痕等から連続的な変遷過程が明瞭であり、あまり時間差のないことが把握される。また、口縁部の指頭圧痕が施文原体の側面圧痕文等と同様に捉えられるのならば、一つの文様帯と看做すことが可能となり、井草Ⅱ式としてではなく、井草Ⅰ式の最も新しい様相として把握されることになる。であるとすれば、本遺跡の井草式土器は井草Ⅰ式の中でも新しい第２段階（宮崎・金子1989）から、最も新しい第３段階のものが存在することになる。井草Ⅰ式の口縁部文様帯幅がやや広い点に古相を帯びるが、地文に口縁部から縦走縄文を施文することから、新しい段階に比定される可能性が高く、第３段階における一括的な土器群の様相を示している可能性があることも指摘して置きたい。口縁部における指頭圧痕及び爪形文が顕著な例として、大宮台地では西大宮バイパスNo４遺跡（山形1986）があり、県内では屋田遺跡（今井1984）、万吉下原遺跡（今井1991）等がある。

また、本遺跡の夏島式土器は口唇部に指頭圧痕を残し、口縁部がやや外反するもの、口唇部が肥厚外反するもの、無肥厚角頭状及び丸頭状口唇部が外反する等、夏島式の中でも古相を帯びている。条線文施文土器は口端部に異方向施文を行い、この段階に特徴的な施文手法であり、井草Ⅱ式



第95図　桶川市内出土の撚糸文系土器群

からの微妙な変化を遂げている土器である。何れも夏島式古段階（宮崎1991、金子1993）に比定されるものである。非常に近い内容の土器群は、伊奈町向原遺跡の包含層から一括的に出土している（金子1984）。

桶川市域内において撚糸文系土器群の出土事例は比較的少ないが、撚糸文土器を始め早期の遺跡は現荒川に面する台地と、元荒川流域では立地等同様相を呈する様である。現荒川流域は前期になってから遺跡数が増加し規模も大きくなる様であるが、元荒川流域では不明な点が多い。現荒川流域で撚糸文系土器群が出土する遺跡は西台遺跡（塩野1970）、楽上遺跡（早坂1990）、楽中遺跡（粒良1988）、宮前遺跡（粒良1990）等が存在し、狐塚遺跡に最も近い遺跡は南側の小さな谷を隔てた対岸の台地上に立地する楽上遺跡である。楽上遺跡からは井草Ⅰ式と夏島式が若干出土している。また、上流の西台遺跡では稲荷台式土器が、やや下流の宮前遺跡でも井草Ⅰ式と夏島式が若干ではあるが出土している。また、元荒川流域では支流の赤堀川流域に後谷遺跡、宮ノ脇遺跡、加納城址遺跡、花ノ木遺跡等で撚糸文系土器群が検出されており（早坂1989）、後谷遺跡では井草Ⅰ式から夏島式が、宮ノ脇遺跡と花ノ木遺跡では井草Ⅰ式が若干出土しており、加納城址遺跡では稲荷台式土器が出土している。

元荒川流域における大宮台地の付け根部分では地盤沈降が進んでおり、撚糸文期の遺跡立地が台地の先端部ということもあって、遺物検出面が氾濫土である粘土層に隠蔽されている場合が多い。桶川市の若干上流に当る鴻巣市の中山谷遺跡（細田1989）では「あおねば」と呼ばれる粘土層が縄文時代早期の遺物包含層を被覆しており、その下から井草Ⅱ式～夏島式古段階の土器群と山形押型文の良好な土器群が出土している。また、桶川市後谷遺跡の第４次調査では、現水田面下約３ｍ下で粘土層を介して井草式土器を含む包含層が検出されている（今井1989、関根1992ａ）。現荒川流域と元荒川流域とでは現在の地形にこそ差異がみられるが、両地域における遺跡の在り方には大きな相違が見られないものと思われる。撚糸文期の遺跡は大きな河川に流れ込む小河川によって開析された小支谷の台地の縁辺に形成されることを常としており、この様な地形を呈する地域では今後撚糸文期の遺跡の発見例が増えるものと思われ、氾濫土の下の部分の調査も必須となってきている。これらの遺跡群の中にあっても、狐塚遺跡は質量ともに優れていると言えよう。

b．条痕文系土器群について

狐塚遺跡からは鵜ガ島台式期の住居跡１軒と早期末の炉穴が２基検出されている。住居跡は攪乱等を受けており依存状態は良好ではないが、およそ隅丸の長方形を呈するものと思われ、壁際に柱穴が巡るものである。炉は検出されていない。出土土器は縦位分割及び櫛状区画を基本にして、部分的に曲線文を組み合せる比較的構成のしっかりしたモチーフを描く鵜ガ島台式土器である。グリッド出土の鵜ガ島台式土器もほぼ同様相を呈し、単一時期の比較的纏まった資料であることが理解される。

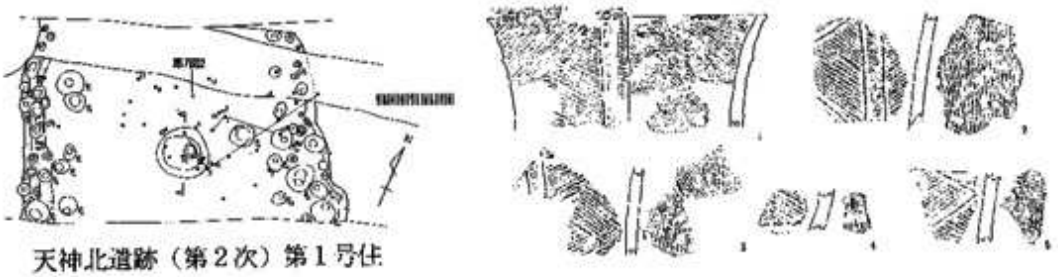
条痕文期の住居跡は桶川市内では天神北遺跡で、野島式期の住居跡が２軒検出されている。天神北遺跡は第１次調査（関根1992ａ）と第２次調査（関根1992ｂ）が行われ、それぞれ１軒の住居跡が検出されている。隣接地を調査しているため遺跡の時期が限定され、良好な遺物が出土している。住居跡からは細隆起線区画内に集合沈線文を充填施文する土器群が出土しており、モチーフは文様帯を縦位に分割し、さらに櫛状区画を主体とする区画文が配されるものである。第２次調査の第１号住居跡からは器形復元のできる大形破片が出土しており、口唇部には貝殻背圧痕文の付く土器が出土している。遺跡全体からは野島式の古段階から中段階の土器群（金子1982）が出土しており、繊維を含まず薄身で堅緻な槻木下層式土器が１点、底径の小さい平底が１点出土している。また、第１号炉穴からは石製の垂飾が１点出土している。天神北遺跡は住居跡の検出、出土遺物等から今後基準資料となる貴重な遺跡といえる。県内の野島式期の住居跡は不確定要素を残すものの岩槻市諏訪山遺跡（横川1971）で25軒、嵐山町金平遺跡で６軒（植木・金子1980）、浦和市明花向遺跡（金子1984ａ）で小竪穴状遺構が２軒等検出例が増加しており、面的調査の結果もあって、炉穴も含め該期の居住形態がしだいに明らかになりつつあるのが現状である。

鵜ガ島台式期では荒川をやや下った上尾市天沼遺跡（藤波1984）で、住居跡が１軒検出されている。住居跡は約半分が削平されており、楕円形の小竪穴状を呈し、復元される大形破片が出土している。土器は２帯の文様帯を持つもので、口唇部が先細り状に内折し、口端部に刻みを施すものである。Ⅰ帯上下端は屈折部で区画され、Ⅱ帯との境目に若干屈曲した無文部を設けている。文様帯はⅠ・Ⅱ帯とも同じ部分に隆起線文を垂下して文様帯を通しで分割し、Ⅰ・Ⅱ帯通しで平行する太沈線文の櫛状区画を行い、梯子状の沈線文を施文するものである。狐塚遺跡の鵜ガ島台式と比較すると、明らかに古い様相を持ち、鵜ガ島台式の最古段階の様相を持っている。

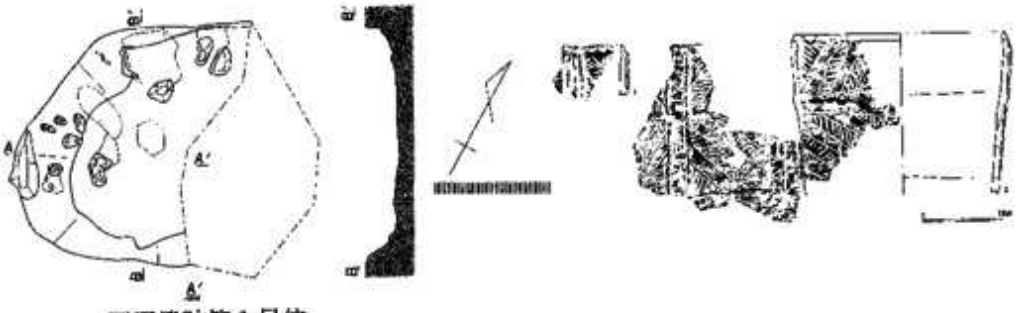
また、天沼遺跡よりやや上流で狐塚遺跡に近付いた殿山遺跡（山崎1991）でも、鵜ガ島台式期の住居跡が１軒検出されている。プランは隅丸の長方形を呈し、柱穴は顕著ではないが、炉を２ケ所に持っている住居跡である。出土土器は２帯の文様帯を持ち、細沈線文区画内に太沈線文を充填するもので、胴部屈曲の強い典型的な鵜ガ島台式である。狐塚遺跡の鵜ガ島台式土器と、近い段階に比定されるものである。この時期の住居跡は、楕円形か隅丸の長方形が一般的なのであろうか。

また、狐塚遺跡では炉穴が２基検出されており、その時期を早期末に比定した。炉穴は何度も増設されてたこ足状の炉床を持つもので、ローム面に深く掘り込まれており、炉床は良く焼けているものであった。遺構確認の段階では殆ど焼土等の散布が見られず、土壙として調査を開始したが調査が進むに従って炉穴であることが判明してきた。非常に堅固な炉穴であり、条痕文期でも初期の

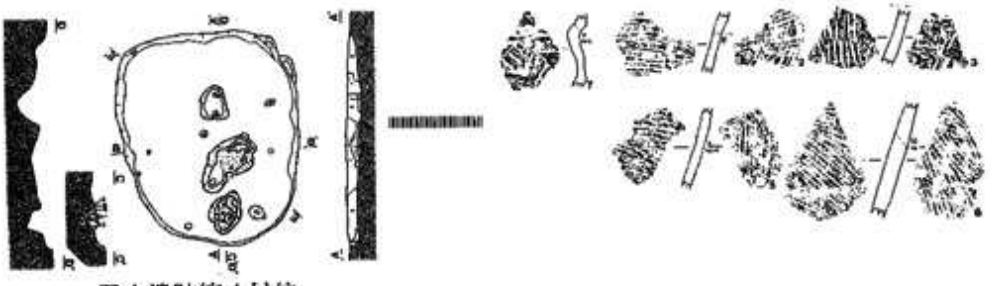
天神北遺跡（第1次）第1号住



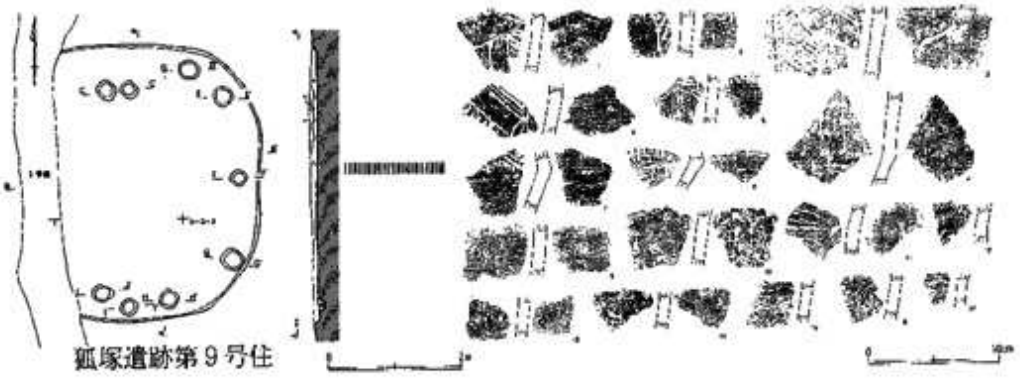
天神北遺跡（第2次）第1号住



天沼遺跡第1号住



殿山遺跡第4号住



狐塚遺跡第9号住

第96図　桶川・上尾市内の条痕文期の住居跡集成

所産と思われたが、炉穴内出土土器は有文土器はないものの新しい様相が看取された。土器は繊維を多量に含み、比較的単純な胎土を持つもので、条痕文も粗く施文されるものであった。中には薄手で条痕文の施文されない土器群を含むことから、茅山上層式以降の様相を呈するものと判断された。グリッドからは隆帯上に絡条体圧痕文の付く早期末葉の土器が若干出土しているため、ほぼ同時期のものと把握される。

荒川をやや下った上尾市には、早期末葉の貝塚として著名な平方貝塚（榎本1971、赤石・井上1991）が存在する。平方貝塚では貝殻腹縁文の鋸歯状文を持つ打越式や天神山式土器が出土しているが、絡条体圧痕文土器は検出されていない。絡条体圧痕文土器は東北地方南部を中心として茅山下層式段階から既に出現していることを指摘したが（金子1991）、要素的には連綿と早期終末まで存続する文様要素であり、中部地方では中道式の前段階まで継承される要素である。狐塚遺跡の絡条体圧痕文土器がどの段階に比定されるかは明瞭ではないが、茅山上層式よりは新しくなるものと思われる。東海系の土器や、打越式等が出土していないことから、入海式段階か神之木台式・下吉井式段階のいずれかと思われるが、隆帯の使い方や絡条体圧痕文の施文手法等から、神之木台式に近い段階に比定して置きたい。上尾市殿山遺跡では土壙から絡条体圧文土器が出土しているが、こちらの方がより茅山上層式に近い段階の土器と思われる。

c．前期から後期の土期群について

前期は遺構が確認されてはいないものの、若干ではあるが連綿と各時期の土器群が出土している程度である。土器型式では関山Ⅱ式、黒浜式、諸磯a式、諸磯b式、諸磯c式、浮島式、興津式、十三菩提式であるがいずれも量的には僅かである。中でも注目を引くのは興津式の出土である。平行沈線文の菱形文内に縦位の貝殻腹縁文を充塡施文するもので、諸磯c式に伴うものと思われる。また、口縁部にひだ状の段部を持ち、三角陰刻が施され、口唇部が押圧による小波状口縁を呈する土器が出土している。この土器の胴部には篦状工具による細かなロッキング文が施文されており、ベースとなる要素は興津式であるが、波状口縁部に大木5式的な要素が垣間見える。

興津式またはその要素を持つ土器群は前記の2種類が存在するが、前者は諸磯c式古段階に伴うものと思われ、狐塚遺跡でも諸磯c式古段階の土器群が出土している。後者は三角陰刻等の手法から諸磯c式の新段階から十三菩提式にかけての段階が想定されるが、ロッキング文を持つことから諸磯c式の範囲を出ないものと思われる。しかし、狐塚遺跡からは諸磯c式新段階の土器群は出土しておらず、むしろ十三菩提式を主体に出土している。明確な位置付けは保留して置きたいが、今後位置付けが問題となる土器群と思われる。興津式土器は大宮台地ではあまり検出例をみないが、大宮市宮ケ谷塔遺跡（山形1985）等で若干出土している。また、1点ではあるが浮島式も出土しており、これは諸磯b式に伴うものである。

十三菩提式は結節浮線文土器と、沈線文のみを施文するものとが出土している。結節浮線文には比較的太いものと、細いものが存在する。太い浮線文は結節もやや粗くなるが、口縁部等に水平に施文するものが多く、口縁部の内折部には稜が付くものがある。口唇部形態も角状を呈するものとなり、細い浮線文土器とは異る。また、太い結節浮線文を持つ土器は、地文に縄文を施文してお

り、一見諸磯b式的であるが造りが異る。この土器は所謂大歳山式の影響を受けた在地の土器であり、器壁こそ厚くて異るが、口縁部の造り等にその要素を大きく表現している。類例は桶川市内では楽上遺跡で若干出土しており、荒川をやや下った上尾市在家遺跡（細田1991）では比較的良好な土器群が出土している。

一方、細い浮線文は平行施文内に鋸歯状に施文されたり、格子目状に施文されたりするが、地文に縄文を持つ場合と、持たない場合がある。口縁部では比較的曲線状や格子目状に施文され、三角陰刻文と併用されるものがあり、頸部と胴部で鋸歯状施文を挟んで水平施文されることが多い。所謂北陸の真脇タイプの土器群であり、嵐山町芳沼入遺跡（川口1992）では原体の側面圧痕文を持つ東北系の土器群と共に、良好な土器が出土している。また、大宮市鎌倉公園遺跡（山形1984）では多系統の土器群が出土している。狐塚遺跡の十三菩提式土器群は陰刻文を多用しない点若干新しい様相が窺えるが、それぞれの土器群の系統的な差異も考慮しなければならず、安易に新旧の要素は語れない。十三菩提式土器は市内では、楽上遺跡が比較的まとまっており、泉野遺跡（関根1990）、東台Ⅰ遺跡（粒良1992）等で若干出土している程度である。

中期では、勝坂式終末期の土器群と加曽利ＥⅢ式からＥⅣ式の土器群が出土している。加曽利ＥⅣ式期では住居跡が１軒検出されており、注口土器が１点出土している。

後期では堀之内Ⅰ式から加曽利ＢⅠ式までが出土している。堀之内Ⅰ式は若干出土している程度で、堀之内Ⅱ式を主体とし、住居跡が１軒検出されている。住居跡は張り出し部を持つかどうかは不明であり、柱穴等も不揃いであった。他に、子ピットをもつ円筒状の深い土壙が１基検出されている。堀之内式期に特徴的な土壙であり、卜伝遺跡（宮崎1980）では顕著にみられ、上組Ⅱ遺跡（黒坂1989）、中山谷遺跡、近くでは上尾市柏座遺跡（藤原1986）、山下遺跡（山崎1988）、小林遺跡（赤石1989）等で検出されている。

狐塚遺跡出土の堀之内式土器は、おおよそ次の様なａ類…胴部がやや括れ、縄文を施文し、多条沈線文で懸垂文を基調としたモチーフを描くもの、ｂ類…器形はａ種と同様であるが地文に縄文を施文せず、単独の沈線文で懸垂文を基調としたａ種より単純なモチーフを描くもの、ｃ種…胴部で強く括れ、無文の口縁部が大きく開き胴部が張る器形を呈し、胴部に沈線文の垂下するモチーフを描くもの、ｄ種…口縁部の開く鉢形を呈し、口縁部に刻みの付く隆帯を巡らせ、胴上半部に磨消縄文による三角形を基調とした幾何学的なモチーフを施文するもの、ｅ種…地文のみを施文する粗製土器、ｆ種…注口土器に分類される。ａ類～ｃ類とも堀之内Ⅰ式から継承されるモチーフ構成をとり、ａ類が関東東部的、ｂ、ｃ類が関東西部的な土器群とされており、狐塚遺跡の土器群は地文縄文土器をあまり出土しないことから、全体的には関東西部的な土器群といえる。

ｄ種の中に曲線及び渦巻状の磨消縄文がみられる点は比較的特徴的であり、堀之内Ⅱ式の中にあってもやや新しい様相として捉えられる。また、第63図20－26は堀之内Ⅱ式の最も新しい段階で、口唇部上端への沈線文施文、口唇部外端部への小突起形成、球形状、耳状突起等の突起の発達、口唇部内面沈線文の多条化等は、加曽利Ｂ式への過渡期的な様相として捉えられる。場合によっては、加曽利Ｂ式の範疇で捉えられることもある（石井1984）。いずれにしても、狐塚遺跡の堀之内式土器は堀之内Ⅱ式期の比較的まとまった良好な土器群であると言えよう。紙面の都合もあって、

土器群の個々については触れ得なかったが、単純な様で比較的系統、器種、及び個体差の多い堀之内式土器について、機会をみて触れてみたいと思う。

参考文献

赤石光資　1989　「小林遺跡」上尾市遺跡調査会調査報告書第１集

石井　寛　1984　「堀之内２式土器の研究」調査研究収録第５冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団

井上　肇　1991　「平方貝塚」上尾市史編さん調査報告書第１集

今井　宏　1991　「万吉下原遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告第18集

今井　宏　1984　「屋田・寺ノ台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集

今井正文　1989　「桶川市後谷遺跡の調査」第22回遺跡発掘調査報告会発表要旨

植木　弘・金子直行　1980　「金平遺跡」嵐山町教育委員会

榎木金之丞　1971　「平方貝塚の調査」埼玉考古第９号

金子直行　1982　「野鳥式について－金平遺跡出土土器を中心として－」上曜考古第６号

金子直行　1984ａ「明花向・明花上ノ台・井沼方馬場・とうのこし」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第35集

金子直行　1984ｂ「向原・上新田・西浦」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第41集

金子直行　1991　「茅山上層式土器の再検討」埼玉考古学論集

金子直行　1993　「四反歩遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第130集

川口　潤　1992　「袈沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺杭・尺尻北・大野田」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集

黒坂禎二　1989　「上組Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第80集

塩野　博　1970　「西台遺跡の発掘調査」桶川町文化財調査報告Ⅳ

関根　訪・早坂廣人　1990　「平成元年度桶川市遺跡群発掘調査報告書」桶川市教育委員会

関根　訪　1992ａ「天神北遺跡」桶川市文化財調査報告書第24集

関根　訪　1992ｂ「天神北遺跡（第２次）」桶川市文化財調査報告書第23集

粒良紀夫　1988　「昭和62年度桶川市遺跡群発掘調査報告書」桶川市教育委員会

粒良紀夫　1990　「宮前遺跡」桶川市文化財調査報告書第20集

粒良紀夫　1992　「東台Ⅰ遺跡」桶川市文化財調査報告書第22集

早坂廣人　1989　「昭和63年度桶川市遺跡群発掘調査報告書」桶川市教育委員会

藤波啓容　1984　「天沼遺跡－第１～３次調査－」上尾市文化財調査報告第21集

藤原宏幸　1986　「柏座遺跡」上尾市文化財調査報告第26集

細田　勝　1989　「中三谷遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第76集

細田　勝　1991　「在家」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第107集

宮崎朝雄　1980　「卜伝」埼玉県遺跡発掘調査報告書第25集

宮崎朝雄・金子直行　1989　「井草式土器及び周辺の土器群について」研究紀要第５号　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

宮崎朝雄　1991　「夏島式土器及び稲荷台式土器について」埼玉考古学論集

山形洋一　1984　「鎌倉公園遺跡」大宮市遺跡調査会報告第９集

山形洋一　1985　「宮ケ谷塔貝塚」大宮市遺跡調査会報告第13集

山形洋　・　1986　「西大宮バイパスNo４遺跡」大宮市遺跡調査会報告第16集

山崎広幸　1988　「石神遺跡・山下遺跡－第１・２次調査－」上尾市文化財調査報告第31集

山崎広幸　1991　「殿山遺跡－第２次調査－」上尾市文化財調査報告第36集

横川好富他　1971　「諏訪山貝塚・諏訪山遺跡・椋山貝塚・南遺跡発掘調査報告」埼玉県遺跡調査報告第８集

Ⅶ　結語

以上、狐塚遺跡の成果を報告し、それに対する考察を行った。調査による良好な資料に対して正当な評価をなし得たのか、報告者としての責を果し得たのか不安である。それは各項で資料に対する検討を尽くし得なかったことと、以下の大きな問題に対して考察が及ばなかったためである。

Ⅲでも述べたように、遺跡の所在する川田谷地区を中心とする地域は古墳時代の多くの遺跡が分布し、中でも本遺跡と時期を同じくする高井遺跡やバチ山遺跡、八重塚遺跡は初源期のカマドが構築されていることから、その「先進性」が早くから指摘されてきた。これまで述べたきたように、本遺跡ではカマドは検出されておらず、そういった意味では前述の遺跡に対してカマドの導入に対する明らかな姿勢の違いが見られる。

それは石製模造品についても同様で、本遺跡に近接する八幡耕地遺跡で剣形製品等が出土しているにもかかわらず、今回の調査では一点の出土も見られなかった。

この両者の問題が本遺跡の住民達による「主体的選択」の結果なのか、あるいは集落間を統一するような小首長による分与等の「客体的強制」の結果なのかは各々の遺跡間における詳細な比較・検討によってのみ判断が可能と思われる。本書では紙幅の関係もあり、全く言及していない。本遺跡の正当な評価も、その作業を通じてのみなしえるものと考えられる。

またⅥでは13・14号住居跡の遺棄・廃棄行為について住居廃絶に伴う儀礼の結果と解釈したが、これも更に類例の検討を重ねる必要がある。

特にこのような竪穴における儀礼行為と、御伊勢原遺跡で見られるような集落の「祭祀」とはどのような関係があるのか。加えて、本遺跡では見られない石製模造品を用いる祭祀と、用いない祭祀の相違はどこにあるのだろうか。等々問題は山積したままである。

本遺跡を含む武蔵地域の５世紀代の様相は、その調査遺跡の少なさからか詳かでない部分が多い。総合的な地域像を形成するためには、本遺跡のような個々の遺跡における検討の集積が必要である。本書がその地域像の構築の一助となれば幸いである。山積みした課題への取り組みと、地域像の構築を期して擱筆することにしたい。

狐塚遺跡の調査・整理を通して以下の方々から多大な御協力を頂いた。文末ながら御芳名を記し、衷心から感謝申し上げたい。（敬称略、50音順）

［発掘調査参加者］

新井照子、石倉光子、及川恒代、大内博子、大木あき、大木なみ、小沢いせ子、小沢章子、小沢幸子、鴨志田京子、坂巻しげ子、新宅輝久、高村　稲、竹内仲枝、田中大介、桑根静枝、桑根せん、原　さき、深谷安子、細田せき子、町田栄蔵、松崎慶喜、松村ふじ、山崎英子、山崎絹江、吉田幸子

［整理作業参加者］

市川章子、小池洋子、高橋敦子、高橋喜代乃、福田ふじ枝、本松章子、宮崎実佐子、森　ヒロ

写　真　図　版